T991
タカ

高岡市古書古文献シリーズ　第九集

高岡詩話

（現代語訳）

高岡市古書古文献シリーズ　第九集

高岡詩話（現代語訳）

『高岡詩話』の現代語訳発刊に寄せて

高岡市立中央図書館
館長　太田久夫

かつて勝興寺の住職を務めたことのある加賀藩十一代藩主前田治脩の子教千代が、満一歳にもならぬ乳児のときに、重い眼の病を患いました。金沢の医師らが診察に当りましたが、乳児のことゆえ適切な診断を下すことができませんでした。高岡から眼科の七代松田三知と小児科の八代金子恕謙が招かれて診察に当りました。二人の適切な診断によって、快方に向ったといわれます。安永八年（一七七九）六月のことでした。「高岡医者」としての名声を確固としたものにしました。

松田・金子両家の他にも、佐渡家・高峰家・津島家・内藤家・長崎家・山本家というように、町医の名家がありました。これらの町医は神農講という組織を結成しておりました。今日でいう研究会で、症例を持ちよって討論したり、当時は漢方医学で漢文を読み合ったりしておりました。神農講は、正徳年間（一七一一～一七一五）に始まったといわれております。

長らく途絶えていたのが文化一二年（一八一五）に再興しましたが、文政四年（一八二一）の大火で再び中絶となりました。天保一一年（一八四〇）また復活しました。いずれもその中心になったのは、津島家でした。

『高岡詩話』は、津島北渓（一八一三～一八六二）の著わしたものです。北渓は一九歳の時に江戸に出て、昌平黌の増島蘭園や幕府医官小島宝素について医学を学びました。天保一〇年（一八三九）兄が病に冒されたために帰郷し、医を継ぎました。また、漢詩吟社娯分吟社の一員として、長崎浩斎・逸見方舟らと交遊し、詩文にも秀れておりました。そのようなこともあって、『高岡詩話』には、高岡の漢詩人や海保青陵・大窪詩佛というように高岡を訪れた文人墨客らについて、逸話や詩などが詳しく記されております。江戸時代の高岡の漢詩壇の様子を知るのに良い資料であります。取り上げられた人物の評伝も記されており、江戸時代の高岡を学ぶ

のに大いに役立つ資料といえましょう。

しかしながら漢文で記されているので、読むのは難解でした。そこで『高岡湯話』を現代語訳していただいた元高岡市教育委員会教育長篠島満先生にお願いし、解読と現代語訳にしていただきました。先生は、時には朝から晩までワープロに向っておられたと伺っております。

篠島先生のご労苦に対して、心から厚くお礼を申し上げますとともに、開町四〇〇年間近い高岡の江戸時代のことを知る好資料として、多くの人々に活用していただくよう念願しております。

『高岡詩話』の現代語訳によせて

元高岡市教育委員会
教育長　篠　島　満

「高岡詩話」は、安政年間に津島北溪が高岡の詩人の伝記詩文等を記述したものである。読みはじめてみると高岡の由緒町人天野屋を出自とする服部南郭が登場する。南郭の出生については北溪の記述に疑問もあるが、天野屋の二代目正知の第八子の元矩が京都の車屋町に店を構え、天野屋と号した。その次男として生まれたのが南郭〔小右衛門元喬〕である。この南郭が江戸に出て柳沢吉保に仕え、後に荻生徂来の護園塾で筆頭門人として活躍するのである。この件に触れて一気に誘発される思いで詩話を読み進めることとなる。当時の高岡の文人墨客が詩作に集まったという養老軒、臨江亭、是性庵、松映房、陸舟楼などが見えてくる。また、吟社として松映社、鳳鳴社、娯分吟社などとともに、その社中の面々が登場してくる。さらにこれらの社中の面々の詩作を出版したという「高陵風雅」、「高陵風雅後集」、「春藻錦綺」、「今道集」などがあがってくる。

高岡の文人たちのよき指導者として京都の皆川淇園のもとで学んだという寺崎蝸洲、富田徳風の二人の俊才、さらに長崎浩斎、大橋嗣斎などが登場し、外からも皆川淇園、村瀬栲亭、海保青陵、嶋林文吾、大窪詩仏、八橋通仙などの諸名家が関わり、あるいは訪れている。これらの諸家のもとで高岡の医師、僧侶、素封家などが詩作を楽しんでいる。殊に医師には優れた人材が多く、町医の名家として佐渡家、松田家、金子家、高峰家、長崎家、津島家、山本家、内藤家などこれら町医でもって神農講という結社までつくっている。さらに著者の北溪自身が、竹馬の友として山本道斎、寺崎山窩をあげ、その詩文とともに評伝を述べ、先立たれた悲しさを伝えている。

また、横川原町、下川原町の瞽女街の絃樓の一つ一つを地図に落とすように詳細に伝えており、当時の風俗を知る手掛かりとして

も興味深いものがある。

この著自体が詩話というように、当時の高岡の文人が詠んだ詩文が二百数十に及んで収められている。これらの詩文を通して当時の高岡の地理・人情などにかかわって心の風景がありありと伝わってくるだけでなく、当時の高岡の様子が興味深く捉えることのできる貴重な資料ともいえるものである。とはいえ、全文が漢文で書かれているので、それを仮名まじりの文語文に読み下し、さらに現代語訳をつけようというのであるから容易なことではない。殊に漢詩が二百数十首が掲載されている。それらの詩を読み下すには、韻を踏むなどの手立てが求められるが、しかし、私にはそうした素養はなく、漢文の読み下しは本格的に学んだものではない。ともあれ何とか現代語訳に漕ぎ着けたい。いえば素人の取り組みである。それも承知の上で何とか現代語訳することで、この貴重な著書を広く市民の皆様に伝えたいという思いで一連の作業をさせていただいた。何かと不手際な点も数々あると思うが、その点については識者の方々のご指導・ご鞭撻を得たいと心から願っている。

願わくは、この書を広く市民の皆様に読んでいただき藩政時代の高岡を知り、間もなく訪れる開町四百年を節目に未来に向かって躍進する町づくりに資すればこのうえない幸せであると思っている。

「高岡詩話」津島北溪著

目　次

『高岡詩話』の現代語訳発刊に寄せて

『高岡詩話』の現代語訳によせて

凡　例

高岡詩話巻之一 …… 1

〔読み下し文中の語句説明〕〔現代語訳文中の内容説明〕

高岡詩話巻之二 …… 28

〔読み下し文中の語句説明〕〔現代語訳文中の内容説明〕

高岡詩話巻之三 …… 52

〔読み下し文中の語句説明〕〔現代語訳文中の内容説明〕

高岡詩話巻之四 …… 81

〔読み下し文中の語句説明〕〔現代語訳文中の内容説明〕

高岡詩話巻之五 …… 110

〔読み下し文中の語句説明〕〔現代語訳文中の内容説明〕

高岡詩話補遺 …… 138

登場する人物資料と評伝並びに余話の要約 …… 148

巻の一 …… 148

服部家（天野屋）略系図 …… 149

内藤家略系図 …… 150

巻の二 …… 154

巻の三 …… 156

巻の四 …… 159

佐渡家略系図 …… 161

巻の五 …… 163

津島家略系図 …… 164

補遺の巻 …… 168

挿絵・写真一覧 …… 169

あとがき …… 170

高岡市古書古文献シリーズ …… 171

凡例

一篇中稱人多用其號、

一篇中[illegible]稱字、或稱通稱、使人易知、非有意於褒貶、

一篇中兼記人之稱謂、[illegible]不厭煩、且稱某幾世之類、要後世人易辨認耳、

一事出傳聞者、不敢無訛、[illegible]待博雅是正[illegible]、

一此篇所收之人、有美事可傳、予別有高岡佳話、不關傳詩者、此不復贅、

凡例

一、篇中ニ人ノ其ノ號ヲ多用シテ稱シ、間字ヲ稱シ、或イハ通稱ヲ稱スルハ、便チ人ヲ知リ易クシ、褒貶ヲ有意ニスルニ非ズ。

一、人之稱ノ謂ハ、煩ヲ厭ワズ、且ツ某幾世之類ヲ稱スルハ、要ハ後世ノ人ガ辨ジ易ク認メル耳。

一、事ノ傳聞ヲ出スニ者、保セズ訛リ無ク、博雅ヲ待チテ是レヲ正ス。

一、此ノ篇ニ収メル所之人、美事ノ有ルヲ傳エル可ク、予ニ別ニ高岡佳話ガ有リ、詩ニ關ワラザル者、此レ復タ贅ニセズ。

凡例

一、篇の中に、その人の号を多用に称するようにした。時に字を称し、あるいは通称も称した。それには、その人を分かりやすく知ってもらうためで、褒めたり貶したりすることに意味があるのではない。

一、人の称を記す理由は、煩わしさを厭わず、かつ、某が幾世のともがらを挙げるのは、要は、後世の人々が明らかにするために認めるだけのことである。

一、事柄の人づてに聞いたことを記すには、そのままにではなく誤りなきよう学問が広く、道の正しい人のあしらいをえて、これを正すようにした。

一、この篇に取り上げて収めたところの人に立派な事がらがあることを伝えるべく、私には別に高岡佳話という書があり、詩に関わりのない者は、これまた無駄にしないよう配慮した。

一、津嶋の〝嶋〟は、〝嶋〟と〝島〟が書かれているが原本のままとした。

高岡詩話卷之一

津島佶 北溪居士著

高岡本云關野（古作野）或稱關野原、慶長十四年己酉、瑞龍公新築城、改號高岡、當時藩士之從而徙者、四百三十餘員、富山守山木舟之工商搬宅者、六百三十戶、遂成繁盛、一都邑焉、其所以名高岡者、蓋取鳳凰鳴高岡之義、文政、天保間、有詩社、稱鳳鳴社、亦由此云、

南郭先生為一代之山斗、而實出於我邑、世人、[illegible]不知、今特表出之、邑之服部氏、（稱天野屋、二世曰正和、稱三郎左衛門、有十子、第三子曰正則、稱傳兵衛、第八子曰元矩、稱龜屋彦左衛散餘錄、北國屋、修三堂湯話云、稱越中屋理或然、[illegible]）

高岡詩話卷之一

北溪居士津島佶著

高岡、本ハ関野ト云フ（古ハ志貴野ト作ス）或ハ関野原ト称ス。慶長十四年己酉、瑞龍公新ニ築城シ、改メテ高岡ト号ス、当時藩士ノ従イテ徙ル者、四百三十余員、富山守山木舟ノ工商ノ宅ヲ搬ス者、六百三十戸、遂ニ一都邑ト成ル。其ノ高岡ト名ヅケル所以ハ蓋シ鳳凰高岡ニ鳴クノ義カラ取ル。文政・天保ノ間、詩社ガ有リ、鳳鳴社ト称ス、亦タ此ノ由ニ云フ。

南郭先生、一代之山斗為リ、而シテ実ニ我邑ニ出ズ、世人ハ罕ニ知ル、今特ニ表ニ之ヲ出ス。邑ノ服部氏、（天野屋ト称ス）二世ハ正和ト曰ウ、三郎左衛門ト称シ、十子有リ、第三子ヲ正則ト曰ウ、傳兵衛ト称ス。第八子ハ元矩ト曰ウ、亀屋彦左衛門ト称ス、（後ニ天野屋ト称ス、閑散餘録ニ云フ、北国屋ト称シ、修三堂湯話ニ云フ、越中屋理、或ハ然ト称ス）、

高岡詩話卷之一

北溪居士津島佶著

高岡は、元は関野といった。古くは志貴野とも関野原ともいった。慶長十四年に前田利長公（瑞龍公）が新たに城を築き、改めて高岡と名付けた。当時、藩主に従って移ってきた武士たち四百三十余人、富山、守山、木舟の地から商工業を営むために家を移した者が六百三十戸あり、遂に一つの繁華な町となった。その時に高岡と名付けたわけは、詩経の「鳳凰高岡に鳴く」の義から取ったものである。

高岡の江戸時代の文政・天保の間に、詩を作る人々の結社があり、「鳳鳴社」といった。また、この由に云う。

服部南郭先生、実に一代の[1]山斗と人々から仰がれ慕われた。而もわが邑の出自である。時移り、そのことを知る者が稀となってしまった。だから今、特に表に出して皆の知るところとしたい。町の服部氏を天野屋という、その二代目は正和といい、三郎左衛門ともいった。十人の子供があり、その第三子を正則といい、傳兵衛ともいった。また、第八子を元矩といい、亀屋彦左衛門ともいった。（後には天野屋といい、[2]「閑散餘録」に北国屋といい、[3]「修三堂湯話」には越中屋理、或いは然ともいっている。）

門、閑散餘録称云、称善右衛門、法論中正院、元矩日法、其妻法諡妙栄、實為先生之考妣、

先生有兄称忠蔵、閑散餘録称善助、後称彦左衛門、

南郭ノ父、在京師、時父母挈而至京師、遂住焉、年十三失父、十四至江戸、是以先生亦以京師為故郷、故其投老歸遊詩云、五十年前出上京、今遊猶作客中情、別長何處尋桑梓、祚薄無家問弟兄、認得山川疑夢寐、想來多少自分明、共知流轉人寰裡、憶似劉郎返赤城、

今服部氏家譜、元矩以元禄八年乙亥歿、妙栄以享保十五年庚戌歿、先生有兄称忠蔵、後称彦左衛門、

〔閑散餘録二云フ、善右衛門ト称シ、修三堂湯話二半六称スハ誤リ」、[1]法諡ヲ中正院元矩日法ト云フ、其ノ妻ノ法諡ハ妙栄、実ニ先生ノ考妣為リ。

南郭ノ[2]幼稚ニ在ル也、父母ニ挈テ京師ニ至ル、遂ニ為ニ住ス。年十三ニ父ヲ失ウ、十四ニ江戸ニ至リ、是レヲ以テ先生亦タ京師ヲ以テ故郷ト為ス。故ニ其ノ[3]投老ニ帰遊シテ詩ニ云フ。

「五十年前ニ出テ上京シ、今モ遊ビ猶ヲ客中ノ情ヲ作ス、別レテ長ク何処、桑梓ヲ尋ヌル、[4]昨薄ニシテ家無ク弟兄ヲ問フ、山川ヲ認得シテモ夢寐ヲ疑フ、想来シテ多少、自ラヲ分明シ、流転ノ人寰裡ヲ共知スル、[5]劉郎ノ赤城ニ返ルニ似ルヲ慨ル。」

今、服部氏ノ家譜ヲ検ベルニ、元矩ハ元禄八年乙亥ヲ以テ歿シ、妙栄ハ享保十五年庚戌ヲ以テ歿ス。先生ニ兄有リ、忠蔵ト称ス。〔閑散餘録ニ善助ト称スルハ謬ナリ〕後ニ彦左衛門ト称ス、

〔「閑散餘録に善右衛門という、「修三堂湯話」に半六というのは誤りである。〕法名を中正院元矩日法といい、その妻の法名は妙栄という、実はこれが南郭先生の亡くなった両親である。

南郭は幼少の時に父母に連れ立って京都に住んでいた。十三歳の時に父を亡くし、十四歳の時に江戸へ出たが、また、そのことを以て京都を故郷とした。故に隠居するようになって京都への旅で帰ってきての詩で、次のように云っている。

「五十年前に故郷を出でて上京し、今なお、旅にある思いから抜けきれず旅人気分のままである。別れて長くあちこちと、いま、故郷の幼い日の記憶に残る垣根の傍の桑と梓を尋ねて父祖を思い返す縁とする。しあわせ薄く今は家とてなく兄弟を問う、故郷の山川を認めて納得しても何もかもが寝床の中での夢かと疑う。これまでの来し方を回想して多少なりとも自分をみつめて、これまでの流転のうちに人の世の裏まで知り尽くし、放蕩者が赤城に返るに似る思いを恥じている。」

今、服部氏の家の系譜を調べてみると、元矩は元禄八年（一六九五）に亡くなっており、妻の妙栄は享保十五年（一七三〇）に亡くなっている。南郭先生には兄があり、忠蔵といい（閑散餘録に善助とあるが、誤りである）、後には彦左衛門といったが、

門以正德三年癸巳歿、其先是時數十年、宜有菓三四之歎、

先是邑中之歌詩上木者、曰高陵風雅、曰高陵風雅後集、曰春藻錦機、高陵風雅、釋自然、看撰、五言律凡二十首、明和四年丁亥春、風館張永頼（子功）上梓、卷首名譜、評歌、名士表號、無不載、通称、且當時藪園之餘習、未除、

清水氏称清、省内藤氏为滕之類、遂使後人不知適為何人、今將百年、無不有聞、無記載、可歎、唯所知者六人、錄于左、

曰釋自然、字子牽、號云云、明講師之義父、清少連、字子城、號荊山、称榎屋藤右衛門、初称北野屋半右衛門、曰崎羣、字敬業、号大樸、初称義助、澤田屋、今称高原屋、六右衛門之孫、

「春藻錦機」

正德三年癸巳ヲ以テ歿ス。其ニ是ノ時ヨリ先ノ数十年、宜シク第三、四ノ歎有リ。

是ノ先ノ邑中ノ歌詩ノ上木ハ、曰ク高陵風雅、曰ク高陵風雅後集、曰ク春藻錦機、高陵風雅ハ釈自然ガ撰シ、五言律凡ソ二十首、明和四年丁亥ニ春風館ノ張永頼〔子ハ功〕ガ上梓スル。巻首ニ賦ト名ヅケ、通称ハ載セズ、且ツ当時ハ藪園ノ〔荻生徂来の学派〕[3]餘習ヲ未ダ除カズ、清水氏ヲ省イテ清ト称シ、内藤氏ヲ省イテ藤ト為ス之類、遂ニ後人ヲシテ適ニ何人カヲ知ラザルト為ル。今、将ニ百年、微スベキ文献無ク、唯知ル所ノ者、六人ヲ左ニ録ス。

曰ク釈自然、字ハ子牽ト号ス云々、〔開正寺宣明講師ノ義父〕。清少連、字ハ子城、荊山ト号ス、〔清水六世、槇屋藤右衛門ト称ス、初メ北野屋半右衛門ト称ス〕。曰ク崎羣、字ハ敬業、大樸ト号ス、〔一ニ荘河ト号ス、又、菊主ト号ス、初メ義助ト称シ、澤田屋、今ハ高原屋ト称シ、六右衛門ノ第三子ナリ、

「春藻錦機」

正徳三年（一七一三）に亡くなっている。その後も数十年の間に、第三、四の嘆かわしいことが続いている。

この先、高岡の町で出版された詩歌の書は、[四]「高陵風雅」[五]「高陵風雅後集」[六]「春藻錦機」である。「高陵風雅」は釈自然が撰録し、[七]「五言律」凡そ二十首を明和四年（一七六七）に春風館張永頼（子は功）が出版している。巻首に賦と名付けている。収録された人々の通称は載せていない。その上、当時は荻生徂来学派の[八]藪園塾の以前からの習わしで清水氏を省いて清、内藤氏は省いて藤といった類を除かずに踏襲していた。このために、遂には後の人に知ることのできない何人かが生じてきた。今となっては将に百年の時が流れ、明らかにする文献もなく、只、知ることのできる者六人を次に記すことにする。

釈自然という者、字は子牽と号す云々〔開正寺宣明講師の義父〕。清少連という者、字は子城、荊山と号す〔清水六世、槇屋藤右衛門と称す、初め北野屋半右衛門と称す〕。崎羣という者、字は敬業、大樸と号す〔荘河また菊主とも号す、初めは義助と称した。沢田屋、今は高原屋と称し、六右衛門の第三子である。

三木屋半左衛門ハ義子ナリ、因リテ半左衛門ト称スルハ蟹洲翁ノ父ナリ〕。曰ク藤順、字ハ子卿、海橋ト号ス、〔一ニ彼丘、又、緑竹堂ト号シ、内藤彦輔ト称ス〕。曰ク日下鶴、字ハ万年、雄上ト号ス、〔茶木屋ト称ス〕。曰ク日下昭、字ハ成卿、才城ト号ス〔茶木屋庄兵衛ト称ス〕。

其ノ知ルベカラザルハ者七人存シ、此ノ姓字ニ曰ク奥良臣、字ハ子相、月軒ト号ス。曰ク岡直温、字ハ君玉、昆山ト号ス。曰ク島濟、字ハ公美、丹岳ト号ス。曰ク木雲、字ハ子龍、藍淵ト号ス。曰ク宇紘章、字ハ子光、北郭ト号ス。曰ク福安道、字ハ士琴、神和ト号ス。他日ヲ俟チテ之レヲ攷エル。

清水少連ノ第六子ヲ淳卿ト為ス〔名ハ鯢、一字ハ叔信、楓篇ト号ス、天野屋三郎左衛門ト号ス〕出テテ服部氏ヲ継イデ後、詩ヲ能クシ、畫ヲ能クス、篆刻ヲ工トス。酒井（能登）ノ水光寺ノ上ニ云フ

『幾踏シテ白雲ノ梵宮ヲ尋ヌ、藤蘿ニシテ路暗ク水淙淙タリ、爰、将ニ絶ニシテ僮ヲ殺魂シテ驚カス、虎様ノ怪岩、龍様ノ松。』

三木屋半左衛門の義子である。因って半左衛門は蟹洲翁の父である〕、藤順という者、字は子卿、海橋と号す、〔彼丘とも号す、また、緑竹堂、内藤彦輔とも称す〕、日下鶴という者、字は万年といい、雄上と号す〔茶木屋と称す〕、日下昭という者、字は成卿といい、才城と号す〔茶木屋庄兵衛と称す〕。

その知ることができない者が七人存在し、その姓字は、奥良臣、字は子相、月軒と号す。岡直温、字は君玉、昆山と号す。島濟、字は公美、丹岳と号す。木雲、字は子龍、藍淵と号す。宇紘章、字は子光、北郭と号す。釈義静、字は大安、善護と号す。福安道、字は士琴、神和と号す。他日を待ってこれを調べてみたい。

清水少連の第六子は淳卿である。〔名は鯢、字は叔信、楓篇と号し、天野屋三郎左衛門と号す〕清水氏から出て服部氏を継ぐが、詩と画を得意とし、また篆刻も巧みであった。能登の禅寺の酒井の永光寺の辺に云う。

『遠い道を踏んで白雲の漂う中に奥まる古寺を尋ねる。分け入る先の道は暗く、樹木に蔓草が絡み、谷の水が淙々と流れている。ここにきて、童の魂をそぐように驚かす。虎を思わせる怪しげな奇岩、竜を見るような松、将に絶景というべきものである。』

三木屋半左衛門、字子卿、号海橋、字子卿、号海橋、字万年、号雄上、木屋庄兵衛、曰日下鶴、字成卿、号才城、木屋庄兵衛、曰日下昭、其不可知者七人、存姓字、曰奥良臣、字子相、号月軒、曰岡直温、字君玉、号昆山、曰島濟、字公美、号丹岳、曰木雲、字子龍、号藍淵、曰宇紘章、字子光、号北郭、曰釋義静、字大安、号善護、曰福安道、字士琴、号神和、俟他日之攷。

清水少連第六子、為淳卿、名鯢、一字叔信、号楓篇、称天野屋三郎左衛門、出テテ服部氏後、能詩能畫、篆刻上酒井永光寺云、幾踏白雲尋梵宮、藤蘿路暗水淙淙、奚僮驚殺魂將絶、虎様怪岩龍様松、佳句惜花云、初知憎雨如憎老、元是愛花緣愛詩、布施圓山碑、是人之所建也、不特紅詩、又頗有更才云、大樸遺草一卷、存於其家、其調頗高、石城舟中云、白日秋風静、盪舟下石城、山村連樹霧、江水接天明、晉代子猷思、呉湖范蠡情、逍遥猶未盡、長夏暮雲生、納涼云、夏日城南古梵臺、同調詞客倚崔嵬、共搗書帙多幽趣、競把彩毫見賦才、楚地風流第日月、越中景色絶塵埃、人間何厭炎天苦、自有清江灑檻廻、警句野望云、草間紙徊直、林表聚山懸、観獵云、烏駭空中翼、獸潜原上邨、内藤彦輔遺稿一卷、不啻詞藻之美、筆勢遒勁、寔可歎也、今録于左、

三木屋半左衛門ハ義子ナリ、因リテ半左衛門ト称スルハ蟹洲翁ノ父ナリ〕。曰ク藤順、字ハ子卿、海橋ト号ス、〔一ニ彼丘、又、緑竹堂ト号シ、内藤彦輔ト称ス〕。曰ク日下鶴、字ハ万年、雄上ト号ス、〔茶木屋ト称ス〕。曰ク日下昭、字ハ成卿、才城ト号ス〔茶木屋庄兵衛ト称ス〕。

其ノ知ルベカラザルハ者七人存シ、此ノ姓字ニ曰ク奥良臣、字ハ子相、月軒ト号ス。曰ク岡直温、字ハ君玉、昆山ト号ス。曰ク島濟、字ハ公美、丹岳ト号ス。曰ク木雲、字ハ子龍、藍淵ト号ス。曰ク宇紘章、字ハ子光、北郭ト号ス。曰ク福安道、字ハ士琴、神和ト号ス。他日ヲ俟チテ之レヲ攷エル。

清水少連ノ第六子ヲ淳卿ト為ス〔名ハ鯢、一字ハ叔信、楓篇ト号ス、天野屋三郎左衛門ト号ス〕出テテ服部氏ヲ継イデ後、詩ヲ能クシ、畫ヲ能クス、篆刻ヲ工トス。酒井（能登）ノ水光寺ノ上ニ云フ

『幾踏シテ白雲ノ梵宮ヲ尋ヌ、藤蘿ニシテ路暗ク水淙淙タリ、爰、将ニ絶ニシテ僮ヲ殺魂シテ驚カス、虎様ノ怪岩、龍様ノ松。』

「佳句惜花」に云う

『初めて老いを憎むが如く雨を憎む心を知る。その心は花と縁を愛し、詩を愛するからである。』

氷見の三布施の圓山の碑は、この人が建てたものである。特に詩づくりが優れているとはいえないが、頗る役人としての才能があったという。

大樸〔寺崎荘河〕の遺した詩の下書き一巻が、その家にあったが、風調が頗る高い。「于石城舟中」にいう。

『秋の日、静かに秋風の吹く中を、流れに沿って、手漕ぎして舟で石城を下る。遠く山村の樹木が晴れ渡った空に連なり、川の水が夜明けの空に接している。中国の晉代の人子猷を思い浮かべ、中国の春秋時代に湖で遊んだ范蠡のことを思い想像してみる。こうして気儘に思いを巡らせてみるのだが尽きないものである。そのうちに秋の日が、何時しか暮れかかって荒々しく雲が生じてきた。』

「納涼」に云う。

『夏の日に城の南の古寺を訪ねる。行動を共にした詞人が岩のごろごろした険しい山の岩の一角に凭れている。共に詩づくりの書冊を携えてきたが山水が静かな絶景を豊かに深めている。競って彩りを把らえてみるが、賦の才が思わしくない。目の前のお寺は中国の寺の風流に遜色なく、ここ越中のお寺の景色も塵埃を絶つものである。人間、何ぞ、夏の日の炎天をにがにがしく嫌うことがあろうか、自然の清らかな流れが、こんなに麗しく洗い涼しげに回廊の外を廻り流れているではないか。』

「警句野望」に云う。

『草の間に奥深い小道が真っ直ぐに延びて、林の奥に幾つもの山が重なり合うように懸かっている。』

「観猟」に云う。

『鳥が空中に驚いて飛び交う。獣が村の辺の野原に潜んでいる。』

内藤彦輔の遺稿が一巻ある。単に言葉のあやが美しいばかりでなく筆勢に力があり、誠に羨ましいかぎりである。今、次に記す。

佳句惜花云、初知憎雨如憎老、元是愛花緣愛詩、布施圓山碑、是人之所建也、不特紅詩、又頗有更才云、大樸遺草一卷、存於其家、其調頗高、石城舟中云、白日秋風静、盪舟下石城、山村連樹霧、江水接天明、晉代子猷思、呉湖范蠡情、逍遥猶未盡、長夏暮雲生、納涼云、夏日城南古梵臺、同調詞客倚崔嵬、共搗書帙多幽趣、競把彩毫見賦才、楚地風流第日月、越中景色絶塵埃、人間何厭炎天苦、自有清江灑檻廻、警句野望云、草間紙徊直、林表聚山懸、観獵云、烏駭空中翼、獸潜原上邨、内藤彦輔遺稿一卷、不啻詞藻之美、筆勢遒勁、寔可歎也、今録于左、

午睡云、午睡昏昏輕車蹂。五雲湧出黄金輪。有人憑軾顔如蕣。犀帶鶴氅翡翠中。朱芾丹璋踈赤烏。自称臣是義和人。幸將日却過鄉閭。僮僕嘗憐處士星。為贈鄉環書百厨。屬車翼翼雲冥冥。縹緗玉軸如山積。逸典奇篇文最靈。寶惜合陰須努力。慇懃名譽似雷霆。搏桑未昳南薰動。冷冷北窓夢廻醒。次井圭齋恵韵云、凝碧秋將半。星臨照草堂。鳴眠徒累世。龜手守單方。貴樂知康伯。含春愧子桑。美君傳豫過。涪涪白雲鄉。梅雨云、鬱鬱苑中草。愁霖又過旬。看来書逾暗。老去酒滋親。胡蝶抱如睡。金錢色少貧。陶然縛短梦。欲效漆園顰。

高陵風雅後集寛政十年戊午、日下

午睡ニ云フ。

『午睡昏昏スルニ軽車ガ蹂ル、五雲ニ黄金ノ輪ガ湧出シ、人有リテ蕣ノ如キ顔ガ毓ニ憑ル、犀ガ鶴ノ氅ヲ帯ビテ翡翠ノ中、朱芾丹璋ニ赤烏ヲ踈キ、自称シテ臣是レ義和人ト、幸イニ将ニ日御ガ鄉閭ヲ過ギ、僮僕ニ嘗テノ處士星ヲ憐レミ、琅環ノ書百厨和人ト、幸イニ将ニ日御ガ鄉閭ヲ過ギ、僮僕ニ嘗テノ處士星ヲ憐レミ、琅環ノ書百厨ヲ贈ル為ニ、車ガ翼翼トシテ雲ガ冥冥ニ属シ、縹緗ヲ玉軸ニ山ノ如クニ積ミ、逸典奇篇ガ最霊ナル文、宝ハ分陰ヲ惜ミ須ク努力、慇懃ナル名誉ハ雷霆ニ似ル、桑ヲ搏チ未ダ昳セズ南ニ薫リガ動キ、冷冷タル北窓ニ夢ガ醒メ始メル。』

次ニ井圭齋恵韵ニ云フ。

〔詩ハ略ス〕

梅雨ニ云フ。

『鬱鬱トスル苑中ノ草、愁霖又旬ヲ過ギ、書ヲ看来スルガ逾ニ暗シ、老ヲ去リ酒滋ヲ親シム、胡蝶ガ花ニ睡ルガ如ク、金銭ノ色少シ貧シ、陶然トシテ短梦ヲ締メクリ、漆園ノ顰ニ効ウヲ欲スル。』

高陵風雅後集、寛政十年戊午、

「午睡」に云う。

『こんこんと昼寝するうちに軽く速く走る車がやってくる。五色の雲に黄金の輪が湧き出している。人がいて、蕣帝（中国古代の聖天子）の如き顔に向かって車の横木に縋って礼をしている。犀が鶴の羽衣を帯びて翡翠の中にいる。朱色の前掛けに丹色の玉をつけ赤い靴を履いている。自ら称して臣は、これ義和人だという。幸いに、まさにお日様が村里をお過ぎになり、ほんの僅かに、かつての浪人の星を憐れみ、金属や玉の触れ合う音のする百箱の書を贈る為に車がうやうやしく暗い雲をつき従わせて、書物を玉の軸に山のように積んでいる。それは世に伝わらない書物や珍しい篇など最もすぐれた文である。しかし、宝とすべきは、僅かな時間をも惜しみひたすら努力することである。うわべでは、いかに慇ろな名声といえども、その雷名の轟きは、いえば、雷鳴にも似たようなものである。外では雨が桑の木を打ち、未だ、太陽が西に傾いてなく、南の方から薫りが感じられる。北の窓が冷え冷えとして夢から醒めはじめる。』

次に「井圭齋恵韵」に云う。

『凝碧秋将半　星臨照草堂　鳴眠徒累世　龜手守単方
赤栗知康伯　含春愧子桑　美君傳豫過　涪涪白雲鄉』

「梅雨」に云う。

『庭の中の草が鬱蒼と茂って気もふさがるような思いである。愁いを誘うような長雨が降りだして十日も過ぎている。書斎に来て書を読むが、ますます暗く気持ちが沈む。老け込んだ思いを払うために酒のよい味わいに親しむ。途端に胡蝶が眠るが如くに花にとまり、金銀の様子も少しばかりとぼしいが、酒に酔ってうっとりとするうちに、短い夢を締めくくり、自分の馳いことを棚にあげて無理して中国の荘子のまねをしたくなる。

桜馬場「玉飛鉛ひ」

つまり、長雨による鬱々した思いを荘子にあやかって胡蝶の夢をみることで気持ちを払いたいというのである。」

「欽効漆園顰」とは、漆園は、荘子の別名で、効顰とは、是非・善悪を考えずにむやみに人真似をすること。これには、中国の春秋時代に「西施捧心」という故事がある。昔、西施という美人が胸を病み、手を胸にあてて眉をひそめている姿を見て、あのようなポーズをすれば美人になれるのだと、醜い女が美しく見せようと、病気でもないのに真似をして眉をひそめたという故事によるものである。それで、ここは、荘子に倣って真似をしたくなるというのである。その真似は、荘子は、夢多き人ともいわれ、胡蝶の夢をみるのである。それには、荘子によれば、人生の現実を夢と見て、このように見れば、人生は苦もなく、煩悶もなく過ごせるというわけである。それで、この作者は、鬱鬱とした中にいる自分を荘子の「夢に胡蝶となる」思想を踏まえて、自分を棚にあげて荘子に真似て夢をみようというのである。なお、荘子の「幻想一如」には、列子の「周穆王」の「人生百年、昼夜おのおの分なり」が、その前提にある。その話は、周の尹家に仕える老僕が日中休む間もなく使われる。夜は疲れきってぐっすり寝込んでしまう。その老僕が夜毎に夢をみた。その夢は王様となって思いのままでこの上ない楽しさである。そして目覚めれば、もとの老僕である。つまり、人生のうち、昼と夜が半分ずつで、この上ない楽しさで別に不満がないというわけである。夢がすべてを解決してくれるのである。

「高陵風雅後集」は、寛政十年戊午（一七九八）に

青河（名ハ明、字ハ子明、雄上子、茶木屋智平、）之ヲ刻スル所ノ詩十七首ヲ載ス。聞所謂俳歌発句ノ者、復タ作者ノ字号ハ載セズ。是レ今僅カニ六十餘年ノ距タリヲ以テ攷エベカラザルモノ有リ。曰ク高資訓、曰ク原之驥、曰ク山清致、曰ク岡維謙、曰ク松村庸、是レ也。其ノ知ルベキ者ハ清少連、服淳卿、日下昭、前ニ見エル曰ク藤履吉、号ハ王福（一ニハ青梧ト号ス、又、宋愚トモ号ス）、彦助ノ子、内藤貞孺ト称シ、後ニ所謂、狂詩ニ流ル。貞孺ニ子無ク、元鑑ヲ養イテ嗣ト為ス。父子諧セズ、更ニ金圃（復タ貞孺ト称ス）ヲ養ウ、金圃ニ男無ク、一女有リ、以テ桐城（復タ貞孺ト称ス、今ハ彦輔ト称ス）ヲ婿ト為ス。

松田慶、龍門ト号ス、三知ト称シ、李安山ノ長子ナリ。龍門ニ子無ク、粟田庸斎（名ハ秀、字ハ成實）ノ弟ノ丁梦（名ハ以正、三知ト称ス）ヲ養イテ子ト為ス。丁梦ニ男無ク、山本道斎（名ハ奎）ノ弟ノ良順ヲ養イテ嗣ト為ス、良順早ク歿ス。

日下青河（名は明、字は子明雄上、茶木屋智平と称す）が集めて版木に刻んで印刷する。詩が十七首載っている。この集には、所謂俳句や歌、発句の者ものせている。また、作者の字と号は載せていない。これには、今を隔てること僅かに六十余年であるが、考えべからざるものがある。高資訓、原之驥、山清致、岡維謙、松村庸などである。その知って欲しい者は清水少連、服部淳卿、日下昭、であり、前にも出てきた内藤履吉、号は王福（一に青梧と号す、また宋愚とも号す）、彦助の子で内藤貞孺と称し、後に所謂、狂詩に流れていった。貞孺には子が無く、元鑑を育てて後継ぎとした。しかし父子関係が整わず、他に金圃（また、貞孺と称す）を育てて跡取りとした。ところが金圃に男の子が無く、一女がいたので桐城（また、貞孺と称した。今は彦輔と称す）を婿として迎えた。

松田慶は龍門と号す。三知と称し、李安山の長子である。龍門に子が無く、粟田庸斎（名は秀、字は成實）の弟の丁梦（名は以正、三知と称す）を養い子とした。ところが丁梦に男が無く、山本道斎（名は奎）の弟の良順を養って後継ぎとした。その良順が早く歿する。

后藤璜、白雪ト号シ（又、菊亭、春秋園ト号ス）内記ト称シ、畑久平ノ弟、白雪ノ子、藤九郎ト称シ、文政初年ニ情死スル。

長蓬洲（名ハ壽、字ハ莱福）長崎玄庭ト称ス、浩斎老人ノ父ナリ。

崎一貫、（字ハ孟恕、一ニ字ハ伯道）蝸洲ト号シ、（又、紫苑斎ト号ス）大樸ノ子デ三木屋半左衛門ト称ス。蝸洲ノ子ノ女青翁（名ハ敬孝、後ニ両字ヲ合セテ靖園、初メハ二一郎ト称シ、後ニ清作ト称ス）、長浩斎（名ハ健、字ハ中正、原禎ト称ス）ガ云フ、予ハ文ヲ翁ニ学ブト、翁幼キ自リ吏ヲ為シ、咕嗶ニ勉メズ、然ルニ読書ハ精細ニシテ能ク世人ノ難読ノ書ヲ読ム、且ツ勉メテ地理学ヲ嗜ム、異言ヲ采覧シテ補約シ、其ノ譯本ヲ十三巻ニ、而シテ之ヲ原書ニ記シテ上層ニ云フ、蓋シ駁重ヲ訂シテ新タニ陋ヲ約スナリ。女青ニ男無ク、山本道斎ノ弟ノ寛所（又、春窓ト号シ、復タ半左衛門ト称ス）ヲ養イテ子ト為ス。

其ノ家ニ上杉景勝ノ軍扇檄書ヲ蔵ス。

頼鴨涯（名ハ惟醇、字ハ子春、三樹三郎ト称ス）歌ニ云フ。

后藤璜、白雪ト号シ（又、菊亭、春秋園ト号ス）内記ト称シ、畑久平ノ弟、白雪ノ子、藤九郎ト称シ、文政初年ニ情死スル。

長蓬洲（名は壽、字は莱福）長崎玄庭と称する。浩斎老人の父である。

寺崎一貫（字は孟恕、一に字は伯道）蝸洲と号し、（また、紫苑斎とも号す）、寺崎大樸の子で三木屋半左衛門と称す。蝸洲の子の女青翁（名は敬孝、後に両字を合わせて靖園、初めは二一郎と称し、後に清作と称した）は長崎浩斎（名は健、字は中正、原禎と称す）が言うには、私は予め文を翁に学ぶという。翁は幼い時から役人となり、くどくどとよく喋る方であった。しかしながら読書は詳しく細かく行い、よく世人の難書とするものを読んでいた。そのうえ勉めて地理学を嗜み、異なった事柄を選び観て補充し、束ねてその譯本を十三巻に増やし、それを原書に記して上層に云う。正しく混じり重なる荒く悪い点を新たにとりまとめて正したのである。

女青に男の子が無く、山本道斎の弟の寛所（また、春窓と号し、また、半左衛門と称す）を育てて子とした。その家に上杉景勝の軍扇の檄書が所蔵されていた。

頼鴨涯（名は惟醇、字は子春、三樹三郎と称した）が歌に云う。

『一本目ノ大将ノ指図旗ガ北陸道ヲ片端カラ攻メトル。二本目ノ指図旗ガワガ国ノ在野ヲ抑エ従ワセル。天カラノ伝来ノ兵法ヲ掲ゲテ胸ノ溢レル情熱ヲモッテ、三本目ノ指図旗ガ国ノ中央部ノ重要ナ地域ヲ一掃スルト約束スル。情シムラクハ北山ニ氷雪ガ深々ト積モリ冬ヲ迎エル。ところガ雪ガ未ダ融ケないうちニ彼ガ亡くなってしまった。彼ハ何ノタメニ、幼い時カラ毛皮ヲ着テ育ったのか、冬デモ戦エタデハないか。こうして我ハ弱弱ナ相手ヲ侮リ相手ニ危害ヲ加えておさえこむ。私ニハ伝来ノ第一義とするきもったまがあり、どうして師や優れた僧ヲ欺き騙すことができようか。さかんニ旧くカラノ士気ヲ煽り立てる。この扇ノ調われハ、謙信公ガ残されたものではない。今ハ魚津城モ滅レ海ニハ暗い雲ガたれこめているガ、思うニ謙信公ガ稲妻のように叱咤されている如くである。京畿ヲまもるタメニ群雄ガ各地ニ広ガリ自ら大将ノ指図旗としての扇ニ記して触れ札とする。敵方ニハかつて鬼とも誇る柴田氏ガおり、公ハ、一戦ヲ交えて後蠢き伏して動かず。険悪な経世ガ幾度となく移り変わりつくしているガ、自ら厳かで厳めしく生贄ヲ捧げて神ヲ尊び祀る。この扇モ、また、亡くなった人ノ雪ヲ護っている。窓ヲ開けると、今ハ穏やかニ天下ガ太平ニ治まり、晴れた空ガ見える。扇ノ字と画ハ雄々しくおおらかで、うわべノ飾りとてない。それとなく奮い起こすように誘い長々と語りかけてくる。』

書ノ最後ニ天正十歳四月日とアル。とすれハ翁謙信ノ死後ノ四年目であることガ分かる。とすれハ書中ニ、たまたま祖先（謙信公）と称するのハ不都合である。君ニハ分からないかも知れないガ、言い換えると、翁謙信ハ三川中島デ老賊と戦い、その時、扇ハ白刃ヲ遮り、忽チニ折れて砂中ニ棄て埋もれて朽ち果てた筈である。

『一麾ガ三越道ヲ席捲シ、二麾ガ八州ノ草ヲ偃靡シ、天ノ韜略ヲ掀シテ懐ニ溢レ、三麾ガ中原ノ一掃ヲ期ス、惜可クハ北山氷雪ガ千尋ニ深ク、雪未ダ曾テ消エズニ身先ニ倒レル、彼何ノ為ノ皮履兒ノ者、我孤弱ヲ侮リ我危ニ乗ズ、我ニ伝来ノ一義ノ謄有リ、豈ニ師吉法師ヲ詐誘センヤ、赫然ト旧士ノ気ヲ煽動ス、此ノ扇、是レ乃チ翁ノ遺スモノデ莫シ、魚津城ガ廃レ海ニハ暗黒シ、想フニ公ガ霹靂ノ如クニ叱咤シ、群雄ガ分布シ京畿ヲ扞ス、麾扇ニ手題シテ檄札ニ代エル、敵中ニ曾テ鬼ト誇ル柴田、公一戦ニ逢イテ輙蟄シテ伏ス、風雲来タッテ幾変遷ヲ閲シ、宗祀ニ血食シテ自ラ儼然タリ、此ノ扇亦タ英霊ヲ護リテ有ル、窓晴レテ太平ノ天ヲ披見シ、字畫ハ雄闊ニシテ虚飾無シ、慈愚シテ鼓舞シ綿綿ト語ル。』

書ノ末ニ天正十歳四月日トアル。乃チ翁ノ死後第四年デ在ルヲ知ル。書中ニ往々祖先ト称スルハ怪シカラズ。君ニハ見エズ、乃チ翁、河中ニ老賊ヲ撃チ、扇ハ白刃ヲ遮リ、忽チニ中デ折レ、沙中ニ棄理シテ朽チテ出デズ。

自ラ注シテ云フ。右ハ上杉公景勝ガ金扇ニ檄書シテ歌ウ、越中高岡ノ寺崎氏ニ所蔵スル、按ズルニ、天正六年、霜臺公ガ没シ、景勝ガ三歳ヲ以テ内乱ヲ戦ス、始メテ出兵シ、越中ノ諸城ニモ復ス。今考エルニ此ノ扇、蓋シ当時ニ将士ヲ奬喩シ、軍事ヲ処分スルノ書ナリ。

富恒亨ハ徳風ト号ス（又、冬青ト号ス）、富田ト称シ、八十右衛門ノ三祖父ナリ。

澤田詩（字ハ義六）ハ亀年ト号シ、高原屋義左衛門ト称ス。亀年ノ子ノ米年（名ハ之篤、八世ノ義左衛門、初メ孫太郎ト称ス）、米年ニ子無ク、雪窩（名ハ方綱、九世ノ義左衛門）ヲ養イ嗣子ト為ス。

風雅後集ノ跋ヲ姪ノ皆吉ガ書ク、蝸洲翁ガ内藤彦助ノ女ヲ娶ル、元鑑ガ生マレル、元鑑ハ幼ニ皆吉ト称ス、宋愚ニ於イテ姪ト為ス、宋愚ニ後ニ子無ク、皆吉ヲ養イテ嗣ト為ス。是ニ於イテ内藤元鑑ト称ス、而シテ父子諧セズ、出テ片原街ニ居ル、元鑑ノ伯母ノ適ガ内藤宗安ナリ、

自ら注して云う。右は上杉景勝が金扇に檄書して歌ったものである。越中の高岡の寺崎氏に所蔵するものは、思うに天正六年に霜臺公（謙信）が亡くなって、景勝が三年で以て敵に勝って内乱を鎮めている。初めて出陣し、越中の諸城にも何度も来ている。今、考えるにこの扇は当時、将士を勧めさとし、軍事をさばきつけるために書いたものである。

富恒亨は、徳風と号し（また、冬青と号す）、富田と称し、八十右衛門の祖父である。

澤田詩（字は義六）は、亀年と号し、高原屋義左衛門と称す。亀年の子の米年（名は之篤といい、八世の義左衛門で、初めに孫太郎と称す）には、子が無く、雪窩（名は方綱といい、九世の義左衛門）を養い、跡継ぎとした。

「高陵風雅後集」の奥書は、甥の皆吉が書く。蝸洲翁が内藤彦助の娘を娶る。元鑑が生まれる。元鑑は幼い時に皆吉と称した。宋愚の甥である。宋愚は、後に子が無くて皆吉を育てて跡継ぎとした。そうしたことで内藤元鑑と称した。しかしながら父子の間が整わず、内藤家を出て片原町に住む。元鑑の伯母の夫が、内藤宗安で、

宗安の子ガ曰ク宗純ナリ、宗純ガ歿シ子ガ無ク、以テ元鑑ヲ嗣ト為ス、元鑑ハ愚山ト号シ〔字ハ孟章〕、頗ル才学有リ、書ヲ善クシ、布施ノ圓山ノ碑、其ノ書スル所ナリ。

春藻錦機ハ文政四年辛巳ニ半樵亭主〔板屋小右衛門ト称ス〕ノ輯錦スル所ニシテ、今存スル所ノ人ハ僅カニ五人ナリ。僧ノ玄妙〔字ハ大玄、痴主ト号ス〕。誠處〔名ハ興、字ハ凡民、高島庄助ト称ス〕。法隆〔字ハ周済、光楽寺ノ老僧〕。赤松青〔時ニ松井藤馬ト称シ、後ニ高峯鼎亭ノ義子トナル、高峯玄臺ト称ス〕。及ビ浩斎老人ノミナリ。予、尤モ老人ト親シム、是レヲ以テ其ノ人物ヲ質スルヲ得ル。

緑處ハ小堀八十太夫ノ弟、西村氏ト為リ後ニ、西村與三男ト称ス。樫園〔名ハ篤〕、山本一覚ト称ス。浚庵ハ米屋八十兵衛ノ弟。石雲竺立道、笹河廣済寺ノ先住。北陵雄ハ鴨島ノ教恩寺ノ先住。佐野成章ハ六渡寺村ノ佐野屋年次郎。林檎主人ハ

その宗安の子が、曰く宗純である。その宗純が亡くなって子が無く、そこで元鑑を跡継ぎとした。元鑑は愚山と号し、〔字は孟章〕頗る学オがあり、書が得意で布施の円山の碑文は、彼の書いたものである。

「春藻錦機」は、文政四年（一八二一）に半樵亭主〔板屋小右衛門と称す〕が集めて彫り刻んだものである。それに掲載されている者で、今もいる人は僅かに五人である。僧の玄妙〔字は大玄といい、痴主と号した〕。誠處〔名は興といい、字は凡民、高島庄助と称した〕。法隆〔字は周済といい、光楽寺の老僧である〕。赤松青〔時には松井藤馬と称し、後に高峯鼎亭の義子となり、高峯玄臺と称した〕、及び浩斎老人だけである。私は、最も老人と親しかったので、それで人物について、いろいろと質問して知ることができた。

緑處は、小堀八十太夫の弟で、後に西村氏となり、西村與三男と称した。樫園は、〔名は篤という〕山本一覚と称する。浚庵は、米屋八十兵衛の弟である。石雲竺立道は、笹河廣済寺の先の住職である。北陵雄は、鴨島の教恩寺の先の住職である。佐野成章は、六渡寺村の佐野屋年次郎である。林檎主人は、

宗安子曰宗純、宗純歿子、以元鑑為嗣、元鑑号愚山、字孟章、頗有学、書善書、布施圓山碑文、其所書也、

春藻錦機、文政四年辛巳、半樵亭主、板屋小右衛門、之所輯錦、今所存之人僅五人、僧玄妙、字大玄、痴主、誠處、名興、字凡民、高島庄助、法隆、字周済、光楽寺老僧、赤松青、時松井藤馬、高峯為鼎亭義子、高峯玄臺、及浩斎老人而已、予尤與老人親、是以得質其人物、緑處小堀八十太夫之弟、為西村氏後、称西村與三男、樫園、名篤、称山本一覚、浚庵米屋八十兵衛之弟、石雲竺立道、笹河廣済寺先住、北陵雄鴨島教恩寺先住、佐野成章、六渡寺村佐野屋年次郎、林檎主人、

吉埜屋嘉兵衛、蕗園、名叔斐、字子章、槇屋貞助、桃里、名信照、称大坂屋武左衛門、僧詩天、名師子、字王吼、下牧野東弘寺先住、烏郊、名槙、字某、百姓町上野屋嘉右衛門、戊午春歿、其弟子羽宗、碑銘乞、未果、法周、開発村妙専寺先住、彦玲、名維、初称藤甫、後称和田彦齢、櫟堂、妙国寺先住、容斎、栗田庸斎、如斎、東林別號、

文化三年丙寅、富田徳風使其友長崎蓬洲、氏家玄兎、称関屋八右衛門、宮崎斗百、称太田屋甚右衛門、篠原花溪、称増山屋善兵衛、田代春舟、称棚田屋小兵衛、田代朴亭、称棚田屋小右衛門、田代菊史、称棚田屋小左衛門、市山青羽、称下村屋吉右衛門、横山雀梅、称米屋伊右衛門、百緡買地於無影井之東、以創一堂、謂之修三堂、是邑中講堂之嚆也、

吉埜屋嘉兵衛。蕗園〔名ハ叔斐、字ハ子章〕槇屋貞助。桃里〔名ハ信照〕ハ大坂屋武左衛門ト称ス。僧ノ詩天〔名ハ師子、字ハ王吼〕ハ下牧野ノ東弘寺ノ先住。烏郊〔名ハ槙、字ハ某、百姓町上野屋嘉右衛門、戊午春ニ歿ス、其ノ弟子ノ羽宗、碑銘ヲ乞フ、未ダ果タセズ〕。法周ハ開発村妙専寺ノ先住。彦玲〔名ハ維、初メ藤甫ト称ス〕ハ和田彦齢ト称ス。櫟堂ハ妙国寺ノ先住。木舟ノ松田丁梦ハ別号ナリ、容斎ハ栗田庸斎ト称ス。如斎ハ東林ノ別号ナリ。

文化三年丙寅、富田徳風其ノ友ヲ使テ、長崎蓬洲、氏家玄兎〔関屋八右衛門ト称ス〕、宮崎斗百〔太田屋甚右衛門ト称ス〕、篠原花溪〔増山屋善兵衛ト称ス〕、田代春舟〔棚田屋小兵衛ト称ス〕、田代朴亭〔棚田屋小右衛門ト称ス〕、田代菊史〔棚田屋小左衛門ト称ス〕、横山雀梅〔米屋伊右衛門ト称ス〕、市山青羽〔下村屋吉右衛門ト称ス〕、百緡ヲ出シ、無影井ノ東ニ地ヲ買イ、以テ一堂ヲ創ル。之レヲ修三堂ト謂フ。是レ邑中ノ講堂ノ嚆ナリ。

吉埜屋嘉兵衛である。蕗園（名は叔斐といい、字は子章）は槇屋貞助である。桃里（名は信照）は大坂屋武左衛門と称する。僧詩天（名は師子といい、字は王吼という）は下牧野の東弘寺の先の住職である。烏郊（名は槙といい、字は某、百姓町の上野屋嘉右衛門、戊午（寛政十年一七九八）の春に歿、その弟子の羽宗が碑銘をたのんでいるが、未だ果たしていない）。法周は、開発村の妙専寺の先の住職である。彦玲（名は維といい、初め藤甫と称した）は和田彦齢と称した。櫟堂は妙国寺の先の住職である。木舟は松田丁梦の別号である。容斎は栗田庸斎と称した。如斎は東林の別号である。

文化三年（一八〇六）に、富田徳風が中心となって、その友の長崎蓬洲、氏家玄兎（関屋八右衛門と称す）、宮崎斗百（太田屋甚右衛門と称す）、篠原花溪（増山屋善兵衛と称す）、田代春舟（棚田屋小兵衛と称す）、田代朴亭（棚田屋小右衛門と称す）、田代菊史（棚田屋小左衛門と称す）、横山雀梅（米屋伊右衛門と称す）、市山青羽（下村屋吉右衛門と称す）のそれぞれが、紐で銭差しにした銭百ピンを出し、無影井の東に土地を買い、そこに一つの堂を造った。これを修三堂と名付け、町での最初の講堂とした。

時海保青陵來遊、後二年脇坂義堂來遊、原松洲之來、亦講書於此、文政初年、以折橋清狂（又、雄川ト号シ、甚助ト称ス）ノ弟ノ（名ハ寛、三郎ト称ス、後ニ喜三右衛門ト称ス）ヲ女婿トシ、之ニ居ラ使ム。時ニ邑中ノ学ビ従ウ者、百余人、予ノ兄弟モ亦、句読ヲ就受スル。後ニ徳風ニ嗣無ク、桐陰ガ入リテ其ノ後ヲ受ケ、此ノ堂、遂ニ廃ス。

文政八年乙酉、宰ノ大橋君（作之進ト称ス）ガ命ジテ、邑社ノ前ニ於イテ講堂ヲ建テル。蓋シ養老軒ヲ毀シテ之レヲ増広スルナリ。桑山玉川（梅染屋武兵衛次ト称ス）ヲ使テ、其ノ事ノ主トスル。堂ガ成ル。敬業堂ト称ス。村井豊州君ニ請ヒ、扁額ヲ書ク、富山ノ侯臣ノ小塚南郊（名ハ之則、外守ト称ス）ヲ講師ト為ス。十一月朔ニ孝経ヲ始講ス。邑中ノ子弟ヲシテ就学セシム。宰、時ニ之レ我邑ノ文学ヲ是ニ於イテ盛ンニセントス。明年二月ニ文宣王ヲ祭リ、明楽ヲ以テ奏ス。後ニ大橋君ガ免職シテ去ル。講堂ハ漸クニシテ廃ス。

この時に、京都から海保青陵が来る。二年後には脇坂義堂がやって来て、ここに泊まった。また、原松洲もきて、ここで書の講義をする。

文政初年（一八一八）に、折橋清狂（また、雄川と号し、甚助とも称した）の弟の桐陰（名は寛といい、三郎と称す、後に喜三右衛門と称す）を婿として堂に住まわせた。その時の町中の従学者は百余人で、私の兄弟も句読の講座を受けた。徳風には、跡継ぎの男の子がいなかったので桐陰が、婿として堂の後継者となった。その堂も、遂に廃止することとなった。

文政八年（一八二五）に、町奉行の大橋君（作之進と称す）が命じて町の社（今の開野神社）の前に講堂を建てることにする。ただし、これは白銀町にあった養老軒を壊し、その材で増築するものであった。桑山玉川（梅染屋武兵衛次と称す）をしてそのことの責任者とする。こうして堂ができあがり、敬業堂と名付けた。村井豊州君に頼み扁額を書く。富山藩の侯臣の小塚南郊（名は之則といい、外守と称した）を招いて講師とする。十一月一日に孝経の講義をはじめる。町中の年少者たちを対象に就学させる。町奉行は、これでもって、わが町の文学が盛んになることを願った。翌年の二月に明楽を奏して文宣王（孔子）を祭る。それが終わって奉行の大橋君が、職を退いて去る。その後、暫くして講堂が廃止される。

時海保青陵來遊、後二年脇坂義堂來遊、原松洲之來、亦講書於此、文政初年、以折橋清狂（又、雄川ト号シ、甚助ト称ス）ノ弟ノ（名ハ寛、三郎ト称ス、後ニ喜三右衛門ト称ス）ヲ女婿トシ、之ニ居ラ使ム。時ニ邑中ノ学ビ従ウ者、百余人、予ノ兄弟モ亦、句読ヲ就受スル。後ニ徳風ニ嗣無ク、桐陰ガ入リテ其ノ後ヲ受ケ、此ノ堂、遂ニ廃ス。

文政八年乙酉、宰ノ大橋君（作之進ト称ス）ガ命ジテ、邑社ノ前ニ於イテ講堂ヲ建テル。蓋シ養老軒ヲ毀シテ之レヲ増広スルナリ。桑山玉川（梅染屋武兵衛次ト称ス）ヲ使テ、其ノ事ノ主トスル。堂ガ成ル。敬業堂ト称ス。村井豊州君ニ請ヒ、扁額ヲ書ク、富山ノ侯臣ノ小塚南郊（名ハ之則、外守ト称ス）ヲ講師ト為ス。十一月朔ニ孝経ヲ始講ス。邑中ノ子弟ヲシテ就学セシム。宰、時ニ之レ我邑ノ文学ヲ是ニ於イテ盛ンニセントス。明年二月ニ文宣王ヲ祭リ、明楽ヲ以テ奏ス。後ニ大橋君ガ免職シテ去ル。講堂ハ漸クニシテ廃ス。

今ハ飯野屋仁右衛門ノ宅ガ是レ其ノ跡ナリ。

弘化初年、上田幻斎（名ハ耕、作之進ト称ス）ガ大仏ノ後ニ於イテ講堂ヲ築ク。其レガ桑田ノ中ニ在ルヲ以テ、之レヲ称シテ曰ク桑亭。一時、稍盛ンナリ、嘉永末年ニ至リ遂ニ廃ス。此ノ事ハ歌詩ニ関ワラズト雖モ、亦、文学ノ盛衰ヲ観ルニ足ル矣、

曩昔ニ詞客ノ優遊シテ憩息スル所ニ、曰ク臨江亭、馬喰街ニ在リ、今ハ青木伯養ノ居ル所ノ西ナリ。曰ク養老軒、一ニ浄光庵トモ称ス、谷内ニ在リ、今ハ板屋長助ノ居ル所ノ地、是レナリ。曰ク是性庵、一ニ春宵庵トモ称ス、坂下街ニ在リ、今ハ中邨屋治右衛門ノ居ル所ノ地、是レナリ。

寺崎蝸洲ガ養老軒ノ詩ニ云フ。

『通衢ノ裏ニ在ルト雖モ、後園ニ緑野深ク、何ゾ消ク救笠借リテ、山村遠ク幽尋ス。』

桑山石蘭ガ養老軒ノ夏日ニ云フ。

『風清ク雲起ル宝池ノ頭、夏景無塵ニシテ品物閑、遊賞捜襟忘俗累、満林緑葉ガ満チ、気秋ノ如シ。』

今は、飯野屋に右衛門宅が、その址である。

弘化初年（一八四四）に、上田幻斎（名は耕といい、作之進と称す）が大仏の後ろに講堂を築いた。それが桑畑の中にあることから桑亭と名付けた。一時、やや、盛んであったが、嘉永末年間になって遂に廃止された。このこと自体は、直接、詩歌に関わることではないけれども、町の文学の盛衰を観るにたる事柄といえよう。

昔、詩歌をつくる同人が、なごやかに憩い休む所として博労町に臨江亭というのがあった。今は、青木伯養が住んでいるところの西になる。養老軒、また、浄光庵ともいったが、谷内（現在の白金町）にあり、今は、板屋長助のいるところが、その地である。是性庵、また、春宵庵ともいったが、坂下町にあり、今、中邨屋治右衛門のいるところが、その地である。

寺崎蝸洲が、養老軒の詩に云う。

『別れ逆の裏の通りに在るといえども、後ろの畑に緑の野が遠く広がり、山村が、いかにも、すっかり養笠を借りたように、遠く静かにつながり連なっている。』

桑山石蘭が、養老軒の夏日に、次のように云っている。

『宝池の辺りに風が清々しく雲を起こし、夏の景色に汚れがなく、万物が歯並びのように連なっている。遊びを愛でて楽しむ者は、白居易が、云ったように、例え、衣冠束帯をつけていたとしても昔を思い、今を喜ぶという俗事のわずらわしさを忘れてはならない。周りの林には緑葉が満ち、気配は、既に秋のようである。』（白居易が、「思往昔今」の詩に、「雖在簪裾従俗累」といい、衣冠束帯をつけていると雖えども俗累（俗事のわずらい）に従うといい、つまり、昔を思い今を喜ぶという俗事のわずらいを忘れてはいけないといっている。）

葉氣如秋。若臨江亭是性菴之詩、他日當收錄、

寺崎蝸洲翁、学村瀬栲亭、又学皆川淇園、自寛政年間、至文政初年、兼此中[illegible]尤好稗史小説、有蝸洲餘珠二巻、囲譚一巻、及狐茶袋等著、刊行于世、其戯和歌琴湖竹枝詞云、首蕭花飛春已稀、秋千格五惜斜暉、雛姫亦識阿嬢意、兩手又扉不許歸、螢節既過蟬序迎、玉欄干外藕花香、曉風殘月佳光景、古盆琴姫與笛晩、村瀬栲亭評云、風調鬆靈、恰尓得竹枝體、上頡頏劉隨州、下壓倒楊誠齋、

蝸洲翁中謝好用新奇字、蓋以仰慕六如上人、故像然耳、其春初禊題云、自然習染者歟、

「囲譚」寺崎蝸洲著

若シ臨江亭、是性菴ノ詩ハ他日ニ収録ニ当タル。

寺崎蝸洲翁、村瀬栲亭ニ学ブ、又、皆川淇園ニ学ブ、寛政年間ヨリ文政初季ニ至ル。仰レテ詩壇ノ主盟トナル。尤モ稗史・小説ヲ好ム、蝸洲ニ餘珠ノ二巻アリ、囲譚一巻及ビ狐茶袋等ヲ著シ、世ニ刊行スル。其ノ某琴湖ノ竹枝ノ詞ニ載レ和シテ云フ。

『首蕭ノ花飛ビ春已ニ稀、秋千格五ヲ惜シミ斜シテ暉ク、雛姫亦タ阿嬢ノ意ヲ識リ、両手デ扉ヲ又シ帰ルヲ許サズ、螢ノ節既ニ過ギ序ニ蟬ヲ迎エル、玉欄干ノ外ニ藕ノ花香リ、晩ノ風ニ残月ノ佳光ノ景、琴姫ガ笛聊ト興ニ古盆ス。』

村瀬栲亭ガ評シテ云フ、風調ガ鬆靈ニシテ恰モ竹枝ノ體ヲ得ル尓。上ニハ劉ニシテ頡頏スル隨州、下ニハ楊ニシテ壓倒スル誠齋ナリ。蝸洲ハ新奇字ヲ好ミテ用フ、蓋シ平生六如上人ヲ仰ギ慕ウ、故ニ自然ニ習染セルモノカ。其レヲ春初禊ト題シテ云フ。

「狐の茶袋」寺崎蝸洲撰

蝸江亭、是性菴の詩があれば、他日にその収録に当たりたい。

寺崎蝸洲翁は、[1]村瀬栲亭に学び、また、[2]皆川淇園に学ぶ。寛政年間から文政初期に至る。皆から仰がれて詩人の仲間の会の中心となる。最も小説風の歴史や小説を好んだ。蝸洲には珠玉の二巻があり、囲譚一巻及び狐茶袋等を著し、世に刊行している。

その某琴湖の竹枝の詞に載れ和して云う。

『うまこやし（豆科の多年草で、牛馬の飼料にする）の花が飛び散り、春も已に終わりをつげようとしている。そこへ秋の月ともいえる気高い品格を備えた月が、五更（午前四時頃）を過ぎるのを惜しむかのように、あやしげに斜めから光り輝いている。そんな時、少女の姫が、またも、姉嫁の思いをさとって、両手で扉を塞いで帰すことを許さない。蛍の季節が既に過ぎて、ついで蟬の季節を迎える。立派な欄干の外に蓮の花が香っている。夜明けの風のなか残月が美しい光に冴えて、あやしげに辺りを照らしている。そんな時、琴姫が笛の男を奪い尽くして離さない。』

村瀬栲亭が批評して次のように云う。詩が松風の魂を聴くように恰も竹の枝の体を得るようである。上にはまさかりのように人には田しない隨州であり、下には楊のように優れて他をしのぐ誠斎である。

蝸洲翁は、文字の六体の一つで、古文に似ている珍しい形の書体を好んで用いた。また、まさしくその平生を[3]六如上人を仰ぎ慕った。そのことからその影響が自然に習い染まっていったということか。それを春初禊と題して云う。

『入梅香リ水自ズト妍、耳根眼識ニテ両相憐ミ、帰來シテノ高臥ノ窓下ノ詩、夢青声白影ガ邊ニ在リ。』

皆川淇園、批シテ云フ、青声白影ハ奇ニシテ則チ奇ナルカナ、頗ル[1]渉怪ナル辭アリ。

海保青陵、翁ニ詩ヲ贈リテ云フ。

『吾兄ノ構思ハ他情ニ没シ、英筆雄詩ノ両声有リ、古人ヲ取ル如ク來比スル者、直ニ兼ネテ万里ノ元章ヲ與エ、蓋シ美ノ辞ガ溢レ属ス、時ニ翁邑ノ正ト為リ、勢イ自ズカラ然ラシム耳』

富田徳風、皆川淇園ニ学ブ、蝸洲・徳風、同ジク淇園ノ門人ナリト雖モ、両人各趣向ヲ異ニス、徳風ハ歌詩ヲ事ハズ、専ラ経義ヲ主トシ、是レヲ以テ講堂ノ挙アリ。報時鐘ノ銘、初メ邑ノ宰ノ寺島君、中島半助ヲ使テ之レヲ作ル。冗漫ニシテ體ヲ失ウ。是レニ於イテ皆川淇園ニ請フ、蓋シ両人ノ周旋ニ出ズル也。其ノ稿ハ徳風ノ家ニ伝フ、往年ニ某邑ノ宰ノ奪イ去ル所トナル。

「時鐘銘」
（文化元年に鋳造された時鐘銘の批評）

『梅花の香りがして水自ずと美しい、それを、耳で聞き眼で見て相憐れみ、帰り来たって世俗を離れて隠れ住む窓の外に詩となって青い声白い影を夢見るかのように、辺りに漂わせている。』

皆川淇園が批して云う、青声白影とは、奇にして正に奇ということだ。頗る通常と異なる関わり方の辭がある。

海保青陵が蝸洲翁に、次の詩を贈って云う。

『わが兄の思いの結び方は人と違った趣を取り上げ、優れた筆と詩の両面に名声をあげている。その著するところ古人から取る如く他の事物を例えに引いて、直ちに万里を包み、それでいて元々の彩りを与え、思うに美しい詞が付きしたがって溢れている。時に翁は町の長となり、その人を制する威力は自ずと、然りといわしむるのみである。』

富田徳風は皆川淇園に学ぶ。蝸洲と徳風が、同じく淇園の門人であったということだが、二人は互いに全く趣向を異にし、徳風の方は詩歌をつくることをせず、専ら四書・五経など儒教の教えを説いた書の意味を主に勉強していた。このために講堂をつくる企てがあったのである。

高岡の時報の鐘に刻む銘を、最初に町役人の寺島君が[2]中島半助に作らせたが、文章に締まりがなく長いことからその体を失うものであった。このことから皆川淇園にお願いすることになった。ただし、これは徳風、蝸洲両人の取り持ちによるものである。その時のことを記した稿が徳風の家に伝えられていたが、ある年に某なる町役人が奪い去ったという。

奪去、因錄於左、

越中高岡新造報時鐘銘并序、平安皆川愿撰并書、金澤侯封内越中高岡、本名關野、自一瑞龍公老後營菟裘焉、改今名、其民屋數千、實為封内一大都、尤是天明二年春、其宰寺島某、以其未有報時鐘、欲作之以惠民、時請之於一公府、既獲一聽允、未果、會更職、其事寢、文化元年、其孫寺島競、復來宰高岡、以祖志之所在、因與同官荒木直哉、相共謀之、以其地金匠街民及木街民、舊有蒙恩卿賜宅地之故、咨以其銘鑄建造之事、二民喜奉其旨、迺會自己為之、官乃為貸資、不日而就、既而其鐘生響而聲嘲哳、坂下街民、有綿賈鐵鍋屋者、本因リテ左ニ録ス。

越中高岡ニ新造スル報時鐘ノ銘并ビニ序。平安ノ皆川ガ愿撰シ并ビニ書ク、金沢侯ガ越中高岡ノ内ニ封ス、本ハ関野ト名ズク、瑞龍公、老後ヨリ焉ニ菟裘ヲ営ム、今改メテ名ズ、其ノ民屋敷ハ千、実ニ封内ノ一大都ト為ス。是レヨリ先ノ天明二年春、其ノ宰ノ寺島某、其ノ未ダ報時鐘ノアラザルヲ以テ、恵民ヲ以テ之ヲ作ルコトヲ欲シ、時ニ之ヲ公府ニ請フ、既ニ聽允ヲ獲シガ、未ダ果サズ、會ニ免職ス、其ノ事寝ム。文化元年、其ノ孫ノ寺島競ガ復タ高岡ニ来テ宰トナリ、祖志ノ在ル所ヲ以テ、因リテ同官ノ荒木直哉ト與ニ、之レヲ相共ニ謀リ、其ノ地ノ金匠街ノ民、及ビ木街ノ民ノ旧カラ宅地ヲ賜ル故ノ恩顧ヲ蒙ムルノ有ルヲ以テ、其レヲ以テ鈴鑄建造ノ事ヲ諮ル。二民喜ビテ其ノ旨ヲ奉ズ、廼チ倹シク自ラ之レノ為ニ乞フ、官ノ費資ノ貸ヲ為シ、日ナラズシテ就ク、既ニ其ノ鐘ヲ生響セシガ、声ガ嘲ク矣。坂下街ノ民ニ、綿ヲ賈トスル鍋屋ト号スル者アリ。

そこで次に記すこととする。

越中の高岡に新しく造る時報の鐘の銘並びに序、京都の皆川淇園が謹んで撰し並びに書く。金沢侯の前田利長公が越中の高岡を領地とされる。元は関野といった。瑞龍公が老後を送る隠居の城を築かれた。今、改めて高岡と名付けられた。その民屋敷は千もあり、実に領土内の一大都とされた。今から逆上る天明二年（一七八二）の春に、当時の町役人の寺島某が、町に時報の鐘が未だ無いことから慈しむ町民によって造ることを願い、その時、藩庁へ願い出て、既にその許しを得ていたが、未だそれを果たせないまま、たまたま職を退くことになって、そのことが途絶えてしまった。文化元年（一八一八）に、その孫の寺島競が、また、高岡に来て町役人となる。そこで同じ役人の荒木直哉と共に相談して、金屋町と木町の人々が、旧から宅地を賜るなどの恩顧をうけているので金属を溶かし込んで鐘を造ることをもちかけた。二町の町民が喜んで賛成してくれた。そこで倹約してこれをなし遂げることをお願いし、官にも経費の融通を手続きして間もなく取りかかった。こうして鐘を鋳たのだが、その音が馬の嘶くようなものであった。坂下町の町人で綿を商いとする鍋屋という者がいた。

出自金匠街民之族、心慍其工敗、奮仕其事、自請廨署、更設冶場于梅山、又募民戶錢、既復督鑄再之而竟成、其質純完聲又洪亮、官吏歡欣、民庶抃躍、蓋凡用銅五千六百二十五斤、工千一百人、十一日畢云、鐘口徑三尺七寸、唇厚六寸、高五尺四寸、併鈕高六尺五寸、重三千七百五十斤、於是紹闡正富田宏、寺崎一貫、以其素為余門人、晩書京師、乞予為之銘、銘曰、「良宰孝思、善継祖規、賢僚輔賛、致彼嘉詣、金木竭力、鑄建是役、其功既就、惠同天施、一都衆庶、獲莫失時、茲勤厥績、徵之萬祀。」文化三年丙寅四月既望、

従清水氏觀蝸洲翁櫻廟雜咏十首、

欠字ナシ

欠字ナシ

本ハ金匠街ノ族ヨリ出ズ。心カラ慍リ、其ノ工ヲ敗シ、奮ッテ其ノ事ニ任ジ、自ラ廨署ニ請ヒ、更ニ冶場ヲ梅山ニ設ケル。又、民ニ戸銭ヲ募リ、既ニ復タ鑄ヲ督シ、再ビ之ヲシテ竟ニ成ス。其ノ質ハ純ニシテ完ナリ、声ハ又、洪亮ナリ。官吏ハ歓欣シ、民庶ハ抃躍ス。蓋シ凡ソ銅ハ五千六百二十五斤ヲ用イル。工ハ千一百人、十一日デ畢ルト云フ。鐘ノ口径ハ三尺七寸、唇ノ厚サハ六、高サハ五尺四寸、鈕ヲ併セテノ高サハ六尺五寸、重サハ三千七百五十斤。是レニ於イテ総閲ノ正ノ富田宏、寺崎一貫、其ノ余ノ門人ノ素ヲ為スヲ以テ、書ヲ京師ニ馳セテ、予ニ銘ヲ為スヲ乞ウ。

銘ニ曰ク、

「良宰ガ考思シ、祖規ヲ善継シテ、賢僚ガ輔賛シ、致彼ニ嘉詣シテ、金木ノ力ヲ竭シ、是レヲ役シテ鑄建ス、其ノ功既ニ就ル、恵同ハ天施ニシテ、一都ノ衆庶、失時ノ莫キヲ獲ル、茲ニ厥績ヲ勒シ、之レヲ萬祀ニ徴ス。」

文化三年丙寅ノ四月ニ既ニ望ム。

清水氏ニヨリ蝸洲翁ノ桜廟雜咏十首ヲ観ル。

元は金屋町の一族から出たもので、心から憤り、その鐘を壊してしまい、奮って鐘づくりに当たり、自ら役所に願い出て、さらに梅山に鐘を鋳造する場所を設け、また、町民に銭を募り、再び鐘の鋳造を促した。こうして二度目にして遂に完成させた。出来上がった鐘の質は純にして完璧なもので音は明るく豊かなものであった。役人たちは小躍りして喜び、町民たちは手を打って躍り喜んだ。これには凡そ五千六百二十五斤の銅を用い、工人が延べ千百人、十一日を掛けたという。鐘の口径は三尺七寸、唇の厚さは六寸、高さは五尺四寸、取っ手を併せた高さは六尺五寸、重さは三千七百五十斤である。それでもって町全体の頭である富田宏と寺崎一貫の二人、元は私（皆川淇園）の門人であったことから、手紙を京都の私の所へ送って、私に銘を作るよう請うてきた。

そこで銘に、次のように云った。

「町のよき奉行が、慈しむ町民のために時報の鐘を造ろうというよい考えを立て、その先人の企てをよく引き継いで皆で賢く同意して助け合い、事を計ってめでたく鐘を造るべく、金木ともいえる真心を尽くして鐘を鋳るよう努力する。そのかいあって既に願いが成就する。その恵みは等しく天からの施しである。町中の誰もが時を失することなく時刻を知ることができた。ここにその功績を刻んで、それを万代に伝えるべく記す。」

文化三年の四月に、既に希望し、求めにきた。

清水氏によって、蝸洲翁の桜廟雜咏の十首を観る。

有朱批、皆川淇園、所書、紙尾云、皆川先生非惟一代龍門、實風流教主也、足下嘗遊于先生之門、伏冀拙作十首、介足下而汚電覽、但恐朽木糞牆、不足煩先生之彫鏤也、其捨而不顧、固其分也、萬一先生有所言、則其永為家輝、幸足下炳察、丁巳正月人日、埼一貫拜、衡德風主盟、乃知蝸洲翁介富田德風始乞正於淇園者、介懷之、寛政九年丁巳蝸洲年二十五、德風年二十、時游學於京師、後藤白雪、亦學皆川淇園、其歸也、淇園送詩云、京城浪速恨離居、豈念乖離更又疎、北地秋風將發日、莫忘鴻雁數行書、自注云、後藤瑛本居浪華數年、更又帰越中、書之贈予、曾於蠹簡中得祖父氷水君與叔父俊五君書云、頃日、後藤白雪自京師帰、説水滸傳、毎夜従聴者七八十人云云、當時事體可想矣、如其學術、雖不可得而知、意拘拘於師説耳、海保青陵和後藤氏韵云、不特先生即越人、兼令孔道再四春、幸假透視心膓眼、偏照古今賢與愚、暗有所諷、蓋斥唯知有淇園、而不知其他也、若其詩、不多経見、虎賢云、嗚汝於兎、能乳子文、誰言殘害慈心拔羣、重佛云、風冷隆冬日、兒童作佛譁、未施黄金色、頭上敬天花、今道集一巻、丹楓之遺草也、安永乙未丙申之作、中載詩云、河東夜坐云、鴨河東望翠樓臺、銀燭清流夜色

守山町にあった横町屋
（下段中央右寄 守山町絵図 正徳2年(1712)）

朱ノ批有リ、皆川淇園ガ係ワリテ批ス、紙尾ニ云フ、

皆川先生ハ惟ニ一代ノ竜門ニ非ラズ、実ニ風流ノ教主ナリ。足下嘗テ先生ノ門ニ遊ブ、伏シテ冀ハク、拙作十首ヲ、足下ヲ介シテ電覧ヲ汚サン、但シ朽木糞牆シテ先生ノ彫鏤ヲ煩ワスニ足ラザルヲ恐レルナリ。其レヲ捨テテ顧ミズトモ、固ク其ノ分ナリ。万一ニシテ先生ノ所言有レバ、則チ其レ永ク家ノ輝キトナサン。幸ニ足下ハ炳察ス。丁巳正月人日、埼一貫拜。

徳風ヲ主盟ニ衡リ、乃チ蝸洲ヲ介シテ富田徳風ヲ知ル、初メニ正ハ淇園ニ乞フ、按ズルニ寛政九年丁巳、蝸洲ハ年二十五、徳風ハ年二十、時ニ京師ニ游学ス。

後藤白雪、亦タ皆川淇園ニ学ブ、其ノ郷ニ帰ルヤ、淇園ガ詩ヲ送リテ云フ。

『京城、浪速ノ離居ヲ恨ム、豈乖離シ更ニ又疎トナルヲ念フ、北地ニ秋風ノ将ニ発ツ日、鴻雁ノ数行ノ書ヲ忘レルコトヲ莫レ。』

自注ニ云フ、後藤瑛ハ本、浪華ニ数年居ル、更ニ又、越中ヘ帰ル、之レニ書ヲ贈ル。

これに皆川淇園について次のように評している。文章の末尾に云う。

皆川淇園は、ただ単に一代の優れた人ではなく、実に風流の教祖ともいえる人である。足下、曾て先生の門に学んだ。頭をさげて願わくは私の拙作十首を、お見せして先生の目を汚したいと思う。ただし、朽ちた木は彫刻もできず、腐った壁は塗りもできないにしても先生の彫り鏤を煩わすに足らないことを恐れている。私の作を捨てて顧みられなくとも、元よりその分であることは判っている。万が一にも先生からのお言葉があれば、それこそ永く我が家の輝きとしたい。幸いに足下はその点を十分に察していただけるものと思います。丁巳（安政四年、一八五七）正月七日、寺崎一貫拜。

徳風を会の中心となる主にすえ、そこで、蝸洲翁は富田徳風を介して知る。初めに正の富田宏が淇園にお願いしたいとした。思うに寛政九年（一七九七）に蝸洲が二十五歳、徳風二十歳の時に京都に遊学する。

後藤白雪もまた、皆川淇園に学ぶ。その郷里に帰って来た時に淇園が詩を送って、次のように云った。

『どうして別々に離れ、更に又、疎遠になるのかと思うと、京都と難波での生活から去っていくことが恨めしい。君は将に秋風の吹く北の地に向かってこの日に発ってゆく、詩経にいう離散してさすらう民を周の宣王が教ったという哀鴻の数行の書を忘れる勿れ。』

自ら注して云う。後藤瑛は、もと、難波に数年おり、さらにまた、越中に帰る。これに書を贈る。

予、曾テ蠹簡ノ中ニ、祖父ノ氷水君ガ叔父ノ俊五君ニ与エシ書ヲ得ルニ云フ。頃日、後藤白雪ガ京師ヨリ帰リ、水滸傳ヲ説ク、毎夜従聴者ガ七八十人云々、当時ノ事體ヲ想フベキ矣。其ノ学術ノ如キハ、知リ得ベカラズト雖モ、意ハ師ノ説ノミニ於イテ拘拘タリ。

海保青陵ガ後藤氏ノ韵ニ和シテ云フ。

『不特ニシテ先生即越人ナリ、兼テヨリ孔道ヲ再回シ春ト令シム、幸ニ假ヲ心デ透視シ眼デ傷ミ、偏ニ古今ヲ照ラシ賢ニ愚ヲ與フ。』

暗ニ諷刺するところがある。蓋しただ淇園の存在を知ることを退けて、それでいてその他を知らないようである。もしかしてこの詩は、緩書を多く見ていないようである。

虎の賛に云う、

『汝、兎ニ於イテ鳴キ、能ク乳子ヲ文ス、誰ガ残害ト言フトモ、慈心抜群ナリ。』

雪仏に云う

『風が冷えきる冬真っ盛りの日、子供達が騒ぎながら雪で仏さんを作っている。未だ、金色の色を施す前に、天から散華の雪が散り始めている。』

今道集一巻は、辻丹楓の残した詩文の下書きである。安永四、五年の作で、「河東の夜に坐して」に次のように云っている。

『鴨河の東に連なる遊女屋数を遠く見渡すと、明るく光る灯火が鴨川の清流に映り夜景が広がっている。私は嘗て虫が食った書類の中に、祖父の氷水君が叔父の俊五君に与えた書を得て云う、近頃、後藤白雪が京都から帰り、水滸傳を説き、毎夜聴衆者が七八十人云々とある。当時のその場の有様を想像するに、その学問の業の様子は分からないけれども、趣は師の説くところによるだけに明らかである。

海保青陵が後藤氏の韵に和して云う、

『当然のことだが、先生は、まさに越中人である。孔子の道を繰り返し学び修めて、遂にそれを手中のものとされた。有り難いことに偽りを心で見透かし眼力で破り、偏に古今を照らして偽物と真実の違いを明らかにする人である。』

暗に諷刺するところがある。蓋しただ淇園の存在を知ることを退けて、それでいてその他を知らないようである。もしかしてこの詩は、緩書を多く見ていないようである。

虎の賛に云う、

『お前は、時には兎となって鳴いてみせ、よく、乳のみ子をあやし育てる。お前に誰が害を与えると云ったとしても、お前の慈悲の心こそ抜群である。』

雪仏に云う

『風が冷えきる冬真っ盛りの日、子供達が騒ぎながら雪で仏さんを作っている。未だ、金色の色を施す前に、天から散華の雪が散り始めている。』

今道集一巻は、辻丹楓の残した詩文の下書きである。安永四、五年の作で、「河東の夜に坐して」に次のように云っている。

『鴨川の東に連なる遊女屋数を遠く見渡すと、明るく光る灯火が鴨川の清流に映り夜景が広がっている。

閑。檻外歌聲何所惹。少年逕歩去還来。緑鳧河畔美人家。殘燭清流月欲斜。但看微風翠簾動。不教蕩子到西涯。送山蘭卿（名は有香、封山と号す、山本中郎）帰省云、

驊騮朝發鴨河東。愛日鞭向越中。客路應爭飛鳥去。苑林風静對尊翁。丹楓林碧波屋伊右衛門、世世傳其巧雕鏤惜哉不知有此詩量也、

蝸洲翁遺稿、載與春樵（梅辻）唱和詩十餘首。因謂當時春樵之所作、或傳於寺崎氏、乃訊諸寛處。寛處云、我家不存一紙。吾聞、八橋（名高、左エ門、後称八三郎）執贄于春樵之門、必存彼家、乃使人問何齋。何齋曰、我受業于村瀬拷亭、春樵之来、以同門之故耳、平春樵之来我邸、在病不能相見、是以無片楮尺紙、

予、後ニ津田半村（名ハ操、字ハ子薫、塩屋彌右エ門ト称ス）ノ家ニ一冊子ヲ観ル。題シテ曰ク梨春風雅、春樵ノ門人ノ加越ニ在スル者ヲ輯刻スル中ニ何斎ガ載リ、雨後ノ渉園ニ云フ。

『風雨ガ嗔リテ芳菲ヲ妬ミテ砕キ、蝶ガ舞イ鶯ガ歌ウ事已ニ非ズ、独リ牡丹有リテ猶ヲ露帯ビテ、今朝向日ニ紅衣ヲ曝ス。』

則チ何斎ヲ春樵ノ門ト為ス。蓋シ何斎ノ人ト為リ、傲矜ニシテ自ラ高シ、人後ニ落チルコトヲ欲セズ、是レヲ以テ此ノ不経ノ説ト為ス、以テ人ヲ欺ク耳。且ツ其ノ詩ハ全経ヲ蝸洲翁ノ粉脂ニ似ル、何斎ハ春ニ来テ舌疽ヲ患イ、夏ニ入ッテ泉下ニ帰ル。只、惜シムラクハ生前ニ之ヲ賞セザルヲ。

逸見亀年（初メ沢田氏ト称シ、後ニ復タ本姓トス）ノ遺墨ヲ観ル。蓋シ内藤彼邱ノ添削ヲ経ル者、野田山ニ登リテニ云フ

『一径斜ニ三両村ニ通ジ、松風ノ声裡ニ黄昏ニ欲ス、渓邊ノ山上ニ英雄ノ塚、今日ハ惟ダ野鳥ノ翻ルヲ看ル。』

須磨懐古ニ云フ。

『南海ノ墳ニ二月ノ風ガ荒レ、涛声ガ馬ノ如ク月ガ弓ノ如シ、

檻外ノ歌声ハ何所トモ惹ク、少年逕歩シテ還来シテ去ル、緑鳧ノ河畔ニ美人ノ家、残燭ノ清流ニ月斜ニ欲シ、但シ微風ニ翠簾ノ動ヲ看ルヲ、不教ニシテ蕩子西涯ニ到ル。』

山蘭卿（名ハ有香、封山ト号シ、山本中郎ト称ス）ガ送リ、帰省ニ云フ。

『驊騮ニテ鴨川ノ東ヲ発チ、愛日鞭ヲ鳴ラシテ越中ニ向カウ、客路応ニ飛鳥ト争イテ去ル。苑林ニ風静カニシテ翁ニ對シ尊ス。』

丹楓ハ碧波屋伊右衛門ト称シ、世ニ但ニ其ノ巧雕鏤惜シキ哉、此ノ詩ノ量アルヲ知ラザルヲ。

蝸洲翁ノ遺稿ニ、梅辻春樵ノ唱和シタ詩ヲ十餘首ト與ニ載ス。因リテ当時、春樵ノ作ル所ト謂フ、或イハ寺崎氏ニ伝ウ、乃チ諸ヲ寛處ニ訊ス、寛處云フニ、我家ニ一紙モ存セズ、吾、大橋何斎（名高、左エ門ト称ス、後ニ八三郎ト称ス）ニ聞ク、春樵ノ門ニ贄ヲ執ルニ、必ズ彼家ニ存ス。乃チ人ヲ使テ何斎ニ問フ、何斎ノ曰ク、我ハ業ヲ村瀬拷亭ニ受ク、春樵モ来タル、同門ノ故ヲ以テ耳、且ツ我ニ適ニ病アリ、相マ見エルコト能ハズ。是レヲ以テ楮尺紙ノ有片モ無シ。

塀の外に何処からともなく歌声が流れてきて、それに引きこまれそうである。若者がゆっくり歩きながら往来を往き来している。緑豊かな河畔に沿って美人の家が連なり、消え残る灯火を前にして清流に映る傾く月が欲しい。いやそれとも青い簾を動かす微風が見たいのか。そうこうするうちに酒の酔いがまわった俺は方向を見失って西の果てをうろついているではないか。

山本蘭卿（名は有香といい、封山と号した、山本中郎と称す）が送り、帰省に次のように云う。

『朝に鴨川の東を立派な栗毛の馬で発ち、日を惜しんで馬に鞭を打ち鳴らして越中に向かう。旅路では、まさに飛び去る鳥と先を争うように駆け去っていった。苑林には風もなく静かである。翁に対して敬い尊ぶ。』

丹楓は、碧波屋伊右衛門と称し、世にひとり彫りちりばめる優れた彫刻の技を伝えた。惜しいことだが、丹楓にこんなに沢山の詩があるとは知らなかった。

蝸洲翁の残した詩文の下書きに、梅辻春樵が唱和した詩が十余首が共に載っている。このために当時は春樵の作ったものだといっていた。或いは寺崎氏のところに伝えられているかと思い、寺崎寛處にいろいろと聞きただしてみた。寛處が云うには、我が家には一片の紙切れも存在しない。そこで私は大橋何斎（鷲塚屋八左エ門と称す、後に八三郎と称す）に聞くと、春樵の家に初めてお目見えした時に手土産をもって敬意を表しにいったが、その時に間違いなく彼の家にあったという。そこで人をして何斎に問う。何斎が云うには、私は業を村瀬拷亭から受ける。その時に春樵も来ていて同門であった。だから聞き置くだけにする。また、私にはたまたま病があり、お逢いすることもできない。というわけで、手元に保有する書簡も紙片もないということであった。

片楮尺紙、

有春樵之所作、或傳於寺崎氏、乃訊諸寛處、寛處云、我家不存一紙、吾聞、大橋何斎（名高、左エ門、後称八三郎）執贄于春樵之門、必存彼家、乃使人問何齋、何齋曰、我受業于村瀬拷亭、春樵之来、以同門之故耳、平春樵之来我邸、適在病不能相見、是以無片楮尺紙、

予、後ニ津田半村（名ハ操、字ハ子薫、塩屋彌右エ門ト称ス）ノ家ニ一冊子ヲ観ル。題シテ曰ク梨春風雅、春樵ノ門人ノ加越ニ在スル者ヲ輯刻スル中ニ何斎ガ載リ、雨後ノ渉園ニ云フ。

『風雨ガ嗔リテ芳菲ヲ妬ミテ砕キ、蝶ガ舞イ鶯ガ歌ウ事已ニ非ズ、独リ牡丹有リテ猶ヲ露帯ビテ、今朝向日ニ紅衣ヲ曝ス。』

則チ何斎ヲ春樵ノ門ト為ス。蓋シ何斎ノ人ト為リ、傲矜ニシテ自ラ高シ、人後ニ落チルコトヲ欲セズ、是レヲ以テ此ノ不経ノ説ト為ス、以テ人ヲ欺ク耳。且ツ其ノ詩ハ全経ヲ蝸洲翁ノ粉脂ニ似ル、何斎ハ春ニ来テ舌疽ヲ患イ、夏ニ入ッテ泉下ニ帰ル。只、惜シムラクハ生前ニ之ヲ賞セザルヲ。

逸見亀年（初メ沢田氏ト称シ、後ニ復タ本姓トス）ノ遺墨ヲ観ル。蓋シ内藤彼邱ノ添削ヲ経ル者、野田山ニ登リテニ云フ

『一径斜ニ三両村ニ通ジ、松風ノ声裡ニ黄昏ニ欲ス、渓邊ノ山上ニ英雄ノ塚、今日ハ惟ダ野鳥ノ翻ルヲ看ル。』

須磨懐古ニ云フ。

『南海ノ墳ニ二月ノ風ガ荒レ、涛声ガ馬ノ如ク月ガ弓ノ如シ、

私は（北渓）、後に津田半村（名は操といい、字は子薫という、塩屋彌右エ門と称す）の家で一冊子を観る。題して梨春風雅という。これには春樵の門人の越中にいる者を集め彫り込んで印刷している。その中に何斎が載り、「雨後渉園」に次のように云う。

『風が雨を怒んで怒り、芳しい草花を砕くように吹いている。蝶が舞い鶯が鳴く季節は已に過ぎてしまったが、ただ、独り牡丹が、なお、露を帯びて、今朝も太陽に向かって紅の衣を晒すように咲いている。』

そうして何斎を春樵の門人としている。これをどう明かしたてたらよいのか。本当に何斎という人は、その人柄は、奢りを慎み、それでいて自ら高潔な人で、人と争うことを欲しない人であった。こうしたことからこのような辻褄の合わない説が生じたということだ。だからといって人を欺いてはならないということである。そのうえその詩の全体の筋立てが何斎の詩の化粧に似ている。蝸洲は春になって舌疽を患い、夏になって亡くなってしまった。ただ、惜しむらくは生前に、これを賞せなかったことである。

逸見亀年（初めに澤田と称し、後にまた、逸見を本姓とする）の残した筆跡文を観る。けだし内藤彼邱の添削を得たものである。野田山に登りてに云う。

『一筋の道が登りの坂に沿って三つばかりの村に通なっている。心のうちにこの黄昏に松風が欲しい思いにかられる。渓の辺りの山上に歴代の英雄の墓が並んでいる。今日は、静まり返ったなかに、ただ、野鳥が空に翻って飛んでいるのが見えるだけである。』

須磨懐古に云う。

『南海の果ての墓に二月の風が吹き荒れている。波の音が馬の嘶く如く、月が弓の如き三日月である。

瑞花一落黄泉路竹笛空存古寺中

文化十一年甲戌、長崎蓬洲、栗田佐久閭、良継、庸斎之父、相謀、富山、島林文吾、名文字季華、号雄山、又自省、借聖安寺寺中安乗寺、令處之、以其與内藤王福舊知也、講孟子及唐詩選、又以詩教海人、就学者頗多、浩斎、庸斎、

田虎雄、田往学詩、津田半村、稱念寺懶外、名海導、字濟生、為舊相識、其他予叔母栗斎、玄渡邊玄碩、後月津為氏、松井藤馬、高峰梧門、内藤義子伊織、佐渡龍斎、稱義順、葉斎父、皆受業云、蓋今邑中所存之老詩人、出此人之豪斎中、多

高岡詩話巻之一

瑞花一ツ黄泉ノ路ニ落ツ、竹笛ガ空シク古寺ノ中ニ存ス。」

文化十一年甲戌、長崎蓬洲ガ栗田佐久閭〔良継、庸斎ノ父〕ト與ニ相謀リ、富山ノ島林文吾〔名ハ文、字ハ季華、雄山、又自省ト号ス、林文ト称ス〕ヲ聘シ、聖安寺ノ寺中ノ安乗寺ヲ借リテ、其ノ内藤王福ト與ニ旧知ナルヲ以テ之レニ処セシム。孟子及ビ唐詩選ヲ講シ、又以テ詩ヲ人ニ海エル。就学者頗ル多シ、浩斎、庸斎ノ徒、日ニ往キテ詩ヲ学ブ、津田半村、称念寺ノ懶外〔名ハ海導、字ハ濟生〕ハ旧ヨリ相識ル。其ノ他予ノ叔栗斎〔玄勇ト称ス〕、渡辺玄碩〔本姓ハ渡辺氏、後ニ津島氏ヲ冒ス〕、松井藤馬〔高峰梧門ノ旧称〕、内藤ノ義子ノ伊織、佐渡龍斎〔養順ト称シ、葉斎ノ父〕皆業ヲ受ケフ。蓋シ今邑中ニ存スル所ノ老詩人ノ多クハ此ノ人ノ囊斎中ヨリ出ズ。

高岡詩話巻之一

玉のような花が一つ死者のゆく、お墓への路に落ち、竹笛の音が空しく古寺の中に聞こえている。」

文化十一年甲戌（一八一四）、長崎蓬洲が栗田佐久閭〔良継・庸斎の父〕と共に相計り、富山の島林文吾〔名は文といい、字は季華、雄山、また、自省と号し、林文と称す〕を招いて、聖安寺の寺中の安乗寺を借りて、内藤王福とも旧い知り合いであることからその処置にあたらせた。孟子及び唐詩選を講義し、また、詩を人々に教えた。就学する者が頗る多かった。浩斎や庸斎たちが日々やってきて詩を学んだ。津田半村、称念寺の懶外〔名は海導といい、字は濟生〕は旧くより相知る仲であった。その他、私の叔父の栗斎〔玄勇と称す〕、渡辺玄碩〔本姓は渡辺氏、後に津島氏を名乗る〕、松井藤馬〔高峰梧門の旧称〕、内藤の義子の伊織、佐渡龍斎〔養順と称し、葉斎の父である〕などの皆が業を受けたという。こうして今、町中にいる老詩人の多くはこの島林文吾の指導をうけて、そのふいごの中から育ったという。

高岡詩話巻之一。

高岡詩話巻之一

【読み下し文中の語句説明】

(1) 法諡　法名のこと。
(2) 襁褓　幼少の時。
(3) 投老　隠居する。
(4) 薄薄　しあわせ薄いこと。
(5) 劉郎　天台山で仙女と交わったという劉晨の故事から遊女に溺れた男で、放蕩者のこと。
(6) 餘習　以前から残っている習わしのことで、ここでは蓬園塾の習わしとして、例えば、徂来の本姓を物部というが、それを省略して物徂来と呼ぶ。この例によって清水少連であれば、清少連と呼ぶのである。
(7) 梵宮　梵王宮の略で寺、寺院のこと。
(8) 桑桑　猛々しいこと。
(9) 崔嵬　石や岩のごろごろして険しい山。
(10) 遒勁　筆力が強いこと。
(11) 軾ニ憑ル　車中の礼、軾は車の前部にある横木で、車中、目上の人に会ったとき、これに伏して礼を行うこと。
(12) 嚮　さしずばた、合図旗、采配、旗で指図すること。
(13) 偃壓　抑え従わせる。
(14) 韜畧　兵法の書。
(15) 孤弱　身寄りがなくか弱い。
(16) 宗祀　尊び祭る。
(17) 雄闊　優れて広く大きいさま、雄大なこと。
(18) 慫臾　誘いすすめること。
(19) 掛鍋　集め彫り刻むことから出版する。
(20) 鋟　はじまりのこと。
(21) 文宣王　孔子の諡である。
(22) 明楽　わが国に伝来した中国の明代の音楽で、明朝に仕えた楽人の音楽であった。江戸時代に京都を中心に流行したが、安永の頃に衰退する。

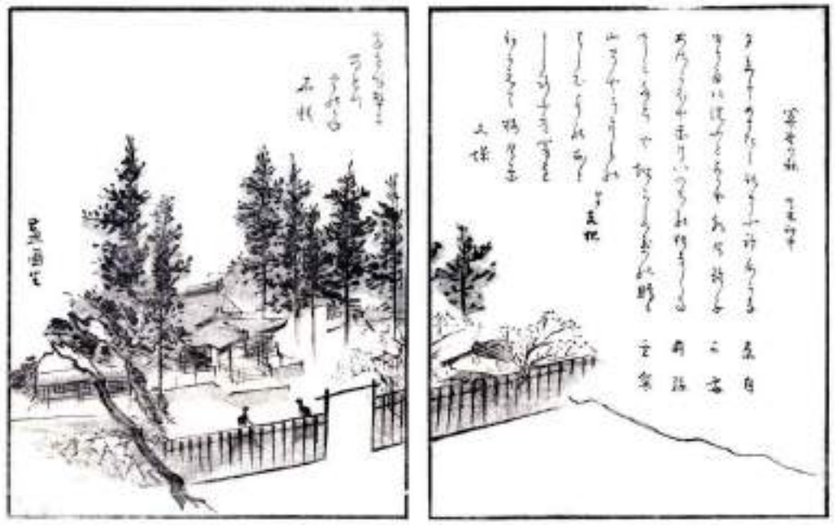
【現代語訳文中の内容説明】

(一) 山斗　泰山北斗の略で、泰山と北斗星のことで共に人から仰がれ慕われるものの例えである。また泰斗ともいう。当時、高岡では荻生徂来の蓬園塾の門下人代表といわれた服部南郭が山斗と仰がれたということである。
(二) 閑散余録　安永六年（一七七七）に南川金渓により二巻二冊で刊行された。
(三) 修三堂湯話　高岡湯話のことで、文化四年（一八〇六）に富田徳風が中心となって同志の者が修三堂に集まり、高岡の町の善行者を数十人を書き出して高岡湯話として編集する。また、修三堂は、文化三年に富田徳風が無影井の傍に講堂を造り、修三堂と名付ける。
(四) 高陵風雅　高岡で出版された詩歌集で、釈自然が撰録し、明和四年（一七六七）に上梓される。
(五) 高陵風雅後集　寛政十年（一七九八）に、日下青河が集めて版木に刻んで出版する。漢詩十七首の他、俳句なども収めている。
(六) 春渠錦機　高岡で文政四年（一八二一）に半樵亭主（板屋小右衛門）が、詩を集めて彫り刻んで出版した詩歌集である。
(七) 五言律　明和四年（一七六七）に春風館張水頼が出版する。（二十首）
(八) 蓬園　江戸の儒学者の荻生徂来が開いた学塾。その門人の代表に高岡の服部家の出である服部南郭がいる。
(九) 布施の円山の碑　氷見の布施の布勢神社境内に万葉の碑がある。享和二年（一八〇二）のもので県内最古の碑である。服部淳卿が建て、撰文は山本有香（中郎）、書は、題字が花山藤公、撰文の書は内藤元鑑である。

(23) 偃息　休み憩うところ。
(24) 須借　須は須の俗字で、すべからくのことで、須借とは、すっかり借りること。
(25) 稗史　小説風の歴史、民間のこまごましたことを記録したもの。
(26) 首蓿　うまこやしのことで、豆科の多年草で牛馬の飼料とする。
(27) 松霊　松風の魂に触れる。
(28) 頡頏　人と優劣を争うこと。
(29) 壓倒　屈伏させる。
(30) 新奇字　漢字の六種の書体の行書、草書などというものの一つで奇字といい、古文に似ている珍しい書体である。
(31) 渉怪　通常と異なる怪しさ。
(32) 慍撰　憤んで詩文をつくる。
(33) 莫裘　中国の山東省、にあった戦国時代の魯の地名。隠公が隠居したところで、転じて隠居することをいう。
(34) 聴允　許しを得る。
(35) 生鑄　鐘を鋳造すること。
(36) 廨署　役所のこと。
(37) 朴躍　手を打って躍り喜ぶこと。
(38) 電覧　人に見せることに対する敬語。
(39) 朽木糞墻　朽ち木は彫刻もできず、腐った壁は塗りもできないということで精神の腐った者は教育しがたい。転じて気力のない怠け者ということである。
(40) 人日　一月七日のこと。
(41) 蠹簡　虫が食った書類。
(42) 蕩子　道楽者。
(43) 雕鏤　彫りちりばめる。
(44) 贊ヲ欽ル　初めてお目見えする時に手土産をもって敬意を表すること。
(45) 楮尺紙　一尺ばかりの紙のこと。
(46) 倣衿　奢りを慎むこと。

(一〇) 狂詩　漢詩の作法に従いながら俗語や俗調を交えて面白くおかしく詠した詩の一種。
(一一) 頼鴨涯　頼三樹三郎のこと。高岡の山本道斎が京都の頼山陽の塾で学んだことで三樹三郎と知己をえ、三樹三郎が蝦夷地を訪ねた帰りに、片原町の道斎の家に逗留し、高岡の文人たちと優遊する。
(一二) 川中島に老賊を撃つ　上杉謙信と武田信玄の川中島の合戦をいう。
(一三) 海保青陵　江戸後期の儒学者、経済学者、諸国を遊歴して武士の町人化、商売繁盛の秘策を説いた。青陵が説くには「学問とは、古のことに詳しきことばかりのことにては無きなり。今日唯今のことに詳しきが、よき学問というものなり」と規定し、現実的で実利的でなければならいとしている。ところが武士たちは「古より興業を憎むものとしている」このため全国を遊歴して武士の商人化を説いて回っている。
(一四) 村瀬栲亭　江戸後期の儒学者、京都の人。京都で講説し、博学で知られ、詩もよくした。
(一五) 皆川淇園　儒学者で京都の人。経書の言語の研究を重んじ、開物学を唱えた。書画もよくした。
(一六) 六如上人　江戸中期の天台の学僧。近江の人で仏教を学ぶ傍ら漢詩を学び、宋詩を範とした新詩風をもたらした。
(一七) 鎖屋仁左衛門が、取り壊したという田時鐘の銘を中島半助に作らせたとあるが、この銘について、「時鐘銘」が、文化紀元六月加賀藩学助教木堆謹撰、中嶌尚書とあり、この銘文について批評したものが、横町屋の一族、富田徳風が書いたらしいとして高岡市史料集の第一集に収録されている。

(47) 嚢籥　鍛冶屋の火をおこすふいご。嚢は、ふいごの外箱、籥は、内部の風をおくる管。ここでは町中の老詩人の多くは、島林文吾の指導をうけ、そのふいごの外箱、管から生まれ育ったものだといっている。



関野の社「玉飛路ひ」

(一八) 水滸伝　中国の長編小説で、宋の時代の群盗たちの事跡を壮渾、壮絶に脚色して記している。
(一九) 辻丹楓　高岡漆器の祖ともいわれ、明和年間に京都から擬堆朱、存星などの技法を伝えたといわれる。楓雨の作としては、御車山の通町の高欄・後屏、小馬出町の鉾留、木舟町の大黒天・高欄などが伝えられている。詩集に今道集がある。
(二〇) 唐詩選　中国の唐代の一二七人の詩人の詩選集である。江戸時代では、これを漢詩の入門書として活用された。

北溪居士津島佶著

蝸洲翁の社中ハ、長崎浩斎、清水蕗園、桑山石蘭（梅染屋専助ト称ス）、妙国寺樵堂、澤田等岳（澤田屋ト称ス、後ニ扇子屋ヲ冒ス）、石川雪峰（名ハ憲、新保屋周平ト称ス）、上原龍圃（名ハ師古、初メ貞順ト称ス）及ビ桃里烏郊ト為ス。而シテ等岳ガ社前ニ於イテ廬ヲ結ビ、松映房ト曰ウ、社中ノ人吟詠ヲ以テ此レニ会ス、是レ鳳鳴社ノ藍膈ノ所ナリ。

浩斎老人ハ博識ニシテ多聞ナリ、其ノ大規盤水先生ノ七十ヲ寿ギ、五言百句ヲ一字モ重ネ用イズ、其ノ筆力見ルベシ矣、老人ハ千字文ヲ好ミ、蓋シ其ノ體ヲ倣ウナリ。新宮凉亭ガ評シテ曰ク、大作ニ老眼ヲ驚カス、中島棕軒ニ与エ贈ル所ノ碩ノ五言一百韻ニ相敵ス、篇ガ長ク録スル能ハズ。

浩斎ガ春ニ二十首ヲ興シ、文政紀元戊寅ニ刻ス。

北溪居士津島佶著

寺崎蝸洲翁を中心とする社中の面々は、長崎浩斎、清水蕗園、桑山石蘭（梅染屋専助と称す）、妙国寺の樵堂、澤田等岳（澤田屋と称し、後に扇子屋を名乗る）、石川雪峰（名は憲といい、新保屋周平と称した）、上原龍圃（名は師古といい、初め貞順と称し、後に迂斎と称した）、及び桃里烏郊である。そうして澤田等岳が高の宮の前に庵をつくり、松映房と呼び、社中の人々が吟詠をするために集まった。これが鳳鳴社の出発点となる所である。

長崎浩斎老人は、博学で多く物事を聞き知っている人である。大槻盤水先生の七十歳の古希を寿き、五言百句を詠まれたが、それには一字も重ね用いず、而もその文章の力強さは見るべきものがあった。老人は習字手本として流布していた千字文を好み、まさしくその作の風調は見習いたいものがある。新宮凉亭が評して云うには、その大作を通して老人の優れた眼力に驚かされる。中島棕軒に与え贈った碩五言一百韻にも優るものである。篇が長いので、ここに録することができない。

浩斎が春に二十首を作って文政元年（一八一八）に印刷した。

石堤東林評云、風韵洒脱、殊覚警奇、今摘其最者、浩斎老人春寒云、寒風吹雨打茅茨、社日清明前後時、猶愛蒲団無火閣、只愁櫻朶照燈遲、自注、櫻枝之照灯、櫻田容斎春月云、良夜吾如有期、穿簾春月十分奇、閑吟獨坐書窓下、無限清光浮硯池、早春云、健竹穿烟吟歩来、江頭十里獨徘徊、客冬為是無深雪、両岸梅花花已開、老人今題其後云、四十年前舊拙詩、看来堪愧又堪嗤、

清水蕗園、次櫻廂先生云、園林清影引清風、紅去緑来春事空、要識閑中光景味、新鶯鳴過一聲中、両餘吟杖到幽樓、萬雀声中將麥秋、把筆聊要賡玉韵、渺々碧水遶欄流、清談縷縷

石堤ノ東林ガ評シテ云フ、風韵ガ洒脱ニシテ殊ニ奇警ヲ覚ユ、今、其ノ最タルモノヲ摘ウ。

浩斎老人、「春寒」ニ云フ

『寒風吹キ雨茅茨ヲ打ツ、社日清明ノ前後ノ時、猶蒲団兼ネテ火閣ヲ愛シ、只桜朶ノ点燈ノ遅レヲ愁ウル。』

〔自注ニ桜将ニ開花シ、邑俗ニ之レ点灯ト称ス〕

栗田容斎、「春月」ニ云フ。

『良夜吾ニ期ノ有ル如ク興エ、簾ヲ穿チ春月十分ニ奇ナリ、書窓下ニ閑吟独座シ、無限ノ清光硯池ニ浮カブ。』

「早春」ニ云フ。

『健竹ニ烟ヲ穿チ吟ジテ歩来シ、江頭十里ヲ独リ徘徊ス、客冬ニ深雪ノ為ニ是レ無シ、両岸ニ梅花已ニ開ク。』

今、蕗ニ老人、題シテ、其ノ後ニ云フ、四十年前ノ旧キ拙詩、看ルニ甚ダ愧、又、甚ダ嗤ヲ来タス。

清水蕗園、桜廂先生ニ次テ云フ。

『園林清ク影ヲ引キ風清シ、紅去リ緑来リ春事空シ、要ハ閑中ノ光ニ好景ヲ識ル。新鶯中ニ一声過ギテ鳴ク、雨餘ニ吟杖シテ幽樓ニ到ル、萬ノ中ニ雀ノ声、将ニ麦秋、筆ヲ把ッテ聊ニ玉韵ヲ要賡ス、渺渺トシテ碧水欄ヲ遶リテ流レ、

石堤の長光寺の東林が批評して云うには、趣があかぬけしてこだわりがなく、特に鋭く人の心をつくものが感じられる。今、その中から最たるものを摘んでみる。

浩斎老人が「春寒」に云う。

『寒風が吹き、雨が茅葺きの屋根を叩いている。春分のあと十五日も過ぎて二十四節気の清明の日の前後の頃だというのに、まだ、布団とともに火のあるねやが恋い慕われている。こんなことでは、ただ、毎年の桜の開花の折の点灯の遅れが心配になってくる。』

自ら注して、桜が、将に開花すると、邑の習いとして点灯する。そのことを云う。

栗田容斎が「春月」に云う。

『よい夜に私との約束を交わしたように春の月が簾を通して十分に奇しい光をもたらしている。独り書台の下に座って詩歌を静かに口ずさむ。その時、無限の清らかな月の影が硯の海に浮かんでいる。』

「早春」に云う。

『健やかな竹が立ち込める中を煙のような霧を切り裂くように吟じながら川のほとりの遠い道を独りさまよい歩いてくる。冬になって深い雪に閉ざされて誰独り訪れる客も無かったが、両岸には既に梅の花が盛んに開いている。』

今、ここに浩斎老人が題して、その後に云う。

『四十年前の昔の拙詩を見ると、甚だ恥ずかしい、また、甚だあざ笑えるような作である。』

清水蕗園が、桜廂先生（桜廂は、蝦洲の別号である）に、次いで云う。

『庭の林が清らかな影を引いて清々しい風が吹いている。花の季節が去って新緑の時を迎え春のことが空しい。しかし、肝心なことは、静かな中に光の影の好ましさを知ることである。今年初めてのホトトギスが、折よく一声鳴いて去ってゆく。雨の後、詩人が杖をついて閑居にやってくる。深い草むらに雀が鳴き、まさに麦秋の時を迎えている。筆を把って、些かなりとも立派な詩をつくりたいという思いにかられる。青い水を湛えた河が橋をめぐって遠く流れている。

夕陽斜。論自劉家至李家。忽有幽螢
呈熠燿。帰程送我照連波。竹逕望中
曲似蛇。清風過處影参錯。時聞吟伴
探詩料。夏色方登錦帶花。（名国常字真道 汎雲雪荘）
桑山石蘭本津幡人。閑雲禪師之在能州也。有事於金城。路必由津幡。
是以與禪師久相知。禪師之死。高岡
石蘭寂寞知云。有石蘭遺稿一卷。抄
出其尤者。春江泛舟云。山頭春色百
花時。山下泛舟江水流。今日共君游
物外。塵襟好是濯漣漪。水樓避暑云。
三伏炎蒸日。涼深上水樓。長松清籟
起。重嶺積陰浮。碧浪虛閣。輕舟繞
曲流。斜陽多勝事。避暑好遨遊。
妙国寺樑堂。庭櫻廂先生招。與諸子
同賦云。烟雲深處老松斜。占盡清閑

縷縷清談スルニ夕陽斜ス、論ハ劉家自リ李家ニ至ル、忽チニ幽螢有リ熠燿ヲ呈ス、帰程ニ漣波ガ照リテ我ヲ送ル、竹徑ノ中曲ヲ望ムニ蛇ニ似ル、清風影処ヲ過ギテ斜ニ還リ、時ニ吟伴ヲ携エ詩料ヲ探ス、夏色方ニ錦帶ノ花ニ登ル。』

桑山石蘭ハ本ハ津幡ノ人、閑雲禪師〔名ハ国常、字ハ眞道、初メ雲荘ト号ス〕之レ能州ニ在ルナリ。金城ニ事エルコト有リ、路ニ必ズ津幡ニ由ル、是レヲ以テ禪師ト與ニ久シク相知ル。禪師之レ高岡ニ至リ、石蘭寂モ旧知ト云フ。石蘭ニ遺稿一巻アリ、其ノ尤モノモノヲ鈔出ス。

「春江泛舟」ニ云フ。

『山頭ニ春色百花ノ時、山下ノ江水ノ濃ニ舟ヲ泛ベ、今日君ト共ニ物外ニ遊ブ、塵襟是レ漣漪ニ濯スルヲ好ム。』

「水樓避暑」ニ云フ。

『三伏ノ炎蒸スル日、涼ヲ尋ネテ水樓ニ上ル、長松清ク籟ヲ起シ、重嶺ノ積ム陰ガ浮キ、碧浪ガ虛閣ニ漲シ、軽舟ガ曲流ヲ繞ル、斜陽ニ多勝ノ事、避暑ヲ好ミ遨遊ス。』

妙国寺ノ樑堂、桜廂先生ノ招キニ応ジテ、諸子ト與ニ同ジク賦シテ云フ。

『雲ガ烟リ深キ處ニ老松斜ス、清イ間ニ便シタ作家ヲ占盡ス、

気持ち良く縷々語り合っているうちに、夕陽が西に傾き、話も劉家から李家に移る。忽ち静かに蛍が鮮やかな光をあらわす。帰りの道筋にさざ波が照りながら私を送ってくれている。竹林の中の曲がりくねった小道が蛇のように蛇行している。清らかな風が影の所を過ぎてはすかいに過ってゆく。その時に、連れの吟人と詩のたねを探す。夏の景色は、まさに、錦の帯のように美しいうえに、さらに花をそえるように麗しい。

桑山石蘭は、元は津幡の人である。かつて閑雲禪師〔名は国常といい、字は眞道、初めは雲荘と号した〕が能登にいた時に、金沢の城に仕えることがあり、その道の途中に必ず津幡の石蘭のところに寄った。このことから禪師と久しく相知る仲であった。その禪師が高岡に来ることになり、石蘭が最も旧知だという。石蘭の遺稿が一巻あり、それから最もよいものを抄出する。

「春江泛舟」に云う。

『山の辺りに春の景色が八千種の花の時、山下の川波に舟を浮かべて、今日は友人と共に世の俗事を離れて遊ぶ、俗世間の汚れた心を漣でもって洗い流しこの上なく好ましい。』

「水樓避暑」に云う。

『夏の夏至の後の暑さの厳しい炎が蒸しかえるような日、涼を求めて水に浮かぶ楼に上る。高い松が清らかに悲しげな松風を響かせている。幾重にもただなずく峰が水に影を映している。碧い波がゆったりと広々と水をひたしている。小舟が屈曲した流れに沿ってめぐってゆく。西に傾く夕陽にも数々の優れた楽しみ方があり、避暑にきたことを喜んで遊び楽しむ。』

妙国寺の樑堂が、桜廂先生の招きに応じて、皆と共に同じく賦に云う。

『雲が奥深く煙っているところに老松が斜めに立っている。この清らかなところを訪れた作家の心を奪い尽くす。

便作家。午睡醒來何所見。畠丁影落水之涯。又云、吟朋來到水邊樓。麥畝綠殘方作秋。酒酌醒酬筍烹玉。優遊不覺夕陽流。全次先生韵云、欄外清流曲似蛇。東阡南陌暮烟斜。非唯螢火流庭際。涼風催興筆生花。夏日蘭櫻廂先生云、霧霖濛濛濕窓櫺。蝸篆流銀看最工。忽憶水南吟社興。幽螢

早已入詩中。

上原龍圃、次櫻廂先生韵云、逕吟來就月光斜。僧舍蕭條陽市家。寂寞田頭絕如畫。柔秋戰戰動青波。安政丁巳年七十九猶矍鑠、一日過予。示元旦詩云、椒酒酌來心豁然。世塵一洗逕新年。年豐便覚民家好。聖代謹聲街裏連。去年秋病虎狼痢而歿、

樣堂画「春藻錦機」

午睡カラ醒メ来ッテ何ソ所見、会ニ丁ノ影水ノ涯ニ落ツ。』

又、云フ。

『吟朋ト水辺ノ樓ニ来タリ到リ、麦畝ニ緑リヲ残シ方ニ秋ヲ作ス、酒ヲ酌ミ醍醐ノ旬ノ玉ヲ烹ル、優遊不覚ニシテ夕陽流ル。』

同ジク先生ノ韵ニ次テ云フ。

『欄外ノ清流ガ蛇曲ニ似テ、東仟南陌ガ暮レノ斜ニ烟ル、唯、螢火庭際ノ流レニ非ラズ、涼風ノ生花ニ筆ノ興ヲ催ス。』

夏日ニ桜廂先生ノ簡ニ云フ。【詩ハ略ス】

上原龍圃、桜廂先生ノ韵ニ次テ云フ。

『逕クニ吟ジ未ダ月光斜ニ就カズ、僧舎ガ市家ヲ隔テテ蕭條トシ、最愛スル田頭絵テ画ノ如ク、柔秋ガ戰戰トシテ青波ニ動ズ。』

安永丁巳年ニ七十九、猶矍鑠ナリ、一日予ト過ゴシ、元旦ノ詩ニ示シテ云フ。

『椒酒ヲ酌ミ心ニ豁然ト来タル、世塵ヲ一洗シテ新年ヲ迎エル、年豊カニ便チ民家ニ好ヲ覚エ、聖代ニ謹声ガ街裏ニ連ルヲ。』

去年ノ秋、虎狼痢ヲ病ミテ歿ス。

昼寝から覚めて、ここに来て何の意見があろう。たまたま、男の影が水の辺りに映っている。』

また、云う。

『吟の友と水辺の樓にやって来た。麦畑の畝には緑が残り、まさに、秋たけなわである。互いに酒を酌み交わし、味がよく滋養に富む旬の代物を煮て、なごやかに遊ぶうちに酔いもまわって、うっかり気がついてみると、夕陽が落ちかかっていた。』

同じく先生の韵に次ぎて云う。

『欄干の外に流れる清流が蛇のように蛇行している。南北と東西に通ずる田圃の道が暮れかかった夕陽に煙っている。但し庭際の流れにはまだ螢火がない。この涼しい風の中でいきいきとした花に、つい筆を執りたい思いにかられる。』

夏日に桜廂先生の簡に云う。

『霧霖濛密湿窓櫺　蝸篆流銀看最工
忽憶水南吟社興　幽螢早已入詩中』

上原龍圃が、桜廂先生の韵に次ぎて云う。

『夜遅く吟じながらやって来たが、月は、未だ西に傾くこともなく光っている。お寺が町並みを隔てて厳かに囁いている。最も愛しい辺り一面の田が絵を織り広げたようである。田植えを終えた後の柔らかい稲の苗がそよぐように青い波を見るように揺れている。』

安永丁巳（四年一八五七）に七十九歳、なお矍鑠としている。一日、私と過ごし、元旦の詩に示して云う。

『屠蘇の酒を酌み心が広々と開ける思いを来す。新年を迎えて一年の世のけがれを洗い流す。新しい年が豊かで、さらに民の家がよしみを結び幸せを覚えることを願い。すぐれた天子様が治める世の町衆にも歌声がしきりに連なることを。』

去年の秋に虎狼痢に罹って亡くなる。

蝸洲社中又有樓齋者、應櫻廂先生之招、與諸子同賦云、養老軒前流水長、煙籠楊柳繞詩腸。紙田耕罷日方暮、代燭幽螢遶小廂。初夏雜詠云、聞得一聲新杜鵑。雙鬟碧沙雲連顧、隨吟伴至幽地。飽領風光及暮天。不知何人號詩稍足觀矣。

文政五年壬午春、詩佛先生來寓于陸舟樓、樓主（後屋太助）越中人。全七年甲申秋、先生再遊、又寓此樓、題詩云、閒閒經過路悠悠。客路不知風已秋。鮮膾何疑細於縷。越中晚飯陸舟樓。自是而後、樓名愈顯。凡文人墨客來遊此地者、心登此樓、文政天保之際、極其隆盛。嘉永末年漸衰。今乃為凡物之居。

文政八年乙酉、松映房杜、移會於陸

蝸洲ノ社中ニ又、樓齋ナル者アリ、桜廂先生ノ招キニ応ジ、諸子ト與ニ同ジク賦シテ云フ

『養老軒ノ前ニ流水長シ、煙楊柳ニ籠リ詩腸ニ籠ル、紙田ヲ耕シテ倦ミ、日方ニ暮レテ燭ニ代リテ幽螢ガ小廂ヲ遶ル。』

初夏ノ雑詠ニ云フ。

『一声ノ新ヲ杜鵑ヲ聞得シ、雙鬟ノ碧沙ニ雲連ナリヲ顧フ、吟ノ伴ニ顧随シテ幽地ニ至ル、飽領ノ風光ニ天暮レニ及ブ。号ヲ何人モ知ラズ、詩、稍観ルニ足ル。』

文政五年壬午ノ春、詩仏先生ガ来テ陸舟樓ニ寓ス。（樓主ハ越後屋太助ト称ス）同七年甲申ノ秋、先生再ビ遊ビ、又此ノ樓ニ寓ス。題詩ニ云フ。

『閒ニ閒ノ經路ヲ過ギテ悠悠、客、路ヲ知ラズ風已ニ秋、鮮膾樓ニ於イテ何ヲ疑ハス、越中ノ陸舟樓ノ晩飯ヲ。』

是レニヨリ後ニ樓ノ名ガ愈顕レ、凡ソノ文人墨客ガ来遊シ、必ズ此ノ樓ニ登リ、文政、天保ノ際、其ノ隆盛ヲ極ム。嘉永ノ末年ニ漸ク衰エ、今乃チ凡物ノ居トナス。

文政八年乙酉、松映房社ヲ陸舟樓ニ会ヲ移ス。

蝸洲の社中に、また、樓齋という者がおり、桜廂先生の招きに応じて、皆と共に同じく賦に云う。

『養老軒の前の用水が遠く連なって流れている。川並に沿った柳にかかる霧が籠もってぼんやりとかすみ、それが詩心にまで及んでくる。詩を綴り紙に書く呼も草臥れを覚え、日まさに暮れて、養老軒の小屋根のあたりに灯火の代わりに蛍火が静かにめぐっている。』

初夏の雑詠に云う。

『今年初のホトトギスの一声を耳にする。頭の左右に束ね揚げた髪のような青い梢に雲が寄り添うように連なっている。詩を吟ずる友にお願いし、この奥深く物静かな地に連れ立ってくる。刷毛でならしたような絶きの景色に空が暮れなづんでくる。この人の号を誰もしらない。詩は、やや観るに足るものである。』

文政五年（一八二二）の春、詩仏先生が来て陸舟樓に泊まる。（樓主は越後屋太助と称す）同じく七年の秋に先生が再び来遊して、この樓に泊まる。

題詩に云う

『度々険しい苦難の道を乗り越えてやって来て今や思いのまま、でも旅人は自分の境地に、まだ満足することができずに風は既に秋、越中での陸舟樓の夕食、この樓でいただく新鮮ななますを何を頑わしく惜ることがあろう、おいしいよ。』

これによって後、樓の名が愈よく知られるところとなり、凡その文人墨客が来遊すると、必ずこの樓に登り、文政・天保の頃には隆盛を極めた。それが嘉永の末年にきて漸く衰え、今は全く平凡な住まいと化してしまった。

文政八年（一八二五）に松映房社の会が陸舟樓に移される。

舟樓、當時社中、為長崎浩齋、粟田容齋、釈懶外、津田半村、富田桐隠、松田木舟、沢田恭堂〔周謙と称す〕、金子観水、江尻譲齋〔宗叔と称す、富山ノ人、時ニ高峰家ニ寓ス〕、釈台巖〔名ハ信成、字ハ義倩、時ニ超願寺左衛門ト称ス〕、釈恵蔵〔蓮光寺ノ弟〕、津島帆齋〔先兄ノ橋東君ノ別号〕及ビ鳥郊ト為ス。時ニ暑韵大成ヲ購ヒ、社中ノ蔵トナス。是ノ時、蝦洲翁既ニ歿シ。浩齋老人ヲ領袖トナス。是レヨリ毎月此ノ楼ニ会ス、明年ニ至リ、高峰犀江〔名ハ清臣〕、逸見雪窩、川上軌齋〔名ハ秀実、字ハ士穀、菱屋二郎四郎ト称ス〕、石川九齋□□□浚菴、釈教界ガ入社シテ邑中ノ詩ヲ能クスル者、或イハ入リ、或イハ出デ、連綿トシテ絶エズ。天保年間ニ至ッテ廃ス。

文政五年壬午、閑雲禅師ガ瑞龍寺ニ住ス。禅師尤モ書ヲ善クシ、海内ノ名家ナリ、交友頗ル多シ、旧ニ摂州ノ伊勢寺ニ住ス、

当時、社中には長崎浩齋、粟田容齋、釈懶外、津田半村、富田桐隠、松田木舟、沢田恭堂〔周謙と称す〕、金子観水、江尻譲齋〔宗叔と称す、富山の人、時に高峰家に泊まる〕、釈台巖〔名は信成といい、字は義倩、時に超願寺の左衛門と称す〕、釈恵蔵〔蓮光寺の弟〕、津島帆齋〔先兄の橋東君の別号〕及び鳥郊の面々がいた。時に暑韵大成を買い社中の所蔵とした。この時、既に蝦洲が亡くなっていた。それで長崎浩齋を頭とした。以来、毎月、この楼に集まって会をもった。明九年になって高峰犀江〔名は清臣といった〕、逸見雪窩、川上軌齋〔名は秀実といい、字は士穀、菱屋二郎四郎〕、石川九齋□□□浚菴、釈教界の面々が入社し、町中の詩をよくする者が、或いは入り、或いは出ていくなどして連綿と続いた。それが天保年間に至って廃れることになる。（暑韵大成を買い求め社中の所蔵としていたということは漢詩の音韻について勉強していたということである。）

文政五年（一八二二）に、閑雲禅師が瑞龍寺の住職となる。禅師は尤も書をよくし天下に秀でた人である。交友も頗る多い。もと摂津の国の伊勢寺に住していた。

舟樓、當時社中、為長崎浩齋、粟田容齋、釈懶外、津田半村、富田桐隠、松田木舟、沢田恭堂、金子観水、江尻譲齋、釈台巖、釈恵蔵、津島帆齋、及鳥郊、時購暑韵大成為社中之物、是時蝦洲翁既歿、浩齋老人為領袖、自是毎月會于此樓、至明年、逸見雪窩、川上軌齋、石川九齋、□□□浚菴、釈教界、而邑中之能詩者、或入或出、連綿不絶、至天保年間而廢、

文政五年壬午、閑雲禅師、尤善書、海内名家、交友頗多、舊住摂州伊勢寺、時柏如亭寓鳩居堂樓上、禅師以題梅園詩乞正、詩云、三年曾住梅溪寺、今日却從西裏看、記得東軒春月下、滿林香雪獨凭欄、如亭改二字、却作翻、下作夜、又曾問詩於大典和尚、和尚曰、凡作詩者、忌浮躁之字、長崎倚松云、（名敬、倚松、字長崎言定、）——石崎小洲曰、言定浩齋子、予一日訪閑雲禅師、談次及詩、禅師曰、吾不能詩、曾率雲水僧徒、登江州中山、時得一絶、固為予誦之云、歩上中峰踏太湖、雲生脚下自模糊、須臾變幻沒蹤迹、笑看天然活畫圖、可謂絶妙、

大菅二岳（株二、屋吉助、）上某大夫一篇、頗似李令伯陳情表、上子心竹（名衡、字竹王、称城、）持來道、倘得採録入詩話中、則傳

時ニ柏如亭ガ鳩居堂ノ楼上ニ寓ス、禅師ハ梅図ト題スル詩ヲ以テ正スコトヲ乞フ。詩ニ云フ。

「三年曾テ梅渓寺ニ住ス、今日却シテ画従ノ裏ヲ看ル、東軒春月下ト記スヲ得ル、満林香月ニシテ独リ欄ニ凭レル。」

如亭ハ二字ヲ改ム、却ヲ翻ニ作リ、下ヲ夜ニ作ル、又、曾テ詩ニツイテ大典和尚ニ問フ。和尚ノ曰ク、凡ソ詩ヲ作ル者ハ、浮躁ノ字ヲ忌ム。

予、一日、閑雲禅師ヲ訪ネ、談ヲ次ギ詩ニ及ブ、禅師ノ曰ク、吾詩ヲ能クセズ、曾テ雲水僧徒ヲ率イ、江州ノ中山ニ登ル、時ニ一絶ヲ得ル、因リテ予ノ為ニ之レヲ誦シテ云フ。

「歩上ハ中峰ニシテ太湖ヲ望ミ、雲生レテ脚下ニ白ク模糊トシ、須臾ニ変幻シ蹤迹ヲ沒シ、笑ミテ天然ノ活ケル畫画ヲ看ル。絶妙ト謂フベキ。」

大菅二岳（二上屋吉助ト称ス）某太夫ノ一篇ヲ上ル。頗ル李ニ似テ伯ノ情ヲ表ニ陳ベシム。上子心竹（名ハ衡、字ハ竹王、元城ト称ス）道ニ持チ来ル。倘シ詩話ノ中ニ入レテ採録シ得レバ、則チ朽チズニ傳ウルヤ、

ある時、柏如亭が鳩居堂の楼上に泊まる。その時、禅師が梅園と題する詩を、正してもらうことをお願いした。詩に云う。

「かつて三年、梅渓寺に住む、今日、画の裏をのぞいて見ると東の軒に春月の下に得ると記し、林いっぱいに雪が白く香りのある花を咲かせたように匂っている。それを独り欄干に凭れて眺めている。」

如亭は、二字を訂正し、却を翻に、下を夜に作った。また、曾て詩について、臨済宗の僧の大典和尚に問うた。和尚が云うには、凡そ詩を作る者は、浮ついて騒がしい字を避けるものである。

長崎倚松（名は敬勝といい、長崎言定と称す、石崎小洲がいうに言定は浩齋の子）が云う。私は、一日、閑雲禅師を訪ねて話をしているうちに詩のことに及んだ。禅師が云うには、私は詩を得意ではないが、曾て雲水たちを率いて近江の中山に登った。その時に一絶を作った。それで私の為に、その詩を誦して云う。

「琵琶湖を一望におさめることのできる過った峰の上を歩く、雲が生まれては足元をぼんやりとさせ、その雲が、しばし足元の足跡を隠すかのように幻のように忽ち現れては忽ちまた消える。笑って天然の生きた書画を見るようだと喜ぶ。絶妙というべきである。」

大菅二岳（二上屋吉助と称す）が某太夫の一篇を上げる。頗る李白に似て、然も叔父の情を表によく陳べている。これを上子心竹（名は衡といい、字は竹王、元城と称す）が道に持ってくる。若し、これを「詩話」の中に入れて採録することができれば、無くせずに長く伝えることができるだろう。

不朽矣、夫詩之述性情、無與文有二途、今此篇收此一篇、不為有害於理、文云、臣因薄命、幼丁險迫、行年五歲、慈母逝矣、尋慈父亦罹疾病、在于牀蓐三年、而臣微弱、未能仕湯藥之勞、年十歲、遂為孤矣、方是時、外既無親戚之顧、內又無朝夕之資、茫茫宇宙、唯有伯父上子、[八竹之父]之在耳、而

臣之祖、家於越中、六十有七世、其先大和之人也、其故事暨一先庆、鳴山地等之事、且載家譜、而六十六世無有事、及至臣身、家脈榮榮如瀉漆之將絶也、然幸伯父上子、閔傷臣孤弱、自援撫養、既而上子亦夥甚矣、雖然情義益堅、不令臣驅馳生理、唯教以書數、慶巢篤純、日希望臣成立、若非

夫レ詩ノ性情ヲ述ベルニ、文ニ二途アルヲ与エズ、今此ノ一篇ヲ収メテ、理ニ於イテ有害ヲナサズ。文ニ云フ。

『臣、薄命ニ因リ、幼丁ニ険ガ迫ル、行年ノ五歲ニ慈母ガ逝ク、慈父ヲ尋ネテ亦タ疾病ニ罹ル、(注)牀蓐ニ三年アル而シテ臣、微弱ニシテ未ダ湯薬ノ労ニ任ス能ハズ、年十歲、遂ニ孤トナル。方ニ是ノ時、外ニ既ニ親戚ノ顧ミルコト無ク、内ニ又、朝夕ノ(注)資米モ無ク、茫茫トシテ宇宙ニ唯叔父上子〔心竹ノ父〕ノ在ルノミ。而シテ臣ノ祖、越中ニテ家ス、六十有七世、其ノ先ハ大和ノ人ナリ、其ノ先ニ暨ブ故事何ゾ、山地等ヲ謂ルノ事、且ツ家譜ニ載ス。而シテ六十六世ニ有事無シ、及ビテ臣ノ身ニ至ル、家脈ハ栄栄トシテ瀉漆ノ如シ、之レ将ニ絶ナリ。然シテ幸イ叔父上子、(注)閔傷シテ臣ノ孤弱ヲ自ラ撫養シテ援ク。既ニシテ上子亦タ甚ダ夥ス、然リト雖モ情義堅ク益シ、令エ臣ガ(注)驅馳シ生理セシメズト、唯ニ書数ヲ以テ教エ、策シテ(注)鏡篤ヲ磨キ、日ニ希望シテ臣、成リ立ツ。

その詩の性質と心情を述べると、文に二途を与えすで、真に迫るものがある。この一篇を収めても道理から云っても害をなすものではない。文に次のようにいう。

『僕は、不幸せなために、幼い時から若者になるまで、何かと危ないことに見舞われてきた。年齢五歲の時に母を亡くし、父を尋ねる、この時、疾病に罹り、寝床に三年臥せる。それでも僕は、か弱くて、ずっと煎じ薬に頼らざるを得なかった。十歲の時に、とうとう独り身となってしまった。本当にこの時には、周りには、既に親戚の者から顧みられることもなく、内にあっては、朝夕の食べる米もなく、ポッとしてはっきりしない広い宇宙に、唯一人、叔父の上子〔心竹の父〕が居るだけであった。しかし、僕の祖先は越中に住むようになって六十有七世だという。その先は大和の人だという。その昔に、どんな故事があったかといえば、山地等を謂ったこと、そのうえ、家の系譜が載っている。そして六十六世の間に何事もなく、僕の身に至まで伝えられてきた。家の血筋は栄々として漆を注ぐ如くに栄え、このことは将に絶賛に値する。そうして幸いに叔父の上子が、独りか弱い僕を憐れみ傷み、自ら助けて可愛がり育ててくれた。その時には、上子も、また甚だ生活がゆき詰まっていた。とはいえども情け深い心は、これまでにも増して固く、例えば僕が、他人に使われて走り回るような生業に落ちないように、ひたすら、多くの書をもって教え、愚かで純い僕を磨くよう計らい、日々望みをかけて僕が自立できるようにしてくれた。

外字セズ

大字ナシ

外字ナシ

上子賞顧之厚如斯、則臣安得至於斯乎、而前宰主荒木氏、亦憐臣孤苦、以故十一歲而得上宦塗、頻蒙恩惠、雖然臣天稟之駑才、不能一堪其職、動輒顛躓困躓、而不以臣之如斯、令闕下以臣家之故事、奏吾一国公、令臣得拝一階下焉、是千歲之一遇、而人世之望無過焉、草莽之微、莫盛焉、

若シ上子ノ斯ノ如キ厚キ愛顧非ラザレバ、則チ臣、安ク斯ニ至リ得ズヲ、而シテ前ノ宰主ノ荒木氏、亦タ臣ノ孤苦ヲ憐レミ、故ヲ以テ十一歲ニシテ上宦ノ塗ヲ得テ、頻リニ恩恵ヲ蒙ル。然リト雖モ天稟ノオニ駑ク、一ニ其ノ職ニ堪エルコト能ハズ、動輒顛覆シテ困躓ス。而シテ臣以テセズ之レ斯ノ如シ、閣下、臣ノ家ノ故事ヲ以テシテ、吾ガ国ノ公ニ奏シテ、臣ニ階下ノ拝ヲ得セシム。是レ千載之レ一遇、而シテ焉ニ人ノ世ノ過チ無キヲ望ム、焉ンゾ草莽ノ栄ノ盛ン莫ランヲ。眞ノ不朽ハ之レ盛事ナリ、漆ハ之レ家勢ニシテ、是レニ於イテ始メ大ナリ。』

上子ノ多年ノ辛苦、是ニ於イテ始顯スル、是レ皆、閣下ノ奬成ノ餘澤ナリ、臣、先鬼ト共ニ鑑ミ、亦タ當ニ臣ノ肺腑ニ草ヲ結ビ、(注)毛頴ニ盡ス能ハザル、謂ニ上問ニ(注)蕪詞ヲ綴ル。

伏シテ惟レ感惕ニ堪エズ、謹敬ノ至リナリ。

八橋山通仙〔名ハ方邑、又、茶顛ト称ス〕文政丙戌ノ歲、広乾寺ニ來寓ス。自ラ高遊外ノ流ト称シ、

真、不朽之盛事也、漆之家勢、於是乎始大、上子多年之辛苦、於是乎始顯、是皆閣下奬成之餘澤也、臣先鬼共鑑、亦當結草、臣之肺腑、非毛頴所能盡、聊綴蕪詞、以上聞、伏惟不堪感惕、謹敬之至也、

八橋山通仙〔名古嵩、号茶顛、又、文政丙戌之歲、來寓於廣乾寺、自称高遊外之流、

若しも上子のこのような厚い引き立てがなかったら僕は容易に今の自分に辿り着くことはできなかったであろう。そして前の町役人頭の荒木氏も、僕の独り身の苦しみを憐れみ、そのために十一歲で宮をけがして仕えるよう計らい、沢山の恩恵をうけた。それにもかかわらず僕は、生まれつきの自分の才能に驚く、というのも全くその職に堪えることができなかったのである。ともすれば事をなすたびに、引っ繰り返して苦しみ躓くのである。それでいて僕は何もできないという始末である。身分の高い方が、僕の家の古い事を国の殿様に上奏し、僕に階段の下での拝を与えて下さった。これは千年に一度しかありえないような滅多にない好機会である。そして人の世の過ちの無いことを望み、民間が栄えて賑んになることを願う。本当に朽ち果てないものこそ盛んな事そのものである。漆の注ぐは家の勢いにしてこれには先祖、家の始めが大事である。』

上子の多年にわたる辛い苦しみが、ここにきてその結果が実を結んだ。これはみな、閣下が勧め成された恵みによるものであり、僕は、先祖の霊とともに鑑みて、また、本当に恩に報いて僕の心の底に草を結ぼうとするが、筆の先では尽せないものがある。些かではあるが上聞に草草の言葉を綴り、伏して恐れ慎みに堪えず謹んで敬するかぎりである。

八橋山通仙〔名は方邑といい、また、茶顛と号す〕が文政九年（一八二六）の歲に、広乾寺に来て泊まった。自ら『高遊外の流れをくむと云う。

僕二高サ四五尺ノ一茶籃ヲ負ハシム、凡ソ煎茶ノ具ヲ其ノ中ニ満タシ盡ス。書ヲ能クシ、又明楽ヲ能クス。従学者ハ十数人、新田節斎〔米屋亮蔵ト称ス〕高足ヲ弟子トナス。歳ヲ越シテ去ル。丁亥ノ元旦ニ云フ。

〔新陽ニ遠ク北溟ノ隅ヲ領シテ、晩ノ井ニ華ヲ轆轤ニ故ツテ汲ム、賀歳ノ客ガ歓ビテ緑髪ヲ披キ、茶ニ侍ル童ガ笑ミテ銀鬚ヲ撚ル、旅ノ林先デ慶春楽ヲ奏アル、禅室ニハ已ニ南極図ヲ舒シ、指ヲ屈スレバ七旬、一ヲ得テ添エテ、趙州ノ無味ナル當ニ屠蘇ヲ。〕

貫名海屋ガ文政巳丑ヲ以テ来タリ、津島東亭ノ生春堂ニ寓ス。時ニ九日ニ逢ウ、一詩ヲ賦シテ云フ。

〔客窓ニ風雨ヲ湿スル重陽、酒畔ニ黄花未ダ黄ヲ点セズ、山ニ登ルコトヲ不必者ハ屐ニテ去リ、相対ノ酣歌ガ即ニ高岡。〕

長浩斎ノ書樓ヲ清風名月樓ト名ヅク、詩仏先生ノ署スル所、先生、浩斎及ビ埜村空翠〔名ハ円平、八田屋円平ト称ス〕ノ詩ヲ再ビ北游詩草ニ並ビ載ス。

小塚南郊ガ〔寄題〕ニ云フ。

付人に、高さ四五尺の茶の籠を背負わせて、殆ど煎茶の道具をその中にいっぱいに入れ込んでいた。書をよくし、また、当時、中国から伝えられたという明楽を得意としていた。学び従う者が十数人、新田節斎〔米屋亮蔵と称す〕、高足を弟子としていた。歳を越して帰っていった。

丁亥（十年）の元旦に云う

『初春に遠く北方の大海の隅、ここ高岡にやってきて晩に井戸の釣瓶の滑車に華を放って水を汲む。年賀の客が黒髪をなびかせて歓んでいる。お茶に侍る童が銀鬚を捻って笑っている。林の連なる先で明楽の慶春楽を奏でる。禅寺では、既に中国古代の天文説でいうところの人の寿命を司るという老人星の南極図の巻物を広げて掲げている。指を折ってみると七十歳、歳はじめのことに添えて、中国の趙州にはじまるという無舌の茶味をまさに屠蘇として口にする。』

貫名海屋が文政十二年（一八二九）に来て津島東亭の生春堂に泊まる。時に九日に逢う。一詩を賦して云う。

『客間の窓を風雨がぬらす九月九日の菊の節句の日、酒の席の傍らに黄色の菊が未だ咲いていない。山に登らない者は下駄のままで帰ってゆく。気ままに皆で互いに酒を十分に飲んで楽しみ歌を唄う、これが即高岡の雰囲気である。』

長崎浩斎の書樓を清風名月樓と名付けていた。詩仏先生の記したところである。先生、浩斎及び埜村空翠〔名は円平といい、八田屋円平と称す〕の詩を、再び北游詩草に並び載せる。

小塚南郊が寄題して云う。

孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。浩齋五十、開齋時、清風明月両相宜、豈是尋常塵間賞、更上一層一段奇、結構百尺摩九霄、眺望万里究四極、造物幻出風與月、無盡藏中無盡期、有客来過経営後、清風明月名者誰、江都詩佛以詩鳴、先題清風明月詩、孤舟横江坡翁賦、不如白傳充家資、吾曹一樂猶未得、聊向風月寄所思。

〔詩ハ略ス〕

浩斎ノ五十、寿宴ヲ楼上ニ開キ、会スル者、詩ヲ賦シテ国歌ヲ咏ズ、予、五十韵ヲ綴リ、薬能蒙求ヲ作リ、之レヲ寿ト為ス。惜シイ哉、嘉永癸丑ノ災ニ楼亦烏有ニ帰ス。

詩仏先生、清風名月楼ニテ飲ミテ云フ。

『今日ハ老夫真ニ羸ヲ得テ、坐スル松洲癒有リテ後老イル。』

是レヲ聞イテ日原松洲〔名ハ簡、越後ノ人〕終席黙々トス。若シ為ス無キモノハ、時ノ人ノ詩仏ニ遠ク及バザル為ヲ以テカ。予、之レヲ見ルニ、松洲、蓋シ他ニ一著ヲ譲リ、敢エテ鋒ヲ争ハザルナリ。其ノ「山水図」ニ題シテ云フ。

『高楼設宴張興時　清風明月両相宜
豈是尋常塵間賞　更上一層一段奇
結構百尺摩九霄　眺望万里究四極
造物幻出風與月　無尽蔵中無尽期
有客来過経営後　清風明月名者誰
江都詩仏以詩鳴　先題清風明月詩
孤舟横江坡翁賦　不如白伝充家資
吾曹一樂猶未得　聊向風月寄所思』

浩斎の五十歳を寿いで宴を楼上に開く。集まる者が詩を賦して国歌を吟じた。私は五十韵を綴り、「薬能蒙求」を作り、これを寿とした。嘉永六年の火災で、この楼が皆無となってしまった。

詩仏先生が清風名月楼でお酒を飲んで、次のように云った。

『今日は老人の方が真に満ち溢れていて、坐っていた松洲が、オコリの病に罹って後に老け込んだようなものである。』

といってからかった。これを聞いて日原松洲〔名は簡といい、越後の人〕は、席を終わるまで黙々として何も云わなかった。若しかしてこの時、黙っていたのは、詩仏先生に遠く及ばないからであろうか。私は、これを見るに、松洲は他に一著を譲り、敢えて矛先を向けて争わなかったのであろう。山水図に題して云っている。

山水園云、自作江湖客、世榮付一泡、若問心中事、久忘魏闕愁、又云、名利場遺些不關、一心閒了一身閒、閒中別有多忙處、朝見清江暮見山、其所自持可想耳、

山本樓園嘗為予賦納涼詩云、霜侵葛屢沙溪月、波洗紗巾松塢風、恨不記其全篇耳、

称念寺懶外遺稿一卷、前日借而觀之、前後錯亂不可讀、為繕修還之、其秋夜云、被惱吟蟲夢不成、滿庭風露月三更、夜來無句酬時節、一段詩愁結作城、舟行云、飛雁聲衰落日幽、鏡光十里水悠悠、偏舟直下汀洲曲、一樣蘆苍兩岸秋、皆可誦、

懶外子玉棧（名は乘海）、閒詩子、余、壬寅

〔詩ハ略ス〕

又、云フ。

『名利ノ場遺ニ些カモ関ワラズ、一心ニ問ヒ一身ニ閒了シ、閒中ニ有多忙ノ處ト別レ、朝ニ清江ヲ見テ暮レニ山ヲ見ル。其ノ自ラ持スル所、想フベキ耳。』

山本樓園ガ、嘗テ予ノ為ニ「納涼」ノ詩ニ賦シテ云フ。

『霜葛ヲ侵シ沙溪ニ月ガ覆フ、波ガ紗巾ヲ洗イ松塢ニ風。』

全篇ヲ記サザルヲ恨ム耳。

称念寺ノ懶外ノ遺稿一卷、前日ニ之レヲ観テ借リル、前後ガ錯乱シテ読ムベカラズ、繕修ノ為ニ之レヲ還ス。

其ノ「秋夜」ニ云フ。

『悩ミヲ被ムリ吟虫ニ夢成ラズ、庭ニ風露ガ満チ月三更、夜来ニ句無ク時節ニ酬ス、一段ト詩愁ヲ結ビ城ヲ作ス。』

「舟行」ニ云フ。

『雁声哀ニシテ飛ビ落日幽タリ、鏡光十里ニシテ水悠悠、扁舟直下ニシテ汀洲ニ曲ル、一様ナル両岸ノ蒹苍ニ秋。皆、誦スベキ。』

懶外ノ子ノ玉棧（名ハ乘海）、予ニ詩ニ問フ、

『自作江湖客 世栄付一泡 若問心中事 久忘魏闕愁』

また、云う

『名誉や利益に関わるような世俗に些かも関わることなく、ひたすら心に問い身に問う、暫しの間、一切の世俗の多忙から身をひいて、朝に清らかな川を見て、暮れには山を見ることで自然の中に自らの乾坤を見る。その自ら身につけているものを想ってみるだけである。それで自ずと理解できる。』

山本樓園が、かつて私の為に「納涼の詩」に賦して云った。

『霜が山野に自生する葛を冷やかにおかし、渚の渓に月の光が覆い尽くしている。波が穏やかにうすいしゃの頭巾を洗うように、土手には松風が吹いている。』

全篇を記すことができないことを恨みに思う。

称念寺の懶外の遺稿一巻、前日にこれを観て借りる。しかし、前後が錯乱しているために読むことができない。それで修繕のためにこれをお返しする。

「秋の夜」に云う

『悩みにふけり、頻りに吟する虫の声を聞きながら眠りにもつけない。庭には風と露が満ち、月は既に午後の十二時を過ぎている。昨夜来、一句もなく、よい時とばかりに酒を酌む、一段と詩心の愁いを結んで心の砦となす。』

「舟行」に云う

『雁が悲しげに鳴いて飛んでゆく、夕日も西に落ちて辺りが物静かである。水面に鏡が光を放つように広々と悠々と水が流れている。真っ直ぐに下ってきた小舟が中州の渚の辺りを曲に逆ってゆく。両岸に一面に生える蒹の穂が枯れかかって秋の風情である。皆、誦して欲しい。』

懶外の子の玉棧（名は乘海という）が、私に詩について問い、

晩春、示松田良順云、九十春光僅是旬、櫻殘梅落耐傷神、欲期來歲鶯花節、何計人間朝露身、余見其詩曰、詩則可矣、恐為讖、翌年果歿、

蝸洲翁送松窠道人云、書画風流罕匹儔、廿年萍迹一囊收、自注云、洛陽松窠道人善画、嘗挾技以遊四方、嘗客吾邑、近聞悅居於江州和爾村、甲寅歟、盛世輯藪四卷文化紀元所刊、摹刻之精、裝之美、真可供文房之清玩、

津田半村之詩、載在北游詩草、及再北遊詩草、今年六十餘、縷縷猶善談、予此詩話、多所資攷云、

壬寅晩春ヲ松田良順ニ示シテ云フ。

『九十春光ニ僅カニ此ノ句、桜残リ梅落チ禅傷ミニ耐エ、来歳ノ花ニ鶯ノ節ヲ期スルヲ欲ス、何ゾ計ル人間朝ノ露ノ身。』

予、其ノ詩ヲ見テ曰フ、詩ハ則チ可ゾ、恐レテ讖ト為ス。翌年ニ果チ歿ス。

蝸洲翁ガ松窠人ニ送リテ云フ。

『書画風流ニシテ匹儔ハ廿年萍迹ヲ一嚢ニ収ム。』

自注ニ云フ。

『洛陽ノ松窠道人ハ書画ヲ善クシ、技ヲ挾シテ四方ニ遊ブ、嘗テ吾邑ニ客ス、近クハ江州ノ和爾村ニ悅居スルト聞ク、甲寅ノ歟月ニ、道人復タ来タリ、散廬ニ数日留マル、別レニ臨ミテ賦ヲ贈ル。予、道人ガ旧ニ禅派僧ト為スト聞ク、還俗シテ杜詩ト称ス（字ハ激公）、盛世ニ輯藪四巻ヲ著シ、文化紀元ニ刊行スル所トス。摹刻之精、裝ハ美ナリ、真ニ文房ノ清玩ニ供スベシ。』

津田半村ノ詩、北游詩草ニ在ルヲ、北游詩草ニ再ビニ及ンデ載ス。今年六十餘ナリ、縷縷ニ善ク談ズ。予、此ノ詩話ニ資攷スル所多シト云フ。

「壬寅晩春」（天保十三年の晩春）を松田良順に示して云う。

『春のニカ月（九十日）間ののどかな景色に、僅かにこの句だけしか作れない。梅が散り桜が残ったが、恐らく坤は季節の移ろいの傷みに耐えていることであろう。来年には是非とも、この季節に花に鶯の声を聞くべく契りを交わしたい。何を来年のことまで計らっているのか、人間とは、いえば朝の露のような身ではないか。』

私は、その詩を見て云う。詩は可である。恐れながら記す。その翌年に亡くなる。

蝸洲翁が、松窠道人に送って云う。

『書画風流、匹儔、廿年萍迹一嚢収

君は書画の風流を愛し、二十年にわたって、時々の足跡ともいうべき文章や詩の草稿を一つの袋に収めてきた。』

自ら注釈していう。

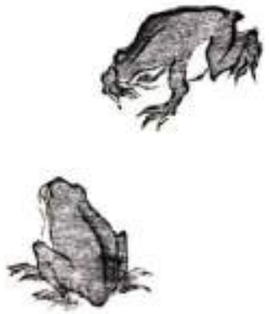
『京都の松窠道人は、書画をよくし、その技を携えて四方に遊ぶ。かつて高岡にもやってきた。最近まで近江の和爾村に住んでいたと聞く。安政元年（一八五四）の十二月に、道人が、また、やって来てあばら家に数日留まる。その別れの時に、賦を贈る。私は、道人が、元は禅僧であったと聞く。それが還俗して杜激（字は激公）と称した。若い時に輯藪四巻を著述し、文化元年（一八〇四）に刊行したという。写し彫りが優れ、刷りの装いも美しく、誠に書斎でのすがすがしい慰めとなるものである。』

津田半村の詩を北游詩草に再度にわたって掲載する。今年六十余歳である。こまごまとよくお話をする。私にとって、この詩話の中に用いて参考にする事柄が多い。

松田丁梦洒洒落落真一奇人也、春日有感云、鴻雁日温歸北天、風軽柳絮熙清連、春光冉冉落梅後、復有櫻花花正鮮、晩年以和歌自樂不復賦詩、

津島東亭之詩、多載北遊詩草附録、秋扇云、盛夏炎場隨此身、起居時作握中珍、撲螢節老不當賞、防暑功成却混塵、窓外秋深方失寵、枕頭風冷已無回、如斯榮辱君知否、今古人情易負眞、

邑之西南、称下屋敷、文政己丑歳有蛙鬪、上子心竹記其事云、江頭欲雨流寥天、陰霧濛濛望渺然、忽聞蛙鼓四面起、非風非波又非聲、訇訇閣閣聲似乱、鳴怒號響村田、奮雷震



「俳諧　西鶴百類集」

松田丁梦ハ洒洒落落ニシテ真ニ一奇人ナリ。「春日有感」ニ云フ。

『鴻雁ハ日温ニ北天ニ帰ル、風軽ニシテ柳絮ヲ清連ニ点ズ、春光冉冉シテ落梅ノ後、復タ桜ノ花花正ニ鮮ス。』

晩年ハ和歌ヲ以テ自ラ楽シミ、復タ詩ヲ賦セズ。

津島東亭ノ詩、多クヲ北游詩草ノ付ニ載ス。「秋扇」ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

邑之西南ヲ、下屋敷ト称ス、文政己丑ノ歳ニ蛙鬪有リ、上子心竹ガ其ノ事ヲ云フ。

〔詩ハ略ス〕

松田丁梦は、心がさっぱりしていて、本当に風変わりな人である。「春日に感あり」に云う。

『雁が季節が温かくなって北の空へと帰ってゆく、風が軽く吹いて柳を揺らし、清い連に新芽の柳の綿の影を映す。春の光はしなやかに梅の花を落とし、その後に桜の花が、この時とばかりに正に鮮やかに咲いている。』

晩年は、和歌を自らの楽しみとし、その後は、詩の方は詠まなかった。

津島東亭の詩を「北游詩草」の付録に多く載せる。「秋扇」に云う。

『盛夏炎場隨此身　起居時作握中珍
撲蛍節老不当賞　防暑功成却混塵
窓外秋深方失寵　枕頭風冷已無回
如斯栄辱君知否　今古人情易負眞』

町の西南を下屋敷といった。文政十二年（一八二九）に蛙の鬪いがあり、上子心竹が、その事を記して云う。

『江頭欲雨流寥天　陰霧濛濛望渺然
忽聞蛙鼓四面起　非風非波又非聲
訇訇閣閣声似　乱鳴怒号響村田

奮雷震氣欲攫敵　飛起如雲幾百千
勝敗未定進退切　孫呉擬兵守後前
一陳伏草一陳闘　南北散乱似擧鞭
就中滅亡漲流血　逐奪沙城将安全』

上子心竹が、林谷梅花の巻図を所蔵している。色々なものに比べて斉藤拙堂の『月瀬紀行』は頗る雅びの味がある。ただ惜しむらくは、鼠に齧られて漏れ汚れがあり、殆ど読むことができないことである。図の上に題していう。明和八年（一七七一）の二月二十日か二十一日に、頼山陽が、椹園、春琴、百谷及び子□君達と連れ立って月瀬に探梅に出掛けた。私は山陽と一緒に早くに京都を発って、伏水の梅林の辺で憩い皆の到着を待った。その時に、山陽が詩の第一句を唱えて、私がその句に続けて数絶句をつくった。ただ、その時、たまたま句が湧いてきたというだけのことである。詩に云う。

『衝雨探梅亦一奇〔山陽〕呼杯遅伴伴来遅
暗香吹送天将暁　正是遊人得句時』
『畢竟此行元在梅　樑花不必待人開
南都名勝暫休間　郷導報知時節來』

上子心竹、林谷梅花ノ巻図ヲ所蔵ス、詩ニ比シテ斉藤拙道ノ月瀬紀行ハ、頗ル雅味ガアリ、只惜シムラクハ鼠嚙ニヨリ漏汚ガアリ、殆ド読ムベカラズ。図上ニ題シテ云フ。

辛卯ノ仲春ノ廿又ハ一日、山陽ガ椹園、春琴、百谷及ビ子□君達ト與ニ、約シテ月瀬ニ探梅スル。予ハ山陽ニ同シテ早クニ京洛ヲ発チ、伏水梅林ノ辺ニ趣ウ。而シテ諸子ノ到ルヲ待ツ、山陽ガ時ニ第一句ヲ唱シテ、予、乃チ続ケテ数句ヲ成ス、亦タ唯一時、偶ニ興ル耳、詩ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

『聞言月瀬満林梅　好日好風花正開
投宿山村村媼喜　幾多高客出都来』
『雲耶雪耶総是梅　漸歩漸行一径開
昨夜羅浮□現在　此身却入梦中来』
『莫訝出梅還入梅　入梅投宿為開門
我元清潔與渠比　詩句猶曾不盗来』
『坐雨恍然猶説梅　除非杯酒意何開
烏舟偶為溪流漲　関却吟身一夜来』
『遶山沿水路高低　万樹梅花望欲迷
月瀬因縁今果了　玉香香裏醉如泥』

元は十、あるいは十三首ほどあったが、今回は七首を記録する。

浩斎老人が、埜郵空翠に贈りて云う。

『高さ三尺の籠を新しい学舎に運び入れ、その一担ぎのつづらを書斎の飾りにおき、殊にすぐれた雰囲気となる。』

末句に云う。

『「悠然盛世漫遊王」と、空翠が、この句を甚だ喜んで、遂に、それに自ら印の刻み入れをする。』

高峰犀江（名は清臣といい、一に梧門、または雲翁と号す）性格は口数こそ少ないが正義を守る心が強い。

原ハ十又三首アルヲ、今節ハ七首ヲ載ス。浩斎老人ガ埜郵空翠ニ贈リテ云フ。

『三尺ノ籠ヲ新学舎ニ輿ビ、一擔ノ行李ヲ小文房トス、殊ニ精妙トナス。』

末句ニ云フ。

『悠悠盛世漫遊王、空翠ハ此ノ句ヲ酷シク喜ビ、遂ニ其レニ印ヲ刻入ス。』

高峰犀江（名ハ清臣、一ニ梧門、又雲翁ト号ス）性ハ沈黙ニシテ義気アリ、

知時節来。聞言月瀬満林梅。好日好風花正開。投宿山村村媼喜。幾多高客出都来。雲耶雪耶総是梅。漸歩漸行一径開。昨夜羅浮□現在。此身却入梦中来。莫訝出梅還入梅。入梅投宿為開門。我元清潔與渠比。詩句猶曾不盗来。坐雨恍然猶説梅。除非杯酒意何開。烏舟偶為溪流漲。関却吟身一夜来。遶山沿水路高低。万樹梅花望欲迷。月瀬因縁今果了。玉香香裏醉如泥。原十又三首。今節録七首。浩斎老人贈埜郵空翠云。三尺籠輿新学舎。一擔行李小文房。殊為精妙末句云。悠然盛世漫遊王。空翠酷喜此句。遂刻入其印。

高峰犀江（名清臣、一号梧門、又雲翁。性沉黙、有義

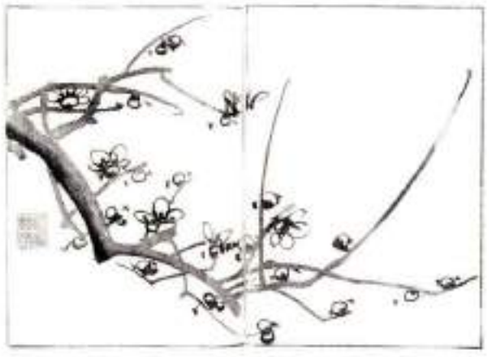
氣。今年六十七。猶矍鑠。甲寅歳旦云。少壮修武事。技拙無一長。致仕隠于医。才劣如捕影。今迎華甲春。合族相慶賀。憮然蒲柳質。不覚居郷杖。兒年將三十。治生較可掌。治生非求富。斉家欲不枉。且喜知仁端。事業亦勉強。只虧未挙孫。熊魚難并享。晨起学五禽。晚飲倣三養。残生能有幾。優遊脱世網。

土肥知言（名伯敬、恭蔵と称す）其為人、風貌清癯、骨格甚偉、以撃剣家、好賦五言絶句。当時人作五絶者、戯称知言体。雖然非五絶外不能作。其雪後尋梅云。尋梅未識梅何處。右挪左投路不同。認雪迷来幽谷底。聽鶯誤到小橋東。幾行過雁迎春月。両岸垂楊動晚風。

今年六十七、猶、矍鑠タリ、甲寅ノ歳旦ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

土肥知言〔名ハ伯敬、恭蔵ト称ス〕其ノ人ト為リハ鳳眼ニシテ竜準ナリ、骨格ハ甚ダ偉ナリ、医ヲ以テ家ヲ興ス。好ンデ五言絶句ヲ賦ス、当時ノ人デ五言絶句ヲ作ル者、戯レテ知言体ト称ス、然リト雖モ五絶ノ外ニ作ルコト能ハザルニ非ラズ。其ノ雪後尋梅ニ云フ。

『梅ヲ尋ネテ未ダ梅ノ何処トモ識ラズ、右挪左投ノ路不同ニシテ、雪ト認メテ迷イ来テ幽谷ノ底、鶯ヲ聴イテ誤リ到ッテ小橋ノ東、幾行ノ雁ガ過ギ春月ヲ迎エ、両岸ニ楊柳垂レテ晩風ニ動ク、



「春藻錦機」

今年六十七歳だが、なお、矍鑠として元気である。安政元年の「歳旦」に云う。

『少壮修武事　技拙無一長　致仕隠于医
才劣如捕影　今迎華甲春　合族相慶賀
憮然蒲柳質　不覚居郷杖　児年將三十
治生較可掌　治生非求富　斉家欲不枉
且喜知仁端　事業亦勉強　只虧未挙孫
熊魚難并享　晨起学五禽　晚飲倣三養
残生能有幾　優遊脱世網』

土肥知言（名は伯敬といい、恭蔵と称す）の人となりは、鳳凰のように眼光が鋭く竜のように高い鼻がしらをしている。骨格が大変に大きい。医者として家を起こした。好んで五言絶句を作っている。当時、五絶句を作る人は、戯れて「知言体」と称していた。とはいえども、五絶の他に作ることができないということではない。「雪後尋梅」に云う。

『梅を尋ねて未だ梅が何処にあるかを知らず、左右に別れる路が同じでなく、雪かと認めて迷い来てみると奥深い谷の底、鶯の声を聞いて誤って来てみると小橋の東に右往左往する。雁が静かに列をつくってゆき空には春月を迎える。両岸には楊柳が垂れ、夜の風に揺れている。

角初看香馥郁、氷珠千點淡烟籠。
土肥松軒（名敏、字遜志、俊造と称す）京師学別、石秋、其職詩刻苦自勵、是
北海有俊傑、梅花云、不愁深雪壓、豈
待惠風吹。寒蕊疎無影、横枝老益奇。
江頭春暗處、林下月明時。清夜難成
睡、遺逸伴玉肌。惜哉青年之夏帰于
泉下、是詩蓋為絶筆矣。広瀬旭莊題

「俳諧　画譜百類集」

其肖像云、温温義象、翩翩彩筆。惜哉
惜哉。秀而不實。
松軒遺筆秋香（名俊、字次、松軒と称す）能書能画、皆
出天然、非別有師受、又能吟咏。先松
軒而歿、所謂苗而不秀者也。壬子元
旦云、東窓漸微白、今日是雞晨。松竹
千門雨、江山萬里春。滿斟椒酒酒、
醉太平民。得句時成字、淋漓墨色新。

富田南山（名思孝、字維則、又号奈園、
平田屋五左衛門と称す）能
画、又好吟咏、少於余七歳、嘉永元年
病歿、今得遺稿於其男秋芳（称五左衛門）
採録二三、以存懐舊之意。秋夕閑居
云、一壺村酒夜孤斟、滿苑蟲聲和醉
吟。皎皎蘆前山月白、飽收風露入胸
襟。緑陰垂釣云、岸樹森森柳作行。蘆
葭深處釣滄浪。晚來江上涼如洗、好
坐苔磯對夕陽。雨後坐月云、雨晴前
苑晚涼佳。竹搖移来騎雅懐。日落方
知幽事足、一輪明月照苔階。
一日過富田氏、觀徳風遺稿、有修三
堂湯話三卷、同附録一卷、記邑中之
有善行者數十人、實可傳之書也。南
氏集數卷、雜収詩及俳歌、今採錄、
皆川淇園改竄者二首、登樓云、燕待

「高岡湯話」（「修三堂湯話」ともいう）

嵒角ニ初メテ香ノ馥郁ヲ看ル、永珠千点ガ
印龍ニ炎ス。』
土肥松軒（名ハ敏、字ハ遜志、俊造ト称ス）
知言ノ男、嘗テ京師ニ学ビ、劉石秋ニ学ブ。其
ノ詩ニ賦シ、刻苦シテ励ミ、往々ニシテ伝フベ
シ。
『梅花』ニ云フ。
『不愁ニ深雪ヲ壓ウ、豈ニ恵風ノ吹クヲ待ツ
ヤ、寒ハ蕊疎ニシテ無影、横枝老イテ益ニ
奇、江頭ノ春暗処ノ林下ニ明月ノ時、清夜
ニ睡成シ難シ、遺逸シテ玉肌ヲ伴フ。』
惜シム哉、去年ノ夏、泉下ニ帰ル、是ノ詩ハ
蓋シ絶筆トナル。
広瀬旭荘、其ノ肖像ニ云フ。
『温温ナル気象、翩翩トシテ筆デ彩リ、惜シ
イ哉、惜シイ哉、秀而シテ実ラズ。』
松軒ノ弟、秋香（名ハ俊、俊次ト称ス）書画
ヲ能クシ、皆天然ヨリ出ズ、別ニ師ニ受ケルニ
アラズ、又吟詠ヲ能クス、先ニ松軒歿シ、而シ
テ所謂苗ガ秀ゼザルナリ。壬子ノ元旦ニ云フ。
『東窓漸ク微白、今日是レ晨ノ鶏、松竹千門
ニ雨、江山万里ニ春、椒柏ノ酒ヲ満斟シ、
醺醉スル太平ノ民、句得シテ時ニ成字ス、
墨色淋漓ニシテ新ナリ。』

嵒角に、初めて香り高い梅を看る、永久の珠が千点の炎を印龍に輝かせるかのように花を咲かせている。」
土肥松軒（名は敏といい、字は遜志、俊造と称す）は知言の息子で、かつて京都で学び、劉石秋について学ぶ。彼の詩に、刻苦して自ら励み、往々に伝えるべしと賦している。
「梅花」に云う。
『ひたすら冬の深雪を厭い、何とて春の恵みの風の吹くのを待つ。この寒さの中、草も疎らでその影もないが、老いた横枝が奇しさを目立たせている。河の辺の暗闇の所の林のもとに春の月明かりを求めて、春の夜に眠り難いのを幸いに美しい女性を伴って彷徨ってきた。』
惜しいことに、去年の夏に、あの世へ帰っていった。この詩は最後のものとなった。
広瀬旭荘が、その「肖像」に題して云う。
『熱気が発するような気構えで、鳥が早く飛ぶように筆を運んで彩る。惜しいかな、惜しいかな、それでも秀は実らず。』
土肥松軒の弟の秋香（名は俊といい、俊次と称す）は、書画が上手であったが、これは天性のもので特に師について習ったというものではない。また、吟詠をよくした。兄の松軒が、既に亡くなり、その為もあって、名前が世に知られなかった。嘉永五年の元旦に云う。
『東の窓が漸く仄かに白みかかって、今日、この元旦の朝に鶏の声を聞く。松竹を飾った町の家々に雨が降っている。山川万里が春となり、屠蘇の酒を杯に満たして傾ける。酒をすすめて酔うほどに天下万民が穏やかに治まっているということである。時に、よい句を得て筆を執って記す。墨痕が氷の滴るように新鮮である。』

富田南山（名は思孝といい、字は維則、また、奈園と号し、平田屋五左衛門と称す）は画を得意とし、また、吟詠を好む、私より七歳も若いのに嘉永七年に病で亡くなる。今は、その息子の秋芳（五左衛門と称す）のところで遺稿を手にする。昔のことなど懐かしく思い返されれのので、その中から二、三を採り上げて記す。
「秋夕閑居」に云う。
『一壺の地酒を夜独り酌む、庭には虫の声が満ち、それに和してほろ酔い気分で吟ずる。白々と簾の前の山に月影が射している。涼しい風と露を掃き収めて心の中にため込む。』
「緑陰垂釣」に云う。
『河岸には高く聳える柳の並木が連なり、葦の深く生えた処で広く流れる水面に竿を立てて釣り糸を垂らす。日暮れの訪れとともに涼しい風が水面を洗う。川辺の土手の苔に独り腰を下ろして心地よく正面から夕日を浴びる。』
「雨後坐月」に云う。
『雨晴れ上がり庭には涼しい風とともに美しい景色が広がる。庭に長椅子を移し整えて雅客を招く。陽が西に沈み、まさに静かな佇まいが満ちてくる。一輪の花を咲かせたように明月が苔むした堂への登りの道を照らしている。』
一日、富田氏と過ごす、その時、富田徳風の遺稿を観る。「修三堂湯話」三巻と同付録一巻がある。町中の善行のある者を数十人を記している。誠に末永く伝えるべき書物である。「南瓜集」数巻があり、詩及び和歌を雑然と収めている。今、皆川淇園によって文章の文字を改めた二首を採り上げて記録する。
「登樓」に云う。

樓台暖。好為客媒。園桃粧水去。山霞帶風來。川柳花農返。春宵坊。携來各自採。詩腸如錦如花月。休訝今宵酒更香。

雪窓遺艸一卷。雪窓桐隠別号。幸舎号。單思於經義。詩非其所長。今摘典一二。見不忘之意。冬晴云、江村雪後始清新。満野風光総似春。吟杖変寒乗興去。梅溪先我有遊人。乙酉之冬、与社友同遊于丁字街。夜半予先帰。詰朝戯賦似浩斎云。雪裏同尋野水濱。爛漫眩目百花春。恐他公慮昔日笑。快々不折一枝新。通仙禅師見訪喜賦云。剪燭陪清尋。煮茶忘世情。山川談亘盡。詩句意頻傾。禅老如不厭。何関到啓明。送通仙翁還于三河。古風一篇殊覚優美。篇長不備録。

江尻宗叔（名は温斎）賀三井文卿（玄孫）君六十云。千里傳聞橘井香。起氏君本有丹方。今日耳順延齢。高壽尚期陵與岡。

閑雲禅師之師。為沽湛禅師。頗能吟咏。題萱草云。緑葉黄花抽百草。幾回雨露恩光。長年特愛忘憂色。能使恵風向北堂。

閑雲禅師老于川口谷昌寺。窓前多栽芭蕉。鬱葱成林。其高者過於屋。自題肖像云。芭蕉窓下老禅和。八十一年無事過。最是緑陰涼影裡。煮茶獨樂淡生涯。

高岡詩話巻之二

菊と茶碗を持つ手
茶摘摘む手花の如

「俳諧　画譜百類集」

『燕待ニ樓台暖トナリ、客媒シテ花ト為スヲ好ム、園桃粧シ水去ル、山ハ霞帯シ風来ル、川柳花農返リ、春宵坊ハ携来シ、各自採リテ詩腸ハ錦ノ如ク花ノ如シ、休訝シテ今宵ハ酒、更ニ香。』

雪窓ノ遺艸一巻、雪窓〔桐隠ガ別号、幸舎ト号ス〕単ニ経義ヲ思ス、詩ハ其ノ長スル所ニ非ラズ、今、一二ヲ摘ス、見ル二不忘ノ意アリ、冬晴ニ云フ。

『江村雪後清新始マル、野ニ風光満チテ総ジテ春ニ似ル、吟杖寒ヲ凌ギ興乗ジテ去ル、梅溪ノ先ニ我遊人ヲ有ス。』

乙酉ノ冬、社友ト與ニ丁字街ニ同遊スル、予、夜半ニ先ニ帰ル。詰朝戯レテ浩斎ニ似セテ賦ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

通仙禅師ガ訪レ、マ見エテ喜ビ賦シテ云フ。〔詩ハ略ス〕

燕の訪れる季節を待ち望むうちに漸く楼の庇も暖かくなってきた。客が花の庭を好み、その仲立ちで梅が庭を装い雪解けの水が流れている。遠くの山に霞がかかり心地よい風が吹いてくる。鋤を担いだ老農夫が畑から帰ってくる。文の客をつなぎ留めていると雁が北へ戻ってゆく。世間では皆が人の集まる都の賑わいを好むが、私は、この村里で酒を酌んで悠然と日を送ることが楽しい。

同じく、皆が「春宵坊」に集まって、即事に云う。

『春の宵に吟人の仲間が連れ立ってこの寺へやってくる。それぞれが詩作りの心を探しに連れ立って来ている。詩情とは錦の如く、また、花月の如きものである。しかし、今宵は訪問者を迎えねぎらうのをやめよう。それより酒だ、更には芳香だ。』

雪窓の遺艸一巻がある。雪窓（桐隠の別号である。幸舎と称す）ひたすら四書・五経などの意味を究めることに思いをかける。詩の方は特に得意ということではなかった。今、一、二を摘まみとって見るに、心に刻む意をもっている。「冬晴」に云う。

『川に沿った村に雪が解けて清新な春を迎える。野には至る所に春に似た風光が満ちている。寒さを凌いで詩人が杖をついて歩いたが、今は雨や雪も止んで、その季節も去り、梅溪のさらに奥まった先に、私と優遊するよき友がいる。これからの季節、往来が楽しみだ。』

文政八年（一八二五）冬、社中の友と（緒に丁字街（遊廓町）で遊ぶ。私は夜半に先に帰宅する。詰朝が戯れて浩斎に似せて賦に云う。

『雪裏同尋野水浜　爛漫眩目百花春
恐他公慮昔日笑　快々不折一枝新』

通仙禅師が訪れ、お逢いし喜んで賦して云う。

『奇緑千里客　一夜打柴荆　剪燭陪清淨
煮茶忘世情　山川談亘盡』

『詩句ノ意ニ頻リニ傾ク、禅老ガ厭ワザルノ如シ、何カト関ワリ、啓明ニ到ル。通仙翁ノ三河ニ還ルヲ送ル。古風一篇、殊ニ優美ヲ覚ユ、篇長ク備録シエズ。』

江尻宗叔〔名ハ温、譲斎ト号ス〕三井文卿〔玄孫〕君ノ六十ヲ賀シテ云フ。

『千里ノ伝聞橘ノ香ノ井、君ノ本ヲ民ガ起シ、方ニ丹有リ、惟ダ今ハ耳順ニシテ遐ンゾ算ス、高寿ニシテ尚、陵ニ岡ヲ與フルヲ期ス。』

閑雲禅師ノ師ハ活湛禅師ト為ス、頗ル吟詠ヲ能クシ、萱草ト題シテ云フ。

『緑葉黄花ノ百草ガ抽シ、幾回モ雨露ノ恩光ヲ借リ、長年特愛シテ憂色ヲ忘レ、能ク恵風ヲ北堂ニ向カハ使ム。』

閑雲禅師老イテ川口ノ谷昌寺ニイル、窓前ニ芭蕉ヲ多栽シ、鬱葱ト林ト成ス、其ノ高キハ屋ヲ過ギル。自ラノ肖像ニ題シテ云フ。

『芭蕉ノ窓下ニ老禅師ガ和スル、八十一年無事ニ過ギ、最モ是レ緑天涼影ノ裡、茶ヲ煮テ独楽ニ生涯淡タリ。』

高岡詩話巻之二

「閑雲禅師筆蹟」

『この詩句に頻りに惹かれていくものがある。老禅師が一向に嫌がる気配も見せず、何かと関わっていただいて明け方まで歓談が続いた。禅師が三河に帰られるのを見送る。古風の一篇、殊に優美さを覚えるものであるが、篇が余りにも長いので、ここに備録することができない。』

江尻宗叔（名は温斎といい、譲斎と号す）が、三井文卿（玄孫）君の六十歳を賀して云う。

『遠く千里にわたって聞き伝えるという香り高い橘の井戸のように、君が本を築き民が起こすが如く、まさに真心の道義がある。ただ、今は六十歳の寿を迎え、いずくんぞ歳を数えることがあろう。今の高齢になお、さらに歳に歳を重ねることを望うものである。』

閑雲禅師の師は、活湛禅師である。頗る吟詠に優れ、「萱草」と題して云う。

『緑の葉や黄色の花などもろもろの植物が芽を出して、その度に、幾度となく恵みの光を被り、長年にわたって、それを特別に愛することで、心配ごとも忘れさってきた。いまも恵みの風がよく働いて母屋の北にある住まいの堂に向かって吹いている。』

閑雲禅師は老後に川口の谷昌寺に住む。窓の前に芭蕉を多く植え、鬱蒼とした林となっていた。その高いものは屋根より高いものとなっていた。自らの「肖像」に題して云う。

『芭蕉の側の窓の下の老禅師はにこやかである。八十一年の歳月を悉なく過ごさせていただいて、最も、これは、すべて緑の自然、万物を支配する天、涼気などによるお陰である。お茶を煮て独り楽しく自分の生涯についても名利もなく心さっぱりとする。』

高岡詩話巻之二

高岡詩話巻之二

【読み下し文中の語句説明】

(1) 濫觴　物事のはじまり。大河を水源まで遡上すると盃を浮かべるほど小さな流れであるという意。

(2) 社日清明　社日は春分のことで、このあと十五日を過ぎて二十四節気の清明の日となる。

(3) 三伏　夏至のあとの厳しい暑さの頃をいう。伏は、火気を恐れて金気を伏蔵する意。夏至の後の第三の庚の日が初伏、第四の庚の日が中伏、立秋後の第一の庚が末伏となる。

(4) 柔秧　柔らかい稲の苗のこと。

(5) 詩腸　詩をつくる心のこと。

(6) 紙田　紙に字を書くのを田を耕すのに例えていう。

(7) 杜鵑　ホトトギスのこと。

(8) 鮑領　刷毛でならしたような趣き。

(9) 浮躁　浮ついて騒がしいこと。

(10) 須臾　しばらく、暫時のこと。

(11) 蹤迹　足跡のこと。

(12) 林蓆　寝床のこと。

(13) 芻米　人の食う米のこと。

(14) 関傷　擦れみ傷むこと。

(15) 驅馳　他人に使われて走り回ること。

(16) 鈍駑　才能が鈍く劣っていること。

(17) 毛頭　筆先のこと。

(18) 蕪詞　謙虚にやつれた言葉を緩るという意。

(19) 烏有　まったく無い、皆無となること。

(20) 九十春光　春三ヵ月（九十日）の間の長閑な景色のこと。

(21) 匹儔　仲間、つれあいのこと。

(22) 汗迹　足跡のこと。

【現代語訳文中の内容説明】

(一) 松瞰房　澤田等岳が高の宮の前に造った庵、当時の詩人たちの結社の拠点となるところである。その後、鳳鳴社、頴分吟社へと拠点が変転してゆくことが分かる。

(二) 大槻盤水　大槻玄沢のこと、江戸後期の蘭医で盤水と号し、杉田玄白、前野良沢に医学・蘭学を学び、長崎に留学する。

(三) 桜廂先生　寺崎蟠洲翁の別号である。

(四) 養老軒　養老軒のことを浄光庵ともいったが、谷内にあったというが、谷内とは、高岡湯話によれば、銀街とあり、今日の白銀町のことである。庄方用水に沿ってあり、当時、文人たちの集まるところであった。この養老軒も文化八年に取り壊され、その古材で高の宮の前に敬業社と呼ぶ講堂を造り、町の年少者のための学問所とした。

(五) 詩仏先生　大窪詩仏のことで、江戸後期の漢詩人、書家であり、字は天民、常陸の人で詩を市河寛斎に学び、中国の宋、元の時代の清新な詩風を喜び、また、両が巧みで谷文晁とも親交があった。

(六) 大典和尚　臨済宗の僧、近江の人、相国寺に住し、儒学・漢文に長じ、幕府の朝鮮修文職として国交文書を司っていた。松平定信に優遇された。

(七) 大管二岳「二上屋吉助」　高岡市史に二上屋の由緒を伝えている。二上屋の遠祖は大和の国より出で、元正天皇の養老年中（七一七～）、同国の二上山権現が越中国二上山に勧請された際、供奉して山麓に居住したもので、利長が守山入城の時は、すでに六十代目であったという。家譜の記す通りとすれば、類い稀なる旧家である。

(23) 臘月　十二月のこと。

(24) 敝廬　謙虚に破れ家といったもの。

(25) 銀装　刷り込んだ装いのこと。

(26) 柳絮　柳の実が熟して晩春の頃に綿のように乱れ飛ぶこと。

(27) 冉冉　はなやかなさま。

(28) 鼠嚙　鼠がかじること。

(29) 休訝　迎えて怨いねぎらうこと。

(30) 啓明　明けの明星のこと。

布施　湖「玉飛路ひ」

(八) 高遊外　売茶翁のこと、高遊外は煎茶の祖である。当時、抹茶の世界の堕落、殊に禅僧社会の享楽に対して煎茶は禅が真の姿にかえる方便として煎茶の手前の法を案出した。茶道具を入れた籠を背負って気ままに庶民とともに歓談しながら茶を楽しんだ。これが当時、上田秋成、頼山陽などの文人社会からも受け入れられていた。

(九) 五十韻　連歌・俳諧で、表が八句に裏十四句、二の表に十四句、二の裏に十四句と合わせて五十句、すなわち百句の半分の五十句のものである。

(一〇) 薬能蒙求　蒙求とは、中国の唐時代に古人の逸話を子供が記憶しやすいように四字句の韻語で配列し、少年用の教科書に編集したものである。薬能を蒙求の形式によって著述ということである。

(一一) 月瀬　奈良県の添上郡の村、名張川に沿う梅花の名所。斉藤拙堂が月瀬記勝を書いて以来、一躍にして有名になる。

(一二) 知言体　一句が五字からなる漢詩の体をもった詩である。

高岡詩話卷之三

北溪居士津嶋佶著

菊渓服玄伯、高岡春興八首ヲ興ス。曰ク分霞橋、曰ク無影井、曰ク青雲館、曰ク桜馬埒、曰ク臥鱗墓、曰ク瑞龍寺、曰ク古城蹟、曰ク新渡。享保丁未（十二年）ニ作ル所、今ヨリ百卅四年ヲ距テ、最古ニシテ且ツ誦セルヤ。

分霞橋ニ云フ。

『霞ヲ分ケ暁色ニ板橋寒シ、司馬柱ト題スルガ後未ダ看ズ、両岸ノ鶏ガ常ニ客ヲ送リ、春風ニ恨ミヲ添エテ欄干ニ涙スル。』

今、中島橋ト称スル所、是レナリ。蓋シ当時ハ是レヨリ以西ニ人ノ有ル家ハ無ク、行人ヲ送ル者ハ必ズ此レニテ別レヲ至ス、転ジテ結スル所ヲ以テ云々ナリ。

無影井ニ云フ。

『汲水ヲ欲スルガ花泉ノ井深ク、春暄ニ幹下ノ古苔ヲ侵シ、憐ミヲ却ケテ一面影無シニ照ラシ、柳眼ヲ空ニ開キ裏心ヲ鏡スル。』

超願寺ノ隣ニ泉ガアリ俗ニ云フ、正月二日、此ノ無影井ヲ瞰ル者、其ノ年ニ必ズ死スト。因リテ無影井ト称ス。虚誕ニシテ可笑シ。

高岡詩話卷之三

北溪居士津嶋佶著

服部菊渓玄伯が、高岡の春について八首を詠んでいる。その八首とは、「分霞橋」「無影井」「青雲館」「桜馬埒」「臥鱗墓」「瑞龍寺」「古城蹟」「新渡」である。享保十二年（一七二七）、今を隔てること百三十四年前に作ったものである。こんなに古くに、かつ、誦したものである。

「分霞橋」に云う。

『朝明けの光をうけて別れの霞を切り裂き、板橋が寒々とした雰囲気を湛えている。昔、司馬柱と名付けたというが、その後、それを裏付けるものを未だ見たことがない。今は、いつも両岸の鶏の声が往き来する客を見送り、春風に恨みを添えて橋の欄干が涙で濡れている。』

今は中島橋と称するところがそれで、当時は、これより西には人の住む家は無く、旅する人を送る者は、必ずこの場所で別れをしたのである。その反対に迎えて結び会えるところでもあった。

「無影井」に云う。

『水を汲みたいが、美しい泉の井戸は深い。晩春の温かい日差しが幹下に広がる古い苔をそこなう。憐れみを退けて、辺り一面を影無しに照りつける。柳の新芽が空に向かって開き、井戸には人の心の裏までも鏡のように写している。』

超願寺の隣に泉があり、俗に、正月の二日に、この無影井を見れば、その年にその人が必ず死ぬと云っていた。それで無影井というのだと、根拠のない嘘で可笑しな話である。

高岡詩話卷之三

北溪居士津嶋佶著

菊渓服玄伯、高岡ノ春ニ八首ヲ興ス。曰ク分霞橋、曰ク無影井、曰ク青雲館、曰ク桜馬埒、曰ク臥鱗墓、曰ク瑞龍寺、曰ク古城蹟、曰ク新渡。享保丁未（十二年）ニ作ル所、今ヨリ百卅四年ヲ距テ、最古ニシテ且ツ誦セルヤ。

分霞橋ニ云フ。

『霞ヲ分ケ暁色ニ板橋寒シ、司馬柱ト題スルガ後未ダ看ズ、両岸ノ鶏ガ常ニ客ヲ送リ、春風ニ恨ミヲ添エテ欄干ニ涙スル。』

今、中島橋ト称スル所、是レナリ。蓋シ当時ハ是レヨリ以西ニ人ノ有ル家ハ無ク、行人ヲ送ル者ハ必ズ此レニテ別レヲ至ス、転ジテ結スル所ヲ以テ云々ナリ。

無影井ニ云フ。

『汲水ヲ欲スルガ花泉ノ井深ク、春暄ニ幹下ノ古苔ヲ侵シ、憐ミヲ却ケテ一面影無シニ照ラシ、柳眼ヲ空ニ開キ裏心ヲ鏡スル。』

超願寺ノ隣ニ泉ガアリ俗ニ云フ、正月二日、此ノ無影井ヲ瞰ル者、其ノ年ニ必ズ死スト。因リテ無影井ト称ス。虚誕ニシテ可笑シ。

曩昔時ニ松柏ガ繁茂シ、鬱葱ト井ヲ掩イ、暗然トシテ物ヲ照ラサズト聞ク、是ノ所ヲ以ッテ無影ト称スルナリ。且ツ此ノ井ハ旧ニハ今ノ堂前ニアリ、寺ガ移リシ時ニ泉、亦隨シテ改ム、寒泉ト号ス、又、戯レテ池ノ元成ト号ス。皆、因リテ之レニ云フ、水ハ甘美、尤モ醸酒ニ宜シク又煎茶ニ宜シ。井ノ東十数歩ニ碑有リ。題シテ曰ク、孝子動地ガ異人ニ遇ッタ處、碑側ニ勒シテ曰ク、動地トハ石瀬屋六兵衛ノ渾名也、州ニ於イテ俸ヲ賜ル、寛政紀元七月卒、年ハ卅五、其レ一代ノ事蹟。修三櫝志ニ在ル〔修三櫝志ハ未ダ何書カヲ審ラカニセズ、今、按ズルニ修三堂湯話、乃チ当時ニ湯話、或イハ此ノ名ノ有ルヲ知ル〕、昨過ニシテ之レヲ視ルニ、動地トイウ者ハ以下ハ数字、漶、読ムベキニ、其ノ他ハ刓滅ニ辨エベカラズ。超願寺ノ其葉ガ筆ニ係ッテ調ウ、当時ノ官ノ六兵衛ヘノ褒賞ノ書札、今猶存ス。安政三年、逸見方舟〔名ハ在綱、字ハ有秋、高原屋文九郎ト称ス〕命加ニ装潢ス。往年ニ上子心竹ガ諸人ノ詩ヲ募ル、

昔は松や柏が生い繁り、鬱蒼として井戸を覆っていたと聞く。辺り一面が暗くものを照らす陽の光もなく、このことから無影と称したということである。その上、この井戸は旧には今の修三堂の前にあったが、寺が移ってきた時に、泉もまた、それにつれて改められたのである。寒泉といい、また、戯れて池の元成とも呼んでいる。こうしたことから皆が、水は甘く美味しく、最も酒の醸造によく、煎茶にもよいという。井戸の東、十数歩のところに碑があり、碑には、題して孝子動地が異人に遇った処とあり、また、碑側には、[三] 動地とは石瀬屋六兵衛の渾名で、その孝養ぶりに加賀藩から褒美に俸禄を賜る。寛政元年七月に亡くなり、年三十五歳であった。それは一代の事蹟であったと刻まれている。

修三櫝志〔修三櫝志は、まだどんな書かは詳らかにしていない。今、調べてみるに、修三堂湯話、いいかえると当時に湯話という名の書があることを知る〕以前にこの書を見るに動地という者の下に確か数字がついていたが、なお、読んでみる必要がある。これ以上のことは記憶が曖昧でふるまうことができない。

超願寺の其葉が、筆に係わっていう。当時の役人からの六兵衛への褒美の書札が、今なお残っているという。安政三年に逸見方舟〔名は在綱といい、字は有秋、高原屋文九郎と称す〕が報恩に表装した。先年に上子心竹が皆に詩を募る。

人之詩、予賦一絶云、可憐斯道日陵夷、巷閭無人談孝子、文字苔埋一片碑、讀來今日情何已、自碑傍尤折面入、為修三堂舊址、湯話一記修三堂創營事、隨傳聞錄之、因致有誤、命筆記富田氏得其實、文化三年丙寅、富田德風借下關之地百餘歩、以創一堂、三月下旬經始、至五月落成、則之者、

肉藤王福出八丁費、宮島雪香（室屋次大夫）、大橋桐斎、氏家玄兎、佐渡金作（阿波加春塘）、篠原花徑（増山八兵衛）、粟田季勃（小間物屋勘右衛門）、藤村壺仙（棚田屋小兵衛）、市山青羽（田代朴明）、藤田千城（広瀬屋八兵衛）、各出五丁費、長崎蓬洲（藤田千城）、鷲十（井又）、蝋七（廣瀬屋八兵衛）、各五丁、桑山堯民（梅染屋源三郎）、後藤白雪、岡島玄隆、沢田凉河（沢田屋藤兵衛）、横山雀梅（一に棣棣軒）、米屋伊右衛門（米屋伊右衛門）、富田春呉（平田屋善左衛門）、及王福、雪香、朴明、青羽、季勃、花徑、叔父鷲梅、名有祥、字子吉、各以戸席簾燈器什贈之、富田德風、費銀凡二千八百五十錢、其他不石席箔之類、不在其數、時海保青陵適來、五月三日、講論語於堂上、就聽者六十三人、後二年戊辰冬、脇坂義堂來寓、義堂題山水云、寂莫孤村夕、漫漫雪満天、寒威侵枕席、爐畔酒杯傳。

修三堂後日下氏、茶木屋右衛門、木屋嘉永中、山本溪山、名章夫、藤十郎、來寓、其游能登、借余所藏能州名跡志、謝以一絶云、沙徑泥途六十郵、晴望佳處子、一絶ヲ賦シテ云フ。

『可憐ニシテ斯道日ニ陵夷トシ、閭巷ニ孝子ヲ談ズル人無シ、文字ハ苔ニ埋レ一片ノ碑、読ミ来ッテ今日已ニ何レノ情。』

碑ノ傍ヨリ左ニ折レテ入ルト修三堂ノ舊址ナス。湯話ノ巻第一ニ修三堂ノ創営ノ事ヲ記ス。傳聞ニ隨ッテ之ヲ録ス、因リテ誤リ有ルニ到ル。余諸ヲ富田氏ニ質シ、真実ヲ得ル。文化三年丙寅、富田德風下関ノ地ニ百餘歩ヲ借リ、以テ一堂ヲ創ル、三月下旬ニ経始シ、五月ニ至リ落成ス。之ヲ助ケル者、内藤王福ガ八丁ノ費ヲ出ス。宮島雪香（室屋次大夫ト称ス）、大橋桐斎、氏家玄兎、佐渡金作（阿波加春塘ト曰ウ、金作ハ養順ノ兄早世）、篠原花徑（増山屋善兵衛ト称ス）、粟田季勃（小間物屋勘右衛門ト称ス）、市山青羽、田代朴明（棚田屋小兵衛、また、朴、また、作トと称ス）、藤村壺仙（開発屋庄右衛門ト称ス）、鷲十、井又、蝋七、各五丁ノ費ヲ出ス。長崎蓬洲、藤田千城（広瀬屋八兵衛ト称ス）、室屋素千（平右衛門ト称ス）、飴屋二峯（清左衛門ト称ス）、石川牛窓（新保屋次郎右衛門ト称ス）、桑山堯民（梅染屋源三郎ト称ス）、後藤白雪、岡島玄隆、沢田凉河（沢田屋藤兵衛ト称ス）、横山雀梅（一ニ棣棣軒ト号ス、米屋伊右衛門ト称ス）、富田春呉（平田屋善左衛門ト称ス）及ビ王福、雪香、朴明、青羽、季勃、花徑、叔父鷲梅（名ハ有祥、字ハ子吉）ガ、それぞれ戸、敷物、簾、燭台、什器物ヲ贈ル。富田德風ハ銀ヲ凡ソ二千八百五十錢ヤス、其ノ他、木石席箔ノ類、其ノ数アラズ。時ニ海保青陵、適ニ来ル、五月三日、堂上ニ於イテ論語ヲ講ズ、就イテ聴ク者、六十三人。

二年後ノ戊辰ノ冬、脇坂義堂ガ来寓スヽ、義堂、山水ト題シテ云フ。

『寂莫タル孤村ノ夕ベ、漫漫ト雪天ニ満ツ、寒威ニシテ枕席ヲ侵シ、爐畔ニ酒杯ヲ傳フ。』

修三堂、後ニ日下氏（茶木屋右衛門ト称ス）ニ傳ス。嘉永中ニ山本溪山（名ハ章夫、藤十郎ト称ス）来寓シ、其ノ能登ニ遊ブ。余、蔵スル所ノ能州名跡志ヲ借リ、謝シテ一絶ヲ以テ云フ。

『沙径泥途ヲ六十郵、晴レニ佳處ヲ幾回モ休ミテ望ム、

私は、それに一絶を賦して云った。

「かわいそうに、この道のことがらが日がたつにつれ、だんだん衰えすたれて、町中に孝子の六兵衛について語る人も無くなってしまった。而も碑文の文字が苔に埋もれて読めなくなり、単なる碑でしかない。これまで読み語り伝えてきたことが、今日、既にその情は何処に消えたのか。」

碑の傍らから左に折れて入ると修三堂の旧跡がある。湯話の巻の第一に修三堂が創られ、その営みのことが記されている。伝聞に基づいてそれを記す。それでは誤りも生ずるので、私は、いろいろ富田氏に、問いただして間違いのない事柄をつかむ。

文化三年（一八〇六）に、富田德風が下関の地に百坪を借りて、一堂を創る。三月下旬に工事をはじめ五月になって落成する。これを援助したのが次の者たちである。内藤王福が八丁の費用を出す。宮島雪香（室屋次大夫と称す）、大橋桐斎、氏家玄兎、佐渡金作（阿波加春塘という、金作は養順の兄の早世である）、篠原花徑（増山屋善兵衛と称す）、粟田季勃（小間物屋勘右衛門と称す）、市山青羽、田代朴明（棚田屋小兵衛、また、朴、また、作トと称す）、藤村壺仙（開発屋庄右衛門と称す）、鷲十、井又、蝋七が、それぞれ五丁の費用を出す。長崎蓬洲、藤田千城（広瀬屋八兵衛と称す）、室屋素千（平右衛門と称す）、飴屋二峯（清左衛門と称す）、石川牛窓（新保屋次郎右衛門と称す）、桑山堯民（梅染屋源三郎と称す）、後藤白雪、岡島玄隆、沢田凉河（沢田屋藤兵衛と称す）、横山雀梅（一に棣棣軒と号す、米屋伊右衛門と称す）、富田春呉（平田屋善左衛門と称す）、及び王福、雪香、朴明、青羽、秀勃、花徑、叔父の鷲梅（名は有祥といい、字は子吉）が、それぞれ戸、敷物、簾、燭台、什器物を贈る。富田德風自身は、銀を凡そ二千八百五十錢を費やす。その他に木や石、敷物、塗り物の類など多かった。その時に海保青陵がまさにやってきて、五月三日に堂において論語を講義する。講義を聞くもの六十三人であった。二年後の文化五年の冬には脇坂義堂がやって来て泊まった。義堂が、「山水」と題して云う。

「他の村から遠く離れた寂しく物静かな村の夕べに、限りなく空から雪が降りしきっている。その厳しい寒さがねやの枕としとねにまで入り込んでくる。そんな夜には、いろりばたを囲んで杯を酌み交わす。」

修三堂は、後に日下氏（茶木屋右衛門と称す）のものとなる。

嘉永年間に山本溪山（名は章夫といい、藤十郎と称す）が来て泊まる。その時、能登に遊ぶ。私の所蔵する能州名跡志を借りる。感謝の気持ちをこめて一絶に云う。

「砂や泥の道を六十宿場を経て、晴れて景色のよい処で幾度も足を留めては休み眺望を楽しむ。

大村直子　画

君ノ両冊ノ旧蔵巻ニ依リ、福海寿山〔自注、福浦蓬莱山並ビニ内外洋ガ絶景ト為ス〕ノ縦遊ヲ得ル。」

無影井ノ南ヲ超願寺ト為シ、超願寺ノ對門ヲ廣乾寺ト為ス、無準禅師ノ開基スル所、天保二年辛卯ニ浦上春琴ガ来寓シ、従遊ハ頗ル多クシテ、其レ去ルナリ、津田半村、津島東亭氷見ニ至リテ送リ、半村ガ送ル所ノ韵ニ和シテ云フ。

『緑樹笑ム時ニ来テ相迎エシ、今日秋風已ニ声ヲ作ス、炎気半消シテ涼気起ル、山程漸ク過ギテ村程ニ入ル、樽ヲ携エ遠送スル故人ノ意、分袂スルハ方ニ寒覇ナル客情、茆家ニ共就シテ一家ヲ謀ル、微陰ノ地草ニ蟲ノ鳴ク満ル。』

天保十年己亥、謙山夕翠〔名ハ哲、鐵蔵ト称ス〕来寓ス、頗ル詩ヲ善クシ、新雁ヲ聞イテ云フ。

『昨周新晴ニシテ秋信通ジ、満林黄葉シテ傍ニ西風、江頭ニ一夜帰雁南ヘ、声ヲ落シテ愁人梦寐ノ中。』

石州途上ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

君の二冊の旧くから所蔵していた能州名跡志をたよりに能登の福浦の鳳来山や海岸を自由に遊ぶことを得る。〔自ら注して福浦、鳳来山並びに内外洋は絶景と為す〕』

無影井の南が超願寺で、超願寺の門の正面が広乾寺である。無準禅師の開基する寺で、天保二年に浦上春琴が来て泊まっている。あちこちと頗る多くの処を訪ね遊んで帰る。津田半村と津島東亭が氷見まで行って送る。その時、半村の送った韵に和して次のように云う。

『木々が緑滴る時に来て、互いに笑って再会して迎えたが、今は已に秋風の声を聞く頃となってしまった。暑かった夏の厳しさも和らいですっかり涼しい気配となっている。遠くに見えた山への道のりも漸く過ぎて間もなく村に入る。酒を携えて遠くに帰る旧知の友を送る思い、いま、まさに、袂を分かち別れゆく友の情は、これ以上にない寒さの旗頭の心境であろう。一緒に茅葺きの家に着いて最後の一夜を共にする。ほのかに暗い雑草の陰から虫の鳴き声が庭に満ちている。』

天保十年（一八三九）謙山夕翠（名ハ哲といい、鐵蔵と称す）が来て泊まる。大変に詩が得意で、「聞新雁」に云う。

『昨夜来の雨もあがって、朝から晴れ渡り秋の訪れが伝わってくる。木々がすっかり黄葉し、そのうえ、西風が吹いてくる。川のほとりに、ある夜、雁が鳴いて南の空へ帰ってゆく。ものの哀れを感じとる詩人たちは語らいをやめて、静かに夢の床につく。』

「石州途上」に云う。

『依微鐘響隔林聞　缺月引人石逕分

春柳ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

夕翠、寺ニ寓ス、逸見之方〔名ハ一實、一ニ可都美ト号シ、又、蕉窓ト号ス、高原屋久左衛門ト称ス〕ノ周旋スル所ナリ、之方ノ資性ハ寛弘ニシテ、尤モ俳句ヲ善クシ、又、画及ビ和歌ヲ能クス、其ノ画墨ニ梅ト題スル所ノモノ家ニ存ス、夕翠ノ去ルニ、余、一絶ヲ賦シテ云フ。

『雪ヲ寺門ニ糴シ未タ春晴レズ、一杯ノ薄酒ヲ餞ニ君ハ行ク、茲従リ分手ニ相送ラズ、我ノ酒消エ愁又生ズルヲ恐レル。』

夕翠、驛ニ妓緑李ヲ携エテ走ル、帰国シテ病ニ殁ス。

緑李ガ伶丁（独りぼっち）ニテ還来スル、其ノ艱苦ノ状ヲ説ク、衆之ヲ憐レミ、毎月四日、詩ヲ以テ廣乾寺ニ会ス、蓋シタ翠ヲ追悼スル、是レ起ノ所由カラ五分会ト為スト云フ。

是ノ歳、岩原逸菴〔名ハ任、二作ト称ス、大聖寺ノ人〕来寓ス、桃樹村ノ途中ニ云フ。

『衣食ニ駆馳シテ歩シ霜皤ク、

長鍬斬狼天未曙　腥風吹断満山雲』

「春柳」に云う。

『春入橋門多遠征　一枝曾動機人情
東風不使愁根斷　復向前年折處生』

夕翠が、広乾寺に泊まる。これは逸見之方（名は一實といい、一に可都美と号し、また、蕉窓とも号す、高原屋久左衛門と称す）の取り持ちによるものである。之方の持前の性格は心がゆるやかで広く、最も俳句が得意で、また、画、そして和歌もよくした。彼の梅と題する画墨が、私の家にある。夕翠が帰る時に、私は一絶を賦して、次のように云う。

『お寺の門の辺りに雪が積もり、未だ春の晴れる日には程遠い。この時に、君は一杯の不味い酒を餞に帰ってゆく。ここで以て別れることにしてこれ以上は見送らないことにしよう。私の酒が醒めて、別れの愁いが生ずることを恐れるからである。』

夕翠は、駅へ遊女の緑李を連れてきて帰っていった。そして帰国して病で亡くなる。その後、緑李が独りぼっちで帰ってきて、その辛苦の情を訴えたので、皆がそれを憐れみ、毎月の四日に詩の会のために広乾寺に集まって、夕翠の追悼を行った。それでこの会を立ち上げたわけから五分会と称したという。

この歳に、岩原逸菴〔名は任といい、二作と称す、大聖寺の人〕が来て泊まる。「桃樹村の途中」に云う。

「衣食のために、人に使われ駆けずり、歩き回ってきたが、いま、目の前の霜が晴れわたってる。

半世ノ労労ノ事自ラニ非ズ、孤リ駅ニ杯ヲ把リ無限ニ悵ム、寒山ニ日斜シ鳥飛ビ帰ル。』

高岡ニ留リ別レニ云フ。

『交朋ハ新旧過ク天涯ニシテ、相遇ノ毎ニ歓ビ別レノ毎ニ悲シム、即チ是レ一般公共ノ理ナレド、何ンゾ離席ニ雙垂シテ涙ス。』

今年、春ニ又来タル、書ハ稍老練ナリ、詩ハ則チ旧ニ依リ拙ナリ、梅ヲ見テ云フ

『東窓ニ朝日シテ一枝開ク、玉潤ノ氷ガ清ク無点ノ埃、心賞スルガ略王子帖ニ同ジ、千週観テ過ギ又千週ル。』

安政五年劉冷窓〔名ハ昇、字ハ君平、三郎ト称ス〕来寓ス、六年四月將ニ去ル、同人ニ祖行一律ヲ賦シテ云云。

今年春閏三月〔石崎小洲曰ク、万延紀元ニ閏三月アリ、因リテ知ッテ曰ク、今年ハ万延紀元ヲ斥ケル〕

広瀬旭荘来寓ス、越中ヲ属目シテ云フ。

『白山西峙ニシテ立山東、一帯ノ高峰碧空ヲ挿ス、四月中旬猶積雪、横ニ千里ノ玉屏風ヲ張ル。』

一生の半分を苦労に苦労を重ねて仕えてきたが、自らをそしる。独り宿場で、杯を酌みながら限りなく恨めしい。寒そうな山に日が斜めにさして鳥がねぐらに帰ってゆく。』

高岡に留まり別れに云う。

『友との交わりは、新旧を問わず遠く空の隅々にまで及ぶものである。互いに遇う毎に歓び、別れる度に悲しむ、これは、取りも直さず、通常、社会一般の理である。それなのに、いざ別れるとなると、どうして両眼から涙が流れるのであろうか。』

今年の春に、また、やって来る。書は、やや、老練であるが、詩の方は旧の形式で拙である。

「見梅」に云う。

『東の窓に朝日がさして一枝の梅が花を咲かせている。美しい清らかな氷が潤すようにとりつき汚れのない美しさである。心の底から愛で楽しむが王子の画帖で見た梅と遜色なく何度も観てまわり、また、幾度も観て楽しむ。〔王子帖の王とは、明末清初の画家の王時敏のことか〕』

安政五年（一八五八）に劉冷窓〔名は昇といい、字は君平、三郎と称す〕が来て泊まる。翌六年の四月に帰っていく、同人に祖行の一律を賦して云々。

今年の春は閏三月である。〔石崎小洲がいう、万延元年に閏三月があり、今年は万延紀元を斥ける〕

[三] 広瀬旭荘が来て泊まる。「越中に属目」してに云う。

『白山が西に立山が東に聳える。一帯の高い峰が紺碧の空を突き指している。四月の中旬だというのに、猶積雪をなしている。千里に広がる立派な屏風を張ったようである。』

此處

大村直子　画

年四月將去越中別賦一律云云

同人相行

石崎小洲曰、万延紀元有閏三月

因知今年書斥万延紀元

今年春閏月廣瀬旭荘來寓、越中眺目云、白山西峙立山東、一帯高峰挿碧空、四月中旬猶積雪、横張千里玉屏風、長光寺南塘詰之曰、白山非正西、旭荘曰、既曰東、不得不曰西、少方位差誤、非詩所關、予則曰、方位差誤、姑舍之、既云西峙、又云東峙、而云一帯高峰、語脈不連属、且横張字、不若横陳之妥貼、

青雲館云、百里青雲飛館流、春風朝駐画楼華、金衣公子花間曲、柴作幸奏綺筵、何不留、按三州志云、瑞龍公以豊太閤所賜伏見秀次遺館也、良材造殿閣於城中、元和元年、火坂役後、廢殿閣以其故材、作亭館于邑之東郎、所謂御旅屋是也、寛文四年甲辰五月、以亭館朽頽、再作之、享保戊申三月、廢亭館、以其遺材造夏月曝書亭、寛延戊辰六月、遂廢之云、

長光寺ノ南塘ガ之ヲ詰シテ曰ク、白山ハ正西ニ非ラズ、旭荘曰ク、既ニ曰ク東、曰クセズシテ西トシ得ズ、方位ノ差誤、詩ニ関ワル所ニ非ラズ、予、則チ曰フ、方位ノ差誤、之レ[四]姑舎ニシテ既ニ西峙ト云ヒ、又、東峙ト云ウ、而シテ一帯高峰ト云ウ、語脈連属ナラズ、且ツ横張ノ字、若シ之レヲ横陳トスルナラ[五]妥貼トナラズヤ。

「青雲館」ニ云フ。

『百里ニ青雲ガ飛ビテ館ニ流レ、春風朝ニ駐シテ我花ニ驕ス、[六]金衣公子ガ花ノ間ニ曲シ、幸ニ[七]綺筵ニ奏シテ何モ留メズ。』

按ズルニ三州志ニ云フ

瑞龍公、豊太閤ヨリ伏見ノ秀次ノ遺館ノ良材ヲ賜ルヲ以テ、城中ニ殿閣ヲ造ル。元和元年、大坂ノ役後、殿ヲ廃シ、其ノ故材ヲ以テ、亭館ヲ邑ノ東郎ニ作ル、所謂御旅屋是レナリ。寛文四年甲辰五月、亭館朽チテ頽スルヲ以テ、再ビ之ヲ作ル。享保戊辰（十三年）三月、亭館ヲ廃シ、其ノ遺材ヲ以テ夏月曝書亭ヲ造ル。寛延戊辰（元年）六月、遂ニ之ヲ廃スト云フ。

長光寺の南塘が、これを詰っていう、白山は真西ではない。旭荘が云う、既に東といっているので、云わなくても西とすることはできない。方位の誤差は、詩に特に関わることではない。そこで、私が云った、方位の誤差、これを言い逃れしても既に西に聳え立つといい、また、東に聳え立つという、そして一帯が高い峰だという、言葉の脈絡が繋がっていないではないか。そのうえ、第四句の横張の字だが、これを横陳とするなら穏やかになるのでないか。

[六] 「青雲館」について云う。

『遠く大空に広がる雲が飛ぶように館の上を流れてゆく。春風が心地よく朝から庭の花を求めて漂っている。鶯が花に向かって淑やかな曲を奏でる。幸せな美しい居心地を奏でて後、跡に何も留めず、飛び去っていった。』

調べると、[七] 三州志にいう。

瑞龍公が、太閤の豊臣秀吉より伏見城の豊臣秀次の遺館の良材を賜って、それでお城の殿閣を造った。その後、元和元年（一六一五）の大阪の夏の陣の後、城の殿閣を取り壊し、その故材でもって亭館を町の東の高台に造った。所謂、御旅屋がそれである。寛文四年（一六六四）の五月に、亭館が老朽化したので取り壊し、再びこれを造る。それが享保十三年（一七二八）三月に亭館を取り壊すことになった。そしてその遺材で夏月曝書亭を造る。それも寛延元年（一七四八）六月に、遂に取り壊したという。

乃チ此ノ詩ハ亭館ノ未ダ廃スル前ノ作ト知ルナリ。今唯武器庫アリ、樹木ガ繁茂（盛んに茂る）シ、古藤ガ纏繞シ、春暁夏初ニ紫茸シテ満園ス。文人墨客、毎ニ遊賞スル所ト云フ。

「桜（原作ハ白）花埒」ニ云フ。

『桜花埒ニ満チ長欄ニ映ジ、調馬樹陰ニ汗血ガ寒シ、故有ノ春風、玉勒ヲ回リ、天邊ニ白雪帯ビテ香ガ看ユル。』

馬埒ハ凡ソ三百六十間、両傍ニ桜樹ヲ以テ植エ、凡ソ五百株、皆吉野山ノ種。曩昔ニ瑞龍公ガ命ジテ移栽スル所ト云フ。相傳ニヨレバ当時、中間ニ亭子アリ、遺蹤ガ猶ヲ存ス、之レヲ園山ト謂ウ。此ノ詩ニ映長欄ト云フ、蓋シ此レヲ斥レルヤ、花時ハ高岡第一ノ壮観トナス。児玉旗山、高岡ニ留マリ別レニ云フ。

『馬埒ニ花飛ブ昨日ノ酒、杯ヲ挙ゲ共ニ惜シテ帰春ヲ欲ス、旗亭ノ柳暗クシテ今朝ノ酒、独リ身ニ同七ズ昨日ノ酒ヲ恨ム。』

是ノ歳ノ三月廿八日、笠原北湖（名ハ辰省、字ハ不爭、又、雀斎ト号シ、絹屋權九郎ト称ス）ト與ニ花ヲ賞ス。

すなわち、この詩は、亭館が未だ壊される前の作であることが分かる。今は、ただ武器倉があり、樹木が繁茂して古木の藤が巻きつくように纏りついて、晩春、初夏の頃には、紫の花で覆われ、一面に満ちあふれている。このため文人墨客が、いつも遊び楽しむところという。

「桜（原作ハ白）花埒」について云う。

『馬場に桜の花が満開に咲いて長い馬場の欄干に沿って映じている。調馬が樹陰に繋がれ、名馬が寒さに身震いしている。昔からの馴染みの春風が立派な馬の轡のあたりをめぐっている。大空の果てに白雪を帯びた香り高い立山連邦が見える。』

馬場は凡そ三百六十間で、両脇に桜の樹を植え、それが凡そ五百株で、皆が吉野の種類だという。昔に瑞龍公が命じて桜の移植をさせたものだという。伝えるところによれば、当時、馬場の中間に小さな亭があり、その礎石の跡が、今も残っている。それを園山という。この詩に映長欄という。しかし、園山のことは斥けている。花時になると高岡第一の壮観となる。

児玉旗山が高岡に留まって、その別れの時に云う。

『馬場での桜の散る中での昨日の楽しい酒、共に杯をあげて散りゆく桜の春を惜しむ思いであった。一夜明け打って変わって、酒屋の柳は暗く今朝の酒、独りしみじみと皆で楽しんだ昨日の春を恨めしく思う。

この歳の三月二十八日に、笠原北湖（名は辰省といい、字は不浄、または雀斎と号す、絹屋権九郎と称す）と一緒に花をめでる。

之作

乃知此詩亭館未廢之前也今唯有武器庫樹木蕃茂古藤纏繞春晩夏初花色滿園紫茸滿園文人墨客毎所遊賞云

櫻（原作白）花埒云櫻花滿埒映長欄調馬樹陰汗血寒故有春風回玉勒天邊白雪帶香看馬埒凡三百六十間両傍植以櫻樹凡五百株皆吉野山之種曩昔瑞龍公命所移栽云當時中間有亭子今猶存礎跡謂之園山此詩云映長欄蓋斥此矣花時為高岡第一之壮観兒玉旗山高岡留別云馬埒花飛昨日酒挙杯共惜欲帰春旗亭柳暗今朝酒獨恨身同昨日春是歳三月廿八日與笠原北湖（名辰省字不爭又号雀斎絹屋權九郎）賞花時南風多蟆子、将帰忽遇上子心竹伴廣瀬旭荘至因倶登高田園（欣右衛門）櫻花村舎（舎馬埒西）予先得一詩云朝来暖暖促花開一望埋林紅霞堆要以芬香滿身上移節故自下風来録示旭荘旭荘曰佳余亦思詩耳有間羽瑟泉（羽廣屋宗左衛門）携酒看来同傾至夜旭荘畢席而無詩

卧麟墓云高岡墓上石麒麟松柏聲寒過萬春豈懷人間殘祭拜碑文自與日星新

瑞龍寺云遥日金田白玉闕重重寶塔雲間極知二梵原成福會上雨花靈鷲山三州志慶長十八年瑞龍公聘廣山（越前）和尚於金澤（信濃）作一刹居焉（称金澤寺作）寶圓寺（寶當二法ト作ス）

蟆子、将帰忽遇上子心竹伴廣瀬旭荘至因倶登高田園（欣右衛門）櫻花村舎（舎馬埒西）予先得一詩云朝来暖暖促花開一望埋林紅霞堆要以芬香滿身上移節故自下風来録示旭荘旭荘曰佳余亦思詩耳有間羽瑟泉（羽廣屋宗左衛門）携酒看来同傾至夜旭荘畢席而無詩

時ニ南風多蟆子、将ニ帰ル、忽チ上子心竹ニ遇ツテ広瀬旭荘ヲ伴ツテ至ル。因リテ倶ニ高田恵園（欣右衛門ト称ス）桜花村舎（舎ハ馬埒ノ西ニアリ）ニ登ル。予、先ニ一詩ヲ得テ云フ。

『朝来暖暖ガ開花ヲ促ス、一望スルニ林ニ紅埋メ堆ニ霞、芬花ヲ以テ要トシ身上ヲ満ス、節ニ移シテ故ニ自ラ風来シテドル。』

録ヲ旭荘ニ示ス、旭荘曰ク、佳、余、亦タ詩ヲ思スルノミ。

有間羽瑟泉（羽広屋宗左衛門ト称ス）酒肴ヲ携エテ来ル、同ジク傾ケテ夜ニ至ル、旭荘ニ席ノ畢ルマデ詩無シ。

臥麟墓ニ云フ

『高岡ノ麒麟ノ石ノ上ノ墓、松柏ノ声寒ヲ過ギテ萬ニ春、豊止ノ人ニ間ニ残ヲ祭拜ス、碑文自ズト日星ニ新ヲ與フ。』

瑞龍寺ニ云フ。

『遥日ニ金田白玉ノ闕、宝塔重重ニ雲間ニ聳エ、二梵ヲ極知シテ原ノ福ト成ス、雨花ガ霊鷲山ノ上ニ會ス。』

三州志ニ云フ、慶長十八年、瑞龍公ガ廣山（越前）和尚ヲ聘シテ金澤（信濃）ニ一刹居ヲ作ル。高瀬ナリ、金澤ト作スハ誤リ）ニ一刹居ヲ作ル。寶圓寺（寶當ニ法ト作ス）ト称シ

その時に南風多蟆子が、折よく帰ってきて、早速に上子心竹に出会って広瀬旭荘を伴って来る。そこで高田恵園（欣右衛門と称す）も一緒に馬場の西の桜花村の舎に登る。（舎は馬埒の西にあり）私が、先に一詩を作って云う。

『朝から暖に温かくなって開花を促している。一望すると、林を紅色で埋め土手の辺が霞で霞んでいる。花の香りを集めて私の心を満たしてくる。杖をたよりに場所を移動しながら気ままに彷徨い歩く。』

旭荘に詩の認めたものを見せる。それを旭荘が見て云う、素晴らしい。私は詩について深く思いをいたすのみ。

有馬羽瑟泉（羽広屋宗左衛門と称す）が酒肴を携えて来て、同じく交じって酒を傾け、夜まで続く。旭荘には、この席が終わるまで詩が無かった。

「臥麟墓」について云う。

『高岡を築いた麒麟ともいうべき才知に特に優れた方のお墓が石の上に建っている。深い森をなす松柏の常緑樹に寒かった冬の風が過ぎ去ってすべてが春の装いに変わる。豊かな足跡を残された方の御霊を静かに祭り拝む。碑文自ずと日々新たに町を見守っている。』

「瑞龍寺」について云う。

『夜遅くに美しい境内と伽藍をもつ寺を訪ねる。宝塔が重なり合って雲間に聳えている。その佇まいに極まって二つの寺が幸せをもたらす根源だと悟る。ここは、お釈迦様が法華経を説かれたという霊鷲山であり、法の花の雨の降り注ぐところである。』

三州志に云う。慶長十八年（一六一三）に瑞龍公が広山（越前）和尚を招いて金沢（私が、調べるに越前の高瀬である。金沢とするのは誤りである）に寺を造る。寶圓寺（寶は法とするのが正しい）と称す。

實當作法、公薨後、增營之、以為祠堂、因號瑞龍寺、殿宇宏麗、門闕巍然、第二世曰快翁芸悅、寛永八年寂、第三世曰奉室正寅、承應二年寂、第四世曰在田春龍、寛文七年寂、第五世曰易天元周、天和二年寂、此間有雲山愚白、事在高岡佳話、第六世曰央山玄中、寶永二年、老子手洗野信光寺、第七世曰無紋良準、享保十六年寂、第八世曰鈍翁雪護、延享四年、老子立野長久寺、第九世曰兀翁普禪、第十世曰機王虎關、十一世曰大昶玉麟、十二世曰大安空王、十三世曰高玄德淳、十四世曰洞峯富仙、十五世曰達觀良穎、十六世曰靈源活湛、十七世曰天外大亮、十八世曰

（小洲曰、明細帳云、廿二世雪巖、廿三世玉岡）

（小洲曰、壬申、寛永九年、明細書上帳、春龍作俊龍）

（富田震風記錄、白作伯）

公薨ノ後、之レヲ増営シ、以テ祠堂ト為ス。因リテ瑞龍寺ト号ス。殿宇ハ宏麗ニシテ門闕ハ巍然タリ。第二世曰ク快翁芸悅、寛永八年寂。第三世曰ク奉室正寅、承應二年寂。第四世曰ク在田春龍〔小州ニ曰フ壬申六月瑞龍寺明細書上帳ニ春龍ヲ俊龍ト作ス〕寛文七年寂。第五世曰ク易天元周、天和二年寂。此ノ間ニ雲山愚白〔富田震風記録ニ白ヲ伯ト作ス〕ノ事ガ高岡佳話ニアル。第六世曰ク央山玄中、宝永二年、手洗野ノ信光寺ニ老ス。第七世曰ク無紋良準、享保十六年寂。第八世曰ク鈍翁雪護、延享四年、立野ノ長久寺ニ老ス。第九世曰ク兀翁普禪。第十世曰ク機王虎關。第十一世曰ク大昶玉麟。第十二世曰ク大安空王。第十三世曰ク高玄德淳。第十四世曰ク洞峯富仙。第十五世曰ク達觀良穎。第十六世曰ク靈源活湛。第十七世曰ク天外大亮。第十八世曰ク眞巖国常。

瑞龍公が亡くなられた後、これを大きく造営して、それでもって公の御霊を祀るところとした。それで瑞龍寺と号した。建物は雄大で美しく由緒あるお寺として高大な山のようである。

第二世が快翁芸悅、寛永八年に寂。第三世が奉室正寅、承応二年に寂。第四世が在田春龍〔小州に、壬申（寛永九年）六月、瑞龍寺の明細書上帳に春龍を俊龍としてある〕寛文七年に寂。第五世が易天元周、天和二年に寂。この間に雲山愚白〔富田震風の記録に白を伯としている〕のことが、高岡佳話にでている。第六世が央山玄中、宝永二年に手洗野の信光寺に隠居する。第七世が無紋良準、享保十六年に寂。第八世が鈍翁雪護、延享四年に立野の長久寺に隠居する。第九世が兀翁普禪。第十世が機王虎關。第十一世が大昶玉麟。第十二世が大安空王。第十三世が高玄德淳。第十四世が洞峯富仙。第十五世が達觀良穎。第十六世が靈源活湛。第十七世が天外大亮。第十八世が眞巖国常。

（小洲曰、明細帳云、廿二世雪巖、廿三世玉岡）

裏巖國常、十九世曰大機覺道、二十世曰齋馬晶道、廿一世曰獨游橘仙、〔是歲來住、天保二年辛卯、浦上春琴訪閑雲禪師、七月十二夜登瑞龍寺佛閣即事云、夜上禪樓四顧幽、一輪月照自松頭、僧寮連殿無人語、唯有蟲聲滿地秋。愚伯禪師、貞享元年甲子歲旦云、金雞偕歲五更天、秦運方開生瑞烟、自是太平安樂主、山河大地永齋年、貞享二年、請退休、二月薙髮、老子泉州成合村成合寺、元禄十五年歿、年八十五、瑞龍寺住持印云、納僧住處來無因、一鉢隨緣物外身、辭謝國君歸舊隱、天恩不隔百花春、古城蹟云、百雄返車絶路塵、山高水

第十九世曰ク大機覺道。第二十世曰ク齋馬晶道。第二十一世曰ク獨游橘仙。〔小州ニ曰フ、明細帳ニ云フ、廿二世ハ雪巖、廿三世ハ玉岡〕。

是ノ歳ニ来住ス、天保二年辛卯、浦上春琴、閑雲禪師ヲ訪ネ七月十二夜ニ瑞龍寺ノ佛閣ニ登リ、即事ニ云フ。

『夜ニ禪樓ニ上リ四顧スルニ幽タリ、一輪ノ月自ズト松頭ヲ照ラス、僧寮連殿ニ人語無ク、唯、蟲ノ声アリテ地ニ満ル秋。』

愚伯禪師、貞享元年甲子ノ歳旦ニ云フ。

『金鶏ガ歳ヲ催ス五更ノ天、秦運ガ方ニ瑞烟ヲ開生シ、自ラ是レ太平安楽ノ主、山河大地ガ永ク齋年タリ。』

貞享二年、請ヒテ退休シ、二月ニ聽允ヲ獲テ、泉州ノ成合村ノ成合寺ニ老ス、元禄十五年ニ歿シ、年八十五。瑞龍寺ノ住持ヲ解クノ印ニ云フ。

『納僧ノ住處ハ本ヨリ無因、一鉢ノ隨緣ニシテ物外ノ身、国君ニ辭謝シテ舊隱ニ帰ル、天恩不隔ニシテ春ノ百花。』

「古城蹟」ニ云フ。

『百雄返車ニテ路塵ヲ絶チ、山高ク水緑満チテ濱清シ、

第十九世が大機覚道。第二十世が斎馬晶道。第二十一世が獨游橘仙。〔小州に云う、明細帳に廿二世は雪巖、廿三世は玉岡という。〕

天保二年、この歳に来住した閑雲禪師を浦上春琴が訪ね、七月十二日の夜、瑞龍寺の仏閣に登って即事に云う。

『夜に禪寺を訪ねると、辺り一帯が静かなさまである。一輪の月がこく自然に松の辺りを照らしている。僧堂をはじめ連なる堂舎からは人の声もなく静まり、ただ、虫の声が辺り一面から秋を告げている。』

愚伯禪師が貞享元年の歳の旦に云う。

『太陽が新しい歳をうながす午前四時の空、安らかな機運が、まさに生き生きとめでたい煙を開き、自らこれ、世の中が穏やかに治まり、安らかで楽しいことの根源であり、山河大地がかぎりなく連なる年でもある。』

貞享二年（一六八五）自ら退くことを乞い願い、二月に許しがでて泉州（大阪府の南部）の成合村の成合寺にて隠居する。元禄十五年に歿する、年八十五歳。瑞龍寺の住持を解くの印に云う。

『僧の住む処とは、本来、固定的なものではない。一鉢の仏縁にまかせた世俗を離れた身である。国のお殿様におことわりして旧の隠棲の家に帰る。天の恵みを疎んじることなく春の花が繚乱と咲き乱れている。』

「古城蹟」に云う。

『沢山の石垣のある城跡にきて車返しの所で路に砂ぼこりがたたないように絶ち、山は高く水濠が広がり、緑に満ち、お濠の州浜も清々しい。

今宵来ッテ月松間ニ対シ、苦問スル城樓ニ
舊日ノ春。』
三州志ニ云フ、慶長十年、瑞龍公富山ニ老
ス、十四年ニ富山城災ス、公命ジテ新城ヲ関野
ニ築ス、是ノ歳八月殿閣成ル、公ガ居ヲ焉ニ徙
ス、十九年ニ薨ス、殿閣ヲ廃ス、余、聞ク此ノ
城ノ經營ヲ高山南坊ニ命ズルトゾ、今ヲ隔タル
コト二百五十年、塹壘（堀と塁）依然タリ、野
村空翠詩ニ云フ。
『自ラ嘆ズルニ居處容易ニ移リ、眼邊ニ迹ヲ
陳ブルニ誰知ル有リ、残スル荷花ニ冷涼ノ
風ガ度シ、荒草ニ天清ナル朝露ガ澄ス、生
前ノ豪傑三尺ノ剣、声名身後ニ幾行ノ碑、
吾日暮レニ寂寥ノ処ニ来タリ、一陣ノ松濤
ニ蟲ノ語悲シ。』
詩ハ佳ト雖モ、第五六句ノ藩宗ノ體ノ失味ヲ
恐レル。
児玉旗山、古城ヲ即目シテ云フ。
『草満チ春塘ニ埃点無ク、青ヲ踏ンデ半日徘徊シテ飛ビ去ル、
徊ニ酔フ、人ニ逢イ睡鴨驚シテ掠ス。』
舊ヲ須臾ニシテ蕭イ水來シテ
劉冷窓、安政己未（六年）、杉谷清瀞〔両左
衛門ト称ス〕ト與ニ古城ニ遊ブ、

今宵、訪ねてみると松の樹の間に月が真正面から照
っている。ねんごろに訪ねた本丸には、今は樓がな
く、遠い日の思い出となっている。』
三州志に云う。慶長十年に瑞龍公が富山に隠居され
た、十四年に富山城が火災で焼ける。公が新しい城を
関野に築くよう命じられた、この年の八月に殿閣が完
成した。そこで居城を移された、十九年に亡くなられ
る。殿閣が取り壊される。私は、この城の縄張りを高
山南坊に命じられたと聞いている。今を隔てること二
百五十年、お堀りと塁が昔のままである。
野村空翠が詩に云う。
「自ら嘆に堪えずしみじみと云う。月日がたやすく移
り流れていくが、目の当たり広がっている足跡を誰
が知っているだろう。今は残された蓮の花に冷やか
な涼しい風が度々訪れ、草むらに自然のままの清ら
かな朝露がたっぷりと含んでいる。昔の三尺の剣を
差していた豪傑たちの名声を伝えるかのように、今
は、亡くなった後に幾行もの碑がたたずんでいる。
私が日暮れの寂しく物静かなこの場所に来てみる
と、ひとしきり松風に合わせて蟲が悲しく語りかけ
て来る。」
詩はみめが宜しいといえるものだが、第五、六句が
藩を尊ぶ面目という点において失味していなかと思れ
るものである。
児玉旗山が、古城を即目して云う。
「草が一面に満ちて春の土堤には砂ほこりもたってい
ない。その青い草を踏んで半日徘徊して酔いしれ
る。たまたま訪れた人に眠っていた鴨が驚いて飛び
さる。しかし、暫くするると、もとの汀に戻って水
をかいで泳いでいる。」
劉冷窓が、安政六年に杉谷清瀞〔両左衛門と称す〕
と共に、古城に遊び、

緑満清瀞。今宵来対松間月。苦問城
樓舊日春。三州志云、慶長十年、瑞
龍公老于富山、十四年富山城燬水
災、公命築新城於関野、是歳八月
殿閣成、公徙居焉、十九年薨、
撤殿閣。余聞此城命高山南坊所
經營、距今二百五十年、塹壘依然
野村空翠詩云、自嘆居諸容易移、眼
邊陳迹有誰知。殘荷花冷涼風度、荒
草天清朝露澄。豪傑生前三尺劍、聲
名身後幾行碑。吾來日暮寂寥處、一
陣松濤蟲語悲。詩雖佳、第五六句恐
失味藩宗之體、児玉旗山古城即目
云、草満春塘無點埃。踏青半日徘徊
酔、逢人睡鴨驚飛去。舊須臾水
來劉冷窓安政己未、與杉谷清瀞〔両左
衛門〕遊古城、有感云、芳草萋萋迷鳴蛙
庵。夕陽幾人傍城耕。城門鎖在松影
外。下有晩花臨水明。極目江山多殘
壘。春天悠悠雁南征。吾來非昔年
迹。愛此越山日日晴。人間陵谷何足
計。豈無再復舊經營。眼前突兀起樓
櫓。幽叢荒蕪愛旗旌。画船東守大門
渡。雲堞北接雙鬟城。梨花香動合陣
色。楊柳陰濃洗馬聲。春光何避行陣
傍。吾邦名將多風情。他年若有横槊
者。鶯花相對尊吾盟。津田半村九月
十三夜古城賞月云、松林千尺古城
頭。四顧山光掌上浮。倚月今宵多快
意。蟬宮磨出十分秋。寛平遺事至今
傳。遥望清秋九百年。松濤深樹
下。夕陽沉處月蟬妍。城東為中河村、

有感ニ云フ。
『芳草ガ萋シテ蒼庚鳴キテ迷シ、夕陽ニ幾人
カ城ノ傍ラヲ耕ス、城門鎖シ外ニ松影在リ、
有晩ニ下ッテ花ヲ臨ミ水明、極目スレバ江
山ニ残壘多ク、春ノ天ニ悠悠ト雁ガ南征ス、
吾來ッテ昔年ノ迹ヲ弔ウニ非ズ、此ノ處ノ
山ヲ愛デテ日日ヲ晴ス、人間、何ゾ陵谷ヲ
計リテ足ル、豈ニ再ビ復タ旧ノ経営モ無キ
ニ、眼前ニ突兀ニ樓櫓ガ起コリ、幽叢ガ
荒蕪シテ旗旌ニ変シ、船東守ニ大門ヲ渡ル
ヲ画ク、雲ガ堞北ニ雙鬟ヲ城ニ接シ、李花
ノ香リ陣色ニ動合ス、楊柳ノ陰ガ馬声ヲ
遮洗シ、春光何ゾ陣際ヲ避行ス、吾邦ノ名
將ノ風情多シ、他年ニ若シ横槊者ガ有ラ
バ、鶯ガ花ニ相対シ吾ニ盟尋ス。』
津田半村、九月十三夜ニ古城ノ賞月ニ云フ。
『松林ガ古城頭ニ千尺、四顧スレバ山光ガ掌
ノ上ニ浮カブ、月待テバ今宵ハ快意多シ、
蟾宮ヲ磨キ出シ十分ノ秋』
寛平ノ遺事ヲ今ニ至ルマデ伝フ。
『遥ニ望メバ清秋九百年、来テ坐スレバ樹下
ニ松濤深シ、夕日ガ沈ム處、月蟬妍タリ。
城ノ東ヲ中河村ト為ス、

有感に云う。
「芳しい草が繁っているなか鶯が鳴いて惑わせる。夕
日のなか何人かが城の傍らを耕している。城の門の
鎖した外に松が影をなしている。その下を夜になっ
て花を見に行くと水が澄んで爽やかに見える。見渡
すかぎり山水に砦が多く残っている。春の空に遠く
遥に雁が南の空に向かって飛んでゆく。吾はここに
来て昔の足跡を弔うものではなく、ここの山を愛で
ることで日々心が晴れるからである。人間、何ぞ、
世の変遷にとらわれることがあろう。どうしたって、
過ぎ去ったものは返らず、また、過去の事業の営み
も元に返るものではない。にもかかわらず、どうし
てだろう。目の前の高く聳える山に城の物見櫓が立
ち現れてきて、静かな草むらが荒れ果てて戦の旗の
立つ景色に変わり、船が東の守りにつくべく大門を
渡ってゆくように描き、雲が北の姫垣に左右両方の
鬢の毛を城に接するように広がり、李花の香りが陣
の景色に合わせて靡き動き、柳の影が馬の声を遮り
洗う。春の光が、どうして陣の辺りを避けるのだろ
う。そこには、わが国の優れた大将たちが多くいるあ
りさまである。他の年に、もし、武器を横たえて戦
う意思を捨てる者がいるならば、それこそ、鶯が花
に向かって鳴き、戦う以上に、吾にもとの誓いをい
っそう有効なものにしてくれるであろう。」
津田半村が、九月十三日の夜に古城の賞月に云う。
「松林が古城の辺りに千尺にも聳えている。四方を眺
めると山の光が掌の上に浮かぶようである。月の出
を待てば今宵は、心地のよいことが多い。月世界が
研ぎ澄まされたような月で、これ以上にない十分す
ぎる秋である。」
平安時代の二〇〇寛平年間に菅原道真が九月十三夜の詩
を詠んだ遺事が、今に至るまで伝わっている。
「遥に望めば、清らかな秋が九百年、ここに来て坐ると、
樹の下に松風の音が奥深く響いている。夕陽が沈み、
その後に出た月が、顔だちが美しく艶やかである。」
城の東を中河村といい、

有南氏之莊、半村所生之處、林蘇坡題云、脩竹茂松影徹遍、滿庭深綠蘚生花、樓階古色多喜趣、便識淳風累世家、城北畔為小松原、蓋是昔後宮之趾也、林蘇坡（名瑜字伊、別字清痴）詩云、八尺毳毯覆草鋪、松陰清處置風爐、生來最愛幽閒地、一點紅塵到此無、今石動内山壺谷（名充積字高仲）題春興八首後云、閒道古城多勝遊、一時和筆入心頭、檻前風雨山川異、水上烟花日夜浮、珠樹鳥傳春雪落、玉臺客見彩雲收、陳遵殊有滄浪興、醉後還驚春色流、新渡云、兩水瀠洄渡口催、風横雲斷喚舟來、春流分散行人思、直向武陵千里回、三州志云、或曰、往昔千保川尤廣大、瑞龍寺草創時、其水勢如建瓴、激流所注、寺後為深淵者數處、殿閣之處、傾覆因命築堤於上戸出、自此水勢減半云、余按當時水減、則架橋、謂之横田小橋、横今中島橋、称大橋、若水漲則非舟不能濟、今中橋五十年前所架、千保川沿邑而流、上自横田中島、下至木街、泛舟濟之、至木津佐埜、頗有風致、從流而下、景色殊佳、至木街西、與親部川合流、漸為廣闊、里許至米島津、丹崖聳立者數千仞、謂之赤壁、與莊河合流、雅客喚作三又江、直至海門、春多贈殘魚、夏宜納涼、秋宜賞月、多打月香魚松魚之類、冬宜觀雪、實為文人韵士賞味

南氏ノ莊アリ、半村ノ生レル所ノ處。』

林蘇坡題シテ云フ。

『竹ガ節リ松茂リ清キ影ヲ遮ル、庭ニ深緑ガ満チ花ガ蘇生スル、檐階ノ古色ニ真ノ趣キ多シ、便スル淳風ガ累世ノ家ヲ識ス。』

城北ノ畔ヲ小松原ト為ス、蓋シ曩昔ノ後宮ノ趾ナリ、林蘇坡（名ハ瑜、字ハ学伊、一ニ清痴ト号ス）詩ニ云フ。

『八尺ノ毳毯ヲ草鋪ニ覆シ、松陰ノ清キ處ニ風爐ヲ置キ、坐來シテ最愛ノ幽閒ノ地トシ、此レニ到ッテ一点ノ紅塵モ無シ。』

今石動ノ内山壺谷（名ハ充積、字ハ高仲）春ト題シテ八首ヲ興シテ後ニ云フ。

『道ヲ尋ね聞いて古城にきていろいろなすぐれたところ見物し、その時に、穏やかに筆に入れ収めることを念頭においてめぐった。手すりの前の山川の景色が雨風の様を異にし、お濠りの水上が煙るように日夜、花の影を映し浮かべている。美しく立派な樹を鳥がつついて白く雪のような香りのある花を散らしている。四方を見渡せる高殿で私は美しい彩りのある雲を視野に収める。さらに、ありのままに陳べると殊に青々と広い濠の浪の様に趣がある。お酒の酔ったあと、帰る段になって酒気の中での春の景色の広まり伝わる思いに感動する。』

二「新渡」に云う。

「天水が逆り流れて渡し場のあたりを溢れ流れている。風が横に吹いて雲を断ち、晴れ間に舟の来るのを喚ぶ。春の川の流れが旅人の心を千々に掻き立てるように乱す。直ちに別天地に向かって千里を思いめぐる。」

三州志に云う。或いは曰く、昔は千保川が最も広大であった。

瑞龍寺ノ草創時、其ノ水勢ハ建瓴ノ如シ、激流ノ注グ所、寺ノ後ニ深淵数處ヲナシ、殿閣之レ傾覆ヲ為ス恐レアリ。因リテ上戸出ニ築堤ヲ命ズル。此レ自リ水勢半ニ減ズルト云フ、余、按ズルニ当時、水減ジテ則チ橋ヲ架ケ、之レヲ横田小橋ト謂ヒ、今中島橋ヲ大橋ト称ス。

若シ水張レバ則チ舟渡ルコトアタワズ、五十年前ニ架ケル所ト傳フ。

千保川邑ニ沿ッテ流レ、上ハ横田中島ヨリ下ハ木街ニ至ル。舟ヲ泛ベテ之ヲ泝レバ、木津佐埜ニ至リ、頗ル風致アリ。流レニ従ッテ下レバ、景色殊ニ佳、木街ノ西ニ至ル。親部川ニ合流シ、漸ク広闊ト為ス。里許ニシテ米島津ニ至ル。丹崖左ニ聳エ数千仞、之ヲ赤壁ト謂フ。稍北ニテ莊河ニ合流スル、雅客喚ンデ三叉江トナス。直ニ海門ニ至ル、春ハ多贈残魚ニシテ、夏ハ納涼ニ宜シ、秋ハ賞月宜シ、香魚、松魚ノ類打ツ月多ク、冬ノ観月モ宜シ、実ニ文人韵士ノ賞詠ノ地ト為ス。

瑞龍寺が建った最初の頃、その水勢は強く防ぎきれない程であった。激流の注ぐところとなる寺の後ろに深い淵が数カ所もつくっていた。このために上戸出に築堤を命じられた。その結果、水勢が半分に減じたという。調べてみるに、当時、水が減ったことで橋を架けることができ、それを横田小橋という。今、中島橋を大橋と称す。

若し、水が張れば、すなわち、舟で渡ることもできない。橋は五十年前に架けたという。

千保川は町に沿って流れ、上は、横田中島より、下は、木街に至る。舟を浮かべて川を遡ると木津、佐埜に至る。頗る美しいけしきである。流れに従って下ると、景色が殊にみめ麗しいうちに木街の西に至る。親部川に合流する。漸く広々とした流れになる。一里ばかりにして米島津に至る。切り立った赤い崖が左に聳え数千仞、これを赤壁という。その先、北で莊河に合流する。雅客たちは、三叉江と呼んでいる。ここからは直に海に至る。春は、多種多様な魚がいて、夏は納涼に、秋は賞月によい。香魚、松魚の類に網を打つ月も多く、冬の観月も乙なもので、実に文人や風流な人の賞味の地となっている。

天保乙未（六年）ノ年、林蘋坡ニ邑中ノ諸子ト與ニ、赤壁下ニ遊ブ詩二首アリ。序ニ云フ。

『同盟余ヲ邀エテ、江上ニ舟ヲ泛ベ、絶壁ノ岸枕ヲ赤壁ト名ヅケ、其ノ下ニ舟ヲ繋ギ、夜ニ入リテ東山ニ月上リ、風景奇絶タリ、網ヲ挙ゲテ鱸魚ヲ得ル。』

詩ニ云フ。

『幽ニシテ尋常ニ費ヲ討チ心ヲ賞ス、偶ニ奇勝ニ逢イ新吟ヲ得ル、西邊ニ夕照東邊ニ月、月波ニ銀シ日湧金スル。網ヲ入レ巨鱗ヲ挙ゲ白ク浮ク、風清ク月白ク吟舟ヲ送ル、今宵ハ豪ニ興ジ君ヲ知ルニ否、併セテ蘇仙ヲ得テ両度ヲ遊ブ。』

又白露ヲ以テ横江水光天ニ接シテ韵ヲ為ス、詩ヲ篋中集ニ載セル。是ノ夏、大聖寺ノ阪井梅屋亦タ来遊シ、伏木舟行ニ云フ。

『老イニ向カイテ殊方ニ漫遊ニ事スル、新知旧識ガ共ニ孤舟、天高ク嶽嶽皆羅ニ立チ、地ハ闊ニシテ川川ガ盡キテ合流シ、千里ヲ買ウ帆ガ海表ヨリ来ル、百年ノ禅刹ノ岩頭ニ據ッテ、無邊ノ画景ニ吟眼ヲ磨ク、教人ガ到處ニシテ旅愁ヲ散ラス。』

舟中ノ帰路ニ云フ。

天保六年の年に、林蘋坡が、町中の皆と共に赤壁下に遊んだ時の詩二首があり、その序に云う。

「同じ結社の仲間が私を迎え招いて、川面に舟を浮かべて遊ぶ。小矢部川の赤壁と呼ぶ絶壁を望める岸の下に舟を繋いで川遊びを楽しむ、夜になって東の山に月が上り、風景がひときわ際立つ美しさである。川に打った網を挙げて美味なすすき魚を獲る。」

詩に云う。

「静かに極く当たり前に銭をおさめて心をめで楽しむ。たまたま、珍しく優れた景色に出逢い、新しい詩歌を得る。西の辺りに夕陽が照り、東の空の辺りに月が出ている。その月が、波の上に銀色にとろけるように揺らめき、夕陽が金色の水が湧き出るように水面に映えている。網を打って大きな魚が白い鱗を躍らせるように浮き挙がってくる。風は清らかで月が白く映え、今宵は、豪快にうち興ずることで、君とも互いに気持ちが通じ合えたと思うが、どうだろう。合わせて中国の蘇軾を真似て風流文物を楽しみを得て、二つの遊びに浸ることができたようだ。」

また、二十四節気の一つ九月の白露で以て、横江の水光が天に接するを韵となして詩を篋中集に載せる。

是の夏、大聖寺の阪井梅屋が、また、来遊して、伏木舟行に云う。

「老いるに従って心のままに他国の方々へ旅をして回る。新しく知った友や旧からの馴染みの友と一緒に小舟に乗る。天高く山々が峨々として並び立っている。土地が広々として川が、大きな流れへと次々に合流してくる。遠く千里の海を越えて商いする帆船が海洋からやってくる。百年の禅寺の岩端に拠りかかって果てし無く美しく彩った景色を見て詩歌をつくる眼力を磨き、教える人の域にゆきつき旅の愁いを散らす。」

舟中の帰路に云う。

『百丈牽舟掠一汀　蒹葭蕭蕭水冷冷
斜暉映海波初紫　淡霧籠山樹益青
話熟親疎同接膝　交深老幼共忘形
篙師莫使帰来急　市上塵囂又恐聴』

邑中聲妓之所居曰瞽女街、雅客絃樓ト称ス、曩昔開正寺ノ對門ノ官倉ノ後ニ、二樓アリ、曰仙姑曰藏佳、今則亾矣、寺ノ側ニ一樓アリ、曰石垣、今移在下衢、故称撞木、為上句、今改作上衢下衢、下千木屋街過橋左折先得者曰阿閭又称小梅、扁曰玉雪、米菴之所書、其次曰新川端、扁云、一坵春夢樓、頼立斎之所書、其次曰

所書、又扁云、觴月咏花樓、中島棕軒所書、其次曰川端、以其在新川端故称、沿川流也、扁云、花園深、皆川淇園書、折而西去曰角院、其次曰者曰松古、中島棕軒亡矣、其東曰者曰茶釜又称古藤、扁云紫雪樓、山陽所書、此數樓喚做上衢、下川原之西有丁字街、其極北曰

邑中ノ聲妓ノ居ル所ヲ曰ク、瞽女街、雅客絃樓ト称ス、曩昔ニ開正寺ノ對門ノ官倉ノ後ニ、二樓アリ、曰ク仙姑、曰ク藏佳、今ハ則チ亾矣、寺ノ側ニ一樓アリ、曰ク石垣、今ハ移リテ下衢（丁字街ハ撞木ニ似ル故ニ称シテ撞木ト喚ブ、横川原ニアル者ヲ上句トナシ、今ハ改メテ上衢下衢トナス）ニアル。

下千木屋街ノ橋ヲ過ギテ左折スルト、先ニ得ルノガ曰ク、阿閭、又小梅ト称ス、扁ニ曰ウ玉雪、米菴ノ書スル所。其ノ次ニ曰ク、新川端アリ、扁ニ云フ、一場香梦樓、頼立斎ノ書スル所、又扁ニ云フ、觴月咏花樓、中島棕軒ノ書スル所。其ノ次ハ曰ク、川端、其ノ街、稍、川流ニ沿ッテ在ルヲ以テナリ。扁ニ云フ、花園深、皆川棋園ノ書。折レテ西ニ去ルト、曰ク角院、其ノ次ニ凹ムハ、曰ク松古、對門ニ曰ク清香樓、此ノ三者ハ今則チ亡シ。其ノ東ノ凹ミハ曰ク茶釜、又古藤トモ称ス、扁ニ云フ紫雪樓、山陽ノ書スル所、此ノ數樓ヲ上衢ノ做リト喚ブ。下川原ノ二丁字街アリ、其ノ極北ニ曰ク、

町中の芸者のいるところを三味線引きのいる瞽女街という。雅客は絃樓と称している。昔は、開正寺の門の正面の蔵倉の後に二樓があり、一つは仙姑、いま一つは蔵佳といった。今は無くなっている。寺の横に一樓があり、石垣という、今は下衢（丁字街は、撞木に似ているから撞木街と呼ぶ。横川原にあるものを上句とす。今は改めて上衢下衢としている）にある。

下千木屋街の橋を過ぎて左折すると、最初にあるのが阿閭、また、小梅と称す。扁にいう玉雪で、米菴の書いた所。その次ぎにあるのが新川端という。扁には一場香梦樓といい、頼立斎の書いた所。また、扁には觴月咏花樓といい、中島棕軒の書いた所。その次ぎにあるのが川端といい、この街が、稍、川に沿っているからである。扁には花園深といい、皆川淇園の書いた所。そこから折れて西に行くと角院、その次ぎに凹んであるのが松古といい、その正面にあるのが清香樓という。この三つのものは今は無くなっている。その東の凹みにあるのが、茶釜、また古藤とも称す。扁にいう紫雪樓で、山陽の書いた所。この数樓を上衢のこしらえと呼ぶ。

下川原に丁字街があり、その一番北にあるのが一本杉といい、

一本杉、其次曰二本杉、扁云雙杉窩、西崖所書、其次曰石垣、扁云栖鳳樓、棕軒所書、其次曰延對寺、扁云鶉亭、山陽所書、其次曰中、扁云芭蕉樓、棕軒所書、又云芙蓉樓、内藤元鑑所書、又云致雨樓、青霞所書、其次曰阿箇、又称松代、其次曰小寺、扁云松月亭、西崖所書、其次曰論田、扁云魯梦亭、

松洲所書、其次曰西院、扁云西園、研斎所書、此數樓喚做下衢、服淳卿也、竹枝云、鏹次樓臺千保東、嬌紅婉緑笑春風、誰尋白嶽桃花路、無限歡娛滿此中、山本道斎竹枝云、治郎流去別離涙、結作川原滿堂霧、亦佳、故老動輙説絃樓往昔、也蠢扑、然服淳卿也竹枝云、時様鬢時様衣、齊趣新

大村直子　画

一本杉、其ノ次ニ曰ク、二本杉、扁ニ云フ雙杉窩、西崖ノ書スル所。其ノ次ニ曰ク石垣、扁ニ云フ、栖鳳樓、棕軒ノ書スル所。其ノ次ニ曰ク、延對寺、扁ニ云フ、鶉亭、山陽ノ書スル所。其ノ次ニ曰ク、中、扁ニ云フ、芭蕉樓、棕軒ノ書スル所、又芙蓉樓ト云フ、内藤元鑑ノ書スル所。又致雨樓ト云フ、青霞ノ書スル所、其ノ次ニ曰ク、阿箇、又松代トモ称ス、其ノ次ニ曰ク、小寺、扁ニ云フ、松月亭、西崖ノ書スル所、其ノ次ニ曰ク、論田、扁ニ云フ、魯梦亭、松洲ノ書スル所、其ノ次ニ曰ク、西院、扁ニ云フ、西園、研斎ノ書スル所、此ノ數樓ハ下衢ノ做リト喚ブ。

服淳卿ガ竹枝ニ云フ。

『樓臺ガ鏹次スル千保ノ東、嬌紅婉緑ニシテ春風ニ笑ム、誰カ桃花ノ路ノ台嶽ヲ尋ヌル、無限ノ歡娛此ノ中ニ満ツ。』

山本道斎ガ竹枝ニ云フ。

『治郎ガ麗シク去リ別離ノ涙ヲ、川原ニ結ビ作シ埜ニ霧ガ満ル、亦佳ナリ、故老ガ動輙絃樓ヲ説キ往昔ハ、蠢朴ト。』

然シテ服淳卿ガ竹杖ニ云フ。

『時様ノ鬢ト鬢ニ時様ノ衣、齊ニ新趣ニ乗ジテ芳菲ヲ踏ム、

その次ぎに二本杉、扁にいう雙杉窩で、西崖の書いた所。その次ぎに石垣で、扁にいう栖鳳樓で、棕軒の書いた所。その次が延對寺で、扁にいう鶉亭、山陽の書いた所。その次ぎに中、扁にいう芭蕉樓で棕軒の書いた所。また、芙蓉樓といい、内藤元鑑の書いた所。また、致雨樓といい、青霞の書いた所。その次ぎに阿箇、また、松代とも称す。その次ぎに小寺、扁にいう松月亭で西崖の書いた所。その次ぎに論田、扁にいう魚梦亭で松洲の書いた所。その次ぎに西院、扁にいう西園で、研斎の書いた所。これらの数樓は下衢のこしらえと呼ぶ。

服部淳卿が、竹枝に云う。

『千保川の東に魚の鱗のように高殿の樓が並んでいる。艶かしい女がなよなよとした衣装をまとって春風の中で微笑んでいる。誰が、この桃の花で彩られた路に居並ぶ樓を尋ねるのであろう。限りなく喜び楽しむ雰囲気が、この街に満ちあふれている。』

山本道斎が、竹枝に云う。

『人民を治める人が麗しく去っていって別れの涙が川原の地に結んで野に霧が満ちている。また、麗しい景色である。古老の人が、ややもすれば、即ち花街のことを話す度に、昔は飾り気なく粗末であったと。』

然して、服部淳卿が竹杖に云う。

『時の流行りの丸髷にもとどりを飾り、流行りの着物のいでたちで、物忌みに新たな晴れに乗じて花の盛りに花で美しく彩られた路を歩く、

瑞龍寺ノ裡ヨリ昏ノ鐘ガ早、桜ノ花ヲ折リ取ッテ月ヲ踏ンデ帰ル。」

此ノ詩ヲ以テ想像スルニ、其ノ風俗今時太ダ相遠ニシテ與ニセズ。不破氏、之レ邑ノ宰ニシテ、奢侈ヲ厳禁シ遂ニ狭斜ニ及ブ、且ツ曰ク、元来、瞽女ノ居ル所、故ニ瞽女街ト称シ、是レ其ノ能ク弾絃スルヲ以テナリ、今ハ瞽女ニ非ラズ、弾絃スルヲ得ズ。是ニ於イテ聲妓ヲ盡逐シ、諸ヲ其ノ里ニ反シ、而シテ別チテ生産ニ理メセシム、但シ西院一樓ニ、一瞽女アルハ此ノ例ニアラズ、不破氏去リテ後、樓毎ニ一瞽女ヲ蓄ス、聲妓ガ稍稍ニ復ス故ト云フ。

万延紀元春、広瀬旭荘、田代琴岳〔名ハ孝。字ハ子徳、棚田屋甚右衛門ト称ス〕ト與ニ芭蕉樓ニ登リ、一絶ヲ賦シテ云フ。

〔詩ハ略ス〕

後ニ富山ヨリ舎ニ客シ、琴岳ガ寄懐ニ云フ。

『旬ヲ連ネテ賓館ニ魚ノ無イ食、単ノ葛ニ汗有余ニ沾濡ス、芭蕉亭ノ裡ニ飲ミテ得ルヲ記ス、一庭新緑ニ初ノ袷衣。』

瑞龍寺の内から早くも夜の鐘の音が聞こえてくる。桜の花を折り取って月の影を踏んで家路につく。』

この詩を通して想像してみるに、その風俗は今時からみて甚だ遠い有り様で同じに考えることができない。不破氏が、この町の役人の長として贅沢な暮らしを厳禁し、それが花柳の街のことに及び、かつ、云うには、本来、瞽女がいるから瞽女街という。それは瞽女が三味線なりをよく引くからである。ところが今は瞽女というものでなく、三味線の引ける者とていない。このことから芸妓を追い払い尽くし、皆を里に返し、それぞれに生産につくよう治める。ただし西院一樓だけに、例外に一瞽女をおいた。ところが不破氏が去ると、樓毎に一瞽女を置くようになる。それは、芸妓が、また元のように徐々に増えはじめたからであるという。

万延元年（一八六〇）の春に、広瀬旭荘が田代琴岳〔名は孝といい、字は子徳、棚田屋甚右衛門と称す〕と共に芭蕉樓に登り、一絶を賦して云う。

『蕉葉陰陰動午風　群芳転眼忽成空
寒暄適體清和候　恰在春過未夏中』

その後に、富山より舎に客としてやって来た琴岳が「寄懐」に云う。

『十日毎に客の館に魚のない食事に、一重の葛で織ったかたびらが余りの暑さに汗が有り余りぬれ潤す。芭蕉亭の中で飲んで得たことを記す。ある日、庭が新緑で緑の初物の袷の着物を見るようであった。』

自注ニ云フ。琴岳兄閏三月ニ、芭蕉亭ニ邀飲ス。別レテ後、八十餘日。

上子心竹ノ丈池樓、服部氏ノ對宇ニ在ル。文政九年、高島雲溟〔名ハ時升、庄兵衛ト称ス〕来寓シ、咏雨ニ云フ。

〔詩ハ略ス〕

児玉旗山〔名ハ愼、字ハ士敬、三郎ト称ス〕来遊ス、予初メ此ノ樓デ遇フ、甲午（天保五年）重三有感ニ賦シテ云フ。

『五風十雨ニシテ九春ノ酣、天公ノ恩沢ノ覃ニ喜ビニ堪エズ、梅白桃紅ニシテ歳事ハ豊カ、菜黄麦緑ニシテ重三ヲ好ム。』

高島誠處〔名ハ興、字ハ凡民、庄兵衛ト称ス〕途中ニ云フ。

『春風ハ料峭ニシテ雨斜斜、一醉シテ葉舟デ水涯ヲ離レ、五十里村ニ三月近シ、梅ガ落チ雪ヲ踏ンデ君ノ家ニ到ル。』

後ニ心竹居ヲ谷内ニ移シ、丈池樓ヲ赤タ廃ス。

自ら注して云う。琴岳兄と閏三月に、芭蕉亭にて待ち受けて飲む、別れて後、八十余日。

服部氏の家の向いにある上子心竹の丈池樓に、文政九年（一八二六）に、高島雲溟〔名は時升といい、庄兵衛と称す〕が来て泊まり、咏雨に云う。

『渾為空情独鎖扉　更看石丈着新衣
絲絲暫與柳條掛　點點忽兼花片飛
雲幕寒來護巫女　淋鈴風送夢楊妃
甑窶春満膏將動　不用堯天千日晞』

児玉旗山〔名は愼といい、字は士敬、三郎と称す〕が来遊する。私は、初めにこの樓で出合う。天保五年（一八三四）に重三有感に賦して云う。

『五日に一度風が吹き、十日に一度雨が降る。（気候が至って順調な中）天帝の深い恵みに喜びに堪えず、春の九十日間酒を十分に飲んで楽しむ。梅と桃の紅白のように今年一年が豊かに、青物が黄で麦が緑でというように賽子の三のぞろめのようになにもかまが順調であることを好しとする。』

高島誠處〔名は興といい、字は凡民、庄兵衛と称す〕が、途中に云う。

『春の風が寒く雨風が強く斜めに横から降りつけている。一酔いして小舟で水際を離れたが、ここ五十里村にも三月の春が間もなく訪れるであろう、梅の花が落ち雪を踏んで君の家にやってきた。』

後に心竹が住まいを谷内に移し、丈池樓を、また、取り壊してしまった。

心竹天尺樓在于閑杜西、天保五年甲午夏林谷（名君潔字氷壺）画蘭云、明皇何太陋、唯知有牡丹。佳人逃幽谷、不近玉闌干。揮蘭于高岡、佳流千万里、秋風動清香。觀者奈其美、林谷洒落有仙骨。其後以鐵筆來游者、羽倉可亭（初名駿河守、初夏偶成云、花夢無痕緑四圍、羈中歳月早於飛、縱身何肯憶窮達、玩世不曾論是非、去意連留隨處計、感思雜慮與人違、蓬頭半白疎慵客、膩垢生光舊弊衣）、松陵（名璋）、青山六雄（名璋）、轟松居、皆以鐵筆來遊、六雄（一云霞舟）、詩云、己聞唖唖鴉、時渡潺潺水、鷄來識天明、猶貪殘睡美。

心竹ノ天尺樓ハ閑杜ノ西ニ在リ、天保五年甲午ノ夏、林谷（名ハ君潔、字ハ氷壺）画蘭ニ云フ。

『明皇ガ何ント（為）太陋、唯、牡丹ノ有ルヲ知ル、佳人ガ幽谷ニ逃レテ、玉ノ欄干ニ近ヅカズ、高岡ニ蘭ヲ揮イ、流レニ任セテ千万里、秋風ニ清キ香リガ動キ、観ル者ニ奈ンゾ其ノ美。』

林谷洒落ニシテ仙骨アリ。其ノ後鉄筆ヲ以テ来游スル者ニ羽倉可亭（初メ駿河守ト称シ、後ニ伊豫守ト称ス）初夏偶成ニ云フ。

（詩ハ略ス）

後□□松陵、青山六雄（名ハ璋）、轟松居、皆、鉄筆ヲ以テ来遊ス、六雄（一ニ霞舟ト号ス）詩ニ云フ。

『已ニ唖唖ト鴉ヲ聞キ、時ニ潺潺タル水ヲ橋デ渡リ、裏デ天明ヲ識スルガ、猶貪ニシテ睡美ガ残ル。』

心竹の天尺楼は高の宮の西にあり、天保五年（一八三四）の夏に、林谷（名は君潔といい、字は氷壺）が、「画蘭」に云う。

『身分の高い明皇が何と甚だ卑しく醜い、ただ美しい牡丹のあるのを知る。みめかたちのよい女性が奥深い谷に逃れ、立派な欄干に近づかない。高岡に蘭を揮って蘭を描き、流れに任せて千万里、秋風がやや清らかに香りを運ぶようで、観る者にとって、何と、その美しいことよ。』

林谷は、心がさっぱりしていて、並々ならぬ風采がある。その後、篆刻をもって来遊してきた者に、羽倉可亭（初め駿河守と称し、後に、伊予守と称す）があり、初夏偶成に云う。

『花梦無痕緑四圍　羈中歳月早於飛
縱身何肯憶窮達　玩世不曾論是非
去意連留隨處計　感思雜慮與人違
蓬頭半白疎慵客　膩垢生光舊弊衣』

後□□松陵、青山六雄（名は璋）、轟松居は、皆、篆刻をもって来遊する。六雄（一に霞舟と号す）が、詩に云う。

『既に鴉があ、と鳴くのを聞き、時にさらさらと流れる水を肩で担う輿で渡り、心の中で夜明けを知りながら、なお、貪るようにうとうとと眠りの中で美しい夢が残っている。』

邑中醫家、相會講究、醫事、謂之神農講、蓋祖正德年間、當時人、皆不可知、實爲年間所記、大方脉（本邦、本道）、津島元俊、内藤元俊、内藤元鑑、居村番町、桜井元安、小竹元綱、金子玄仙、居馬出、上田玄隣、上田玄政、關玄的、居馬出、大島玄騰、藤岡玄釣、生島玄單（中島、伊藤周哲、杉山休菴、息全慶、袋町、桜井元安、小竹元綱、小芝正仙、下川原、桜井元安、小竹元綱、小芝正仙、下川原、眼科、松田三知、息鍼隆、木舟町、鍼科、岡田玄達、馬出、關全順、息鍼隆、木舟町、眼科、松田三知、息鍼隆、木舟町、婦人科、佐渡養順、屋敷、櫻井玄安、婦人科、佐渡養順、屋敷、鍼科、岡田玄達、馬出、關全順、息鍼隆、木舟町、岡島玄隆、息順隆、下町、瘍科、長崎玄貞、息玄周、一番、藤岡玄釣、生島玄單、中島、伊藤周哲、杉山休菴、息全慶、袋、大久保壽澤、小竹元綱、小芝正仙、下川原、桜井元安、婦人科、佐渡養順、屋敷、櫻井玄安、婦人科、佐渡養順、屋敷、小竹元綱、小芝正仙、下川原、中條三達、口齒科、大門屋次兵衛、

邑中ノ医家、相會シテ医事ヲ講ズ。之ヲ神農講ト謂フ、蓋シ正徳年間ニ始マル。其ノ人評ラカニスベカラズ、宝暦年間ニ記ス所、大方脉（本邦、本道ト称ス）津島元俊、内藤元鑑（利屋街ニ居ル、明和二年ニ婚儀ニ赤飯ヲ配ル、覚エニ之レヲ記ス、以下之レニ倣ウ）瀧元綱、金子元仙（御馬出ニ居ル）、上田玄隣（横街ニ住ス）。

兼テ瘍科（本邦、外科ト称ス）玄隣ノ子ノ玄政、關玄的（御馬出ニ住ス）、大島玄騰、藤岡玄釣、生島玄單（中島ニ住ス）、伊藤周哲、杉山休菴、息ノ全慶（袋街ニ住ス）、大久保壽澤、小竹元綱、小芝正仙（下川原ニ住ス）、桜井元安。

婦人科、佐渡養順（利屋街ニ住ス）。

眼科、松田三知、息ノ鍼隆（木舟街ニ住ス）。

鍼科、岡田玄達（御馬出ニ住ス）、關全順（木舟街ニ住ス）、岡島玄隆、息ノ順隆（坂下街ニ住ス）。

瘍科、長崎玄貞、息ノ玄周（一番街ニ住ス）、津島右膳、大島玄叔（一番街ニ住ス）、藤岡玄正（片原街ニ住ス）。

案摩ハ嶋長育（木舟街ニ住ス）、中條三達。

口齒科、大門屋次兵衛、

町中の医者が、互いに集まって医事を講習する。これを「神農講」という。けだし正徳年間に始まる。それに加わった人達を詳らかすることができない。それで宝暦年間に記されたものによると、

大方脉（わが国では、本道と称す）（漢方医の用語では内科のことをいう）は、津島元俊、内藤元鑑（利屋町に居る。明和二年に婚儀に赤飯を配る。覚えに記しておく、以下、これに倣う）、瀧元綱、金子元仙（御馬出に居る）、上田玄隣（横町に住す）である。

兼て瘍科（できもの）（わが国では、外科と称す）は、玄隣の子の玄政、関玄的（御馬出に住す）、大島玄騰、藤岡玄釣、生島玄単（中島に住す）、伊藤周哲、杉山休菴、その息子の全慶（袋町に住す）、大久保壽澤、小竹元綱、小芝正仙（下川原に住す）、桜井元安である。

婦人科は、佐渡養順（利屋町に住す）である。

眼科は、松田三知、その息子の鍼隆（木舟町に住す）である。

鍼科は、岡田玄達（御馬出に住す）、関全順（木舟町に住す）、岡島玄隆、その息子の順隆（坂下町に住す）である。

瘍科は、長崎玄貞、その息子の玄周（一番町に住す）、津島右膳、大島玄叔（一番町に住す）、藤岡玄正（片原町に住す）である。

案摩は、嶋長育（木舟町に住す）、中條三達である。

口齒科は、大門屋次兵衛、

次兵衛、八十島屋安右衛門、岩見屋四郎右衛門、玄的、玄漢、玄的作玄迪、此會廢絶シテ三十年、文化十二年乙亥、先考再興之、時會者、長崎玄庭、松田三知、金子玄僊、澤田早雲、栗田柔齋、上原貞純、内藤貞儒、小竹玄透、岡田元達、佐渡養順、岡田元達、及先君、長崎蓬洲、一絶云、宜帆齋主取牛耳、絶會盟十二仙、論古驗今、濟世業、相期長勿破斯筵、松田三知、李安山詩云、神農講會獻酬航、八十年來同社盟、飲食日奢終廢絶、慎旃酒澤肉林榮、文政四年、(災也)復此會復絶、天保十一年

松田三知　画「春藻錦機」

庚子、余與長崎浩齋、松田丁梦相謀復興之、十二月八日、上原迂齋、高峯玄臺、土肥恭藏、津島玄碩、金甲、長崎應禎、内藤貞儒、松田三知、金子恕謙、上子元城、栗田太逸、栗田作磨、小竹修三、澤田龍岱、共會予宅、是時雖有佐渡養順辭以他故不會、時高峯梧門賦云、大少又軒岐、尊崇古世師、漢和雖異域、今古豈殊規、精意依誰至、臨機自欺、折衷同志士、庭有大成期、從此而後、連綿不絶、惜哉今復廢、英後來有志者、庭復興之、予(時年)事聊存餞、羊之意云、

高岡詩話卷三

八十島屋安右衛門、岩見屋四郎右衛門。

明和二年ニ記ス所ニ玄鑑ヲ玄漢ト作シ、玄的ヲ玄迪ト作ス。此ノ會廢絶シテ三十年頃ウ、文化十二年乙亥二、先考ガ之レヲ再興ス。時ニ會スル者、長崎玄庭〔時ニ年五十一〕、松田三知〔時ニ年四十七〕、金子玄僊〔時ニ年四十三〕、澤田早雲〔時ニ年三十八〕、栗田柔齋〔時ニ年三十七〕、上原貞純〔時ニ年三十七〕、内藤貞儒〔時ニ年三十五〕、小竹玄透〔時ニ年三十六〕、岡田元達〔時ニ年三十四〕、佐渡養順〔時ニ年二十一〕、及ビ先君〔時ニ年三十八〕。

長崎蓬洲、一絶ヲ賦シテ云フ。

『宜シク、齋主帆ヲシテ牛耳ヲ取リ、絶会ヲ繼ギテ十二仙ガ盟シ、古驗ヲ論ジテ今期ヲ濟世セム、相期シテ長ク斯ノ筵ヲ破ル勿レ。』

松田〔救〕李安山詩ニ云フ。

〔詩ハ略ス〕

文政四年ノ災後、此ノ會、複タ絶ユ。天保十一年庚子ニ、

八十島屋安右衛門、岩見屋四郎右衛門である。

明和二年に記されたものでは、玄鑑を玄漢とし、玄的を玄迪としている。この会が廃絶されて三十年の空白となったが、文化十二年に、亡き父がこれを再興する。その時に集まる者は、長崎玄庭（時に五十一歳）、松田三知（四十七歳）、金子玄僊（四十三歳）、沢田早雲（三十八歳）、栗田柔斎（三十七歳）、上原貞純（三十七歳）、内藤貞儒（三十五歳）、小竹玄透（三十六歳）、岡田元達（三十四歳）、佐渡養順（二十一歳）、及び私の父（三十八歳）である。

長崎蓬洲が、一絶を賦して云う。

『宜しいことに、結社を司るに相応しい頭ともいうべき人が、立ち上げるべく帆を掲げて仲間の頭となる。長らく途絶えていた会を引き継いで、この度、十二人の高尚な人々が集まって契りを固める。昔からの研究された試みについて論じ合い、今日の弊害を取り除き人々の苦しみを救いたい。共々に契りを固めて、この筵ともいうべき結社を、これからも長く破綻させないようにしていきたい。』

松田救、李安山が詩に云う。

『神農講會獻酬航　八十年來同社盟
飲食日奢終廢絶　慎旃酒澤肉林榮』

文政四年（一八二一）の火災後に、この会が、また絶えることになる。天保十一年（一八四〇）に、

余、長崎浩齋ト與ニ、松田丁梦ト相謀リ、復タ之ヲ興ス。十二月八日、上原迂齋〔時ニ年六十二〕、高峯玄臺〔時ニ年四十七〕、土肥恭蔵〔時ニ年四十六〕、津島玄碩〔時ニ年四十二〕、松田三知〔時ニ年三十九〕、内藤貞儒〔時ニ年三十六〕、金子恕謙〔時ニ年三十四〕、上子元城〔時ニ年十八〕、澤田龍岱〔時ニ年十五〕、栗田太逸〔時ニ年二十九〕、栗田作磨〔時ニ年二十五〕、小竹修三〔時ニ年十三〕共ニ予ノ宅ニ會ス。是ノ時佐渡養順ガ他ノ故ヲ以テ辞シ會セズ。時ニ高峯梧門賦シテ云フ。

『大小又軒岐ヲ万世ノ師ト崇メ尊ビ、和漢ガ異域ト雖モ、古今ニ豈ンゾ殊ニ規、精意ヲモッテ誰モガ依ル筧キ、臨機ニ自ラニ欺ヲモッテ誰モガ欺ク、折衷同志士ヲ折ッテ、応ニ大成ノ有ク勿レ、同志士肱ヲ期スベシ。』

此レ従リ後、連綿トシテ絶エズ、惜シイ哉、今複タ廃ス。後ニ來タル有志、應ニ複タ之ヲ興スベク、予、特ニ之ヲ表ニ、聊カ飲羊（生贄の羊）ノ意ノ存スルヲ云フ。

高岡詩話巻之三

私が長崎浩斎と共に松田丁梦と互いに謀り、また、この会を興す。十二月八日に上原迂斎（時に六十二歳）、高峯玄臺（四十七歳）、土肥恭蔵（四十六歳）、津島玄碩（四十二歳）、松田三知（三十九歳）、内藤貞儒（三十六歳）、金子恕謙（三十四歳）、上子元城（三十四歳）、栗田太逸（二十九歳）、栗田作磨（二十五歳）、小竹修三（十八歳）、沢田龍岱（十三歳）が、共に私の家に集まる。この時、佐渡養順が他に事情があり、断りを入れて出席せず。時に高峯梧門が賦して云う。

『医家の大小を問わず共に医学の祖である軒岐を万世の師と崇め尊び、（軒岐とは、軒は黄帝軒轅氏で、岐は、岐伯のことで、ともに中国の伝説上の医学の祖である。だから軒岐の二人を医学の祖として万世の師として崇め尊ぶというのである。）和漢が互いに国違いのことと雖も昔も今も何と格別の定めである。混じりけのない心でもって誰もが従うべきである。その場に臨んで自ら欺くことがあってはならない。同志の人々が力を合わせて、まさに大きな成功を果たすべく目指そう。』

これより後、連綿と続いてきたが、惜しいことに、今また絶えてしまった。後に続く有志の者が、まさに復たこれを興すべく、私は聊か、その存念を披瀝するものである。

高岡詩話巻之三

高岡詩話 巻之三

【読み下し文中の語句説明】

(1) 春暄　春の終わり、晩春のこと。
(2) 虚誕　根拠のない可笑しな話。
(3) 陵夷　だんだん衰え廃れること。
(4) 閭巷　町中、村里のこと。
(5) 経始　工事がはじまること。
(6) 戸席簾燈器什器　戸、敷物、燭台、什器物のこと。
(7) 枕席　寝床のこと。
(8) 茆家　茅葺きの質素な家。
(9) 雙垂シテ涙ス　二つの眼から涙を流して泣くこと。
(10) 姑舎　一時しのぎの家のこと。
(11) 妥貼　穏やか、詩文の穏当な場合のこと。
(12) 金衣公子　鶯の別名である。唐の玄宗が黄色の鶯を、こう呼んだ故事からウグイスの雅号となる。
(13) 綺筵　美しい筵、つまり、美しい居心地のこと。
(14) 蕃茂　盛んに茂ること。
(15) 纏繞　巻きつくようにまといついていること。
(16) 紫茸　紫に茂ること。
(17) 満畹　畑に満ること。
(18) 汗血　名馬のこと。
(19) 玉勒　玉をちりばめた美しい轡。
(20) 旗亭　酒屋のこと。
(21) 駘蕩　にわかな暖かさのこと。
(22) 聴允　許可、許しのこと。
(23) 衲僧　僧、お坊さんのこと。
(24) 荷花　蓮の花のこと。
(25) 極目　見渡すかぎり。
(26) 突兀　山などの高く聳えるさま。
(27) 旗旌　大小の旗のこと。
(28) 横槊者　ほこを横たえて持つ者。
(29) 蟾宮　月、月世界のこと。
(30) 婀娜　頗かたちの美しくあでやかなさま。
(31) 里許　一里ばかり。
(32) 蘇仙　蘇軾のこと。蘇軾とは、中国の宋の時代の文豪で「風流文物が蘇仙に属す」とあり、風流文物をともに愛したということである。
(33) 瞥女街　三味線ひきのいる街。
(34) 撞木　鉦を叩く丁子形の鋼。
(35) 鱗次　魚のうろこのように続いて並んでいること。
(36) 嫣紅婉緑　艶かしい紅色に美しく淑やかな緑色。
(37) 粋朴　荒々しく飾り気のないこと。
(38) 狹斜　花柳の街。
(39) 聲妓　芸者のこと。
(40) 沾濡　濡れ潤うこと。
(41) 邀飲　まちうけて飲む。
(42) 五風十雨九春酣　五日に一度の風が吹き、十日に一度の雨が降ることで、天候が至極順調なことをいい、九春は九十日春光の略で春の穏やかな光が九十日の三ヵ月であることをいい、天の恵みに感謝して酒を楽しんで飲むということである。
(43) 料峭　春の風が寒いことの形容。
(44) 太陋　甚だしく醜いこと。
(45) 瀟瀟　水のさらさら流れるさま、雨の降るさま。
(46) 大方脈　漢方医の用語で内科のこと。
(47) 瘍科の瘍　できもののこと。
(48) 牛耳　仲間の頭のこと。

【現代語訳文中の内容説明】

(一) 分霞橋　千保川の中島に架かる橋、中島橋を分霞橋と詠んだということである。当時の千保川は中島を挟んで流れが二分していた。
(二) 無影井　今の片原町の超願寺横の無影坂に無影井があり、その傍らに孝子六兵衛の顕彰碑が建っている。
(三) 動地　孝子六兵衛の渾名で六兵衛の母親がお酒が好きで飲むと大きな声で喚きたてるので動地と渾名された。
(四) 山本渓山の「入越日記」　山本渓山は、高岡から京都へでた山本封山（中郎、有香）の孫で、嘉永四年に祖父の故郷の高岡を訪ねて祖父の生家の日下家に逗留し、高岡の文人達と交遊し、詩話にも記すように能登の福浦などをめぐっている。
(五) 広瀬旭荘　江戸時代末期の漢詩人。名は謙といい、豊後日田の人、広瀬淡窓の弟である。
(六) 青雲館　御旅屋が取り壊された後、その遺材で曜書亭を造り、寛延元年（一七四八）の頃まで、文人墨客が優賞するところであった。
(七) 三州志　富田景周の著作による「越登賀三州志」（古墨考）のことである。
(八) 桜馬場　桜馬場のことである。埒とは、馬場の周囲の囲いのことである。
(九) 臥鱗墓　前田利長公の墓所のことである。
(一〇) 寛平ノ遺事、今ニ至ルマデ伝ウ　ここでの寛平は平安時代の年号の寛平（八八九～八九七）を指し、ここでの遺事とは、菅原道真が「九月十三夜」の詩を詠んだことを指すものと思われる。それで津田半村が、ここで九月十三夜に古城賞月の詩を詠んだのである。だから、今に至るまでとなり、それが寛平年間から数えて九百年の清秋とも辻褄が合うこととなる。
(一一) 新渡　千保川に架けられた横田小橋のことである。中島橋を大橋と呼んでいた。また、高岡詩話とは別に、津島北渓による「英遠紀行」がある。木街から舟で伏木に向かう件で、吉久の桃林について、次のように記している。
「先ズ吉久ノ桃林ヲ探ネント欲シ、乃チ舟夫ニ問フ。舟夫曰ク『桃樹叢ニハ数百株、近年江流ノ為ニ嚙ラレ、今、存スル所、数株ニ過ギズ』ト。已ニシテ遙カニ之レヲ望ムニ、花方ニ盛ンニ開ク。然レドモ、僅々七、八株。往キテ観ルニ足ラズ云々」とある。
(一二) 神農講　高岡には宝暦年間以降、名医といわれる医者が多くいた。それが長崎家、佐渡家、金子家、松田家、津島家、高峰家、山本家、内藤家などである。神農とは、火を司る神の炎天が火の徳で王になったという神農氏が百草をなめて薬草をつくったという。このことから医薬の神に祀られる。それで神農講と名付けられたものである。

(49) 軒岐　軒は黄帝軒轅氏、岐は岐伯のことで、共に中国の伝説上の医学の祖とされた。それで軒岐を医の万世の師と崇め尊ぶのである。

(50) 餼羊　生贄の羊のことで生々しいということである。

二　上　山「玉飛路ひ」

高岡詩話卷之四　　津嶋佶 北溪居士著

余竹馬之學友尤親者二人曰寺崎山窩（名文敬、字元吉、一号菩圃又号貞可、称三木屋源右衛門、曰山本翠溪（名奎、字仲章、道斎、山窩本姓川上、鶯宿（称中條屋作郎右衛門、作如第、為寺崎女青女壻、因冒其姓、其為人質直而好義、殊有氣慨、春雨云、楊柳含烟暗四隣、園花香散雨中春、可憐細細霏霏裡、李白桃紅幾作塵、初夏云、萬紫千紅已卿卿、池涵新綠畳清漣、窓前午睡醒來處、初聽松頭一箇蟬、出游云、林烟暮色翠烟含、隔水茅茨家幾三、耦語人歸斷橋畔、夕陽猶照落花潭、山行遇雨云、漠漠濛濛望已合、山中驚地雨紛紛、樵童取路不迷誤、是

高岡詩話卷之四　　北溪居士津島佶著

余ノ竹馬ノ友、尤モ親シキ者ニ二人アリ、曰ク寺崎山窩〔名ハ文敬、字ハ元吉、一ニ若圃ト号ス、又、三木屋源右衛門ト称ス〕、又、曰ク山本翠溪〔名ハ奎、字ハ仲章、道斎ト称ス〕。山窩ノ本姓ハ川上、鶯宿〔中條屋作郎右衛門ト称ス〕ノ弟ナリ、寺崎女青ノ女ノ婿ト為ル、因リテ其ノ姓ヲ冒ス、其ノ人ト為リハ質直ニシ而義ヲ好ミ、殊ニ気慨アリ、春雨ニ云フ。

『楊柳烟ヲ含ミテ四隣暗シ、園ニ花香散リ雨中ノ春、可憐・細細・霏霏ヲ裡ニシテ、李白桃紅ノ幾ベテヲ塵ト作ス。』

初夏ニ云フ。

『萬紫千紅ガ已跡渺然タリ、池ニ新緑畳ミテ涵シ漣清シ、午睡カラ醒メテ窓前ニ来所シ、初メテ松頭ニ一箇ノ蟬ヲ聴ク。』

出游ニ云フ。

『林暮色ニ烱シ翠舎ヲ烟シ、隔水ニシテ茅茨ノ家両三アリ、耦スル人語リ帰リ橋畔ニテ断シ、夕陽猶ヲ照リテ花潭ニ落ツ。』

山行遇雨ニ云フ。

『漠漠濛濛トスルヲ区分シテ望ム、山中ノ驚地ニ雨シ絵ト紛レル、樵童ガ路ヲ取ッテ迷誤無シ、

高岡詩話卷之四　　北溪居士津島佶著

私の幼い時からの竹馬の友として最も親しい者がいる。その一人が寺崎山窩〔名は文敬といい、字は元吉。また若圃と号し、三木屋源右衛門と称した〕、いま一人は山本翠溪〔名は奎といい、字は仲章、道斎と称す〕である。

山窩の本姓は川上で、川上鶯宿〔中条屋作郎右衛門と称す〕の弟である。寺崎女青の娘の婿となる。それで寺崎の姓を名乗ることになる。その人柄は素直で何事にも一途で、正義感があり、殊に気骨のある人であった。

「春雨」に云う。

『緑の柳に霧が煙るように辺り一面が暗くなり、庭には春の雨にうたれて花の香りが散っている。それを眺めながら、心の内では、優美で愛らしいさまが微かなさまに変わり、さらには雨や雪がはらはらと降るさまになったりと変化し、やがて桃李の紅白も、いつしか総てが塵となって消えてゆく。』

「初夏」に云う。

『春の八千種の花が散った後に、水面が広々と果てしなく広がっている。池には新緑が折り重なるように、その影をひたしている。午睡から醒めて窓の前に来てみると、今年初めての一匹の蝉が松頭に鳴いている。』

「出游」に云う。

『林が暮れかかる夕日に輝き、屋敷が緑に煙っている。遠く水を隔てて茅葺きの家が両三軒が見え、語りながら帰って来た人の連れが、橋の畔で別れていく。夕日が、なお、照りながら水辺の花に影を映して落ちてゆく。』

「山行遇雨」に云う。

『遠く遙かなさまが雨や霧で薄暗くぼんやりと霞んでいるので一つ一つの界を仕切って望む。山の中にたちまち雨が降って辺りの景色が水墨の絵と紛れるほどにぼんやりしている。そんな中、樵の童が道案内するが、道に迷って誤ることがない。

平生慣踏雲。
山本道斎幼而頴悟、人称賀蒙好歴史学、邇栗殼嶺云、栗殼山中雨始晴。山色氷光一般清。老牛飽飼松陰臥。不獨人間遇太平。是幼年之作、栗水[illegible]才可見矣。道斎之於彦助為玄孫、蓋血脈之所傳也。遺稿一巻逸見方舟[illegible]之所採錄。

くりから「多萬比ろひ」

案山子、歌云案山子。汝形何所似。頭載菅笠身蒲蓑。手持竹弓手弟矢。伶仃炎暑烈日間。孑孑荒烟寒雨裏。一生守人田。可憐案山子。案山子。汝生何所比。居無屋廬坐無茵。暑無繊蓋寒無被。竟日在田無人饋。形容憔悴羸如鬼。猶畏鳥雀嚴其防。禦護未粗。一生代人苦。可憐案山子。案山子。汝葉何所浪。秋禾穰穰滿滿溝。夏菓纍纍蓋篚匡。豐稔有兆由汝力。蕃殖能成稼穡美。却怪功名終不成。笠破蓑敗身已斃。朔風滿壁霜露降。殘骸遺棄同馬蘭。薄命終無尺土封。累功積勲徒為耳。一生無人賞。可憐案山子。案山子。遽々然而起。啞然而笑向我曰。吾子之言皆不是。大哉天地化育恩。造物猶是不帰己。刈吾蓋圃小勲労。復賞爵禄豈可企。天使百司各執職。擇才任能有定規。上自宰輔下胥吏。尊卑等異分賢否。吾此微躬世所棄。天与鄙職奏薄技。一蓑一笠亦天恩。吾守天分遵天理。行藏顯晦固由時。吾復誰咎復誰毀。若扶小恩恩小德。吾於天地多所恥。喜噫案

是レ平生ヨリ雲踏ミテ慣レ知ル。』
山本道斎ハ幼ニシテ頴悟、人ハ賀蒙ト称ス、歴史学ヲ好ム、栗殼嶺ヲ過ギテ云フ。
『栗殼山中ニ雨始メ晴レ、水光山色ニシテ一般ニ清シ、老牛飽シテ松陰ニ向キテ臥シ、独リモ人間ニ遇ワズ太平ナリ。』
是レ幼年ノ作、才藻見ルベシ、道斎、之レ彦助ノ玄孫ト為ス、蓋シ血脈ノ傳フル所ナリ、遺稿一巻逸見方舟ノ撰録スル所、案山子ノ歌ニ云フ。
『案山子、汝ハ何所ノ形ニ似ル、頭ニ菅笠ヲ載セ身ニハ蒲蓑ヲ、手ニハ竹弓ヲ持チ弟矢ヲ與フ、伶仃ニ烈日ノ炎暉スル間ニ、荒烟ナル寒雨ノ裏ニ孑孑スル、一生人ノ田ヲ守ル、可憐ナル案山子、
案山子、汝ハ何所比リ生レル、居スル屋盧モ無ク坐スル茵モ無シ、暑ニ繊蓋モ無ク寒ニ被モ無シ、竟日、田ニ在ッテ人饋モ無ク、形容ガ憔悴シテ羸ニ鬼ノ如シ、猶ヲモ鳥雀ヲ嚇シテ鶉雀ニ與フ、厳メシク其ノ防禦デ未粗ヲ護ル、一生人ノ労ニ代ル、可憐ナル案山子、

平生から雲の上を踏んで慣れ親しみ知り尽くしているからである。」
山本道斎は、幼い時から才能に優れて賢く、人々が知識の袋とまでいっていた。歴史学を好みとしていた。
「栗殼嶺を過ぎて」に云う。
『俱利加羅山の峠に始めに雨が降っていたが、いつしか晴れて、水の光が山の景色に溶け込んで全体が清らかである。年老いた牛が、十分に食べて松の樹影に臥せっている。峠では、誰独り遇う人もなく、この兵者どもの跡も、今は穏やかな景色である。』
これは、幼年の時の作で、この作からも文章の才能が豊かなことが見えるでしょう。道斎は、山本彦助のやしゃ孫、つまり孫の孫で、その血脈を伝えている。逸見方舟が撰録した遺稿が一巻あり、その中に、
「案山子の歌」に云う。
『案山子さん、お前は何の形に似ているの。頭に菅の笠を載せ、身には蒲の蓑を着て、手には竹の弓に茅の矢を持たされて、独りぼっちで、烈しく照りつける暑さの中でも、荒れ果てる寒い雨の中でも、独りたたずみ、一生、人の田を守る可愛そうな案山子さん。
案山子さん、お前は何処から生まれてきたの。住む住まいもなく、座る敷物もない、暑さにも笠もなく、寒さに着るものとてなく、終日、田んぼにいて食事することもない、顔形がやつれて鬼のように肌をぬき、それでも鳥のように鳥や雀を脅しかけて、厳めしく防ぎ田んぼの稲を守って、一生、人に代わって働く、かわいそうな案山子さん。

案山子、汝ハ何所ニ葉ヲ族ツ
秋ノ禾ハ穰穰ト溝漑ニ満チ、復タ菓ハ纍纍ト篚匡ニ盈ル、豊稔ノ兆シ汝ノ力ニ由リテ有リ蕃殖ニシテ能ク稼穡ノ美ヲ成ス、却ッテ功名ノ終ニ成ラザルヲ怪シム、笠破レ蓑敗レ身已ニ斃レテ朔風ガ壁ニ満チ霜露ガ降リ、残骸ガ馬蘭ト同ジク遺棄サレル薄命ニシテ終ニ尺土ノ封ヲ無ク、功ヲ累シ勲ヲ積メドモ徒ニ為スノミ。一生人ノ賞無ク、可憐ナル案山子、
案山子、遽々然トシ而起キテ、唖然トスル我ニ向カイ而笑ミテ曰ク、
吾子ノ言ハ皆不是ナリ、大ナル哉、天地ハ育恩ト化シ、造物ハ猶ヲ是レ已ニ帰ラズ、矧ンヤ
吾ハ最モ賜リ小勲ノ労、褒賞爵禄ヲ豈ンゾ企テル可キヤ、天使ニヨリ百司ハ各職ヲ執リ、才ヲ擇ビテ任ズル能キ定規有リ、上ハ宰輔自リ下ハ胥卒マデ、尊卑等シク異分スルハ賢否ナリ、吾ハ此ノ微躬ニシテ世ヲ棄テタル所、天ハ鄙職ヲ與エ薄技ヲ奏ス、一蓑一笠トテ亦タ天ノ恩、吾ハ天分ヲ守リ、天理ニ遵ズ、行蔵シテノ顯晦ハ固ク由ノ時、吾ハ復タ誰ヲモ咎メズ誰ヲモ毀サズ、若シ小恩ヲ挾ンデ小徳ヲ思スレバ、吾ハ天地ニ於イテ耻ル所多シ。

案山子さん、お前は何を葉として待っているの。秋には稲が豊かに稔って、田畑の間の溝にまで満ち、果物が箱に重なり合って満ち、この豊かな稔りの兆しは、お前の力により、よく茂り豊かな収穫を稼ぎなすが、感うことなく、功名を遂げ、遂には我がものともしない、蓑笠破れすたれて身は既に倒れ、北風が野に満ちて霜露下りて、案山子の残骸が捨てられ、馬の敷物同様となる。薄命にして遂には僅かの土地も与えられず、功勲を積み重ねても下僕で終わるだけである。一生、人から褒めもされず、可愛そうな案山子さん。
案山子が、にわかに起き上がり、驚き呆れて口もきけない私に向かって笑って云う。
「私は、あなたのおっしゃること、すべてを認めないよ。」なんと偉大なこと哉。
天地の恵みによって育み生じた造物は、既にもとへは帰らない。まして私の如き小さく而も僅かの手柄をたてた骨折りに、褒めて位や俸給など、どうして企てることなどできよう。天は諸々の役割について、それぞれに応じて職に就かせ、才を選び能力に任せるなど一定のきまりのもとに行っている。それを上は大臣から下は小役人までを貴い、卑しいなどと、差別だとするのは利口なことではない。私はこの卑賤な身ではあるが、世を棄てることで、天から御での職を与えられ、取るに足らない技を成し遂げている。この一蓑一笠もまた天からの恵みであり、私はこの天から与えられた才能を守り、天地自然の道理に遵うだけである。選んで道を行うように顕すか、それとも退き隠れて才能を表さないように晦ますかは、もとより時による。私が、また、誰かを咎め、また、誰かを誹り、若しも僅かの恩の代償に僅かでも利得を願うことがあれば、それこそ私は天地に多くを恥じることになる。

山子。斯言汝似有道士。紙鳶歌云紙鳶挾長風。飄然飛且沖。直到青雲上。軒軒薄蒼穹。金眼光烱烱。碧羽響瓏瓏。勢欺九皐鶴。心比千里鴻。無人擬金丸。誰復設樊籠。揚揚而自得。跋扈大虛中。烏鴉雖爭食。鴆雀不同叢。志滿意太驕。自謂百鳥雄。豈思僥倖福。勢與浮雲同。朝來狂風如箭筈。紙鳶拯蕩難自持。茫茫氣海無涯涘。顛覆狼狽任所之。此時所恃唯一縷。一縷之絲繫安危。須臾風怒絲忽斷。翻身飄墮郊之岐。楮翼筋骨裂且破。殘骸掛在夕陽枝。烏鴉來喙鳩雀笑。前榮後辱一瞬時。君不見世間恃權勢者。不知權勢危於絲。右二首錄示方舟。題其後云。辛亥樣月。偶作長歌二篇。以遣雨中之悶。書水塘西舟中。

「俳諧　画譜百類集」

嘻噫案山子、斯ク言フ汝ハ有道ノ子ニ似ル。」

紙鳶ヲ歌イテ云フ。

〔詩ハ略ス〕

君ニハ見エズ、世間ノ権ヲ恃ミ勢ヲ怙ム者、権勢ノ絲ノ危ウキヲ知ラズ、右ノ二首、方舟ニ示シテ録ス、題シテ其ノ後ニ云フ、辛亥（嘉永四年）樣月、偶ニ長歌二篇ヲ作リ、

ああ、案山子さん、このように云うお前は道義を修めた君子にも似ているよ。」

「紙鳶の歌」に云う。

『紙鳶扶長風　飄然飛且沖　直到青雲上
軒軒薄蒼穹　金眼光烱烱　碧羽響瓏瓏
勢欺九皐鶴　心比千里鴻　無人擬金丸
誰復設樊籠　揚揚而自得　跋扈大虛中
烏鴉雖争食　鴆雀不同叢　志滿意太驕
自謂百鳥雄　豈思僥倖福　勢與浮雲同
朝来狂風如箭筈　紙鳶拯蕩難自持
茫茫気海無崖涘　顛覆狼狽任所之
此時所恃唯一縷　一縷之絲繫安危
須臾風怒絲忽断　翻身飄墮郊之岐
楮翼筋骨裂且破　残骸掛在夕陽枝
烏鴉来喙鳩雀笑　前栄後辱一瞬時』

君には分からないかも知れないが、世間の人々は権勢におもねているが、本来、権勢に繋がる糸は脆く弱いものであることに気づいていない。上の二首は、方舟の目の前で記したものである。作り終わってその後に云う。嘉永四年樣月に、たまたまに長歌二篇を、雨の降る中での気晴らしと一時の戯れに作ったもので、

載、遺稿所遺新雪簡方舟云、夜来折竹壓柴開。曉見前溪雪一灣。恍想曾游湖畔路。夕陽寒鶴比良山。病窓知是不堪閑。索莫詩思溢且慳。何藥須教噬臂爽。繁烟濃翠一籃山。山窩長於余一年。道斎少於余一年。雖趣向不同。情義殆如兄弟。道斎嘗

以テ雨中ノ悶ニ遣ワス、固ヨリ一時ノ戯レニテ而シテ有意ニアラズシテ作ルナリ、兄、其ノ興ニ比シテ多ノ語トヲ為ルヲ以テ誤ルヲ恐レル。而シテ風刺ノ意モ含ム、故ニ告ゲルヤ。

中田嘉平〔瀬水ト号ス〕ニ贈リテ云フ。

〔詩ハ略ス〕

皆佳シ。

遺稿ヲ新雪簡ニ載セテ方舟ガ云フ。

『夜来ニ竹ヲ折リ柴関ヲ壓ス、暁ニ前渓ヲ見ル ニ雪一湾タリ、曾テ湖畔ノ路ニ游ブヲ恍想スル、夕陽ニ寒ク鶴スル比良山。』

方舟ガ臥病ト聞ク、草花一籃ヲ送リ、詩ヲ副エテ云フ。

『病窓ヲ知ッテ是レ閑ニ堪ラレズ、索莫ニシテ詩思ガ渋ク且ツ慳ム、何ゾ薬ヲ須教シテ噬骨ノ爽ヤカヲ、柴ガ濃翠ニ烟ッテ一籃ノ山。』

山窩ハ余ニ一年ヲ長ジ、道斎ハ余ニ一年少シ、趣向同ジカラズト雖モ、情義ハ殆ド兄弟ノ如シ、

もとより有意があって作ったものではない。兄が、多くの語句を駆使して作詩するので、誤りが生じないかと恐れる。それでいて風刺の意も含まれている。その故を告げて、中田嘉平（瀬水と号す）に贈りて云う。

『呉歌越曲新詩巻　蜑雨蠻炬舊夢魂
紗鶴天連三越路　勾呉雨送九州秋
行按地図尋古蹟　汎投名刺訪時賢
擔上策書無處試　樓間刀剣有時鳴』

皆、宜しい。

遺稿を新雪の簡に載せて方舟が云う。

『昨夜から柴の門を押しつぶし、竹を折るように雪が降っていた。朝を迎えて渓の辺りを見ると、雪に埋もれた入り江を見るようである。かつて、湖畔の路を遊んだ光景がほのかに思い返される。夕陽をうけて寒々とした霧に霞む比良山である。』

方舟が病の床に臥すと聞く、草と薬草の一籠を送り、それに詩を副えて云う。

『病に臥せっていることを知って、堪える間もなく、物悲しく詩を作る思いも滞り、かつしみったれてくる。何とかよい薬を、すべからく教えて身体を爽やかにしたいものである。柴が濃い緑に煙って、ひと籠の山のようである。』

山窩は、私より一歳上で、道斎は一歳下である。二人の趣味や趣向は同じでないけれども、よしみは全く兄弟のようであった。

殘、余哭之云、往年喪元吉、若失吾左手、今又喪仲章、若失吾右手、噫、昊天不慭、奪吾左右手。

堀田松籟、嘯次、初小竹玄透、無子、養松籟為子、既而有二子、因之厭松籟、松籟乃去、結廬于伏木、[illegible]、道[illegible]隆、為人溫厚、好吟[illegible]、又能倭歌、惜哉已成異物、今掘窓底得一紙、和

余舟中聽蟲云、鼓吹蟲聲秋一川、水風清冷月中天、醉來舟裡曲肱卧、雨岸聽過管與絃、和北湖詩作云、避暑山溪裡清陰、松下留、苔深苔冒石、雲散月登樓、茶鼎評新水、詩囊收早秋、幽花畏折去、蓼岸繫輕舟、服部有年、[illegible]、卓帷不羈、沉毅而有究才、善書畫、能詩、嘗[illegible]、

「俳諧　画譜百類集」

道斎歿シ、余之ヲ哭シテ云フ。

『往年ニ元吉ヲ喪シ、吾左手ヲ失ウガ若シ、今又仲章ヲ喪シ、吾右手ヲ失ウガ若シ、嗚、天ハ昊ヲ慭レミズ、吾ガ左右ノ手ヲ奪ウ。』

堀田松籟（太順ト称ス）初メ小竹玄透ニ子無ク、松籟ヲ養イ子ト為ス。既ニシテ二子アリ、之レニ因リテ松籟ヲ厭ウ。松籟乃チ去リ、伏木ニ廬ヲ結ビ、醫家ヲ業トシテ道ヲ漸ク隆ス。人ト為リハ溫厚ニシテ、詩ヲ好ミ、又倭歌ヲ能ス。惜シキ哉、已ニ異物ト成ル。今簏底ヲ掘ツテ一紙ヲ得ル。余ノ舟中ノ聽蟲ニ和シテ云フ。

『蟲声秋ノ一川ニ鼓吹シ、水風清冷ニシテ中天ニ月、舟砕來シテ曲ニ肱臥ス、両岸ニ管絃ノ過ギテ與フルヲ聽ク。』

北湖ノ作ニ和シテ云フ。

『山渓ノ裡ニ避暑シ、松陰ノ松下ニ留メ、苔深苔ニシテ石ヲ冒ス、雲散リ登樓ニ月、茶鼎ニ新水ヲ評シ、詩囊ニ早秋ヲ収ム、幽花畏ノ折去シ、蓼岸ニ軽舟ヲ繫グ。』

服部有年（天野屋外與次ト称ス）卓帷ニシテ不羈（非凡）、沈毅ニシテ宏才アリ、書ヲ善クシ、詩ヲ能クス。

その道斎が亡くなり、私は、それを泣き悲しみて云う。

『過ぎし年に、親しき友の元吉（寺崎山窩）が逝き、恰も私の左手を失うようなものであった。今、また、仲章（山本道斎）を泉下に送ることになり、私の右手を失うことになる。ああ、天は憐れみを愛うることもなく、私から左右の手を奪ってゆく。』

堀田松籟（太順と称す）、初め小竹玄透に子供が無いので、松籟を養って子とした。その後に、二人の子供ができて、そのために松籟を嫌い遠ざけるようになった。それで松籟が、この家を去り、伏木に粗末な住まいをもち、医者を業として漸くその道で身を立てた。人柄は温厚で、詩を好み、和歌もよく詠んだ。惜しいことに既に亡くなってしまった。今、箱の底から取り出した一枚の紙を得る。それに、私の舟中の虫を聴くに和して次のように云う。

『蟲が川の辺で頻りに鳴いている。風が水面を清く涼しげに揺らし中天に月がかかる。波頭を砕きながら進む舟の中で、奏でる曲を肘を枕に臥して聴く、両岸にまで管弦の音色が遠く広がり流れてゆく。』

北湖の作に和して云う。

『暑さを避けて山渓の内に入り、清らかな松の木陰の下に足を留めてみると、苔が深くはびこって石にも取りついている。雲間から洩れる月を楼に登ってみる。お茶の味がまさに新鮮な水だとほめて、詩の下書きを初秋に取って袋に収め、奥ゆかしく咲いた花を蓼のあたりで折って持ち帰り、草が長く伸びた岸に舟を繋ぐ。』

服部有年（天野屋外與次と称す）は、卓帷にして非凡であり、落ち着いていて意思がしっかりして豊かな才の持ちまである。書も許もよくした。

詩稿散佚後、今未詳在他日收錄、

有年弟、清水梅顏（名冕、字天民、横屋藤右衛門、）素順而敏才、好吟哦、惜哉、暫天不假年、扶江晚泊云、沙禽拍拍夕陽收、眺望維舟古渡頭、潮漫江洲如月上、水光雲影盡鄉愁、江軒云、一帶江流雲色開、清風洗暑氣佳哉、晚望好有添詩興、點點螢光入坐來、晚歩云、夕照斜斜落、前村未掩關、風吹蟬酔薄、露冷覺衣單、林樹籠烟浸、布帆截浪還、不妨歸路遠、山外月彎彎、海樓望月云、風收洲渚中、帆懸過雁聲、聲破暮烟、好是海樓清賞處、浸心月湧水連天、山本道斎評云、首首平穏恬雅、如君之為人、楊子云、書者心画也、今讀此詩、可謂詩亦心畫也、

「医事漫録」清水梅顔　著

詩稿ガ散佚シ、他日ヲ俟チ収録セム。

有年ノ弟、清水梅顔（名ハ冕、字ハ天民、横屋藤右衛門ト称ス）従順ニシテ而オアリ、吟哦ヲ好ム、惜シイ哉、天年ヲ假サズ。

秋江ガ晩泊シテ云フ。

『沙禽拍拍トシテ夕日ニ収マル、維舟シテ古渡頭ヲ眺望シ、潮月上ヲ知リテ江州ニ没ス、水光ノ雲ノ陰ニ郷愁ヲ尽クス。』

江軒云フ。

『一帶ノ江流ニ霽色開キ、清風暑気ヲ洗イ佳哉、晩ニ好有ヲ望ミ詩興ヲ添エル、点点タル蛍光坐来ニ入ル。』

晩歩云フ。

『夕照斜斜トシテ落チ、前村未ダ関ヲ掩ズ、風吹キ酔薄ヲ嫌フ、露冷ヲ衣単ニ覚ユ、林樹烟ニ籠リテ没シ、布帆浪ヲ截シテ還ル、帰路ヲ妨ゲズシテ遠シ、山外ニ月彎彎タリ。』

海樓望月ニ云フ。

『風洲ニ収マリ渚ニ片帆懸カリ、雁声声ト暮烟ヲ破リテ過ギ、是ノ海樓ヲ好ミテ清賞スル處、波心ニ月ガ湧キ水天ニ連ナル。』

山本道斎、評シテ云フ、首首平穏ニシテ恬雅ナリ。君ノ人ト為リノ如シ、揚子ニ云フ、書ハ心ヲ画クナリ。今此ノ詩ヲ読ムニ、詩モ亦タ心ヲ畫クト謂フベキナリ。

詩の稿が散逸しているので、後日をもって収録したい。

有年の弟の清水梅顔（名は冕といい、字は天民、横屋藤右衛門と称す）は、素直で逆らわないが才があり、詩を吟ずることを好んだが、惜しいことに亡くなってしまう。

秋江の晩泊に云う。

『浜の水鳥がばたばたと羽を打ってタ陽の中に収まっている。舟を繋ぐ昔からの渡し場の辺りの眺望では、月の上るのを知っているかのように川州の潮が引いていき、その水の光が雲の陰に揺らめき故郷を恋い慕うしみじみとした心へと満たす。』

江軒に云う

『雨が止んであたり一帯の川の流れが晴れ渡ってくる。清らかな風が暑気をしずめて美しい際りである。晩になってより好ましい思いに誘われて詩興が湧いてくる。暗がりに点々と蛍の光が舞い、座敷の中まで彷徨ってくる。』

晩歩に云う。

『夕陽が照り輝いて斜めに釣瓶落としに沈んでいく。前の村では未だ出入りの門を閉ざしていない。風が吹いて酔い覚めを嫌い、一重の着物に露を帯びた冷やかさを覚える。林の木々が霧に籠もったように沈んでいる。帆かけ舟が波をきって帰ってゆく、帰路を妨げるものもなく遠く広がっている、山を遠ざけて弓張りの月が明るく照っている。』

海樓望月に云う

『風が浦に収まって穏やかな中に渚に片帆の舟が懸かっている。日も暮れかかって、煙るような景色の靄を破るように雁が鳴きながら飛び過ぎてゆく。ここ、海の楼は清々しく賞遊するにはこの上もない處である。波心が月を誘い、海が遠く天にまで広々と連なっているようである。』

山本道斎が、評していう。「つ一つが納得できる。穏やかで静かな雅びがあり、彼の人柄そのものである。楊子が云うに、書は心を描くものとある。今、この詩を読むと、詩もまた心を描くと云うべきである。

曾以金蘭印譜、為衣上彩、同作納涼
袷、泛舟於射水川、樂酒賦詩、或命打
魚、獲鮮撃膾、實一時之盛會也、顧而
慎之、恍若夢寐、僅指二十餘年、時同
遊者十三人、為河原柳亭、山本道斎、
寺崎山窩、服部有年、小竹松籟、川上
管根（又号軒風、号又弘）、笹原北湖、氏家慎斎（名之弘、字士毅）、
（杜閑屋八左衛門）、田代琴岳、及小川北峯（奥）

余其二人、曾志之、而今存者、北湖慎
斎琴岳與余四人而已、
河原柳亭喜晴云、江上有山山正静、
江心無路路分明、晴波八萬四千頃、
鷗與扁舟暮回盟、鳥影度寒塘云、
従醉夢認玄裳、江上斜陽踪跡長、依
約繫船風浪曲、隨逢翅影度寒塘、早
春喜晴云、北地従来少此晴、江山和

曾て金蘭の印賦を以て、衣上二彩リヲ為ス。同ジク納涼ノ袷（一重）ヲ作ル。舟ヲ射水川ニ泛ベ、酒ヲ挙ゲ、詩ヲ賦シ、或イハ命ジテ魚ヲ打チ、鮮ヲ獲リ膾ヲ撃ツ。実ニ一時ノ盛会ナリ。顧ミ而之ヲ憶フニ、恍若ノ夢寐、指ヲ懐レバ、二十餘年。時ニ同ジク遊ブ者十三人、河原柳亭、山本道斎、寺崎山窩、服部有年、小竹松籟、川上管根（又、軒風ト号ス、軌斎ノ父）、笹原北湖、氏家慎斎（名ハ之弘、字ハ士毅、閑屋八左衛門ト称ス）、田代琴岳、小川北峯、及ビ余ト為ス。其ノ二人之レヲ忘ル。而シテ今ニ存スル者ハ北湖、慎斎、琴岳ト余ト與ニ四人ノミナリ。

河原柳亭、喜晴ニ云フ。
『江上ニ山山有リ正ニ静カ、江心ニ路路無ク分明、晴レテ波八万四千ノ頃、鷗ガ舳舟ト與ニ旧名ヲ尋ヌ。』
鳥影度寒塘ニ云フ。
『一縱ノ醉夢ニ玄裳ヲ認ム、江上ニ斜陽ガ踪跡長シ、船ヲ依約シテ繫ギ風浪ノ曲、偶ニ翅影ノ度スルニ逢ヒ楚寒シ。』
早春喜晴ニ云フ。
『北地従来此ノ晴少シ、江上ニ和気夙ニ分明、

昔て親しい友の印影を集めた賦をもって着物の彩りとし、今回は納涼の一重をつくり、舟を浮かべて、盃をあげ、詩を賦し、或いは、命じて魚の網を打ち、新鮮な魚を獲り、その場でさばいて、実に一時、盛り上がる集いであった。これを顧みて思うに、柔らかくうっとり夢を見るようである。指を折ってみると、二十余年の時が流れている。その時に一緒に遊ぶ者が十三人、河原柳亭、山本道斎、寺崎山窩、服部有年、小竹松籟、川上管根（また、軒風と号す、軌斎の父）、笹原北湖、氏家慎斎（名は之弘といい、字は士毅、閑屋八左衛門と称す）、田代琴岳、小川北峯、及び私であった。そのうち、二人は忘れる。今も達者にいるものは北湖、慎斎、琴岳と私の四人だけである。

河原柳亭、「喜晴」に云う
『川の向こうに山々が、まさに静かに連なり、中流の路々がほんやり霞んで見える。晴れ渡った川面には波が八万四千の歩幅を連ねるかのように広がり、鴎の舞い飛ぶ中を小舟に乗って古くからの名勝を尋ねる。』
「鳥影度寒塘」に云う
『独り欲しいままに酒に酔い夢に翡翠を見る。川面には夕陽が長く足跡を映している。舟を繋いでいると、辺りに波風が微かに曲を奏でているようである。たまたま、鳥が飛んで渡ってゆく姿に出逢うと川の土手の辺りが寒々と感じられる。』
「早春喜晴」に云う。
『北陸の地では、これまでもこんなに晴れる日は少ない。山や川にやわらかな気分が朝早くからはっきりとみえる。

片片殘雪。
氣夙分明白雲霸振消殘雪搖動東
風幾許情、柳亭之詩大率如是服南
郭解唐詩云、其妙在可解不可解之
間、予於柳亭之詩亦云爾、
笹原北湖、好讀書、求甚解、博涉群
籍、尤有見解、樹閑石云、従為桃李伴、
桃李幾時榮、縱是春風好、頑然不復
爭、初夏云、金爐烟盡日方長、滴架蕃
薇晒錦裳、深院無人晝琴寂、一簾涼
氣午風香、秋日即事云、爛晴天氣屬
深秋、紅蓼白蘆思出遊、而簡促來兩
般事、東隣採蓴北隣舟、
笹原翠處（名は孟省、字は子行、号は權之助、前人也男）、詩
極風韵、片原橋上云、雨洗殘炎夜氣
清、新涼殊覺葛衣輕、街頭人定水聲
靜、二十三橋秋月明、秋夜云、清宵霜

白雲片片ト残雪ニ横タワリ、東風揺動シテ
機ニ情ヲ許ス。』
服南郭ガ唐詩ヲ解クニ云フ、其ノ解クベキ不
可解ノ間ニ妙在リ、予、柳亭ノ詩ニ亦タ爾ト云
フ。
笹原北湖、読書ヲ好ミ、求メズ甚ダ解ク、博
ク群籍ニ渉リ、尤モ見解ヲ有ス。
樹間石ニ云フ。
〔詩ハ略ス〕
初夏ニ云フ。
『金爐ガ烟盡シ日方ニ長シ、薔薇滴架ニ錦裳
ヲ晒ス、深院ニ人無ク琴晝ニシテ寂、一簾
ニ冷気シテ午風ノ香リ。』
秋日即事ニ云フ。〔詩ハ略ス〕
笠原翠處〔名ハ孟省、字ハ子行、権之助ト称
ス〕前ノ人ノ男、詩ハ風韵ヲ極メル。
片原橋上ニ云フ。
『雨ガ残炎ヲ洗イ夜気清シ、新涼殊ニ葛衣ノ
軽キヲ覚ユ、街頭ニ人定マリ水声静カ、二
十三橋ニ秋月明ス。』
秋夜ニ即事ニ云フ。

白雲がきれぎれに残雪の山に横たわっている。東風が揺れ動くように吹いてくる兆しに情が緩んでくる。』
服部南郭が唐詩を解いて云う。その解くべき不可解さの間に妙があるのだ。私は、柳亭の詩について、また、然りという。
笠原北湖は、読書を好み、究めずともどんなことでも解きあかしてしまい、それでいて多くの書籍を広く読みあさり、しっかりした見解を身につけていた。
「樹間石」に云う。
『従為桃李伴　桃李幾時栄　縱是春風好
頑然不復争』
「初夏」に云う。
『太陽が燃え尽くすように日は、まさに長くなった。垣根の薔薇が錦のような裳すそをさらし、奥静かな寺には人の気配もなく、峰は絵のようにひっそりとしている。簾には冷気が、真昼の風に香っている。』
「秋日」に即事に云う。
『爛晴天気屬深秋　紅蓼白蘆思出遊
両簡促来両般事　東隣採蓴北隣舟』
笠原翠處（名は孟省といい、字は子行、権之助と称す）は、北湖の息子で、詩は風雅で高尚なものであった。
「片原橋上」に云う。
『雨が立秋を過ぎての暑さを洗い夜の空気が清らかである。この秋の初めの涼しさが、殊に葛の糸で織った帷子を軽やかに感じさせる。街の辺りに人が足を止めて水音が静かである。片原街の二十三橋に立つと明るい秋の月がでている。』
秋夜に云う。

氣肅。孤雁過寒皐。多思人猶坐。中天月色高。悼六雄贈其妻小波云、同行人不見。孑獨嘶何之。落木秋聲咽。孤墳夕露悲。愁過越水遠。到處信雷垂。

往事且休問。長流無盡時。

氏家慎齋（名孝、字子德、棚田屋甚右衛門、商人）ノ風流好事、雖在市人之部、絶無穢汙之意。有賣茶菴詩稿數卷。十六夜無月云、

鳥投林夜色侵。清談相對共啣杯。欄

詩情。彩霞段段天將曙。聞得新鶯第一聲。密雪望行人云、溪上模糊天未晴。閑排窓戸遣幽情。何人早要問梅信。撑笠沙蓑帶雪行。

田代琴岳（名孝、字子德、棚田屋甚右衛門、商人）ノ部、絶無穢汙之意。有賣茶菴詩稿數卷。十六夜無月云、

「俳諧　画譜百類集」

『清宵ニ霜気肅タリ、孤雁ガ過ギ寒皐ナリ、多思人猶坐シ、中天二月ノ色高シ。』

悼ミ六雄ノ其ノ妻ノ小波ニ贈リテ云フ、〔詩ハ略ス〕

氏家慎斎、人ト為リハ清楚ニシテ、士人（学問・修養を積んだ人）ノ風アリ、書ヲ善クシ、諷詠ヲ好ム、春暁ニ聞ク鶯ニ云フ。

『独リ簷前ニ立チ未ダ敢行セズ、眸ニ春色満チ総テ詩情、段段ニ霞彩リ天将ニ曙、新鶯ノ第一声ヲ聞得ス。』

密雪望行人ニ云フ。

『溪上模糊トシテ天未ダ晴レズ、閑ニ窓戸ヲ排シ幽情ヲ遣ス、何人モ早ニ梅信ヲ要問スル、笠蓑ヲ帯ビテ雪ヲ行ク。』

田代琴岳〔名ハ孝、字ハ子徳、棚田屋甚右衛門ト称ス〕風流事ヲ好ミ、市人（商人）ノ部ニ在ルト雖モ、絶エズ機巧（策略）ノ意無シ、売茶菴ノ詩稿数巻アリ。十六夜無月ニ云フ、〔詩ハ略ス〕

『清らかな宵に霜の気がおりて身がちぢまるようである。一羽の雁が過ぎて、いっそう寒さを呼ぶ。心に思いの多い人が、なお、庭に向かって坐している。中天に月が高く冴えわたっている。』

悼みて、六雄の妻の小波に贈りて云う。

『氏家慎斎、その人柄は、姿が清らかでさっぱりしていて、学問の修養を積んだ風貌がある。書にすぐれ、詩歌を諳じて歌うことを好みとした。』

春暁に聞く「鶯」に云う。

『独り何もしないで軒の前に立っていると、春の景色が瞳に満ちて全てが歌心を醸し、嘘のように霞が彩り、空はまさに曙となって明けようとしている。そのとき初の鶯の第一声がとどいてくる。』

「密雪望行人」に云う。

『谷の上がぼんやりとして空は未だ晴れず。しずかに窓の戸をおし開くと、奥深い思いが伝わってくる。誰もが、早々と梅の便りを問い求めてくるが、菅笠と蓑姿を着て雪の中をゆく。』

田代琴岳、〔名は孝といい、字は子徳、棚田屋甚右衛門と称す〕風流ごとを好み、商人の職にあるが、常に商人特有の計算高さなど全く持ち合わせていない人であった。売茶菴の詩稿が数巻あり、

「十六夜無月」に云う。

『潜むように鳥が林のねぐらに戻って夜景を催している。世俗を離れて風流を語る仲間共が杯を交わしている。』

頭思聽風吹面。一道浮雲掩月來。風竹如水聲云、數十琅玕遶一庭。万枝風動響玎玎。恰如流水過灘上。頓使詩人得意聽。雪天魚云、雪後初登市。活來自當庖。護人三尺喙。大口莫陀嘲。山夜聞鐘云、不知何處寺。鐘響度雲間。孤枕眠難得。月高落葉山。咏老妓云、對鏡無由飾。玉簪匆匆老色若

粗侵。山盟海誓已無跡。秋月春風猶管心。往事思來情自亂。叢芳零落夢難尋。空房寂莫没人識。多少離愁淚作霖。琴岳殊愛老妓、所以有此佳作也、

琴岳所藏趙子得好書李太白友人會稽詩。況著逍遥、眞可愛。但良宵宜且談。皓月未能寢。作良宵且宜談。皓

風竹水声ノ如シニ云フ。

『数十ノ琅玕ノ遶ル一庭ニ、万枝ガ風ニ動キ玎玎ト響ク、恰モ流水ノ如クニ灘上ヲ過ギル、頓ニ詩人ヲ使テ意ヲ得テ聴カシム。』

雪後初登市ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

山夜聞鐘ニ云フ。

『何処ノ寺トモ知ラズ、雲間ニ鐘ノ響ク度、孤リ枕ニ眠リ得難ク、月落葉ノ山ニ高シ。』

咏老妓ニ云フ。

『対鏡シテ由無シ二玉簪ヲ飾ル、匆匆ニ老色若相ヲ侵ス、山海盟誓セシガ已ニ跡無ク、秋月春風猶ヲ心ノ管、往事ノ情ヲ思来シテ自ラ乱レ、衆芳零落シテ梦尋ネ難ク、空房ニ寂寞トシテ人ノ没ヲ識ス、多少愁イヲ離レテ涙霖ヲ作ス。』

琴岳ガ趙子ノ書ヲ得テ所蔵スル所、李太白ガ友人ト宿ニ会スル詩。況ンヤ著ハ逍子勁ク可愛、有ルナリ。

琴岳ガ殊ニ老妓ヲ愛スル所以此ノ佳作ヲ以テ

『良宵宜シク旦ツ談ズベシ、皓月未ダ寝ル能ワズ、青ヲ戻シ作シ且ツ宜シク談ジ、皓月ニ誰モガ能ク寝ンヤ。』

俄に襴干の辺りに風が吹いてたかとみると雨の音がして一筋の浮雲がやって来て月を覆ってしまう。

『数十の竹を遶らす一つの庭に、すべての枝が風に大きく揺れて玉のような音を響かせている。恰も水が流れる如くに早瀬の上を過ぎてゆくようである。にわかに詩人をして意を得たりとばかりに、その音に耳を傾けさせる。』

「雪天魚」に云う。

『雪後初登市　沽来自当庖　護人三尺喙　大口莫陀嘲』

「山夜聞鐘」に云う。

『何処の寺からか分からないが、雲間に鐘の音が響いてくる度に、独り枕に眠りがたく、月が落葉しきりの山の上に高く冴えわたっている。』

咏老妓に云う。

『鏡に向かってたわいなく化粧して髪に玉の簪を飾る。忽ちにして老いの気配が消えて若々しい相に変身する。山海に誓う如く美を詩りとしてきたが、既に今は、その跡もなく、訪れる秋の月、春の風も今となれば心まかせである。昔の頃の艶かしい情を思い返すと自ずと心が乱れる。もろもろとあった芳しさも、今となれば枯れ萎んで、その夢すら尋ね難い。誰もいない部屋で独り寂しく物静かに人のほろびるを悟る。いくらかは愁いを遠ざけたとしても涙が長雨のように流れる。』

琴岳が、とりわけ老妓を愛する。そんなわけで、こんな佳作があるということだ。

琴岳が、趙子（趙孟頫か、中国に十三世紀の詩人、書画にも巧みであった）の書を得て所蔵していた。李白が友人と宿に会する次の詩である。況んや、趣が、すなわち強く愛らしい。

『こんなに素晴らしい夜は、清らかにかつ語り合うのがふさわしい。白く輝く月光のもと、まだとても寝る気にはなれないのだ。一晩中、清らかに語り合うのがふさわしい。白く輝く月光のもと、誰だって寝る気にはなれないよ。』

月誰能寢。
佐渡葆斎山邦、字達夫、一二山梁詩痴、養順ト為リハ温厚、博学ニシテ吟咏ス、其詩平淡ニシテ味アリ、信玄公ヲ陵ス云、四海海涌揚白波。群雄振剣斫蛟鼉。大弁小弁強制弱。虎吞狼嚥竟如何。武田起此紛亂際。騰裏超裏勇奮奮。精熟弓馬探厥精。孫呉兵法蔵以如。出軍信野破諸城。鈴若軽車下陀陀。後越殊有一敵手。屢角抗衡交干戈。鼓螺震地河中島。左右急撃奇功多。十有二年兵未解。麾下輜湊幾八千。欲向中原伸威力。引兵西征入三河。此時信長頗猛撞。猶且禮聘乞親和。惜哉一夜大星隕。陳営従是政令差。孺子不肖守遺謨。漫罷二酵窮殄誇。天日奚奚鬼哭。血涙化露滴草花。唯有軍法伝不朽。士民尚慄武田家。

佐渡葆斎〔名ハ邦、字ハ達夫、一ニ山梁詩痴ト号ス、養順ト称ス〕人ト為リハ温厚、博学ニシテ吟咏ス、其ノ詩ハ平淡ニシテ味アリ、信玄公〔分字ハ得陀〕ニ云フ。

『四海ガ海涌シテ白波ヲ揚ゲ、群雄ガ剣ヲ振リ蛟鼉ヲ斫ル、大ガ小ヲ并セ兮強ガ弱ヲ制ス、虎ガ狼ヲ呑噬シ竟ニ如何ニ、武田ガ此ノ紛乱ノ際ニ起コリ、騰裏ハ衆ヲ超エ勇奮奮タリ、弓馬ヲ精熟シ厥蹟ヲ探リ、孫呉ノ兵法ヲ加エ以テ蔵ミ、信野ニ出軍シテ諸城ヲ破ル、勢イ軽車ノ陀陀ヲ下トルガ若シ、後越ニ殊ニ一敵手有リ、屢、角杖干戈ヲ交シ、河中島ニ螺ヲ鼓シ地ヲ震ヒ、左右急撃シテ奇功多シ、十有二年兵ヲ未ダ解ズ、麾下ハ幾八千ヲ欲シ、兵ヲ引キテ西ノ三河ニ征入ス、ノ伸ヲ欲シ、此ノ時、信長頗ル権ヲ握ルニ、猶且ツ礼ヲ聘シテ親和ヲ乞フ、惜シイ哉、一夜ニシテ大星ガ隕ル、營ヲ陣ブレバ是レ従リ政令ニ差、孺子ニハ肖ナエズ遺誡ヲ守ル、漫ニ二襲ヲ罷シ窮矜ヲ誇ルガ、天日ガ寥寥トシテ、冥鬼ニ哭シ、

佐渡葆斎（名は邦といい、字は達夫、一に山梁詩痴と号す、養順と称す）は、人柄が温厚で博学であり、吟詠をよくした。彼の詩は平淡であるが味がある。「信玄公」（分字得陀）に云う。

「天下が、白波が湧きあがるように、どよめき騒ぎ、群雄が剣を振るい蛟や鼉を切り殺すように戦っていた。大きな者が小さな者をわがものとし、強い者が弱い者を制圧し、いかにも虎が狼を飲み込むように他国を奪いとっていた。それが、どうだ。このもつれ乱れる時に、武田氏が登場してきた。大胆な策略にすぐれ、それは、周りを超えて猛々しく強い者であった。弓や馬の扱きを十分にこなし、相手の弱点を探りあばき、加えて中国の孫呉の兵法でもって相手を翻弄し、信濃に出陣して諸城を蹴散らしていた。その勢いは、恰も軽い車が傾斜地を下るようなものであった。しかし、越後に殊に有力な競争相手がいた。しばしば、互いに武器を巧みに交えて戦い、川中島では、法螺貝を吹き鳴らし地面を震撼させて、互いに左右から不意に攻め合い、すぐれた手柄の多い戦いであった。そして互いに譲らず十二年余にわたって兵を解かず、大将の陣所には、君主を守る武人でいつも混み合っていた。それが、自ら国の中央部に進出して威力を伸ばそうと欲し、兵を引いて西の三河に攻め入らんとした。この時、織田信長が頗る力を蓄えていた。それなのに互いに戦わずして礼を尽くして相手を招き和睦をとった。惜しいではないか。一夜にして一大の星が落ちた。これ以後の陣営を陣べるに、政の裁きが一変する。小僧には、納得し難いことだが、如何にも二人が、君主に気にいられ、慎れみ極めたことを、みだりに誇りとしているが、お天道様が、寂しそうに無実の罪で亡くなった人の亡霊の泣き声を咎めておられる。

欠字セズ

大村直子　画

闘言江左近多事。偏喜寄身在北邊。佐葆斎評云、霰雪二字起後聯来妙。柊里曾仕福井侯。是時従侯在福井、結末故云爾。記夢云尊船墨船列尤橋。東海新闘互市場。轟耳磧声聞不怪。眩眼服彩視為常。煤新烟裏舟行駛。喇叭響中人影長。閑却腰間三尺劍。夜深枕上放奇光。佐葆斎評云、結

血涙ガ草花ノ露滴ト化シ、唯、軍法有リテ不朽ニ伝フ、士民ハ尚、武田家ヲ懼レル。』

坪井柊里〔名ハ良、字ハ信良、信良ト称ス〕葆斎ノ弟ナリ、性ハ謹慎ニシテ節概アリ、最モ西洋学ニ長ジ、今、大府ニ仕ウ、腦月無雪ニ云フ。

『是レ仁恩ハ遠ク天ニ達スルト為ス、霰雪ヲ看来スルガ権ヲ専ラニセズ、川ニ汎水無ク、鬼穏ニ眠リ、野ニ糧ノ遺リ有ルヲ雀ガ全ク食ス、一任ノ苔紙ノ如ク薄衣、何ゾ論ズル魚ノ腹痩連肩ヲ、江ノ左近ニ多事ヲ聞ヲシ、偏ニ北辺ニ身ヲ寄セテ在ルヲ喜ブ。』

佐葆斎ガ評シテ云フ、霰雪ノ二字、起ノ後聯ノ来ハ妙ナリ。柊里ハ曾テ福井侯ニ仕エ、是ノ時、侯ニ従イ福井ニ在ル、結末ニ故ニ爾ト云フ。記夢ニ云フ。

『魯船墨船ガ檣ヲ列シテ危シ、東海新ニ互イニ市場ヲ開キ、磧ノ声耳ニ轟クヲ不怪ト聞ク、眩眩スル服彩ノ視スルヲ常ト為シ、新烟ノ煤舟行ノ裏ニ駛セ、喇叭ノ響キノ中ニ人影長シ、閑却スル腰間ノ三尺ノ劍、夜深ク枕上ニ奇光ヲ放ツ。』

佐渡葆斎が評して云う。

これまでの血の涙が、草花の露の滴に代わり、ただ、戦の方法が長く伝えられ、朽ち果てることはないだろう。人々は、今なお、武田家のことを恐れている。」

坪井柊里（名は良といい、字は信良、信良と称す）は、佐渡葆斎の弟である。性格は、慎み深く真心があり、礼儀正しく何事にも屈しない強い意思をもっていた。特に西洋学に優れ、今は、幕府に仕えている。

「腦月（十二月）無雪」に云う。

「これ恩みは遠く天からの頂きものである。霰、雪を見にやってきたが、その気配もなく勝手に降らせることもできない。川には浮う水もなく、鳴が穏やかに眠っている。野には、わずかに穂のついた神が残っており、雀がそれをついばんでいる。苔は、さもあればあれとばかりに紙の如くに薄い衣のようである。どうして魚の腹が痩せ肩に連なるのかなどと論じている。川のわき近くで忙しそうに働きながら話すのを聞いて、偏に北辺のこの地にやって来たことを喜ぶ。」

佐渡葆斎が評して云う。第二句の霰雪の二字、起の句の後に続く来は妙である。柊里は、かつて福井の松平侯に仕え、この時、侯に従い福井にいる。結末に、故に然りと云う。

「記夢」に云う。

「ロシアやアメリカの大きな黒船が帆柱を連ねて次々にやってきて不安がらせている。東海の港が新しく開港し、海岸では騒ぎ立てる人々の声が轟き、それも不思議ではないと聞く。目も眩むような派手な服装の外国人がいつも見れるという。船の行く手の裏に薪の煤煙が早く流れるともいう。喇叭の響く中を兵士達の行列が長く続いている。なおざりにした腰に差す三尺の剣が、寝静まった枕元に奇しげな光を放っている。」

佐渡葆斎が評して云う。

来雪氣凜凜十二月十四日鵠雁一隻不堪感謝記喜云殊恩何幸及微臣況鵠巨鴻元絶倫翻可賜書將作筆肉堪養老好呈親節堅避熱追涼志生淡雲飛水宿身恍覺寒厨頓回暖光期早領一團春佐葆斎評云第三句眞蘭家韵事第四句家語所謂食美者思其親之意五六頗有寓意

建部琢斎（名横字士寧堅隆前人也）宇津木太一郎曾納為女婿其才學可知矣竹牖聽雨云小盧卜來未幾年比隣人物情相牽晨夕省老意始保生計悠悠付昊天草卉培養素偶然鬚鼠處處穿泥土蛛網狼籍又蝸涎一笑刀圭半閑却几辺唯有詩債纏十日未晴雲漠漠竹

オランダ語のアルファベット
清水梅顧 著

窓閉臥聽雨眠冬曉云簾起曉來寒意加紙窓猶暗聽啼鶏石爐灰盡三更火園樹看來六出花開落週時難下菊苦甘適口味中茶無端又憶阿兄事今日如何天一涯點燈會友云三五約來池上庵楊花半落緑毯毯一宵輕雨春蕭寂無數鳴蛙供話談初夏晚晴云連日亦雪雨未收窮簾一醉倚高樓無端雷電吁晴去洗盡吟腸萬斛愁阿波加春塘（名顥字士栗修造）前人也第四句栗而有穎才偶成云黑白輪蠃夢幾場人間局手談長傍觀荀會斯中趣別有乾坤了我狂辭修海樓望豁然風光一一入新篇就中尤愛浮鳴棄上下任波隨處眠

大村直子　画

結末ハ勇気凜凜タリ、十二月十四日、雁一隻ヲ賜ル、感謝ニ堪エズ、喜ビ記シテ云フ。

〔詩ハ略ス〕

佐葆斎評シテ云フ、第三句ハ眞ニ蘭家ノ韵ノ事、第四句ハ家ヲ語リテ謂フ所ノ美ヲ食（贅沢な食べ物）スルハ、其レ親ノ意ヲ思スル。五六ハ頗ル寓意アリ。

建部琢斎（名ハ横、字ハ士寧、堅隆ト称ス、）前ノ人ノ弟ナリ。宇津木太一郎曾テ納メテ女婿ト為ス。其ノ才学ヲ知ルベシ。竹牖聴雨ニ云フ。

〔詩ハ略ス〕

終わりは勇気が漲っている。十二月十四日に一羽の雁を贈ると、それに感謝して喜びて云う。

『殊恩何幸及微臣　況鵠巨鴻元絶倫
翻可臨書將作筆　肉堪養老好呈親
節堅避熱追涼志　生淡雲飛水宿身
恍覚寒厨頓回暖　先期早領一團春』

佐渡葆斎が評して云う。第三句は、羽で以て臨書の筆を作ると云っているが、ここでの臨書は、本当は蘭学家のオランダ語のことである。第四句は家のことをいい、所謂、贅沢な食事をすることで親の気持に思いをいたすのである。また、五、六句には頗る寓意が含まれているようである。

建部琢斎（名は横といい、字は士寧、堅隆と称す）は、坪井柊里の弟である。宇津木太一郎が家に迎えて娘の婿とした。学才は類なきものがある。「竹牖聴雨」に云う。

『小盧卜來未幾年　比隣人物情相牽
晨夕省老意始保　生計悠悠付昊天
草卉培養素偶然　鬚鼠處處穿泥土
蛛網狼籍又蝸涎　一笑刀圭半閑却
几辺唯有詩債纏　十日未晴雲漠漠
竹窓閉臥聴雨眠』

冬暁ニ云フ。

『懶ク暁ニ起キ寒來ニ意加ワル、紙窓猶ヲ暗ク鶏ノ鳴クヲ聴ク、石爐ニ灰盡キ三更ニ火、園樹看來スレバ六出花、籬ノ下ノ菊ガ時過ギテ開落ス、苦甘ヲ適ニ期ニ茶ヲ口中ニス、端無ク又阿兄ノ事ヲ憶フ、今日、如何ンゾ天ニ一涯。』

点燈会友ニ云フ。

『三五ニ約シテ池上ノ庵ニ来ル、楊花半落シ緑毯毯ニシテ、一宵ノ春ノ軽雨ニ蕭寂タリ、無数ノ蛙鳴キ供ニ談話ス。』

初夏晩晴ニ云フ。

『連日昏昏ト雨未ダ収ラズ、一醉シテ高樓ノ釣簾ニ倚ル、無端ニ雷電晴レヲ呼ビテ去ル、吟腸萬斛ノ愁イヲ洗イ盡クス。』

阿波加春塘〔名ハ顥、字ハ士栗、脩造ト称ス〕前ノ人ノ弟、恂栗ニシテ面才穎才アル。偶成ニ云フ。

〔詩ハ略ス〕

「冬暁」に云う。

『物憂げに暁に起きると、寒さが加わってひとしお寒さを覚える。障子は、なお暗く、鳥の鳴くのを聴く、囲炉裏の火が燃え尽きて午後十二時頃の火である。庭に来て見ると樹に雪が積もっている。垣根の下の菊が、時を過ぎて花が落ちている。適度の苦甘い茶を、まさに口に美味しく口にする。端なく、また、兄様のことを思い出し、今は、いかにせん、天に一人かぎりの身である。』

「点燈会友」に云う。

『十五日の満月の日に、つつまやかに池の上の庵に来る。柳の花が半ば落ちて緑が瑞々しく垂れている。今宵の軽い春の雨に静かでもの淋しい佇まいである。そこへ無数の蛙たちが鳴く中で、共に談話して過ごす。』

「初夏晩晴」に云う。

『連日、鬱陶しい暗い日がつづいて雨が未だ止まず降っている。高楼の釣り簾に倚るようにひと酔いする。端なくも、雷と稲妻が晴れを呼んで遠のいてゆき、吟ずる心やたまり沼まった諸々の愁いをすっかり洗い尽くしていったようである。』

阿波加春塘〔名は顥といい、字は士栗、脩造と称す〕は建部琢斎の弟である。その厳しさに人は恐れおののく位で優れた才能をもっていた。

「偶成」にいう。

『黒白輪蠃夢幾場　人間局局手談長
傍観荀会斯中趣　別有乾坤了我狂
醉倚海樓望豁然　風光一一入新篇
就中尤愛浮鳴棄　上下任波隨處眠』

佐渡緑窓（名ハ景行、立策ト称ス）前ノ人ノ弟、幼ニシテ詩オアリ、惜シイ哉天年ヲ假サズ、歿、時ニ僅カ十七。夏日即事ニ云フ。

「六月ハ炎天日正ニ長シ、門ヲ過ギレバ酷吏人ヲ使テ狂ワス、唯薄暮ヲ期シテ園林ノ下ニ、閑ニ清茶ヲ煮テ石牀ニ臥ス。」

雪中訪友人ニ云フ。

「短蓑ニ圓笠デ除除ニ歩ク、村ノ外ニ雪深ク人跡ガ疎、竹折レ斜斜トシテ路上ニ横ス、却ッテ林ノ下ヲ穿ッテ幽居ニ到ル。」

雪後訪友人ニ云フ。

「路ヲ曳キ新晴ヲ弄シテ吟歩スル、得得ト君ヲ尋ネ雪ヲ踏ミ行ク、竹ノ門前ニ修マッテ、何用ヲ問フ、除ニ茅屋ニ読書ノ声ヲ聞ク。」

乙卯元旦ニ云フ。

「鐘ノ声ニ残臘ヲ送リ、晴旭ガ新正ヲ鼓シ、外ノ竹梅ガ初笑イシ、林ノ邊ニ正ニ鶯ガ鳴ク、合家ガ皆壮健ニシテ、四国ガ総ジテ昇平ナリ、好ンデ椒花酒ヲ酌ミ、欣然トシテ世情ヲ遣ワス。」

是ノ歳、木ニ就ク、世情ノ本ヲ作リテ遣シ、俗情ヲ遣ス、乃チ兄ノ作ヲ改メテ世ニ遺シ、暗ニ詩識ト為スニ似タリ。

逸見方舟、性ハ慎密、面シテ書ヲ善クシ、最モ吟咏ヲ嗜ム、道斎曾テ云フ、

佐渡緑窓（名は景行といい、立策と称す）は阿波加春塘の弟である。幼い時から詩を作る才能があった。惜しいことに年僅かに十七歳でこの世を去る。「夏日即事」に云う。

六月は、日がかんかん照りつけて暑く、日も、まさに長い。一歩門の外に出れば、それこそ酷暑でもって人をして狂わせるようである。そこで夕暮れになると、きまって庭の林の下に出て、静かに茶を清らかに煮て石の床に横たわって涼むことにしている。

「雪中訪友人」に云う。

『短い蓑に円い笠をかぶってゆるゆると歩く、村の外には雪が深く、人の足跡も疎らである。路には竹が折れて斜めに傾いて通行を塞いでいる。路をさけて林を堀り開いて漸く幽居にたどりつく。』

「雪後訪友人」に云う。

『竹を杖に曳き、雨のあとの晴れた空を弄ぶように吟じながら歩き、わざわざ君を尋ねて雪の中を行く。竹の門の前について身をつくろって、何用かを告げる。茅葺きの家の中から静かに読書の声が聞こえてくる。』

「乙卯元旦」に云う。

『年越しの鐘の音によって十二月の残りを送る。晴れやかな朝日が、改まった年の始めを奮い励ます。外の竹や梅が初笑いをし、林の辺りで鶯が、まさに鳴き、家族が皆そろって元気で達者であり、四方の国々が、すべて太平である。新春のめでたい屠蘇の酒を好ましく酌み、悦んでこの世の趣の憂いなどを、すっかりと晴らす。』

この安政二年の歳に亡くなり、世のありさまを本に作って、世間の人情を書き遺す。これは兄の作に手を入れて遺したもので、それとなく未来に向けての予言の記録ともいえるものである。

逸見方舟の性格は、慎み深く何事にも手落ちがなく、書に優れ、最も吟詠を嗜む人であった。山本道斎が、かつて云うには、

佐渡緑窓（名緑窓、前人也）弟、幼而有詩才、惜哉天不假年、没時僅十七、夏日即事云、六月炎天日正長、過門酷吏使人狂、唯期薄暮園林下、閑煮清茶卧石牀、雪中訪友人云、短蓑圓笠歩徐徐、村外雪深人跡疎、折竹斜斜横路上、却穿林下到幽居、雪後訪友云、曳杖吟歩弄新晴、得得尋君踏雪行、修竹門前何用問、徐開茅屋讀書聲、乙卯元旦云、鐘聲送残臘、晴旭鼓新正、竹外梅初笑、林邊鶯正鳴、合家皆健壮、四国総昇平、好酌椒花酒、欣然遺世情、是歳就木、遺世情本作遺俗情、乃見改作遺世、似暗為詩識、逸見方舟（性慎密、而善書、最嗜吟咏、道斎曾云、我輩作詩以為酒資、方舟嗜詩以代酒、柳湾帰舟圖云、千株又萬株、楊柳水西東、蔭容碍暮月、沙清淡濛濛、欲乃一聲夕、舟移別浦風、依稀暮火影、影落水烟中、廣瀬旭荘評云、風神肖漁洋、秋館雨夜云、香銷茶冷情無人、一穂寒燈自可親、梧葉蕉心秋已老、従教夜雨滴殘筠、冬夜云、酒醒寒月落、四境夜沉沉、忽有山陰想、閉窓雪滿林、旭荘評云、曷古、邦人所無佳句、咏烟州云、将他湘竹一枝細、吹出巫雲幾朶多、又云、鐙燈野邊春試履、吹烟郭外晩憑鞍、題坪井柊里云、二越往還三日路、両回帰省十年心、題画云、楓葉繽紛撲蓬背、有人枯坐補漁簑、宮島如雲（名□□□□室屋次左衛門、温厚好

我輩ハ酒ヲ資ト為シテ詩ヲ作ル、方舟ハ酒ニ代ワリテ詩ヲ嗜ム、柳湾帰舟図ニ云フ。

『千株又万株ノ楊柳水ノ西東ニ、暮月碍シテ蔭容、沙清淡ニシテ濛濛タリ、乃チ夕ベノ一声ヲ歌ス、舟別浦ヘ風ニ移リ、篝火依稀ニシテ影、影水烟中ニ落チル。』

広瀬旭荘評シテ云フ、風神漁洋ニ肖ル。

秋館雨夜ニ云フ。

『香ノ銷茶無人ニシテ冷悄、一穂寒燈自ラニ親シム可キ、梧葉ノ蕉心秋已ニ老イ、従教ニ夜ノ雨滴殘筠ニ。』

冬夜ニ云フ。

『酒カラ醒メテ寒月落チ、四境ノ夜沈沈トシ、忽チ山陰ニ有ッテ想ヒ、窓ヲ開ケバ雪林ニ満ル。』

旭荘評シテ云フ、高古ナリ、邦人ノ佳句無キ所。

咏烟州ニ云フ。（以下、皆、詩ハ略ス）

又、云フ。

坪井柊里ニ贈リテ云フ。

画ニ題シテ云フ。

『楓葉繽紛撲蓬背　有人枯坐補漁簑』

宮島如雲（名□□□□室屋次左衛門ト称ス）（六字欠）温厚ニシテ詩ヲ好ム、

私はお酒の助けを借りて詩をつくるが、方舟はお酒の代わりに詩を嗜む方である。柳湾帰舟の図に云う。

『千株、また万株の柳が水に沿って東西に並んでいる。夕暮れの月が邪魔されて、恰も心の底を深く隠して見せないようにしているようである。砂の湾が淡く薄暗くぼんやりとしている。ああ、夕べの鳥の一声を喜ぶ。舟が風に乗って別の湊へ移ってゆく。ぼんやりとハッキリしない篝火の影が、水に落ちて水面に霧がかかったようである。』

広瀬旭荘が評して云う。風神が魚洋に写り見えるようである。

「秋館雨夜」に云う。

『香り高いとろけたお茶に、人は無く冷やかに悲しおれるようである。寒い中での一つの灯火が、自らに親しみを覚える。梧の葉が、心を寄立たせるように秋は已に終わろうとしている。教えられたとおりに夜の雨が竹林に滴を落としている。』

「冬夜」に云う。

『酒の酔いが醒めると、寒い夜の月が西に落ち、辺りの夜が更けて奥深く静かである。忽ち山陰にいて思いを抱き、窓を開けると林に雪が静かに積もっている。』

広瀬旭荘が評して云う。邦人的ではなく、漢語調で気高く古風な雅びがある。

「咏烟州」に云う。

『将他湘竹一枝細　吹出巫雲幾朶多』

また、云う。

『鐙燈野辺春試履　吹烟郭外晩憑鞍』

坪井柊里に贈りて云う。

『二越往還三日路　両回帰省十年心』

「画」に題して云う。

『楓葉繽紛撲蓬背　有人枯坐補漁簑』

宮島如雲（名は□□□□室屋次左衛門と称す）は、性格が温厚な人で、詩を好む。

詩能書畫善又妙鐵筆、曉行江上云、燈火誰家漏竹扉。曉行何厭露沾衣。江寒殘月猶浮水。如雪白鷗凝不飛。客去云、客去小齋眠未成。茶爐火燼沒由烹。時聞一板青頭雨。枕上歇無聊數滴聲。

高峰槐窓（名紳、字張書、元圭と称す）、屏江男、頗る才氣、精於究理學、今仕本藩。春江曉景云、微微殘月掛山頭。曉露模糊四顧幽。江上梅花猶未落。數聲橫笛起何樓。

弘化年間、娯分吟社、為雀斎、廬山、蓀斎、方舟、槐窓、逸斎、李斎、分斎、莎洲、及余、今逸斎莎洲、皆帰于泉下、槐窓廬山、倶移于金澤。

釋廬山（名周玄、字周民、称廬山寺、今称乘敬寺）、嚮落

書ヲ能クシ、畫善シ、又、鉄筆ニ妙。曉行江上ニ云フ。

『燈火誰ガ家カ竹扉ニ漏レ、曉ノ露ニ衣ノ沾ズルヲ何ラ厭ワズニ行ク、江寒ク殘月猶ヲ水ニ浮キ、白鷗雪ノ如ク飛バズ凝ル。』

客去リニ云フ。

『客去リ小斎眠未ダ成サズ、茶爐ノ火燼ノ由烹ヲ沒シ、時ニ青頭ニ雨ノ一板ヲ聞ク、枕ニ欹ト無聊ニ數滴ノ声。』

高峰槐窓（名ハ紳、字ハ張書、元圭ト称ス）ハ屏江ノ男、頗ル才気アリ、究理学ニ精ジ、今、本藩ニ仕エル。

春江曉景ニ云フ。

『微微ニ殘月山頭ニ掛リ、曉ノ露ガ模糊トシテ四顧幽タリ、江上ノ梅花猶ヲ未ダ落チズ、數声ノ横笛ガ何樓ニ起ル。』

弘化年間、娯分吟社ニ娯シム、雀斎、蓀斎、廬山、蓀斎、方舟、槐窓、逸斎、李斎、分斎、莎洲及ビ余トなス。今ハ逸斎、莎洲、皆、泉下ニ帰リ、槐窓、廬山ハ金沢ニ移ル。

釈廬山（名ハ周玄、字ハ周民、慶圓寺ト称ス、今ハ乗敬寺ト称ス）嚮落ニシテ奇才アリ。

書に優れ、画を善くし篆刻に妙技をもっている。

「曉行江上」に云う。

『誰の家か燈火が竹の扉から漏れている。夜明け前に露に着物が濡れるのも何ら厭わず外に出て歩いてゆく。川には寒々と殘月が未だその影を水面に浮かべている。白い鷗が雪かと見えるように寒さに飛びもせずに羽を寄せ合って固まっている。』

「客去」に云う。

「客が帰っても小生は未だ眠りにもつかず、お茶の炉の燃え殘り火の後始末をする。時に青葉の辺りに雨が、初めて板に打つのを聞く。床に就いて、耳をそばだてると、つれづれに数滴の雨の音が聞こえる。」

高峰槐窓（名は紳といい、字は張書、元圭と称す）高峰屏江の息子、頗る知恵の働きがよく、自然を対象に究める学問に通じていた。今は、加賀藩に仕えている。

「春江曉景」に云う。

「微かに殘月が山の頂に掛かっている。夜明け前の霧がうすぼんやりと辺り一面に覆い尽深く物静かである。水の上に梅の花が、なお未だ落ちずに咲いている。樓のどこからか横笛の音が数笛聞こえてくる。」

弘化年間には、娯分吟社に集まって楽しんだ。そこに集まった者は、雀斎、廬山、蓀斎、方舟、槐窓、逸斎、李斎、分斎、莎洲及び私であった。今は、逸斎、莎洲が、皆、亡くなってしまった。槐窓、廬山は共に金沢に移ってしまった。

釈廬山（名は周玄といい、字は周民、慶圓寺と称す、今は乗敬寺と称す）は、心が広く小事にこだわらず、優れた才知のある人である。

有奇才、俱利迦羅途中云、幾樹蟬聲風已秋。行程十里客情浮。輿窓聽雨眠方足。直向加州入越州。

松田逸斎（名質、良順、山本道斎ノ弟、丁梦無子、養逸斎為子、因屑松田氏、頗有才學、惜哉夭折、送諫山夕翠云、君曾來訪百花時、纔到秋風忽別離。日夜談都是夢、微吟無奈無聊遺蹟痕。往吟詩才思、身羈旅留遺蹟。獨吟行思。日宋數都是夢、往今文學奈無聊。

上江亭天將晚、一杯杯酒更遲遲。

福尾莎洲（井波屋太助、稍有詩才、能州云青青両岸幾重山。杜字聲中出海關。新月滄溟波不驚。篇舟晚泊甲村灣。雨後訪清足軒云、埜橋半板夕陽斜。驟雨洗炎涼氣加。藥草滿畦花正好。香風一路到君家。初夏即事云、半

「俳諧　画讃百類集」

俱利伽羅途中ニ云フ。

『幾樹ニ蟬ノ声、風已ニ秋、行程十里客ノ情ハ浮キ、輿窓ニ雨ヲ聴キテ眠リ方ニ足リテ、直ニ加州自リ越州ニ入ル。』

松田逸斎（名ハ質、良順ト称ス）山本道斎ノ弟、丁梦ニ子無ク、養イテ子ト為ス、因リテ松田氏ヲ冒ス、頗ル才学アル。惜シイ哉、夭折ス。諫山ヲ送リ夕翠ニ云フ。

『君曾テ百花ノ時ニ來訪ス、纔カニ秋風到リ忽チ別離、他日ノ都ノ笑談是レ梦、今ハ奈ンゾ師無ク文字ニ従ウ、孤身ニシテ万里ノ遺蹟ニ留マリ、瘦馬独吟シテ所思ヲ労ス、俱ニ上ル江亭ニ天将ニ晩、一杯ノ杯酒ヲ更ニ遅遅ト。』

福尾莎洲（井波屋太助ト称ス）詩差覚ルベキ、游能州ニ云フ。

『青青ト両岸ニ幾重モノ山、杜宇ノ声ガ中ニ海関ニ出ズ、新月ニシテ滄溟ニ波驚セズ、篇舟晩ニ甲村湾ニ泊ス。』

雨後訪清足軒ニ云フ。

『埜橋ノ半板ニ夕陽斜シ、驟雨炎ヲ洗イ涼気加ワル、薬草畦ニ満チ花正ニ好シ、香風一路ニシテ君ノ家ニ到ル。』

初夏即事ニ云フ。

「俱利迦羅途中」に云う。

『周りの木々から蝉の声がしきりにして風は已に秋である。道のり十里を越えてゆく旅人の情は軽やかである。輿籠の窓から雨の音を聞きながら眠り、正に満ち足りた思いである。ただそれだけで加賀の国から越中の国に入るのだから。』

松田逸斎（名は質といい、字は良順と称す）は山本道斎の弟で、松田丁梦に子が無かったので養って子とした。それで松田の姓を名乗ることになる。頗る才知と学問に優れていたが、惜しいことに若死にする。諫山を送り夕翠に云う。

『君は、かつて、沢山の花が咲いている時に訪れてきた。それがやっと、秋風が吹く時に到ったかと思うと別離の時を迎えている。いつか都で笑いながら話ったが、これも今となれば夢のようである。今は、どうしてか、導びかれる師もなく文字だけが頼りである。独り身で万里を越えて遺蹟をたずねて足を留め、私のような痩せ馬は独り詩を吟じて思いを慰めるだけである。連れと一緒に来た川の辺りの亭は、将にめぐりあわせの晩で、一杯の杯の酒を二人でちびりちびりと楽しむ。』

福尾莎洲（井波屋太助と称す）その詩のもつ品は観るべきものがある。「游能洲」に云う。

『両岸に青々と山が幾重にもたたなずみ、ホトトギスの声が通ったように海の関所に聞こえてくる。新月が空にかかって大海原には波も走らず穏やかである。小舟が夜に甲村湾に停泊している。』

「雨後訪清足軒」に云う。

『野橋の中央の板に夕陽が斜めに差している。にわか雨が暑さを洗い涼しげなさまを加える。薬草が畦に満ち、花もまさに好し。芳しい風がひたすら君の家の辺りに吹いてくる。』

「初夏」に即事に云う。

輪殘月落林西。翠靄模糊杜宇啼。昨夜山中桃李雨。紅波一道漲訶溪。
嘉永庚戌半健（浩斎老人別号）松軒、梅顛、東竹、入娛分社（松軒□□云）萬樹溪南梅。忽看一枝發。夜來衾枕寒。夢繞孤山月。梅顛詩稿數首。今又蒐遺偶於其胃、――題赤壁圖云。扁舟棹去載壺觴。是花當年古戰場。收拾江山風月美。一痕明月水茫茫。暮投山村云。雪滿山間小逕迂。寒窓岑寂夜燈孤。樵家閑話無塵趣。風味方佳芹一盂。佳句。秋夜云。一夜竹窓眠不得。琴音。砧響送月明時。又云。金風寂寂吹秋背。月和蟲聲到竹欄。天保辛丑人日。賣茶菴小集聯句。人日多風雪。琴音種松猶白頭。柳亭詩成各感慨。知言醉熟共優遊。北渓烘硯處。雀斎窓前月一鈎。起雲。栗田起雲（名文、太逸）。倜儻有氣概。以醫起家。嘗賦咏雖田詩為世所称。因自號起雲。詩地日當収錄。西方寺蓮滿嵐山花云。聞知某邊某地花。春光総屬此山花。勝於吉埜知何倍。影照清流水亦花。

『半輪ノ残月林ノ西ニ落チ、翠靄ガ模糊トシテ杜宇啼ク、昨夜ニ山中ノ桃李ニ雨シ、紅波ガ一道ノ前溪ニ漲ル。』

嘉永庚戌（三年）半ニ、健（浩斎老人ノ別号）、松軒、梅顛、東竹の面々が娛分社に入ってくる。松軒が□□ニ云フ。

『萬樹南海ノ溪、忽チ一枝ヲ発スルヲ看ル。夜来ニ衾枕寒ク、夢ニ孤リ山月ヲ繞ル。』

梅顛ノ詩已ニ数首ヲ録ス、今又、其ノ男ノ遺稿ヲ獲ル、赤壁ノ図ニ題シテ云フ。

『篇舟ニ壺觴ヲ載セ棹シテ去ル、此ノ是レ当年ニ古戰場、江山ガ風ヲ収拾シテ月美シ、一痕ノ明月水ニ茫茫タリ。』

暮投山村ニ云フ。

『雪山ニ満チ間ニ小逕ガ迂ス、窓ニ岑寒ク寂夜ニ燈孤リ、樵家ノ閑話ニ塵無キ趣、風味方ニ佳ナル芋ノ一盂。』

佳九ナリ、秋夜ニ云フ。又云フ。

『一夜竹窓ニ眠リ得ズ、寒ク砧ガ響キ明月ヲ送ル時。』

又云フ。

『金風ガ寂寂ト秋葉ニ吹キ、月ニ蟲声和シテ竹欄ニ到ル。

天保辛丑（十二年）人日、賣茶菴ニテ聯句ノ小集ス、人日ニ風雪多シ。琴岳、種松猶白頭、柳亭、

『弓張りの残月が西の林に落ち、緑色の靄がぼんやりとするなか不如帰が鳴く、昨夜は山中の桃李に雨が降り、色鮮やかに紅の波を揺らすように小道の前の溪に漲っている。』

嘉永三年（一八五〇）半に、健（浩斎老人の別号）、松軒、梅顛、東竹の面々が娛分社に入ってくる。松軒が□□に云う。

『沢山の樹木が南海の溪に密生し、忽ち風が吹いて一枝を芽すのを看る。夜が来て夜具と枕が寒く、夢に独り山にかかる月がめぐっている。』

梅顛の詩を既に数首を記す。いまだ、彼の息子の遺稿を入手する。小矢部川の「赤壁の図」に題して云う。

『小舟で酒の壺と盃を載せて棹して去る。ここはその昔に古戦場であった。山川が風を取りまとめて月が美しい。その明月の痕跡が水に映り、ぼうっとしてはっきりしない。』

「暮投山村」に云う。

『雪が山に満ち、隔てるように小道がまわり遠い。窓から見える峰は寒く、寂しい夜に燈火が一つ灯り、樵の家でのむだばなしには煩わしさがない趣である。御馳走はといえば、まさに、好みの芋の一鉢である。』

中々のよい句である。

「秋夜」に云う。

『ある夜に、寒そうに布を打つ砧の音が響いてくる中に月明かりが窓を照らし眠れないまま月を送って時を過ごす。』

また、云う。

『秋風が、寂しそうに木々に吹いている。空に照る月に和するように虫の声が聞こえ、竹の手摺りの辺りまでやって鳴いている。

天保十二年一月七日の七草粥の日に、売茶庵にて連句の者が集まった。この日は風雪が強かった。

ます、琴岳が、人日多風雪と吟じ、柳亭が、種松猶白頭と吟じ、

詩成各感慨、知言、酔熟共優遊、北渓、烘硯処、雀斎、窓前月一鈎、起雲。』

栗田起雲（名ハ文、太逸ト称シ、後ニ文機ト称ス）倜儻ナル気概アリ、医ヲ以テ家ヲ起ス、嘗テ龍詩ヲ賦咏シ、世ニ称スル所ト為ス、因リテ自ラ起雲ト号ス、詩ハ他日ニ當ニ収録スベシ。

西方寺蓮満嵐山花云ニ云フ。

『某辺某地ノ花ヲ聞却ニス、春光此ノ山ノ花ヲ総属シ、吉埜於勝レルコト何倍ナルヲ知ル、影ガ清流ニ照リ水亦タ花ナリ。』

天保甲午乙未（五、六年）ノ鳳鳴社ノ吟稿ヲ氏家愼斎ニ於イテ得ル、中ニ松籟、雀斎、三龍（一ニ葆斎ト号ス）、愼斎、山窩、有年、敬介、宗明、謙斎、南山、有峯、蘭窩、梅圃、由斎ノ作ル所ガ載ル。既ニ經テ著録スル者多ク居リ、今ハ前ニ遺ス所ヲ収ム。

服部冠斎（名ハ信、字ハ履吉、修道ト称ス）、秋日登古城ニ云フ。

『吟ニ会ス古城ノ万水ノ中、眼前ノ池水ノ色青葱、西風一陣偶得天保甲午乙未鳳鳴社吟稿於氏家愼斎中載松籟雀斎三龍（一号葆斎）、懐斎、山窩、有年、敬介、隆介、宗明、謙斎、南山、有峯、蘭窩、梅圃、由斎所作、松籟、雀斎、三龍、愼斎、山窩、有年、敬介、隆介、宗明、謙斎、南山、有峯、蘭窩、梅圃、由斎ノ作ル所ガ載ル。既ニ経テ著録スル者多ク居リ、今ハ前ニ遺ス所ヲ収ム。秋日登古城云、吟会古城万水中、眼前池水色青葱、西風一陣偶

知言が、詩成各感慨と次ぎ、北渓が、酔熟共優遊と続け、雀斎が、烘硯処と次ぎ、最後に起雲が、窓前月一鈎、と結んだ。

栗田起雲（名は文といい、太逸と称し、後に文機と称した）は、高く優れたものをもち加えて何事にも屈しない強い意思の人であった。医者として家を立てる。かつて龍詩を詠み、広く称賛された。それで自ら起雲と号した。彼の詩は、いつの日にか収録したい。

西方寺の蓮満が「嵐山花」に云う。

『某辺某地の花の見事なことをなおざりにしてきたが、春の景色が、この山の花のすべてを従えている。その素晴らしさは吉野の桜の何倍も優れていることを知る。花が清流にその影を映し、水面もまた花の景色である。』

天保五、六年の鳳鳴社の吟稿を氏家愼斎が入手する。その中に、松籟、雀斎、三龍（一に葆斎と号す）、愼斎、山窩、有年、敬介、宗明、謙斎、南山、有峰、蘭窩、梅圃、由斎の面々の作ったものが載っている。そのうち、既にかつて著録したものも多くあり、今回は、前に残したものを、ここに収めることとする。

服部冠斎（名は信といい、字は履吉、修道と称す）が、「終日登古城」に云う。

『お濠に水が浸々と湛える古城の中で詩を吟ずるために集まる。目の前の池の水が葱の葉のように青々としている。

回首、粟穀山頭夕日紅。秋夜不寐云
聞敲窓紙動愁情。下是雨聲是葉聲。
撫枕終宵眠不得。更更數盡到天明。
雪後出遊云、門外雪晴雲又收。醉中
乗興作閑遊。従歌一曲斜陽路。獨木
橋邊駭睡鷗。服部有年晩景即事云、
晩逃炎暑尋涼飆。三両吟朋到埜橋。
時有漁夫撃舟去。幾多螢火逐波飄。

大村直子　画

秋夜枕上云、夜雨蕭蕭燈火昏。芭蕉
葉上滴聲繁。閑眠一覚難難熟。晩下
階除歩小園。秋晩閑居云、門前幾株
櫪紛紛落葉深。白蘆半汀香黄菊滿
園金。窓下試新茗。松陰調玉琴。頃来
無客到。又見夕陽沉。秋夜不寐云、一
雨晴来夜氣清。詩魔惚我到殘更。風
吹古木琴聲細。月上書窓樹影明。遠

一陣ノ西風アリ倒ニ回首スレバ、栗殻山頭
ニ夕日紅。』
秋夜不寐ニ云フ。
『聞ニ窓紙ヲ敲キ愁情ヲ動カス、是レ雨声ニ
アラズシテ是レ葉声ナリ、枕ヲ撫デルガ終
宵眠リ得ズ、更更ニ数ヲ盡スガ天明ニ到
ル。』
雪後出遊ニ云フ。
『門外ニ雪晴レテ雲又収マル、醉中興ニ乗ジ
テ聞遊ヲ作ス、一曲ヲ斜陽路ニ放歌ス、独
リ木橋ノ辺ニ鷗ノ眠ヲ駭ス。』
服部有年、晩景ヲ即事ニ云フ。
『晩ニ炎暑逃ゲ涼・・・・・、三両ノ朋ト吟
ジテ埜橋ニ到ル、時ニ漁夫有リテ舟ヲ繋ギ
テ去ル、幾多ノ螢火ガ波ニ飄シテ逐ス。』
秋夜枕上ニ云フ。
『夜ノ雨蕭蕭トシテ燈火昏レ、芭蕉ノ葉上ニ
滴声繁シ、閑眠一覚シテ重ネ難ク覚、暁ニ
下階ノ小園ノ除ヲ歩ク。』
秋晩閑居ニ云フ。
『門前ノ幾株カノ樹、紛紛ト落葉シテ深シ、
自ラ蘆半ノ汀ニ雪、黄菊園ニ満チ金トナス、
窓下ニ新茗ヲ試ミ、松陰ニ玉琴ノ調ベ、頃
ニ来客ノ到ル無ク、又、夕陽ノ沈ムヲ見
ル。』
秋夜不寐ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

西風がひとしきり吹いて、たまたま振り返って見ると、倶利加羅山の辺りに夕陽が真っ赤に燃えている。」
「秋夜不寐」に云う。
「風が静かに窓の障子を小刻みに敲き、愁いに情がみだれる。聞こえるのは雨の音ではなく風に揺れる葉ずれの音である。枕を撫でて呪いするが夜もすがら眠りにつけず、何度も数を数え尽くしてみるが、とうとう明け方になってしまった。」
「雪後出遊」に云う。
「門の外は雪も晴れて雲の動きも落ちついたようである。酔い心地の中、興味に乗じてひっそりと遊びにでる。夕陽の射す道を歩きながら一曲の歌を歌い放つ。誰もいない木橋の辺りで眠っていた鴎をびっくりさせたようである。」
服部有年が「晩景」を即事に云う。
「晩になって厳しい暑さも涼しく・・・・・・、二三人の友と詩を吟じながら野橋の所へ来た。その時、漁夫がいて、舟を繋いで帰っていった。たくさんの蛍火が競いあうように波のように翻り彷徨っている。」
「秋夜枕上」に云う。
「夜の雨が物静かに降り燈火がほんやりと黄昏ている。芭蕉の葉に雨の落ちる滴の音が頻りにしている。静かに一眠りから覚めて重ねて見ることができず、暁に外に出て階段の下の庭のきざはしを歩く。」
「秋晩閑居」に云う。
「門前の幾株かの樹が、散り乱れるように葉を落とし深々と敷り敷いている。自然に葦の生えた水際の辺りにもう雪がきている。黄色の菊が一面に咲いて庭を金色に染めている。窓の外に新しい茶の芽を植えて試み、松影に美しい琴の調べを聞くように松風が吹いているが、この頃は訪ねる客もなく、今日もまた夕陽が沈んでいくのが見える。」
「秋夜不寐」に云う。
『一雨晴来夜気清　詩魔惚我到残更
風吹古木琴音細　月上書窓樹影明

寺鐘於枕邊落。隣家雞鳴屋頭鳴。定
知征客侵晨發。認得門前敲鐸聲。雪
晴晩望云、晩際風収雨雪微。閑人乗
興出柴扉。水仙花發香方動。松樹枝
垂聲已稀。漁叟断崖霜落辺。樵童小
逕日斜帰。前山暮添好詩料。幾樹着
花暁夕暉。佳句如冬日郊行云、方識
牧童吹笛去。黄牛磐在晩楓陰。雨夜
小集云、席上薫香是何事。主人笑指
一瓶梅。皆妙、澤田君亨（敬輔、早紅
葉云、霜林深出一庭中。光景幾般黄
又紅。日日品題情不盡。唯愁夜雨洪
朝風。聞落葉云、門外無人夜寂寥。唯
聞落葉逐風飄。颯颯颯颯眠難得。驚
客如何此一宵。牧童云、馳牛叱叱傍
溪流。蓑笠風寒山色幽。短笛数聲斜

雪晴晩望ニ云フ。
『晩際ニ風ガ収マリ雨雪ガ微カ、閑人ガ興ニ
乗ジテ柴扉ヲ出ル、水仙ノ花ガ香リヲ発シ
テ方ニ動キ、松樹ノ枝ノ垂スル声ガ已ニ稀、
漁ヲ叟シ、霜落辺ニ断崖ニ立ツ、樵ノ童ガ
日斜ニ帰ル。前山ニ添エテ好詩
料ヲ得ル、幾樹ガ花ヲ着シタ暁ヲ明ス。』
佳句冬日ノ如シ、郊行ニ云フ。
『方ニ識スル牧童ガ笛ヲ吹イテ去リ、黄牛ガ
繋ガレテ晩ニ楓ノ陰ニ在ル。』
雨夜小集ニ云フ。
『席上ノ薫香是レ何事ゾ、主人ガ笑ミテ一瓶
ノ梅ヲ指ス。』
皆妙ナリ。
沢田君亨（敬輔ト称シ、早雲ノ義子である）ガ、
ニ云フ。
『霜林ガ一庭ニ染出ス中、光景幾般ニ黄又紅、
日日ニ品ガ題スル情盡キズ、唯愁夜ノ雨ニ
朝風興フ。』
聞落葉ニ云フ。
『門外ニ人無ク夜寂寥ナリ、唯、落葉ノ風颯
ニ逐スルヲ聞ク、颯颯颯颯トシテ眠スルヲ
得難シ、如何ニモ客騒グ此ノ一宵。』
牧童ニ云フ。
『渓流ノ傍ニ叱叱ト牛ヲ馳セル、蓑笠風ニ寒
ク山色幽ス、短笛数声斜日ノ裡ニ、

遠寺鐘於枕辺落　隣家鶏鳴屋頭鳴
定知征客侵晨發　認得門前敲鐸声』
「雪晴晩望」に云う。
「夕暮れ際に風が収まって雨や雪が、ほんの少し降るだけとなった。閑人は興に誘われて柴戸を開けて外へ散歩にでる。水仙の花が香りを発して風に揺れ、松の枝の風に逆らう音もおさまって已に時折にするだけである。漁を嘆し、酷く酔っぱらって断崖の上に立つ、樵の少年が小道に印をつけながら帰ってゆく、前方に連なる山に添えて好ましい詩づりの材料が得られる。幾つかの木に花が目立つように咲き、夕陽が明るく照らしている。」
よい句で、正に冬日をよく詠んでいる。「郊行」に云う。
「丁度、知り合いの牧童が笛を吹いて去り、黄牛が、夕暮れに楓の陰に繋がれている。」
雨夜の小集に云う。
「席上に香気な薫りが漂っているので、これは何だろうというと、主人が笑って一瓶の梅を指さしていた。」
どれも優れたものを漂わせている。
沢田君亨（敬輔と称し、早雲の義子である）が、
「紅葉」に云う。
「林の霜が染出すように庭一面を包み込んでくる。目に見えるさまが黄色に、また紅にと幾たびも変化する。日々品定めする味わいがつきない。ただ、愁いを起こさせる夜来の雨に朝の庭に風を伴ってくる。」
「聞落葉」に云う。
「門の外に人の気配もなく夜は寂しく物静かである。ただ、風に翻り戦って散り敷く落ち葉の音を聞いている。風を繰り返し誘うようにさっと吹く風の音になかなか寝つかれない。今宵は如何にも客が騒いで寝つかれないのと同じである。」
「牧童」に云う。
「渓流の傍らに牛を追いながら叱る声がする。その蓑笠が風にいかにも寒そうに見え、山の様子も静かである。短い笛の音が夕陽の中に幾度か響いてくる。

日輕。歸來一路石橋頭。富陵介（名ハ元隆、字ハ謀人）晩景ヲ即事云、黄昏眠覺思深哉、簾外微吟帙未開。忽喜蟲童能解意、拮撑取水灌青苔。南謙齋（一ニ旦里、林氏見紅葉云、清霜染出滿林紅。不用飄飄翼晚風。過雨無妨却增色。晴來如洗映秋空。秋夜聞落葉云、寒風幾陣通秋令。顧轉難眠夜正深。軒外蕭蕭

大村南子　画

楓葉落。恰如輕雨打窗音。江村雜興云、霜重岸草皆枯處處園林葉似朱。靜景詩人尋句去。江頭沽酒又沽鱸。川上有峰（名ハ秀実、字ハ士毅、一ニ軌斎ト号ス）冬日遊山寺云、凄風滿山岳。霜葉深如舟。塔影跨溪冷。磬聲度水寒。晚看修竹瘦。又愛菊花殘。共約來春日。探花又結歡。春晴登樓云、以詩會友陸

帰来ノ一路石橋頭ニ。』

富陵介（名ハ元隆、字ハ謀人）晩景ヲ即事ニ云フ。

『黄昏ニ眠リカラ覚メ思深哉、簾外ニ微カニ吟ジ、帙未ダ開カズ、忽チ蠻童ノ意能ク解スルヲ喜ビ、桔槔ヲ取ッテ青苔ニ灌水ス。』

南謙斎（一ニ旦里ト号シ、建斎ト称ス、今、氷見ニ住ス）紅葉ニ云フ。

『清霜ガ満林ノ紅ヲ染出シ、不用ノ風ガ飄飄ト晩ニ舞ウ、雨過ギテ妨ゲズ却ッテ色ヲ増ス、晴来洗ウ如ク秋空ニ映ズ。』

秋夜聞落葉ニ云フ。

『寒風幾陣モ秋衾ヲ逼シ、顛轉トシテ眠リ難ク夜正ニ深、軒外ハ蕭蕭トシテ飄葉落チ、恰モ怪イ雨ノ如クニ窗ノ打ツ音。』

江村雑興ニ云フ。

『霜両岸ニ厳シク草皆枯レ、園林ノ處處ニ葉朱ニ似ル、静景ニ詩人詩句シテ去リ、江頭ニテ沽酒シ又沽鱸ス。』

川上有峰（名ハ秀実、字ハ士毅、一ニ軌斎ト号ス、菱屋二郎四郎ト称ス）冬日遊山寺ニ云フ。

『凄風山岳ニ満チ、霜葉ヲ丹ノ如クニ染メ、塔影渓ニ跨リテ冷エ、磬ノ声水ニ度シテ寒シ、既ニ看修シテ竹瘦セ、又菊花ノ残ヲ愛ス、共ニ來タル春日ヲ約シ、探花スル又歡ビヲ結ブ。』

春晴登楼ニ云フ。

石橋の辺りに帰りの一本の道が連なっている。

富陵介（名は元隆といい、字は謀人）が「晩景」に云う。

『黄昏時に目覚めて深い思いに沈むことだ。簾の外で微かな声で吟じ、書物を未だ開かず。忽ち野蛮な童の気持ちがよく分かるような喜びようで、撥ね釣瓶を取って庭の青苔に勢いよく水をまき散らす。』

南謙斎（一に旦里と号し、建斎と称す、今は氷見に住む）「紅葉」に云う。

『清らかな霜が林に落る紅葉を浮きだせるように染めあげてゆく。役にたたない風が彷徨うように夜に舞っている。雨があがって、その雨を妨げるどころか、却って色を増したようである。晴れの訪れがすべてを洗い流す如く秋の空に映じている。』

「秋夜聞落葉」に云う。

『何度も寒い風がしきりに吹いて、それが秋の寝巻にまで襲いかかってくる。何度も寝返りを打っても眠りにつけず夜もまさに更けてゆく、軒の外にはもの淋しく楓の葉がしきりに散っている。それは恰も雨が窓を打つ音のようである。』

「江村雑興」に云う。

『厳しい霜が両岸に下り、すべての草が枯れている。畑の林のあちこちに木の葉が朱に染まっている。この静かな景色に詩人は句を求めて訪れ帰ってゆく。川の辺りで酒と鱸を買い求める。』

川上有峰（名は秀実といい、字は士毅、一に軌斎と号す、菱屋二郎四郎と称す）「冬日遊山寺」に云う。

『凄い風が山いっぱいに吹いて、降りた霜が葉を丹の色に染めている。塔の姿が淡にうすくまるようにひんやりとしている。岩を打つ水音が寒く響き渡っている。既に秋も終わりを見せ竹も痩せほそっている。また、菊の花も名残を惜しんでいる。皆が来年の春の日差しのおとずれをを誓い、さらに花を訪ねるその喜びの契りを約束している。』

「春晴登楼」に云う。

「俳諧　画譜百類集」

舟樓。席上探題分韻。雪。雪解連山帶雪痕。水添新漲抱欄流。喜晴野雀群相喚。向暖庭梅香正浮。偏愛軒前幽味足。共傳杯酒倚窓頭。早起涉園云、閒夢醒來醉尚存。一伸一欠涉前園。蹣跚直為駆疎懶。緑樹陰中又出門。雪中聞鶯云、從來北越深寒氣。正月梅花猶未開。忽聽黄鸝三両囀。誤看雪片作殘梅。山本蘭窩（時林樓造、今浦屋仁山、字弼卿、林柳浦屋浦之丞、今称吟左衛門）竹笛云、龍孫遊出破苔紋。雨後數竿緑十分。柳蹠斑斑如玳瑁。庭前此立欲凌雲。夏日宴池亭云、一樽呼客坐池亭。酬酢頻傾醉又醒。今夜不妨織月暗。分明照水數群螢。桑山梅浦（名仁山、字弼卿、林柳浦屋浦之丞、今称吟左衛門）冬日遊山寺云、一望田園紅葉深。登來古寺

『詩ヲ以テ友ガ陸舟樓ニ会スル、席上探題シテ分韻ヲ籌ス、雪解ケ連山ニ雪帯ビテ聳ユ、水新漲ヲ添エ欄ヲ抱イテ流レ、晴野ヲ喜ビ雀ノ群レ相喚シ、向暖ニ庭ノ梅香正ニ浮カレ、軒前ノ幽味ヲ偏愛シテ足リ、共ニ杯酒ヲ伝エテ窓頭ニ倚ル。』

早起渉園ニ云フ。

雪中聞鶯ニ云フ。

『從来トモ北越ハ寒気深シ、正月ニ梅花未ダ開カズ、忽チ黄鸝ノ三両ノ囀リヲ聴ク、雪片ヲ残梅ト作シ看誤スル。』

山本蘭窩（時ニ禮造ト称ス、今、本藩ニ仕ウ、内藤宗安ト称ス）、竹笛ニ云フ。

夏日宴池亭ニ云フ。

『一樽ニ客ヲ呼ビ池亭ニ坐ス、酬酢ニ頻傾ニ酔イ又醒メル、今夜ハ織ヲ妨ゲズ月暗シ、分明ニ数群ノ螢水ヲ照ラス。』

桑山梅浦（名ハ仁山、字ハ弼卿、梅染屋浦之丞ト称シ、今ハ吟左衛門ト称ス）冬日遊山寺ニ云フ。

『一望スルニ田園ニ紅葉深シ、古寺ニ登来シ酔イテ高吟ス、

『詩を以て結ばれる友が陸舟楼に集まる。その場で詩の題材を探して韻の割り付けを考える。辺りの雪が解け、遠くの連山が雪を頂いて聳えている。雪解けの新鮮な水が満ち溢れて欄干を抱くように流れている。晴れ渡った野を喜ぶように雀の群れが互いに囀り合っている。暖かさにつられて庭の梅の香りが、まさに浮き立っている。軒先の静かな趣をひたすら愛でて満ち足りる。共に酒盃を交わして窓先に寄り掛かっている。』

「早起渉園」に云う。

『間夢醒来酔尚存　一伸一欠渉前園
蹣跚直為躯疎懶　緑樹陰中又出門』

「雪中聞鶯」に云う。

『從来とも北越は寒気の厳しいところである。正月には梅の花が未だ開かず。突然に鶯の三声ばかりの囀りを聞く。庭の雪の端くれを咲き残りの梅の花かと見紛う。』

山本蘭窩（時に禮造と称す、今は加賀藩に仕え、内藤宗安と称す）が「竹笛」に云う。

『龍孫遊出破苔紋　雨後數竿緑十分
粉蹠斑斑如玳瑁　庭前屹立欲凌雲』

「夏日宴池亭」に云う。

『酒をもって客を招き池亭で席を設ける。杯のやりとりするうちに、たびたび酔いが回っては、また、醒める。今夜は、穏やかさを妨げず月が出ていない。幾群れかの蛍が水を、はっきりと照らしている。』

桑山梅浦（名は仁山といい、字は弼卿、梅染屋浦之丞と称し、今は吟左衛門と称す）が「冬日遊山寺」に云う。

『一望すると田園に紅葉が深まっている。古寺を訪ねて酔いにまかせて高らかに吟ずる。

醉高吟。暮烟籠處鳴鐘起。倚遍闌干
送斷鴻。游是性菴云、獨歩春園柳蔭
風。黄鸝日暖囀蘆叢。茅堂寂寂松濤
起。雲外連山斜照紅。津田由斎（名は景完、字は苟好、鶴来屋喜三
次と称す）山村書所見云、山村雪
霽暖於春。屋後屋前堆玉塵。開戸時
望瀟橋趣。吟行緩緩是詩人。春雨云、
鳩声何處去来疎。烟霧濛濛雨若絲。
墻角梅花玉肌濕。池邊楊柳緑眉垂。
啄柳云、數株烟鎖野橋酒。裏柳新枝
掃岸垂。時雨染成千縷緑。含風織出
萬條絲。差池鶯燕時藏影。宛轉黄鸝
不見姿。好景何妨日西沒。更懸纖月
最清奇。
一日訪橋仙禪師。見閑雲禪師偈
云、閑雲閑過是仙寰。月白風清閑復閑。

暮レテ烟籠ノ處ニ金起鳴ク、欄干ノ邊ニ倚リ断ジテ鴻ヲ送ル。』

游是性菴ニ云フ。

『独リ春園ヲ歩キ柳ノ蔭ニ風、黄鸝ガ日暖ニ幽叢ニ囀ル、茅堂寂寂トシテ松濤起ル、雲連山ノ外ニ紅斜照ス。』

津田由斎（名ハ景完、字ハ苟好、鶴来屋喜三次ト称ス）山村書所見ニ云フ。

『山村ニ雪霽レ春ニ於イテ暖、屋後屋前ニ玉塵ガ堆ス、時ニ戸ヲ開キ望ムニ橋趣新ス、緩緩ニシテ是レ詩人吟行ス。』

春雨ニ云フ。

『鳩ノ声何ヲ求メテ何処ヘト去ル、烟霧ガ濛濛トシテ若緑ノ雨、墻角ニ梅花ガ玉肌ヲ湿ス、池辺ノ楊柳ガ緑眉ヲ垂ス。』

咏柳ニ云フ。

『数株ガ野橋ノ酒ニ鎖シテ烟リ、新枝ガ泉郷シテ岸垂ヲ掃フ、薫雨ガ千縷ノ緑ヲ染成シ、風ガ含ミテ万条ノ緑ヲ織リ出ス、差池ニ紫燕ガ時ニ蔵影ニ宛転スルガ黄鸝ガ姿ヲ見セズ、好イ景ニ何ンゾ妨ゲテ日西ニ没ス、更ニ纖月ガ最モ清奇ニシテ懸カル。』

一日、橋仙禪師ヲ訪ル、閑雲禪師ノ偈ヲ見セ示シテ云フ。〔詩ハ略ス〕

日も暮れかかって煙のように籠もる辺りに鐘の音が振るいたつようになっている。欄干の辺りに凭れて、空をゆく雁をきっぱりと見送る。』

「游是性菴」に云う。

「独り春の庭を歩き、柳の陰が風に揺れている。鶯が日が暖かくなって静かに草むらの辺りに囀っている。茅葺きのお堂がひっそりと寂しく松風の音が立っている。雲が連山の表面にかかり夕日が紅く斜めに射している。」

「津田由斎（名は景完といい、字は苟好、鶴来屋喜三次と称す）が「山村書所見」に云う。

『山村に雪が晴れあがって暖かい春の兆しがする。しかし、家の前後には雪が積み上げられている。戸を開けて望むと、橋の趣は、また、新鮮を見るようである。しかし、日差しが暖かいので詩人は、それに誘われて吟じながら外を歩く。』

「春雨」に云う。

「鳩の声がして雌を求めて何処ともなく去ってゆく、霧のような小雨が降って薄暗く煙っている。墻の角の梅の花が玉のような肌をしっとりと濡らしている。池の傍の柳が、風に揺れて緑の眉が乱れゆがむように垂れている。」

「咏柳」に云う。

『五六本の木が野橋のほとりまでをつなぎ、ほんやりと煙っている。新しい枝が猛々しく時にはしなやかに川の土手を掃いているようである。洗い流す雨が千の糸を緑に染め上げ、風の含みが万すじの緑を織り出しているようである。ふぞろいに紫の燕が時に蔵の影で綾やかに舞っているが、鶯は姿を見せない。こんなによい景色のなかに、どうしてそれを妨げるように日が西に没するのであろう。さらに細い月が、最も清らかにあやしげに東の空に懸かっている。』

ある一日、橋仙禪師を訪ねる。閑雲禪師の作った偈を目の前に見せて云う。

『閑雲閑過是仙寰　月白風清閑復閑

高岡詩話卷之四

閑。茶三昧又詩三昧。瞻仰儀家第一
關。予即和之云、脱却塵寰入梵寰。蕉
陰鎖日領清閑。幾多談笑幾多意。憶
得當年前度閑。

椿の古城「玉飛路ひ」

子、即之ニ和シテ云フ。

『塵寰ヲ脱却シテ梵寰ニ入リ、蕉ノ陰ニテ鎖ス日ヲ清ク閑ヲ領ス、幾多ノ談笑ト幾多ノ意ニ、當年ヲ得テ前度ノ閑ヲ憶フ。』

高岡詩話卷之四

茶三昧又詩三昧　瞻仰儀家第一關』

私は、その場で、その偈に和して云う。

『汚れた人間世界を脱却して仏教世界に身を投じ、芭蕉の葉陰で平素とも清らかな時を領有する。幾多の談笑や幾多の思いを重ねて当年の思いを得て、先の年に心にとめたことを思いかえす。』

高岡詩話卷之四。

高岡詩話巻之四

【読み下し文中の語句説明】

(1) 霏霏　雨や霰がはらはらと降るさま。
(2) 渺然　水面がひろびろと遙に果てしないさま。
(3) 茅茨家　茅葺きの家。
(4) 蕪地　たちまちに。
(5) 頴悟　才知が優れて賢いこと。
(6) 知嚢　智慧袋、知識の多い人。
(7) 才藻　文章の才能が豊かなこと。
(8) 玄孫　やしゃ孫、孫の孫のこと。
(9) 伶仃　独りぼっち。
(10) 孑孑　ただずむ。
(11) 竟日　一日中。
(12) 耒耜　農具の鋤。
(13) 邊邊然　あわただしく俄にのさま。
(14) 宰輔　大臣、宰相のこと。
(15) 胥卒　小役人、下役。
(16) 行藏　すすんで道を行うのと、退き隠れて才能を表さないこと、日常の暮らし向きのこと。
(17) 覃花　桑の木にでるきのこ。
(18) 異物　亡くなる。
(19) 詩嚢　詩の下書きを入れる袋。
(20) 不羈　非凡なこと。
(21) 沙禽　砂浜に住む水鳥のこと。
(22) 恬雅　静かで雅びなこと。
(23) 印賦　詩賦におす印。
(24) 踪跡　あしあと、足跡のこと。
(25) 依約　結びつける。
(26) 士人　修養の積んだ人。
(27) 市人　商人のこと。

【現代語訳文中の内容説明】

(一) 竹馬の友
津島北溪が竹馬の友として寺崎山窩と山本道斎〔山本翠溪〕をあげているが、当時、津島家は、坂下町の現在の金子医院のある所である。山窩の家は源平町、道斎の家は片原町、こうした地の利もあって、互いに行き交う竹馬の友であったということである。

(二) 山本翠溪（道斎）
片原町に住む町医者で、加賀藩の藩校の明倫堂で学び、十三歳の時に藩主の前で詩経を講読するほどの秀才であった。後に江戸に出て昌平黌に学び、京都に移って頼山陽の塾に入って学んだ。その折に山陽の子の三樹三郎と知り合うことになる。それが縁となって、三樹三郎が蝦夷地を訪ねた帰りに山本家に逗留する。道斎のお墓と顕彰碑が片原町の妙国寺にある。また、京都に帰る三樹三郎を見送り別れた碑文が上北島の公民館の所にある。

(三) 逸見方舟
逸見女九郎のことで、山本道斎の妹を娶り、山本家に逗留した頼三樹三郎とも交わり、当時、高岡を代表する勤皇家であった。

(四) 坪井信良（祿里）
佐渡奠斎（養順）の弟、江戸に出て坪井信道に蘭学を学び、坪井家の養子となり、将軍家の侍医として方眼に叙せられる。坪井信道は、江戸後期の蘭医で、その門下に緒方洪庵らがいた。

(五) 高峰槐窓
高峰譲吉の父である。譲吉はアメリカに渡り、薬学・理学者としてタカージアスターゼ、アドレナリンなどを発明、創製する。譲吉の父は加賀藩の壮猶館舎密方出仕として金沢に赴く。槐窓の妻、譲吉の母の幸子は、横田町の津田家、酒造業の「つるぎ屋」、津田半村の娘である。また、譲吉の妹の節子が、半村の生家の南家に嫁ぎ、その二男として生まれたのが、高岡市長を務めた南慎一郎である。また、譲吉の叔母のいつが津田家から木津家に嫁ぎ、その孫の木津太郎平が市長となっている。

(六) 津田由斎（鶴来屋喜三次）
横田町の津田家、酒造業の「つるぎ屋」で、高峰譲吉の母の幸子の実家である。

(28) 機巧　策略のこと。
(29) 洶涌　波が沸き立つこと。
(30) 膽畧　大胆で策略に富むこと。
(31) 陂陀　傾斜しているさま。
(32) 冤鬼　無実の罪で死んだ人の亡霊のこと。
(33) 鳧　かも、千鳥科の渡り鳥。
(34) 三五　三×五＝十五で十五夜の満月のこと。
(35) 恂栗　誠に厳しいこと。
(36) 頴才　優れた才能のこと。
(37) 酷吏　ひどく暴さにに苦しめられることを酷吏に例えたもの。
(38) 詩讖　詩をそしること。
(39) 慎密　慎み深く手落ちのないこと。
(40) 鉛茶　とろけた茶。
(41) 杜宇　ホトトギスのこと。
(42) 霑酔　甚だしく酒に酔うこと。
(43) 枯桿　井戸のはねつるべのこと。
(44) 梟郟　猛々しく、時には、なよなよしく淑やかに。
(45) 纖月　細くなった月、三日月のこと。
(46) 塵寰　汚れた世のこと。
(47) 鎖日　ふだん、平日のこと。

高岡詩話巻之五

北溪居士津島佶著

曾祖父景山先生（名祇董、字祇菴、元俊、一号洞虚、又号如蘭軒、恒之進と称す）、彭水先生（名久成、字祇菴、一号洞虚、又号如蘭軒、恒之進と称す）以物産学鳴於京攝之間、新井白蛾、中井竹山、蒹葭堂、山脇東門、藤林玄覚、福井立啓、皆出其門、寶暦四年歿於浪華、有攻玉本草十卷、異魚録三卷、存於家、岩子島夕照云、暮日返照曲、景明孤島過、雲低極浦波、浪接南天、新月東山上、殘霞北渚鮮、坐看無限興、総在寸眉前、鯨島飯帆云、烟嵐抱曲灣、鯨島出雲間、漢吐氣成市、龍挂雨移山、壁泉千丈峭、喬木一汀閑、日暮征帆遠、幾人得便還、景山先生所藏炎帝像、雪村所画、法印玉翁之賛アリ、松岡恕菴先生（小洲曰ク、蒹葭堂雑録ニ云フ、松岡玄達字ハ成章、恕陰ト号シ、平安ノ人、物産学ヲ以テ稲若水ヲ継ギ、而シテ興ス）ガ書スル所、賛ニ云フ。

『嘗テ草ヲ分ケテ薬トシ、農ヲ勧メテ耕ヲ促ス、大ナル哉聖ナル業、万代ニ衡ヲ権ス。』

嘉永六年、彭水先生百回忌辰、上子東竹（名ハ格、字ハ物聊、担庵ト称ス）一絶ヲ賦シテ云フ。

『日月ハ（1）飛箭ノ如クニ如カズ、百年ノ往ノ事事方ニ蹤シ、即チ今（2）縦遊ス覧處無シ、只ニ数巻ノ書ニ遺香ヲ看ルノミ。』

予、亦タ一絶ヲ得テ云フ。

『三尺ノ（3）美髯ガ今尚存シ、英風ヲ百歳ニシテ容ヲ想フ、年ハ四十ヲ過ギ、未ダ世ニ称セズ、碌碌トスル此ノ身ノ（4）後昆ヲ慙ル。』

先生ニ美髯アリ、詳シクハ予ノ著スル所ノ高岡佳話ヲ見ルベシ。

祖父ノ氷水君（名ハ□□、景俊ト称ス）ノ詩、之ヲ求メテ未ダ獲ズ、今、姑ズ佐渡養順ニ書キ與フルヲ録ス、書ニ云フ。

『昨夜諸子ト與ニ生島宅ニ會シ、図ラズモ欬唾シテ時ヲ移ス。足下将ニ薬ニ建中湯ヲ投ゼシムト聞キ、明察賛慮スルニ、（5）不佞ノ及ブ所ニ非ズ、然リト雖モ不佞ナルヲ退ケテ其ノ方證ヲ按ジルニ、

北溪居士津島佶著

曾祖父ノ景山先生（名ハ祇董、元俊ト称ス、法橋ニ叙セラル）ノ弟、彭水先生（名ハ久成、字ハ桂菴、一ニ洞虚ト号シ、又、如蘭軒ト号ス、恒之進ト称ス、石崎小洲曰ク、蒹葭堂雑録ヲ按ズルニ、彭水ハ物産学ヲ松岡玄達ニ受ケル。）物産学ヲ以テ京攝ノ間ニ鳴ル。新井白蛾、中井竹山、蒹葭堂（小洲曰ク、木村孔恭、字ハ世肅、巽斎ト号シ、又、蒹葭堂ト称ス、小字ハ太吉郎、家ハ坪井屋ト号ス、元文二年ヲ以テ浪華ニ生マル）、山脇東門、藤林玄覚、福井立啓、皆其ノ門カラ出ズ。宝暦四年ニ浪華ニテ歿ス。攻玉本草十巻、異魚録三巻アリ、家ニ存ス。

『岩子島夕照』ニ云フ。

『暮日曲ニ照リ返シ、景ヲ孤島ノ邊ニ明ス、烟雲低ク浦ヲ極メ、波浪南天ニ接シ、新月東山ニ上ル、残霞ニ北ノ渚鮮ナリ、坐シテ無限ノ興ヲ看ル、総テ眸前ノ寸在ナリ。』

『烟嵐湾曲ヲ抱キ、鯨島雲間ニ出ズ、（1）蜃ガ気ヲ吐キ市ヲ成シ、龍ガ雨ヲ移シ山ニ到ル。泉ニ懸カル千丈ノ岸、喬木一汀ニ閑タリ、日暮レニ征帆遠ク、幾人カ還便ヲ得ル。』

景山先生ハ炎帝像ヲ所蔵ス、雪村ノ画ク所、法印玉翁ノ賛アリ、松岡恕菴先生（小洲曰ク、蒹葭堂雑録云、松岡玄達字ハ成章、恕陰ト号シ、平安ノ人、物産学ヲ以テ稲若水ヲ継ギ、而シテ興ス）ガ書スル所、賛ニ云フ。

『嘗テ草ヲ分ケテ薬トシ、農ヲ勧メテ耕ヲ促ス、大ナル哉聖ナル業、万代ニ衡ヲ権ス。』

嘉永六年、彭水先生百回忌辰ニアタリ、上子東竹（名ハ格、字ハ物聊、担庵ト称ス）一絶ヲ賦シテ云フ。

『日月ハ（2）飛箭ノ如クニ如カズ、百年ノ往ノ事事方ニ蹤シ、即チ今（3）縦遊ス覧處無シ、只ニ数巻ノ書ニ遺香ヲ看ルノミ。』

私モ、また、一絶ヲ賦シテ云フ。

『今モナオ三尺ノ、あの長く美しい髯ガ記憶ニ残っている。秀でた風貌を百歳にもなるが容貌やお言葉を想い返してみる。あれから既に四十年の歳月が過ぎたというのに未だ世に称えられず、平凡で役にもたたない我が身が子孫であることを恥じている。』

先生には美しい髭があった。詳しくは私の著述した『高岡佳話』を見たらよい。

私の祖父の氷水君（名は□□といい、景俊と称す）の詩だが、これを探しているが、未だ入手できない。今は、取り敢えず佐渡養順に書き与えたものから採って記すことにする。その書に云う。

『昨夜、皆と一緒に生島さんのお宅に集まって、図らずも欬び打ち解けて時を過ごした。その時、私は慢性の胃潰瘍や胃炎の人のための薬湯として（5）建中湯を飲ませる話を聞いた。その話を明快に分かるようによく理解しようとするが、才知に欠ける私の理解に及ぶところではない。さりとてそんな私なりにその証明の手だてを調べてみたいと思うのだが、

身体消瘦、潮熱自汗、將成勞瘵、遂虛熱生血氣、而未嘗說療咳血吐血也、然則樂令建中湯、身体消瘦、欲生血氣者、與之可矣、今夫順碩者、三四年之況痼、非將成勞瘵症、不倦性狂學蠹不能解之、足下有高論、乞幸見示、草草不宣、津島景俊拜、佐渡養順公梧右、

叔父北岳君（名之篤、字子信、又号一甚、寛永和祚俊五、後称元桂）学山本中郎於京師、又學村瀬栲亭上、尊大人云、奉命辭來北越間、即今無恙入達聞、茫茫學海認難得、題杜駟車何日還、巖晚云、徒重大馬巖、春色客中催、縱無添華髮、慷慨肝膽摧、山家看雪云、草堂人不到、偶坐養天真、倘當滿瓶雪、從如花樹新、賞雪云、六出飄簾外、隨風落玉杯、難分庭裡樹、疑箇是真梅、午睡夢友人云、曲肱夏日午時、夢裡逢君又別君、落枕鐘聲北窓下、擎頭几上讀殘書、中秋与山中郎及諸子遊廣澤云、萬里異鄉客、來遊廣澤傳、誰言秋月好、總是斷人腸、塞下曲云、胡天秋色夜凄凄、蕭瑟悲風征馬嘶、月下霜冥三尺劍、人傳虜在陰山西、花月吟、送建養益歸鄉云、新月映花夜如霜、花梢月影照離腸、眠花弄月春宵短、嘯月愁花別恨長、花月看時爾憶否、月花銷宴何時忘、月前花下吟詩客、花月吟成空斷腸、伏見途中云、冬風何處來、颯々塵埃起、回首望北天、雲重千萬里、叙嶽隱雲秀、鯨音古寺過、暮過十

身体ノ痩セヲ消シ、潮熱自ラ汗シテ治シ、將ニ癆ヲ労成セントシ、虛熱退キ、血気生ジ、而シテ未ダ嘗テ咳血、吐血ノ療スルヲ說カズナリ。然ラバ則チ樂ニ建中湯セシムルヲ、身体ノ痩セヲ消シ、血気生ズルヲ欲スル者ニ、之ヲ與ヘルベキヤ。今夫レ碩ニ順ズル者、三四年ノ沈痼ナリ、將ニ癆症ヲ労成スルニ非ラズ。不倦ノ性ハ学ビ狂イテ蠹ニシテ、之レヲ解スル能ハズ。足下ノタメニ高論有ラバ、幸イニシテ見示ヲ乞フ。』

草草宜シカラズ、津島景俊拝、佐渡養順公梧右。

叔父ノ北岳君（名ハ之篤、字ハ子信、また、二笠斎ト号ス、初メ俊五ト称シ、後ニハ元桂ト称ス）京師ニ於イテ山本中郎ニ学ブ、又、村瀬栲亭ニ学ブ、上リテ家ノ大人ニ云フ。

『命ヲ奉ジテ北越ノ間ニ辞來シ、即チ今恙ナク逢関シテ入ル、茫茫トシテ学海認メ難ク、何日カハ柱ニ題シテ駟車ヲ還ラム。』

歳晩ニ云フ。

『徒ニ大馬ノ歳ヲ重ネ、春色ニ客中ヲ催ス、縱エ華髮ヲ添エ無クトモ、慷慨シテ肝膽ヲ摧ク。』

山家看雲ニ云フ。

『草堂ニ人到ラズ、偶ニ坐シテ天眞ヲ養ウ、偏ニ瓶ニ満ル雪ヲ愛デルト、総テ花ノ如ク樹新タナリ。』

身体の痩せを無くし、潮熱を自ら汗して治して正に病を労り治さんとして、熱が嘘のように退いて血気が生じて、それでもって咳血、吐血を治したという說を未だ聞いたことがない。それでは果して、身体の痩せを無くし、血気の生ずるのを欲する者に建中湯の投薬をしてよいものだろうか。今はたとえ達者な人も、三、四年の長患いに沈む、正にその病を治してあげたいのだが、才知のない私にはもともと力及ばず粗雑で理解することができない。こんな私のために優れた理論があれば、見せ示していただければ、幸いである。早々、不宣（手紙で敬意を表して、言葉足らずですが、と書く）津島景俊拝、佐渡養順公、梧右（机の右、手紙で敬意を表してそえる）。」

叔父の北岳君（名は之篤といい、字は子信、また、二笠斎と号す、初めは俊五と称し、後には元桂と称した）は、京都で山本中郎に学ぶ、また、儒学者の村瀬栲亭に学ぶ。京都に上洛して家族に云う。

『中しつけを頂いて北越の地に別れを告げてやってきた。今、どりあえず恙なく幾つもの関所を越えて都入りした。学びの海は行く手果てしなく広々と広がり認めがたいものである。しかし、いつの日にか業績を印して四頭立ての馬車で故郷に帰らん。』

「歳晩」に云う。

『徒に大馬のように無駄な歳を重ねてきて、春の景色に旅に出た間の心を催している。たとえ、白髪が生えていないまでも、このままではいけないとばかりに、憤り嘆いて甘えた心を砕く。』

「山家看雲」に云う。

『草葺きの家に訪れる人もなく、たまたま独り坐って自らの本性を養う。無心にひたすら瓶に満る雪を愛でていると、全てが花の如く、樹もまた新たなり。』

賞雪ニ云フ。

『六出ガ簾外ニ翻リ、飄風ニ玉杯落ツ、庭ノ裡ノ樹分ケ難ク、幾箇是レ真ノ梅。』

午睡夢友人ニ云フ。

『夏日ノ午時ニ曲肱シ初メル、夢ノ裡ニ君ニ逢イ又君ト別レル、鐘声ガ北窓下ニシテ枕ヲ落トス、頭ヲ挙ゲル几上ニ読ミ残シノ書。』

中秋ニ山中郎及ビ諸子ト與ニ広澤ニ遊ブニ云フ。

『万里ノ異郷ノ客、広沢ノ傍ニ来遊ス、誰モガ秋ノ月ヲ好ムト云フ、総テ是レ人ノ断腸ナリ。』

塞下曲ニ云フ。

『胡天ノ秋色夜凄凄タリ、蕭瑟ニシテ風悲シク馬ガ嘶キテ征ク、月下ニ霜寒ク三尺ノ剣、人伝フ山西ノ陰ニ在ツテ虜ニナルト。』

建養益ヲ送リ、花月ヲ吟ジ、帰郷ニ云フ。

〔詩ハ略ス〕

伏見途中ニ云フ。

『冬風何処ヨリ来タリ、颯颯ト塵埃ヲ起ス、回首シテ北天ヲ望ム、雲千万里ニ重ナリ、叙嶽何ゾ秀ヲ隠シ、古寺過ヨリ鯨音シ、

「賞雪」に云う。

『六出花の雪が降り簾が風に翻る外に、冬にふさわしい風に玉で造った杯ともいえる梅の花が落ちる。庭の中の樹が、この雪の中に見分け難いが、この中で真の梅の木が何本あるのだろう。』

「午睡夢友人」に云う。

『夏の日の昼頃、肱を枕に眠りはじめる。その夢のなかで君に出会い、また君と別れる。北向きの窓の辺りから鐘のなる音がして枕から落ちて目が覚める。頭をあげると机の上に読みさしの書がそのままになっていた。』

中秋に山本中郎及び皆とともに「広沢の池に遊ぶ」に云う。

『万里も遠く離れたよその土地へ旅をして広沢の池の辺に来て遊ぶ。誰もが秋の月が好きだという。すべてこれは秋の月が人々の腸がちぎれるほどに美しいと思うからである。』

「塞下曲」（皆の下での曲）に云う。

『北の国の空に秋の夜の景色が寂しく痛ましく感じられる。秋風が音をたててもの淋しく吹き、恰も馬が嘶いて行くが如くである。月下に霜が降りて寒く、三尺の剣のように冷たく冴えわたっている。噂によれば、西山の陰にゆくと、その景色に虜になるという。』

建養益を送り、花月を吟じて「帰郷」に云う。

『新月映花夜如霜　花梢月影照離腸
眠花弄月春宵短　嘯月愁花別恨長
花月看時爾憶否　月花銷宴何時忘
月前花下吟詩客　花月吟成空断腸』

「伏見途中」に云う。

『冬の風が何処からともなく疾風のように吹き砂ぼこりをあげている。振り返ると北の空に果てし無く雲が重なり合っているのが見える。どうして比叡山の威容を隠してしまうのか。古刹の辺りから鐘の声が響いてくる。

里客所思清如飛轅牛車去。夕陽優已轉。寒風吹六出。忽見滿林花。又云、篁間深鎖兩三家。檐下柚橙發香。遐景青苔相照去。東山削出一寒光。全有感云、少年學劍一書生。來往幾回功未成。水上月明難悟得。不知何日止斯行。蓋君學劍。出於伏見河田伏水。先生。量究其蘊奥。同門有孫福齋宮者。演戲伊勢音頭。福岡貢是也。□□□。嘗來訪君。時新雪降數尺。兩人揮鍬馳驅于雪上。恰如走平地。予家文政火災前宅檐内隙地。雪深二尺餘。東西四間。兩人時在此間演武。若飛鳥在空。如搏。毫無所支梧。祖母妙順君。時論次之。詳本末。以其長武事也。旗下之士。有而已。欲薦幕府。者。於是潛至江戸。開演武場。教以劍法。及門者三百餘人云。偶病而還。歿於越後梶屋敷。時年二十六。叔父鷲橋君。名有祥。林吉。後字玄俊。學于池田錦橋。仙。先生。其善行載修三堂茶話中。鷲橋君。男。帆斎君。名敬之。字吉幼。後称猪吉。學浪華三井棗洲。名善。字文卿。後称玄俊。先生。其婦也。棗洲先生。有送之序。文長不錄。渡口知足。字叔富。送別云、柳花飛盡石榴紅。北望嗟君返越中。落日暫斟長命酒。促來渡口一帆風。文政七年。病歿于家。時年二十二。有遺稿一卷。今朱墨雲森。他日當追錄。明年中秋。同社諸子。會陸舟樓祭之。各賦。悼詩。澤田周謙。早雲。詩云。憶君偶悼淚如流。此夜樓中感舊游。十

暮レテ千里ノ客過ギ、所思泉ノ如ク湧ク、牛車ガ轅ヲ輾シテ去リ、太陽復タ已ニ傾キ、寒風六ヨリ吹キ出ル。忽チ二林ニ花ノ満ルヲ見ル。』

又、云フ。

『篁間ニ両三家ガ深鎖シ、墻下ニ柚橙ガ自ラ香リヲ発ス、遐景ガ青苔ヲ相照ラシ去リ、東山ニ一寒光ガ削出ス。』

同有感ニ云フ。

『少年ハ剣ヲ学ブ一書生、幾回ト来往スレド未ダ功成ラズ、水上ノ明月ノ悟リ難キヲ得テ、何日止マッテ斯ク行ウカヲ知ラズ。』

蓋シ君ハ伏見ノ河田伏水〔左助ト称ス〕先生ニ於イテ撃剣ヲ学ビ、其ノ蘊奥ヲ窮究ス。同門ニ孫福斎宮ナル者アリ、戯レニ伊勢音頭ヲ演ズル、福岡貢是レナリ。□□□嘗テ君ヲ来訪ス。時ニ新雪数尺降リ、両人雪上ヲ驅駆シテ剣ヲ揮ウ、恰モ平地ヲ走ルガ如シ。予ノ家、文政ノ火災前ニ宅檐内ニ隙地アリ、雪深ハ二尺餘ニシテ、東西四間、両人時ニ此ノ間ニテ演武アリ、若キ飛鳥空ニ在ッテ相搏ツ、毫モ支梧スル所無シ。祖母妙順、時ニ君ノ話ヲ次ギ之ニ及ビ、君其ノ武事ヲ長ズルヲ以テナリト。旗下ノ士ニ欲シテ幕府ニ薦ムル者アリ、

日も暮れかかって遠来の客が帰ってゆく、いろいろな思いが泉のように湧いてくる。牛車が車の軋む音を残して帰ってゆく、太陽が巳に西に傾き、寒風が東西南北上下と四方八方に吹いている。忽ち林に花が満ろのが見える。」

また、云う。

「竹藪の間に、ひっそりと繋がるように両三軒の家がある。垣根の下の柚子の樹が自ら香りを発している。夕日が青苔を相照らしながら落ちてゆく。その後に東山に冬の三日月が刀で削ったように鋭く輝いている。」

同じく、「有感」に云う。

「若者は剣を学ぶ一書生であるが、幾回となく行ったり来たりを繰り返しているが未だその功が得られず、水上の明月のように悟り難いことに気づき、何日ここに止まって、どのようにすればよいのか、それすら分からない。」

思うに、叔父は伏見の河田伏水〔佐助と称す〕先生のところで撃剣を学び、その技芸の奥の手をことごとく究めてきた。その同門に孫福斎宮という者がいて、戯れに伊勢音頭を演じた。それが実は福岡貢である。(三字欠)かつて、叔父を訪ねてやって来た。その時に新雪が数尺も降り、その雪の上を二人が走り回るように剣を揮っていた。それは恰も平地を走るようであった。私の家は、文政の火災の前には、家の裏子窓枠の内側に東西四間ばかりの空き地があって二尺余の雪があった。二人はここで演武を行い、飛鳥のように宙に舞いながら相打ち合い、少しも乱れることが無かった。

祖母の妙順が、ある時、叔父の話が出たときに、それは叔父が武事に優れていたからだと云った。江戸の旗本の武士から求められて幕府に薦める者があり、

是レニ於イテ潛カニ江戸ニ至ル、演武場ヲ開キ、剣法ヲ以テ教エ、門者三百餘人ニ及ブト伝フ、偶〻ニ病ニテ還リ、越後梶屋敷ニ於イテ歿ス。時ニ二十六ナリ。

叔父鷲橋君〔名ハ有祥、玄俊ト称シ、又、鉄研真人ト号ス〕、池田錦橋〔瑞仙ト称ス〕先生ニ学ブ、其ノ善行ハ修三堂茶話ニ載ル。鷲橋ノ男、帆斎君〔名ハ敬之、字ハ吉幼、猪吉ト称シ、後ニ玄俊ト称ス〕浪華ノ三井棗洲〔名ハ善之、字ハ文卿、玄蕃ト称ス〕先生ニ学ブ。其ノ婦ルヤ、棗洲先生送ルノ序アリ、文長クシテ録セズ。

渡辺知足〔字ハ叔富〕送別ニ云フ。

『柳花飛ビ石榴紅ヲ盡シ、北ヲ望ミテ君嗟キ越中ニ返ル、落日ニ暫ク長命ノ酒ヲ酌ム、渡口ニ一帆ガ風ニ促サレテ来ル。』

文政七年、病ミテ家ニテ歿ス、時ニ年二十二、遺稿一巻アリ、今ハ佚ス、他日ニ追録ニ当タルベシ。明年ノ中秋ニ、同社ノ諸子、陸舟楼ニ会シテ之ヲ祭リ、各詩ニ賦ス。

沢田周謙〔早雲ノ男、龍岱ノ兄〕詩ニ云フ。

『君ヲ憶ヒ悼傷シテ涙ノ流レル如シ、此ノ夜楼中ニ旧游ヲ感ズルニ、

このことから密かに江戸に出ていった。そして演武場を開き、剣法を教え、その門生が三百余人にも及んだという。たまたま病のために還り、越後の梶屋敷で亡くなる。時に二十六歳であった。

叔父の鷲橋君〔名は有祥といい、玄俊と称し、また、鉄研真人と号す〕は、医師の池田錦橋〔瑞仙と称す〕(江戸後期の医師で痘瘡の治療で知られ、後に幕府医学館で講義した)先生に学ぶ。その善行は、「修三堂茶話」に載る。鷲橋玄俊の息子の帆斎君〔名は敬之といい、字は吉幼、猪吉と称し、後に玄俊と称す〕は、浪華の三井棗洲〔名は善之といい、字は文卿、玄蕃と称す〕先生に学ぶ。その婦帰国する時に、三井先生が送った序がある。文が長いので、ここには記さない。

渡辺知足〔字は叔富〕が「送別」に云う。

「柳の花が風に飛び石榴の花がすっかり紅く咲いている。君が北を遠く見渡して嘆いて越中へ帰ってゆくので、日の落ちる夕暮れに暫く長命の酒を酌み交わす。別れの渡口に一叟の帆舟が風に促されるように近づいてくる。」

帆斎が文政七年に病気で家にて亡くなる。その時、二十二歳、遺稿一巻がある。今は無くなる。他日に追録したい。明年の中秋に、同じ社の仲間が陸舟楼に集まって、彼を祀りてそれぞれに詩を賦す。

澤田周謙〔早雲の息子、龍岱の兄〕が詩に云う。

「君を追悼し傷み悲しみ涙が流れるようにこぼれる。この夜に楼にきて以前に遊んだことが思い返され心にしみ込んでくる。

分明月十分興唯恨一人欠好傳津田半村詩云欲訪浮雲薤露幾況荷匹奈赴黄泉何岡父慈金蘭友別恨寂寞已一年金子観水詩云羊孫重二忽帰空弔慰今宵思不窮感涙沾巾懸眺望玲瓏明月似朦朧超願寺孤松名信成字義倩後二台厳詩云可惜光陰君水流憶君仙去又逝秋秋宵最一好時節欲慰吟情却起愁憑念寺懶外詩云蟲聲切切月娟娟更憶故人轉惨然毎歳一般今夜興風情不復似当年松田丁梦詩云良友豈圖早夭殤簷前細雨淚千行蟲声更助悽悽意空奉寸心一炷香浩齋老人詩云嗟子為孤従叔父勉承庭訓報殊恩家人未見憤

十分ニ明月十分ニ興ナレド、唯一人ノ好傳ノ欠ケルヲ恨ム。』

津田半村詩ニ云フ。

『浮雲訪レ薤露ノ縁ヲ欲シ、匹ガ鞠ニ沈ンデ奈ンゾ黄泉ニ赴ク、何ンゾ図ラズ交態金蘭ノ友、別レテ恨ミ已ニ一年ノ寥寥。』

金子観水〔名ハ進、字ハ盈科、原泉ト称シ、後ニ恕謙ト称ス〕詩ニ云フ。

『年ハ臻重ナルニ空ニ帰ル、今宵慰ヲ吊ルシテ思不窮ナリ、感涙巾ヲ沾シ眺望慟ク、玲瓏ナル明月朦朧ニ似ル。』

超願寺孤松〔名ハ信成、字ハ義倩、後ニ台厳ト号シ、今ハ隣泉ト号ス〕詩ニ云フ。

『光陰ハ水流ノ若ク惜シム可シ、君ノ仙ニ去ルヲ憶ヒ又秋ニ逢ウ、秋ノ宵ヲ第一ノ時節ト好ミ、吟情ヲ慰メント欲スルガ却ッテ愁イガ起コル。』

称念寺懶外詩ニ云フ。

『蟲ノ声ガ切切ト月ハ娟娟タリ、更ニ故人ヲ憶ヒ惨然ト轉ブ、毎歳ノ一般ニハ今夜ヲ興スルニ、風情ハ復タ当年ニ似ズ。』

松田丁梦詩ニ云フ。

『良友ガ豈ニ早クニ夭殤ヲ図ルヤ、簷前ノ細雨ニ涙千行、蟲ノ声ガ更ニ惨悽ノ意ヲ助ケ、空シク寸心ノ一炷ノ香ヲ奉ズ。』

浩齋老人詩ニ云フ。

『嗟、子ハ孤リ叔父ニ従イテ為シ、勉メテ庭訓ヲ承ッテ殊恩ニ報イ、

大村直子　画

月も明るく興を尽くして申し分ないのだが、ただ、恨みに思うのは、今は一人の好きな友がらが欠けていることである。』

津田半村が詩に云う。

『空に浮かび漂う雲の訪れを欲するように、はかなく薤の葉の上の露のように葬送の歌に乗って病に沈んだ友が、どうして黄泉の国に赴いたのであろう。なぜ、相談することもなく、互いに交わり親しく固く結ばれていた友が、別れて既に一年の時が流れるが、恨みはなお虚しく寂しいかぎりである。』

金子観水〔名は進といい、字は盈科、原泉と称し、後に恕謙と称す〕が詩に云う。

『年齢がこの上もなく尊いのに、再び空に帰ってゆく。今宵、慰め弔うが、思いが窮まることがない。感涙に頭巾を濡らし眺望も物憂いかぎりである。玉のように光輝く月明かりも、濡れた眼には朧げな月のようである。』

超願寺の孤松〔名は信成といい、字は義倩、後に台厳と称し、今は隣泉と号す〕が詩に云う。

『月日が、あたかも水の流れのように過ぎていくことを惜しむべし、君が世俗を離れてあの世の人となったことを憶い、また、秋の時節がめぐってきて、秋の宵こそ、もっともよい時節だと思い、歌心で自らを慰めようとするが、その思いとは別に寂しさが襲ってくる。』

称念寺の懶外が詩に云う。

『虫の声が切々と悲しく訴え、月は麗しく静かに照っている。そんな時に、さらに亡くなった人を思うと、ひどく悲しみに心が乱れて落ち着きを失う。毎年、通常であれば、こんな夜は、うち興じて楽しむのだが、様子が、どうしても今年は、いつもの歳のようには運ばない。』

松田丁梦が詩に云う。

『良き友が、どうしてこんなに早く若死にするのだろう。軒先に降る微かな雨に、誘われて涙が、頻りに流れる。さらに虫の声が、いっそう傷み悲しむ思いをつのらせる。空しい思いのまま、心から一本の線香を捧げて手を合わせる。』

浩斎老人が詩に云う。

『ああ、君は独り叔父を敬い慕って、つとめて家庭での親の教えを承って格別の恩義に応える。

家人ニ未ダ憤争ノ色ヲ見セズ、社友ノ誹謗ノ言モ問カズ、曾テ浪華ニ在ッテ疫ヲ逃レ、却ッテ閑埜ニ帰ッテ塵煩ヲ厭ウ、雲ニ乗ジテ歳ヲ問フニ幾ニ重ニ、空シク吾曹ヲ使テ夢ノ魂ニ返ス。』

帆斎ハ人ト為リ温順、老人ノ詩、當ニ小傳トナスベシ、称スル所癘疫ナリ、乃チ当年三日虎狼疫流行ス、浪華最モ劇シ、三井棗洲哭シテ云フ。

『北陸ノ雲ニ鴻ノ声惜シマズ、遠ク書信ヲ伝エ江城ニ到ル、開緘シ泣涙児ノ態ノ如シ、夫人ノ為ニ非ズシテ誰ノ為ニ傾ク。』

自注ニ云フ、津島玄俊君ノ凶計到ル、哀愕ノ至リ、賦ヲ以テ弔ウ。

三井檀橋（名ハ正之、字ハ伯亀、孝孺ト称ス）哭シテ云フ。

『好友ノ黄泉ニ赴クヲ聞キ驚ク、事ヲ掷シテ両眸ニ涙、泫然タリ、君今ニ去来シ何ゾノ所見、道編ガ往往ニシテ床邊ニ在リ。』

叔父ノ栗斎君（名ハ玄勇、又作玄、又子仁、又字ハ子禮、玄勇ト称ス）文政紀元歳晩ニ云フ。

『氷雪看エズ寒力微カ、荒園ニ手ニ種シ緑葱ニ肥ス、近来風気斯ク小ノ如シ、鑿ノ角ノ梅ノ香リガ飛ンデ鼻ヲ撲ツ。』

栗斎君ハ先君ノ弟、

家の者に未だかつて憤り争った様子を見せたこともなく、また、社の仲間からも誹謗の言葉を聞いたこともない。かつて難波にいた時、らい病を逃れて帰ってきたが、むしろ高岡に帰って、世俗の煩わしさを嫌っていた。今はその世俗を離れて雲に乗って去り、歳月を問いただしてみると、わずかにふたまわりが過ぎ、空しくわれわれをして熱い心に返らせる。」

帆斎の人柄はやさしく素直で、浩斎老人の詩が、正に彼の小伝に当たるものである。流行病というもので、その年の三日にコレラが流行して浪華が最も激しかった。三井棗洲が泣いて云う。

「北陸の雲の中に白鳥が惜しみなく鳴いている。遠くからの書信が伝えて、ここ城の渚にやって来たのである。手紙の封を開いてみると、涙が童の泣くさまの如く、はらはらと流れる。それは残された夫人の為ではなく誰の為に、こんなに泣くのであろう。」

自ら注して云う。津島玄俊君の訃報が伝えられて、驚愕の至りである。それで賦を以て弔う。

三井檀橋（名は正之といい、字は伯亀、孝孺と称す）が泣いて云う。

「黄泉の国に赴いた親しき友の訃報を聞いて驚くばかりである。すべてを投げ打って両の眼からはらはらと涙が流れる。君が去って今さらに、何んの思いがあろう。たまたまに、君の遺した編が、床の辺りに、ほつんとある。」

叔父の栗斎君（名は玄勇といい、また、作玄、また、子仁といい、字は子禮、玄勇と称す）が、文政元年に「歳晩」に云う。

「氷と雪もなく寒さが少し和らいだようである。冬の嵐で荒れた畑に手ずから種を蒔き、緑の葱に肥やしをやる。近頃は気候がこのように弱まったようである。まがきの角の梅の香りが飛んできて鼻を打つ。」

栗斎君は、私の父の弟で、

爭色。杜友不聞誹謗言。曾在浪華逃厲疫。却帰閑埜厭塵煩。乘雲問歳幾重二。空使吾曹夢返魂。帆斎曰為人温順、老人之詩、可以當小傳、所称當疫、乃當年三日虎狼痢流行、浪華最劇。三井棗洲哭云、北陸雲鴻不惜聲。遠傳書信到江城。開緘流涙如兒態。非為夫人誰為傾。自注云、津島玄俊君訃到、哀愕之至、賦以弔、三井檀橋（名正之、字伯亀、孝孺）哭云、驚聞好友赴黄泉。掷事両眸涙泫然。君去今来何所見。遺編往往在床邊。叔父栗斎君（名玄勇、又作玄、又字子仁、又字子禮、称玄勇）文政紀元歳晩云、氷雪不看寒力微。荒園手種緑葱肥。近来風氣如斯少。鑿角梅香撲鼻飛。栗斎君先君弟、

最長本草學、吟咏非所好、是以其詩甚少。文政四年病疫而歿。時年二十九、友人挽詩集為一卷、浩斎老人為之序曰、稱与蝸洲翁東林玄妙、宝樹懶外四師、誠所容斎龍齋元良敬周諸子交、優游唱和云云。蝸洲哭云、難將鴻臚寄幽冥。唯見孤墳秋草青。君是奇才誰不惜。能經最恨十年

最モ本草学ニ長ジ、吟詠ハ好ム所ニ非ラズ、是レヲ以テ詩ハ甚ダ少ナシ、文政四年病疫ニテ歿ス、時ニ年二十九、友人ノ詩集ヲ挽キ一巻ヲ為ス。浩斎老人之ノ序ヲ為ス、蝸洲翁ト東林、玄妙、宝樹、懶外ノ四師、誠所、容斎、龍斎、元良、敬周ト與ニ諸子交ワリ称シテ、優游唱和シテ云云ト、蝸洲哭シテ云フ。

『将ニ鴻臚幽冥ニアッテ寄リ難シ、唯孤墳ヲ秋ノ草青ニ見ルノミ、君ノ是レ奇才誰モガ惜シマザル。最恨スルハ能経十年ノ蛍。』

最光寺ノ東林（名ハ雪象、字ハ公鮮）哭シテ云フ。

『予、幼稚ニシテ君ニ句読ヲ受ク、回想スルニ此ノ詩ノ後半ニ、其ノ人ト為リヲ盡ス、君ハ最モ酒ヲ好ム、東林ハ愛飲セズ、第三句ハ実得ナリ。』

国分痴王（名ハ玄妙、字ハ太玄）哭シテ云フ。

最光寺東林（名雪象、字公鮮）哭云、年來吟社最相親。内外操心更不移。清夜逢君常戒酒。淨窓迎我共論詩。看書敏捷成功速。臨事殷勤然諾遲。永訣誠如失一臂。從今風月又誰与。国分痴王（名玄妙、字太玄）哭云、不向冥

最も本草学（和漢の薬物学）に優れ、吟咏は好む方ではなかった。それで詩は至って少ない。文政四年に悪性の流行病で亡くなる。その時、二十九歳。友人の詩集から挽いて一巻をつくる。これに浩斎老人が序を、次のように書く。蝸洲翁と東林、玄妙、宝樹、懶外の四師、それに誠所、容斎、龍斎、元良、敬周の皆さんと交わり、優遊唱和して云々と、蝸洲が泣いて云う。

『正に、大いなる師の札が死者の世界にいって寄りつくことができない。ただ、ぽつんと建つお墓が、秋の青草のところに見えるだけである。あなたの優れた才能は、誰一人として惜しまぬものはありません。いま、最も残念なのは長い年月、教わった詩経が、もう師から学べないことである。』

長光寺の東林（名は雪象といい、字は公鮮）が泣いて云う。

『私は、幼年の頃に、この叔父から句読の指導を受けた。いま、回想するに、この東林の詩の後半に連なる句には叔父の人柄が尽くされている。叔父は最も酒を好み、東林はお酒が好きでなく、第三句は事実に則して書かれたものである。』

国分痴王（名は玄妙といい、字は太玄）泣いて云う。

異泣哭来。靈床今日供樽罍。西方縱有無量樂。却欠人間般若杯。稱念寺嬾外哭云、君去墓前春草新。同盟今日[illegible]。[illegible]。半村哭云、結交風月好因緣。逝水之傷乍一年。今話旧游真似夢。不知何處接神仙。長崎浩斎哭云、研精多識笑時珍。

一病遂為泉下身。噫是從今涉山水。草名華號問何人。東林看花慣亡友。子仁云、可歎時光似急流。春風復作去年游。嬌桃依舊呈妍笑。吟友新亡欠唱酬。夢暗江村楊柳路。望遠山寺白雲頭。斜陽影裏蕭蕭西。不覺花愁我亦愁。

先考竹山先生（諱之恒、字子産、一号藤樹園、称玄逸。）

驚橋君之弟。栗斎君之兄。学山脇東海（名ハ約、字ハ子斑、道作先生、殊通脈理著。傷寒類症一卷、名家方類十卷、目録一卷、咏草十數卷。文政十年歿。享五十、江風明月吟云、乘月探春棹碧潯。江風吹醉興尤深。花含春露月明下。月吐清光花樹陰。水上落花翻泛泛。江邊孤月影沉沉。嘯風共酌篇舟裡。賦得江風明月吟。春日山居云、庭前苔緑石泉清。山上不聞笑語聲。終日黄鸝啼遠舍。飛來飛去自多情。竹山先生所藏天帝像。曾我暉一（真田平之進。所撰。東海先生讃云、生民罹疾苦。嬰草典醫方。宇宙盡尊仰。同塵万古光。）津島東亭、竹山先生門人、東亭本姓

『不向キニ冥冥ニ泣哭シテ来タリ、霊床ニ今日モ樽罍ヲ供エル、西方ニハ縦バ無量楽ガ有リ、却ッテ人間欠ケテ般若ノ杯。』

稱念寺ノ懶外哭シテ云フ。

『君去リ墓前ニ春ノ草新タ、同盟ガ今日ニ蘖蘖ヲ鹿ス、悲愁ニ豈ニ音ニ惜シミテ手ズカラ吟ズ、奈ンゾ医家ノ為ノ此人ヲ欠ク。』

南〔当時、未ダ津田氏ヲ贅セズ、故ニ南氏ト称ス〕半村、哭シテ云フ。

『結交風月ノ因縁ヲ好ミ、逝水ノ傷ミ一年乍、今旧游ヲ話スモ眞ニ梦ニ似ル、何処ノ神仙ニ接スルカヲ知ラズ。』

長崎浩斎哭シテ云フ

『研精シテ多識ニシテ笑ウ時珍シ、一病遂ニ泉下ノ身ト為ル、噫、今是レ従リ山川ヲ渉ル、草名花号ヲ問フ何人ゾ。』

東林、花ヲ看テ亡友子仁ヲ憶ヒテ云フ。

『歎ク可キ時ニ光急流ニ似ル、春風復タ去年ノ遊ビヲ作ル、嬌桃依旧ニ妍笑ヲ呈シ、吟友新タニ亡シ唱酬ヲ欠ク、江村ノ楊柳ノ路ガ梦暗シ、山寺ノ白雲頭ニ遂イテ望ム、斜陽ノ影裏ニ蕭蕭、花ニ止マズ愁イ我亦タ愁ウ。』

先考ノ竹山先生〔諱ハ之恒、字ハ子産、一ニ藤樹園ト号シ、玄逸ト称ス〕ハ

驚橋君ノ弟、栗斎君ノ兄、山脇東海〔名ハ約、字ハ子斑、道作ト称ス〕先生ニ学ブ、殊ニ脈理ニ通ズ、傷寒類症一巻、名家方類十巻、目録一巻、咏草十数巻ヲ著ス、文政十年ニ歿ス、年五十。江風明月吟ニ云フ。

『月ニ乗ジテ春ヲ探シ碧潯ニ棹ス、江ニ風吹キ酔興尤モ深シ、花ハ月明下ニ香露ヲ含ミ月清光ヲ吐キ樹影ニ花、水上ニ落花ガ翻リ泛泛、江邊ニ孤月ノ影沈沈タリ、風嘯キ篇舟ノ裡ニ共ニ酌ミ、賦ヲ江風ニ得テ明月ヲ吟ズ。』

春日山ニ居テ云フ。

『庭前ニ苔緑シ石泉清シ、山上ニ笑語ノ声無ク、終日黄鸝遠舎ニ啼キ、飛来飛去シテ自ズト多情ナリ。』

竹山先生ハ曾我暉一〔真田平之進ト称ス〕ノ模スル所ノ炎帝像ヲ所蔵ス。東海先生ノ讃ニ云フ。

『生民ガ疾苦ニ嬰レ、草ヲ医方ニ與エル、宇宙ガ尊ビ仰ギ盡シ、同塵ニシテ万古ニ光ル。』

津島東亭ハ竹山先生ノ門人ナリ、

『似つかわしくなく暗い様子で泣き叫んできたが、死者の霊前に今日も酒樽を供える。西方には、たとえば、阿弥陀仏の楽土があって、人間が亡くなっても、却って般若の酒の杯を。』

稱念寺の懶外が泣いて云う。

『君があの世に去って墓前に春がめぐってきて新たな草が、同じ行動をとることを約束した者が今日の日にそまつな供物を供える。悲しみと憂いにどうしても絶えきれず君の死を惜しみ手すから詩を吟ずるが、どうして医家にとって欠くことのできないこの人を見送ることになるのか。』

南半村〔当時は、未だ津田家に婿に入る前であったので南の姓を名乗っていた〕が泣いて云う。

『風や月を素材として詩をつくる交わりを結んで、それをよき拠りどころとしてきたが、帰らざる人となって、その悲しみも、忽ちにして早一年、いま、旧交の遊びを語っても真実夢のようである。君が人間世界を抜け出して何処の不老長寿の世界に遊んでいるのか分からない。』

長崎浩斎が泣いて云う。

『専ら詳しく調べて多くを識る君は笑う時が珍しいくらいであった。それが一病の為に泉下に身をおくこととなり、悲しいことに、今これより黄泉への山川を渉ることとなる。悲しい思いを抱いて君の名号を尋ね来る者は何人いるだろうか。』

東林が、花を看て亡き友の津島子仁を憶って云う。

『この悲しむべき時に光が急流を見るようである。春の風が去年の遊びへと回想させる。艶かしい女が昔のまま艶かしい笑みを見せている。吟する友を今失い、詩歌のやりとりする友を失う。川の辺の村の柳の道が薄暗く夢のようにぼんやりしている。白雲のかかる山寺に迷い込んで遠くを望むと、夕陽の光の中に心のうちでは静かに雨が降っている。花に止まることなく悲しみが次から次へと湧いてくる。』

今は、亡き私の父の[illegible]（諱は之恒、字は子産、一に藤樹園と号し、玄逸と称す）は、

驚橋君の弟であり、また、栗斎の兄である。実験医学の先駆者の山脇東海（名は約といい、字は子斑、道作と称す）先生のもとで学ぶ。殊に脈理に通じていた。傷寒類症一巻、名家方類十巻、目録一巻、咏草十数巻を著作する。文政十年に七くなる。五十歳であった。「江風名月吟」に云う。

『月に誘われて春を探しに紺碧の大川に竿をさして舟を浮かべる。川風が吹いて酔い心地がこれ以上にないくらいに深みを覚える。月明かりの下に花が香るような露を含み。月の吐く清い光に木陰の花が見え、水面に花が翻っては落ちて浮かび漂っている。川辺にしょんぼりと月の影が映り、奥深く物静かなさまである。風が嘯くなか小舟の中でお互いに盃を酌み交わし。川風に賦を得て明月を吟ずる。』

「春日山に居て」に云う。

『庭先の苔が緑して石に囲まれた泉が清らかである。ここ山の上には人の気配を伝える声もなく静まり返っている。終日鶯が遠くの家の辺りで啼き、飛び来ては、また、飛び去り、自ずと心に感ずることが多い。』

竹山先生は曾我暉一（真田平之進と称す）の模写した炎帝像を所蔵していた。その像図の賛に山脇東海が云う。

『人民が苦しい病気に罹り、嘗て草で病気を直す方法を与え、宇宙が尊び仰ぎ尽くし、俗世間と調子をあわせて永久に光りつづける。』

津島東亭は、竹山先生の門人である。

渡辺氏ナリ、養順ノ子、曾テ富山
山侍医ノ木村東詮ノ女婿トスル以養順微
賤ナルヲ欲セシガ、養
順ガ微賤ナルヲ以テ東詮ノ門地ニ相敵セズ、先
君ニ義弟トスヲ乞フ、遂ニ東詮ノ婿ト成リ、
因リテ木村氏ヲ冒ス、北游詩草附録ニ木村東亭
ト称スルハ是レナリ。資質軽浮ニシテ是レヲ以
テ父子諧セズ。去リテ七尾ニ寓シ、又氷見ニ寓
シ、後金沢ニ寓シ、遂ニ高岡ニ来タリテ住ス。
其ノ木村氏ヲ去ルヤ、當ニ本姓ニ復スベニ漫リ
ニ津島氏ヲ冒ス者ナリ。

浩斎老人、東亭ノ六十ヲ賀シテ云フ。

『耳順ニ至ッテ君ニ聞ク、烏兎ノ遷ルヲ
浩嘆シ、人鶴亀ヲ以テ賀シ、或イハ神仙ニ
比シテ祝ウ、皆是レ旧套ヲ語リ、百首一篇
ノ如シ、我常ニ尚眞率ニシテ、寿言亦タ
淡然トス、只願ワクハ十年後、心従リ欲ス
ル年ニ、主客倶ニ恙無ク、若簡ノ筵ニ再開
スルヲ。』

先君ノ交友ノ中、最モ親シキ者ハ超願寺ノ其
葉、長崎蓬洲、藤村鳥翁、栗田花岳、大橋侗
斎、長楽寺ノ為楽菴ト為ス。蓬洲ト侗斎ノ詩ハ

老人賀東亭六十云、聞君至耳順、浩
嘆烏兎遷、人賀以鶴亀、或祝比神仙。
皆是舊套語、百首如一篇、我常尚真
率、寄言亦淡然、只願十歳後、従心所
欲年、主客倶無恙、再開若簡筵。
先君中年文章、親者、超願寺其葉、
長崎蓬洲、藤村鳥翁、栗田花岳、大橋
侗斎、長楽寺為楽菴、蓬洲侗斎詩、

この東亭の本姓は、実は、養順の子で渡辺姓である。かつて富山藩の侍医の木村東詮の娘婿となることを望んだが、当時、養順の身分が低かったので門地がつりあわず、父の義弟とすることで願いがかない東詮の家の婿となる。それで木村の姓を名乗ることになる。「北游詩草」の附録に木村東亭とあるのが彼である。資質が、やや軽薄なこともあって義父との折り合いが整わず、木村家を去って七尾に住した。また、氷見に住し、後には金沢に住み、最後に高岡にきて住んだ。木村家を去った時に、自分の元の渡辺姓に戻るべきなのに津島姓を名乗っているのである。

浩斎老人が、東亭の六十歳を賀して云う。

『六十歳を迎えて君に聞く、月日の過ぎ去るのが早いことを大いに嘆いている。人々が鶴亀でもってお祝いし、或いは不老不死の仙人におもねてお祝いする。皆これはありきたりの語らいである。百首一篇の如くで、いえば、通り一遍のようなものである。私はいつもなお正直で飾り気のないひたむきさを大事にしている。その点からも祝い事はあっさりとしたい。ただ願わくは十年後の年には、主人と客が共に恙なく、いずれかの席で再開することを心より願い求めている。』

亡き父の交友の中で最も親しき人々は、超願寺の其葉、長崎蓬洲、藤村鳥翁、栗田花岳、[一二]大橋侗斎、長楽寺の[一三]為楽庵たちであった。

前巻既著録、鳥翁花岳能俳句、其葉
為楽菴好和歌、前年丁為楽菴某忌
辰、其子民部卿、西勝寺、金沢、訪予、予賦
詩云、隔開先君手澤書、中得
上人雙鯉魚、墨痕淋漓筆勢穩、数行
文字意有餘、已想先君平素事、情与
上人最深交、来往不厭閭里遠、且往
且来厚交誼、当時浩也猶記憶、時々
在側分明記、上人為人温淳風流
好事是天真、于花于月吟倭歌、往往
愛茶、會其倫、嗚乎如今非無愛、茶吟
倭歌者、風趣絶不似當年、居諸逝
矣不可追、潸然収巻涙如瀉、
亡兄橋東君、諱俊字、遂資性英邁、書
尤遒美、殊嗜酒、惜哉年不盈三
十而歿、浩斎老人哭云、叔兮姪兮相

前巻ニ既ニ著録ス、鳥翁ト花岳ハ俳句ヲ能ク
シ、其葉ト為楽菴ハ和歌ヲ好ム。前年ニ為楽菴
ノ某忌辰ニ丁リ、其ノ子ノ民部卿〔西勝寺ト称
ス、金沢ニ住ス〕広ク詩歌ヲ募ル。予、詩ニ云
フ。

『偶ニ先君ノ手澤書ヲ開キ、中カラ上人ノ
雙鯉魚ヲ得ル、墨痕、淋漓ニシテ筆勢穏ヤ
カ、数行ノ文字ニ意有餘タリ、先君ノ平素
ノ事ヲ回想シ、上人ニ與エルノ情、最深ニ
至ル、来往シテ閭里ノ遠カナルヲ厭ワズ。
且ツ往キ且ツ来タリ交誼厚シ、当時、佶也
尚、鮮能ナリ、時々存側シテ分明ニ記ス、
上人ノ人ト為リ尤モ温淳ニシテ、風流ノ事
ヲ好ミ是レ天眞タリ、花ヲ月ヲ和歌ニ咏ミ、
往々ニ茶会ヲ愛シ和歌ヲ咏ズル者、無キ
嗚乎、今、茶ヲ愛シ、風趣絶エ当年雅ニ似ズ、
ニ非ザルガ如シ、居處逝キテ追フベカラズ。潸然ト巻ニ収メ、
涙瀉ノ如シ。』

亡兄ノ橋東君〔諱ハ俊、字ハ遂夫、嚴俊ト称
ス〕資性ハ英邁ニシテ、書ハ尤モ遒美ナリ、殊
ニ酒ヲ嗜ム、惜シイ哉、年三十ニ盈タズシテ歿
ス。浩斎老人哭シテ云フ。

蓬洲と侗斎は詩を好み、この二人の詩は、既に前巻に表記した。鳥翁と花岳は俳句をよくし、其葉と為楽庵は和歌を好んだ。前年の為楽庵のある忌日にあたり、その子の民部卿〔西勝寺と称し、金沢に住す〕が、広く詩歌を募った。その時、私は、その詩に次のように云った。

『たまたま、父の慣れ親しんだ手垢のついた書を開いてみると、その中に上人からの手紙が挟み込まれていた。墨痕が水の滴るようで筆勢も穏やかである。数行の文字を目にしただけで、その文意にあり余るものがある。父の平素のことを回想し、上人に対して抱く父の情が最も深いものであったことを思う。二人は村里遠く離れていても往き来を厭うことなく、共に行ったり来たりして厚く親しい交わりを結んでいた。当時、私は、未だ歯の抜け変わる年頃の子供であったが、時々、その傍にいてハッキリと記憶にとどめている。上人のお人柄は、とりわけ優しく素直な方であった。風流ごとを好み、飾ることもなく、本性からごく自然のままのものであった。花や月を求めて和歌を詠み、折々に茶会を愛し、それを人の道としていた。

ああ、今は茶を愛し、和歌を詠む者、無きに有らざるが如し、風趣が絶えて、この節では雅びの情が無くなっている。月日がゆき過ぎていって、今更、追いかける術もないことである。ひそかに父の書に収めて、涙が注ぐようにこぼれる。』

亡くなった兄の橋東君〔諱は俊、字は遂夫、嚴俊と称す〕は、資性において才能、知識の優れた人であった。なかでも書はもっとも強く美しいものであった。お酒が大好きであった。惜しいかな、三十歳前にして亡くなってしまった。浩斎老人が泣いて云う。

後先。英才扶我是何縁。弱齢未卅皆仙去。俱會鷹山一處泉。琴岳哭云、吟社變遷詩夫律。蹉壇零落酒酣行。君有古方藥註適意。鈔録之著、橋東居集一卷、豚児子又所輯録、

橋東居集中、美不勝收、摘其尤者、五古如水亭観螢云、超凉無月夜。覩螢水亭中。珠撒幾千顆。星流一陣風。咽咽又鳴鳴。幽窓柳橋東。有人忽歌曰。妾身與彼同。有口不能訴。夜夜焦其躬。七古如題画云、山崢嶸。水回縈。山如佛頭髻塊。秀。水如鏡面。[illegible]清。下有茅屋五六箇。一半傍山。一半瀛。橋可以通幽客。如何無人作吟行。七律如聞雁云、世務営営秋又冬。長嗟連夜五更鐘。夢為萬里関東客。身是廿年溪北農。壯志同林間葉委。白毛下砌興霜濃。逍遥何事来茲地。水緑沙明為汝供。訪北湖云、湯脆摩頂訪舊盟。相逢相喜十分情。多時閑話與茶熟。幾陣微風吹體清。白菊鮮鮮有香送。丹楓燦燦向窓横。欲帰預約鏡山畔。一両日中探菊行。七絶如春暁云、煙暖林園暁色融。黄鸝宛轉五更風。雨妍相闘小樓外。斜射梅花月一弓。秋日閑居云、尤木蕭條網逗斜。一般紅遠野人家。生憎昨夜風兼雨。落葉賽於惜落花。皆有清微淡遠之音、其他名句、如秋日偶成云、窓閑良學壁鈎帖。湖上時嘗数口魚。游古城云、連環峯嶺猶籠緑。空闊平田已作黄。又如臨下客置六大洲。雖一時戯語、

大村直子　画

「俳諧　画讃百類集」

『叔父姪分ガ相後先ニ、英才我ヲ扶ケ是レ何ノ縁、齢未ダ卅ニ去リ皆仙ニ去ル、鷹山ノ泉ニ倶会一処スル。』

琴岳哭シテ云フ。

『吟社ガ変遷シテ詩ノ律ヲ失イ、壇ガ零落シテ酒ニ騒ギ酌行ス。君ニ古方薬註ナル意ニ適フ鈔録ノ著アリ。橋東居集一巻、豚児子ノ輯録スル所ノ文。』

橋東居集ノ中ニ美ヲ収ムルニ勝レズ、其ノ尤モナル者ヲ摘ス。

五古（五言古詩の略称）水亭観蛍ノ如シニ云フ。

『凉ニ趨シテ月ノ無イ夜、水亭ノ中ニ蛍ヲ観ル、珠ヲ撒シテ幾千ノ顆、流星ニ一陣ノ風、咽咽ト又鳴鳴トシ、幽ニ柳橋ノ東ニ聴ク、人有リ忽チニ歌イテ曰ク、妾ノ身彼ト與ニ同ジ、口有リテ訴エルコト能ワズ、夜夜ニ其ノ躬ヲ焦ス。』

七古題画ノ如シニ云フ。

『山崢嶸ニシテ水回縈タリ、山仏頭ノ如ク髻塊ニ秀デ、水鏡面ノ如ク玲瓏トシテ清シ、下ニ茅屋ガ五六箇有リ、一半ガ山傍ニ一半ガ瀛ニ、低イ橋ハ幽客ヲ以テ通スベク、如何ニモ人無ク吟ヲ作シテ行ク。』

七律（七言律の略称）聞雁ノ如シニ云フ。

『世務営営秋又冬　長嗟連夜五更鐘
弟為万里関東客　身是廿年溪北農

『叔父、姪が、優れた才能をもち私を扶けてくれたが、これは何かの因縁によるものだが、相前後して齢の三十にも満たないのに、皆、仙界へ去っていってしまい。冷土に往生して黄泉の国の鷹山にみんながともに一緒に集まっている。』

琴岳が泣いて云う。

『吟の結社が変遷するうちに詩の律を失い、仲間が酒に落溺れて騒ぎ、次第に欠けてゆく。兄には古方薬註という意に適った抄録の著がある。橋東居集一巻は、豚児子なる私が集めて録して文にしたものである。』

「橋東居集」は、美を整えるという点では優れたものとは言い難い。その内にも最もよいものを摘んで記す。

五言古詩の「水亭観蛍の如し」に云う。

『涼しさに誘われて月の無い夜に水亭の中で蛍を観る。珠をばらまいたように無数の粒が光っている。流れ星が流れたかと見るや、ひとしきりの風が吹いている。その風は、咽々と咽ぶように、また、鳴々と悲しむが如くに花街の東から物静かに聴こえてくる。途端に誰かがいて歌っていう。わらはと彼は、一身同体の仲、ただ、人の口が煩いので訴えることもかなわず、夜々、その身を焦がしていると。』

七言古詩の「題画の如し」に云う。

『山が険しく重なるように連なり、川が山を取り巻くように迂っている。山の姿が、如何にも仏頭を見るかのように高く秀でて聳えている。水は鏡の面のように透き通るように輝いている。川下に五六軒の茅葺きの家があり、半分が山の脇に半分が沢のほうにある。低い橋は隠者を通るに似つかわしく、如何にも人一人いないところで、つい吟じながら行くことになる。』

七言律の聞雁の如しに云う。

『世務営営秋又冬　長嗟連夜五更鐘
弟為万里関東客　身是廿年溪北農

北湖ヲ訪ネテ云フ。

『偶ニ塵煩ヲ脱シテ旧盟ヲ訪ネ、相逢相喜シテ情十分、多時茶熟ト與ニ閑話ス、幾陣ノ微風體ト共ニ清シ、白菊鮮鮮トシテ香有リ、リヲ欲シナガラ鏡山ノ畔ニ預約シテ、一両日中菊ヲ探シニ行ク。』

七絶（七言絶句の略）春暁ノ如シニ云フ。

『煙暖ガ林園ノ暁色ニ融ケ、黄鸝ガ五更ノ風ニ宛転シ、両妍小樓ノ外ニ相闘ウ、梅花ニ一弓ノ月ガ斜射ス。』

秋日閑ニ居テ云フ。

『尤木蕭條トシテ細逗ニ斜シ、一般ニ江ガ野人家ヲ遶ル、生憎ノ昨夜ノ風ニ兼ネテノ雨、落葉ニ惜シムラクハ落花ガ賽ス。』

皆、清微淡遠ノ音アリ、其ノ他ニ名句ナリ。

秋日偶成ノ如シニ云フ。〔詩は略ス〕

古城ニ游ブニ云フ。

『群嶺ヲ連環シ猶緑ガ籠リ、空ハ闊ニシテ平田已ニ黄ヲ作ス、又臨下ニ六大州ヲ安置スル如シ。』

一時ノ戯語ト雖モ、

「壮志同林間葉委　白毛下砌興霜濃
逍遥何事来茲地　水緑沙明為汝供」

「北湖を訪ねて」に云う。

『たまたま世間の煩わしさを脱して旧知の友を訪ねる。お互いに喜び合って十分に旧交を温める。長い時を茶を煮て共に静かに話を交わす。ひとしきり静かに爽やかな風が吹いて身体に清々しく感じられる。庭には白菊が鮮やかに咲き香りを送っている。真っ赤な楓がきらきらと光って窓先の横にある。帰りたいとしながらも鏡山の辺に前もって約束して二三日の間、コケを探して送ぶ。』

七言絶句の「春暁の如し」に云う。

『暖かくなって庭の林が煙るように明け方の景色に溶け込んでいる。鶯が午前の四時の風にゆるやかに舞って、美しく艶かしい二羽が小さな樓の外で相闘っている。梅の花に弓張りの月が斜めから射している。』

「秋日閑に居て」云う。

『秋になって葉をすっかり落とした木が細く斜めに連なる小路に居並んでいる。何処でも極く自然に見られる景色のように川が野や人家を巡って流れている。生憎の昨夜来の雨風で、落ち葉と賽子を競うように、惜しむらくは花も沢山散っている。』

皆、いずれも清らかで気高く、深く広々とした音があり、加えて名句である。

「秋日偶成の如し」に云う。

『窓閑良学壁鈎帖　湖上時嘗数口魚』

「古城に游ぶ」に云う。

『群れなす峰が輪のように連なり、なお、緑に籠もっている。空は広くおおらかで平らな田は已に黄金色をなしている。古城は、恰も眺下に六大州を据えたようである。』

一時の戯れを語ると雖も、しかし、

而可想見其胸宇矣。

橋東君次道齋偶成云、雁聲頻促居人淚、冷氣可臻羈客襟。予時客於荏土、同胞四情懷、筆不能盡、本詩之潸然、予丙申春、寄家兄云、郷關一去已三年。渺渺江山里隔千、多少苦辛唯自嘆、幾重懷抱有誰憐、新芳春美轉傷思、舊枕夜寒不易眠、若載歸鴻

人語得、當時此事報君還。

天保辛卯、予遊于江戸、入増島蘭園先生之門、留学三年、此間毎月與諸子以詩會于亀井戸大□菴、一日與奈須柳邨先生、武田道安君、赴會而帰、過亀井橋、柳邨先生唱第一句云、仰見蜻蛉印爪痕、道安君續之云、魂抱龍水過寒村、予足之云、

「俳諧　画譜百類集」

而シテ其ノ胸宇ヲ想見スベシ。

橋東君、道齋ノ偶成ニ次イデ云フ。

『雁ノ声ガ頻リニ居人ノ涙ヲ促シ、冷気ガ客ノ襟ヲ臻羈ス可ク、予ノ時ニ客ハ荏土ニ於イテ同胞ノ情ヲ懐キ、筆ニ触レテ流露シ、之レヲ読ミテ潸然タリ。』

予丙申（天保七年）ノ春、家ノ兄ニ寄セテ云フ。

『郷関ヲ一去シテ已ニ三年、郷郷トシテ江山千里ヲ隔テ、多少ノ辛苦ニ唯ダ自ラヲ嘆ク、幾重ニモ誰カ有ッテノ憐ミヲ懐抱ス、新芳春ニ美シク傷思ヲ転ズルガ、旧ノ夜寒ヲ被ッテ眠リ易カラズ、若シ鴻ヲ遣帰スルナラ人語ヲ得ル、當ニ将ニ此ノ事ヲ君ノ邊ニ報サム。』

天保辛卯（二年）、予、江戸ニ遊ブ、増島蘭園先生〔金之丞ト称ス〕ノ門ニ入ル、留学三年、毎月諸子ト與ニ詩ヲ以テ亀井戸ノ大□菴ニ会ス。一日奈須柳邨先生、武田道安君ト與ニ赴キテ会ス、而シテ帰リニ亀井橋ヲ過ギ、柳邨先生第一句ヲ唱シテ云フ。

『蜻蛉ヲ仰ギ見テ爪痕ヲ印ス』道安君ガ之レニ続ケテ云フ、『晩ニ水烟リ籠リテ寒村ヲ過ギ』予、之レニ足シテ云フ、

その胸のうちの大きさを想い見るべきものがある。

橋東君が、道齋の「偶成」に次いで云う。

『雁の鳴く声が、頻りに住んでいる人の涙を誘うように促す。冷たい空気が客の心にまで襲い及んでくる。前もっての柔らかい暖かい土の時に、客は、友達の真心を懐き、筆でもって自然のままに、隠すところなく書き認めておいたが、いま、それを読んで心が深く沈む思いである。』

私が、天保七年の春に、「家の兄に寄せて」云う。

『国もとを出でて既に三年の月日が流れる。遠く遥かに山川を隔てててこの地にきて、多少の辛苦をなめ、ただ、自らに嘆くばかりである。幾度も誰かがいて憐れみくれたらと心の中で思ったりする。新たに花の咲き匂う春を迎えてこれまでの悲しむ思いから立派に立ち直りたいと思うが、これまでの夜の寒さともいえるさまざまな思いをうけて容易に眠れないことである。もし白鳥を帰してやることができる、直に正にこの思いを人にも告げることができたら、この思いでいることを君の方へ報せたい。』

天保二年に、私は江戸へ遊学にでて増島蘭園先生〔金之丞と称す〕の門に入る。留まること三年、毎月、皆と一緒に詩づくりのために亀井戸の大□菴に集まった。ある時、奈須柳邨先生が武田道安君とお出でになってお会いした。その帰り道に亀井戸を過ぎたあたりで柳邨先生が、第一句を唱して云う。

『月を仰ぎ見て、捺印する。（爪痕を印すとは、捺印するということである）。これに続いて道安君がいう。

『夜の川面が煙るように籠もる中を寒村を尋ねる』私が、これに加えていう。

此時此景模難得、共倚橋欄詩仮魂。

壬辰春、従服部敬作（今、三郎左衛門、郎本閑才輔、子北山本元春、共遊鎌倉有湘中記程一卷、是歳秋与奈須玄竹、山本宗洪君及鹿堂得三、従小島葆素先生、時称喜菴、遊日光有日光紀游一卷、俱載詩数十首、今佚、未所得他日當補録

癸巳之歳、自江戸経東街道、游京師、發江戸云、書剣飄然遊学身、幾多風月墨江濱、即今不似北帰雁、却向南程作去人、過問遠津云、布帆風緊海煙晴、幾叠亂山頻送迎、一箇青樽傾未盡、舟師先報九華城。

四月入京師、時上子心竹、本閑才輔、亦在京師、才輔詩云、鼓棹風聲月

『此ノ時此ノ景を模スルハ得難シ、共ニ橋欄ニ倚リテ詩魂ヲ役ス』

壬辰（天保三年）春、服部敬作〔今、三郎左衛門ト称ス〕本間才輔〔今、山本元春ト称シ、今石動ニ住ス〕ヲ送リ共ニ鎌倉ニ遊ビ、湘中記程一巻アル。是ノ歳ノ秋、奈須玄竹、山本宗洪君及ビ鹿堂得三ト與ニ小島葆素先生〔時ニ喜菴ト称シ、后ニ春菴ト称ス〕ニ從イ日光ニ遊ビ、日光紀游一巻アリ。倶ニ詩数十首ヲ載ス。今ハ佚シ、他日當ニ補録スベシ。癸巳（天保四年）ノ歳、江戸ヨリ東海道ヲ経テ京師ニ遊ブ、江戸ヲ発シテ云フ。

『書剣ハ飄然タル遊学ノ身、幾多ノ風月ヲ墨江ノ濱、即今ハ北ニ帰ル雁ニ似ズ、却ッテ南程ニ向カッテ去ル人ト作ス。』

遠津ノ問ヲ過ギテ云フ。

四月ニ京師ニ入リ、時ニ上子心竹、本閑才輔モ亦タ京師ニ在リ、才輔詩ニ云フ。

『この時、この景色を形にとらえることは難しい、共に橋の欄干に寄りかかって詩心をはたらかせる」と。

天保三年の春、服部敬作〔今は、三郎左衛門と称す〕が、本間才輔〔今は、山本元春と称し、今石動に住す〕を送って共に鎌倉に遊び、「湘中記」一巻がある。

この歳の秋、奈須玄竹、山本宗洪君及び鹿堂得三と一緒に小島葆素先生〔時に喜菴と称し、後に春菴と称す〕に従い、日光に遊び、「日光紀游」一巻がある。倶に作った詩を数十首を載せる。今は無く、他日に補録に当たりたい。

天保四年の歳、江戸より東海道を経て京都に遊ぶ。江戸を出発して云う。

『書生はふらりと居所の定まらぬ遊学の身、あまた隅田川の辺で風流を楽しんできたが、只今は、北に帰る雁とは異なり、却って南に方向に向かって旅立つ人となる。』

遠津の問を過ぎて云う。

『布帆風緊海煙晴　幾畳乱山頻送迎
一箇青樽傾未盡　舟師先報九華城』

四月に京都に入る。その時に上子心竹と本間才輔もまた京都にいた。才輔が詩に云う。

色斜。移来孤榻眠窓紗。休言萬里関山遠。一夜身帰梦裡家。眺而才輔忍帰。予贈古調一篇。請其不能辭。録篇末云。高陽諸子若相問。為言信也在京師。依旧鹿狂猶未已。抛却儒冠今学聖。若問帰期又為言。自道学不成不帰。當時少年疎放之。乳象可笑。是歳秋九月。祖母病篤。因是帰省。

「俳諧　画譜百類集」

天保甲午年歳。予復遊江戸。入篠素先生之門。先生与松崎慊堂先生善。慊堂先生以籠雕詩。乞正。詩云。雕乎鳴呼雕。自古不為雌。雙晴爭日月。六翮能凌雲。一挙三万里。衆鳥徒紛紛。忽為籠中物。萬方不可脱。雷爪無所用。啄餌向人乞。卓犖懐中氣。如何能忍屈。春風又秋風。終年請フ汝ニ暫ク之レヲ勉メル、将ニ遭遇ノ期有リ、天既ニ此ノ物ヲ生ム、累在ッテ又幾時。

先生曰ク、雕乎鳴呼雕ヲ、雕乎雕乎雕ニ作リ、争日月ヲ烟争日ニ作リ、懐ヲ臆ニ作ル。且ツ曰ク、文選ニヨリ鳳鳥ノ賦ト云フ、請ヲ臆ヲ以テ対トス。」

戊戌（天保九年）ノ春、北小輔（名は由之）ト與ニ篠素先生ニ従イ、墨水ニ遊ビ、聯句ニ云フ。

『金波ガ練ル如クニ嫦娥ヲ篩カス』（篠）『一片ノ扁舟墨沱ヲ渡リ、縹緲ト江ガ烟ニ籠モリ遠クノ浦』（佶）『依微ナル漁火ガ平沙ヲ隔テ』（由之）『平沙阡陌ヲ句ヲ求メテ行ク』・・以下、聯句ヲ略ス。

（佶）第九句ニ、初メ慶歴郎官清徹骨ト作ル、

『寂寂タル風声ニ月色ガ斜シ、孤リ榻ヲ移シ来タッテ窓紗ニ臥ス、休言シテ万里ノ関山ヲ遠ク、一夜身ヲ梦ノ裡ニ家ニ帰ル。』

既ニシテオ輔忍チ帰ル、予、古調一篇ヲ贈リ、篇末ニ云フ。

『高陽ノ諸子若シ相問ハバ、言ノ為ニ信也京師ニ在ルト、依旧ニ鹿狂ニシテ猶未ダ已ニセズ、儒冠ノ拠ヲ却ケテ今ハ医ヲ学ビ、若シ帰期ト問ハバ又言ノ為トス、自ラ学ブ道ヲ成サザレバ帰ラズ。』

当時ノ少年ノ疎放ノ気象ヲ笑ウベシ。是ノ歳ノ九月、祖母ノ病ガ篤ク、是レニ因リテ帰省ス。

天保甲午（五年）ニ予、復タ江戸ニ遊ビ、篠素先生ノ門ニ入ル。先生ト松崎慊堂先生ト善シ、因リテ屢、謁スルヲ得ル。籠雕詩（籠の中の鷲の詩）ヲ以テ正スヲ乞フ。詩ニ云フ。

『雕乎鳴キ雕ガ呼ブ、古自リ群レヲ為サズ、晴レテ雙ニシテ日月ヲ争イ、六翮ニシテ能ク雲ヲ凌ギ、一挙ニ三万里、衆鳥ヲ徒ニ紛粉ニス、忽チ籠ノ中ノ物ト為ル、万ニ方ニ脱ル可カラズ、霜爪ヲ用イル所無シ、人ニ向キテ乞イ餌ヲ哺ム、卓犖ナル懐中ノ気、如何ニ能ク忍屈シ、春風又秋風、終年ヲ鬱ト定メル、

『寂しい風の音がするなか月の光が斜めに落ち、薄絹を張った窓の傍に独り長椅子を移し来たって臥す。休んでいるうちに遠く万里を離れた故郷に入る境をめぐる山を越えて、一夜わが身が夢のうちに故郷の家に帰る。』

間もなく才輔が忽ちに帰る。その時、私が古調の一篇を才輔に贈り、篇末に云う。

『高岡のみなさんから若し互いに問われれば、信也は、言いつけで京都にいるのだという。依然として元気だがそそっかしくて、なお、未だ目的を果していない。それどころかこれまでの拠り所とする儒者のかぶる冠を斥けて今は医学の方を学んでいる。若し約束の帰る期限だと問われれば、また、言いつけという。自ら学びの道を成さざれば帰らず。』

当時はまだ若く、気ままで締まりがなかった気立てをお笑いください。この歳の九月、祖母の病が重く、そのために帰省する。

天保五年に、私は、また江戸に遊学する。小島篠素先生の門に入る。先生と松崎慊堂先生が親しかったので、しばしばお逢いすることができた。籠雕の詩を作って正して頂くことを乞う。詩に云う。

『鷲が鳴き、鷲が呼ぶ。昔から群れをなさず、二羽のつがいで晴れがましく成長を争う。首、翼休、羽、両足の機能にすぐれ、雲をも凌いで、一挙に三万里をも飛び、諸々の鳥を徒に粉粉に砕く、その鷲が、忽ち籠の中のものとなり、決してどんなにしても抜けだせなくなり、白く鋭い爪も無用のものとなる。人のさずける餌を乞いつついている。この上なく優れたふところの気概を、どのようによく耐え忍んで我慢し、春秋の季節を通じて一年中、思うようにならないままにいるのだろう。

お前にお願いして暫くお前を見習って勉めたい。まさに、この世で出会う約束があって、天が既に、この優れた鷲という生物を生みなしたのである。代々を重ねて、いくばくの時が過ぎたのであろう。

先生が、仰るには、雕乎鳴呼雕を、雕乎雕乎雕に作り、争日月を烟争日に作り、懐を臆に作る。その上に、仰るには、文選により鳳鳥の賦と名付けて、請を臆をもって対にしなさい。』

天保九年の春、北小輔（名は由之という）と共に篠素先生に従い隅田川に遊び、聯句に云う。

『金の波が、月を練りあげるように欲しいままに揺らしている』（篠）『一片の小船が隅田川を渡ってゆく、川面が煙るように籠もり遠くの浦まで広がっている』（佶）『砂浜を遠く隔てて微かに漁火がぼんやりとしている』（由之）『砂浜や田の畦道を句を求めながら歩く』（篠）略約柳塘徐吟嘯　迫趂暗香尋野寺（佶）浸踐踈影渉荒坡　慶歴郎官誰比得　昌泰賢相奈讒何（篠）妍々明月雲容掩　灼々春花風毎多　幾許塵寰有歡樂　且逢良夜可酣歌（佶）林間相見不期友　笑把詩章嘱唱和（佶）第九句に、初めに、慶歴郎官清徹骨と作る。

時夜將半、遇宮戶得所、按寬素不相識也、問曰、公等何許人、先生戲云吾曹江戶近村者、又曰、公為誰、先生答以予名、又問為何先生云、乘月尋花、因學所得聯句誦之、至慶歷郎官清徹骨、令得所續之、得所吁喝之、卒不能成一句、告別而去、是歲夏病疫殆盡、病閒三宅昷亨君（小太郎）見訪、座間賦云、往事回頭總空、竹陰堂上坐春風、別來三載無他故、子善沈病吾善窮、蓋竹陰增島先生堂號、昷亨君、增島內君之弟也、丙申之春、有崎嶼之役、歲別于增島先生宅、第三句謂此事也、病後不堪無聊、謀諸山本學半（北山孫）、學半曰、游於總房之間、我為之介、於是泛海達於上總、逆海于房州、保田途中云、石橋茅店醉相過、憔悴人烟細逕斜、自入房州風氣異、村林無處不桃花、紙窗土壁有蓑笠、餘滴一卷、歸程至于上總金谷、宮田氏強留之、寓其金波樓、新井子恕（名忠、三太夫）、柳下子柔（名温、宗寛）、有事來共登錦山、歸飲于金波樓、夜明予先眠、賦云、一醉同歸日暮天、縱橫繙帙短檠前、今宵好似舊時樣、枕畔讀書聲裏眠、子恕蘭園先生之門人、子柔葆素先生之門人、皆為舊同門、己亥之春、歸于江戶、賦、叮嚀呈先生、先生和其韵云、逸生浮海去、無人監藥房、忽遭歸棹日、相伴入書藏、滿架香溢帙、討論究涵篇、倦來命尊爵、試

短檠

時ニ夜、將ニ半ニナラントス。宮戸得所〔寛司ト称ス〕ニ遇ウ、素ヲ相識ラザルナリ。問イテ曰ク、公等ハ何許ノ人、先生戲レテ云フ、我曹ハ江戸近村ノ者ナリ、又曰ク、公ハ誰ナリ、先生、予ノ名ヲ以テ答フ、又何ノ為ト問フ、先生ガ云フ、月ニ乘ッテ花ヲ尋ネ、因リテ聯句ノ得ル所ヲ誦シ、慶歷郎官清徹骨ニ至ッテ、之レニ續ク所ヲ得セシム、得ル所、吁喝シテ之ヲ久シクス、卒ニ一句ヲ成ス能ハズ、別レヲ告ゲテ去ル。

是ノ夏ニ疫ヲ病ミ、殆ド死ニ瀕スル、病閒ニ三宅昷亨君〔小太郎ト称ス〕ガ見訪シ、座間ニ賦シテ云フ。

『往事ヲ回頭シ総テヲ空ト作シ、竹陰堂ニ上リ春風ニ坐ス、別來シテ三載他ニ故無シ、子善沈シ窮吾ハ善窮スル。』

蓋シ竹陰ハ増島先生ノ堂号ナリ、昷亨君ハ増島内君ノ弟ナリ、丙申（天保七年）ノ春、崎嶼ノ役アリ、増島先生宅ニテ飲ミ別ル、第三句ハ此ノ事ヲ斥ケル。病後ハ無聊ニ堪エズ、山本学半（彦十郎ト称ス、北山ノ孫）ガ諸ニ謀リ、学半曰ク、総房ノ間ニ遊ベ、我之ノ為ニ介ス。

時に正に夜半になろうとしていた。その時、宮戸得所（寛司と称す）に遇う。葆素先生を見知っていなかった。それで問うて云うには、あんたらは何処から来られたのか。それに先生が戯れて答える。私どもは江戸の近村の者だ。また問うて、貴方は誰か。先生が、私の名前を使って津島佶だと答えられた。一体、何をしているのですか。先生が月に乗って花を尋ね、それでもって聯句の得るところを挙げて誦して、第九句の慶歴郎官清徹骨のところまでできて、さあ、これに続く句をと、求められた。そこで口を空けたまま、ああ、と暫く驚くだけで一句も得られずに、別れを告げて立ち去っていった。

この夏に流行病を患い、殆ど死に瀕するものであった。病床に三宅昷亨君（小太郎と称す）が見舞いに訪れた。座敷に賦して云う。

『過ぎ去った昔のことを回想し、総てが空しくなる。春の爽やかな風のなか竹陰堂に上って坐る。相別れて已に三年の月日が流れているが、特に変わったことがあったわけではない。久しぶりで逢ったことで、貴方は、心のわだかまりが解け、病の私は、十二分に快い気分にひたることができた。』

しかし、この詩の竹陰堂とは増島先生の堂の号である。昷亨君は増島先生の奥様の弟である。天保七年の春、崎嶼の役があり、増島先生宅で別れに飲む、第三句はこのことを斥けている。病後は、つれづれに退屈に堪えず。山本学半（彦十郎と称す、北山の孫）が、皆に謀り、学半の云うには、房総のあたりで遊ぼう、自分がその段取りをするからと。

是ニ於イテ上総ニ達シテ海ニ泛ベテ、遂ニ房州ニ游ビ、保田途中ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

此ニ游ビテ蓑笠餘滴一巻アリ、帰程ニ上総ノ金谷ニ至リ、宮田氏強イテ之ニ留メ、其ノ金波樓ニ寓ス。新井子恕〔名ハ忠、三太夫ト称ス、仙台ノ人〕柳下子柔〔名ハ温、宗寛ト称ス、相州ノ人〕ガ事アリテ来タリ、共ニ錦山ニ登ル、帰リ金波樓ニテ飲ム、夜ニ入リテ予先ニ眠ル、賦シテ云フ。

『一醉シテ同ジク帰ル日暮レノ天、短檠ノ前ニ縱横ニ帙ヲ繙キ、今宵好ミテ旧時ノ様ニ似テ、枕手ニ読書ノ声ノ裏ニ眠ル。』

子恕ハ蘭園先生ノ門人、子柔ハ葆素先生ノ門人、皆為ニ旧同門トナス。

己亥（天保十年）ノ春、江戸ニ帰リ。賦ヲ先生ニ呈ス、先生和シテ韵ニ云フ。

〔詩ハ略ス〕

そこで上総に行って海に舟をうかべて、房州にて遊ぶ。保田の途中にて云う。

『石橋茅店醉相過　憔悴人烟細逕斜
自入房州風気異　村林無處不桃花』

この遊びによって「蓑笠餘滴一巻」がある。帰りに上総の金谷にきて、宮田氏が強いて此処に留め、そこの金波樓に泊まる。そこへ新井子恕（名は忠といい、三太夫と称す、仙台の人）と柳下子柔（名は温といい、宗寛と称す、相模の人）が用事で来て、共に錦山に登る。帰りに金波樓にて飲む、夜になって、私は先に眠る。賦して云う。

『ひと酔いして日暮れの空を見ながら連れ立って帰り、短檠（ともしび）の前で縱横に書物を開いて読む。今宵は昔の時の様子に戻ることを好んで、手枕して声をだして書を読むうちに眠ってしまった。』

子恕は蘭園先生の門人で、子柔は葆素先生の門人で、このため皆、旧門人ということになる。

天保十年の春に江戸に帰り、賦を先生に呈す。これに先生が和して韵に次のように云う。

『逸生浮海去　無人監藥房　忽遭歸棹日
相伴入書藏　滿架香溢帙　討論究涵篇
倦來命尊爵

爾酒力長。對酌興情酣。陶陶入醉鄉。
笑問上池妙。定知窺垣墻。

是歳冬、橋東君病篤、因是帰、北呑花由之、送云、今宵斯送君。情緒奈紛紜。
應盡青樽酒。明朝隔白雲。後寄詩云、
東台明月墨川花。買醉幾回過酒家。
豈料匆匆忽分手。江雲渭樹各天涯。
偶爾詩成又與誰。旅窗寂寂獨相危。

遙知白雪擁山水。故園風光又一奇。
庚子之歳。有家子準（名貞繩、称玄平、筑後寄書云、新井子恕（後其兄豐吉於白石、予去年與子恕飲別于不忍池、因寄詩云、池亭喚酒談忱慨。言笑恍乎既過暮。豈料當時聲下劍。一朝報怨血淋漓。

大村直子　画

壬寅之冬、佐田筑水（称修平、筑後久留米人）來寓予家數日、談及奥州浮島、其事甚奇。予贈云、東窮奥羽割浮島。世若先生知幾人。全筑水會四琴岳坦坦亭、（琴岳名）席上以飲啄隨緣度歳華。為題予賦云、巳兒姹娜忽超歳。昨日能行今日言。我豈四方無志者。放歌一曲且開樽。蓋是歳亡巳太郎（今之彦俊、二歳也、全族津島如栢（名之成、称小右衛門、後称休作）性質直、不阿諛、為里老十數年、罷官而後、植菊自樂。男陶園（名之篤、称清五郎、殊能和歌。筑水□□□□□□□

此書一行アケズ

辛亥之歳巳。酉五死、有一奇事、詳見山道斎詩序。曰云、辛亥之秋、友兄北溪島君手開菊圃、植菊數十種、作藩

是ノ歳ノ冬、橋東君病篤ク、因リテ是レニ帰ル、北呑花（由之）送リテ云フ。
『今宵斯ク君ヲ送リ、情緒ハ紛紜ニ紊レ、応ニ青樽ノ酒ヲ盡ス、明朝ニハ白雲ガ隔タル。』
後ニ詩ニ寄セテ云フ。
『東台ニ明月アリ墨川ニ花アル、醉ヲ買テハ幾回モ酒家ヲ過グ、豈ニ料ガ匆匆ニ忽チ分手トナリ、江雲渭樹ニシテ各天涯、偶爾リシテ詩ガ成リ、又誰ニ與スル、旅窓ハ寂寂トシテ独リ危ヲ呼ブ、遙ニ山水ニ白雪ノ擁クヲ知リ、故園ノ風光又一奇ナリ。』
庚子（天保十一年）ノ歳、家ニ子準（名ハ貞繩、倉平ト称ス、豊前ノ中津ノ人）ノ寄セ書ニ云フアリ、新井子恕、復タ其ノ兄、白石ヲ讐トス、予、去年子恕ト與ニ不忍池ニテ飲別ス、因リテ詩ニ寄セテ云フ。
『池亭ニテ酒ヲ喚ビ忱慨ヲ談ズ、言笑恍シテ既ニ暮ヲ過ギ、豈ニ料ニ時ニ腰下ノ劍ヲ當テ、一朝ニシテ怨ミヲ報ジ血ガ淋漓タリ。』
壬寅（天保十三年）ノ冬、佐田筑水（修平ト称ス、筑後ノ久留米ノ人）

試賜酒力長　対酌興情酣　陶陶入醉鄉
笑問上池妙　定知窺垣墻』
この歳の冬、橋東君は病が重く、このため高岡に帰る。北呑花（由之）が送りて云う。
『今宵は、このように君を見送ることで感情が千々に乱れ、まさに樽酒を盡って気を紛らわせたが、明朝を迎えたところが白雲ともいえる君が遠くへ隔たっていった。』
後に詩に寄せて云う。
『隅田川を挟んで東には明月があり、西には花ともいえる賑わいがある。それに誘われて何軒も酒屋に立ち寄っては樽子で酒を買っては酔いが深まる。思いもかけず忽ち早々に手当てがすっかり酒手となってしまう。独りは渭水のほとり、独りは墨田川のほとりにあって互いに友を思い切ない情にかられる。たまたま、その時に、納得のいく詩ができあがるが、誰に贈ろう。旅宿に帰ったが、宿の窓が寂しく、たまらず独り盃を求めることになる。飲むにつれ、遙に山水が白雪を抱く景色を心に覚え、故郷の景色が、また、一つの幻のように見えてくる。』
天保十一年の歳、わが家に子準（名は貞繩といい、倉平と称す、豊前の中津の人）の寄せ書きがある。新井子恕は、その兄の白石を讐としている。私は去年、子恕と一緒に不忍の池で別れに飲んだ。それで詩に寄せて云う。
『池亭で酒を飲んで騒ぎ談論風発するうちに、酔いがまわってうっとりして既に一回りが過ぎ、どうしてか代金がわりに腰の刀を当てて帰り、一夜明けて怨みをそそいで血潮がにえたぎった。』
天保十三年の冬、佐田筑水（修平と称す、筑後の久留米の人）が、

予ノ家ニ数日來寓ス、談ジテ奥州ノ浮島ニ及ブ、其ノ事甚ダ奇ナリ。予、贈リテ云フ。（詩ハ略ス）
『東ノ窮マル奥羽ニ浮島ガ割ク、世ニ先生ノ知ル若ク幾人。』
同ジク筑水ガ田琴岳ノ担担亭（琴岳ノ亭名）ニ會シ、席上隨縁ニヨリ飲啄シ歳華ヲ度スルヲ以テ題ト為ス、予、賦シテ云フ。（詩ハ略ス）
蓋シ是ノ歳巳ニ巳太郎（今ハ彦俊ト称ス）二歳ナリ。
同族ノ津島如栢（名ハ之成、小右衛門ト称シ、後ニ休作ト称ス）性質ハ直ニシテ阿諛ヲセズ、里老トナリ十数年、官ヲ罷リテ後、菊ヲ植エテ自カラ楽シム。男ノ陶園（名ハ之篤、清五郎ト称シ、後ニ小右衛門ト称ス）殊ニ和歌ヲ能クシ、筑水□□□□□□□
辛亥（嘉永四年）ノ歳、児酉五死ス、一奇ナル事アリ、詳シクハ山道斎ノ詩ニ序シテ云フヲ見ヨ、辛亥ノ秋、友兄ノ北溪君、手ヅカラ菊圃ヲ開キ、菊数十種ヲ植エル、藩ヲ作リ、

私の家に数日来泊まっている。話が進むうちに奥州の浮島に及んだ。その事自体甚だ不思議なことである。私が贈りて云う。
『東の窮まる奥羽に散らばり浮かぶ浮島（松島）を先生のように知っている者が世に幾人いるだろう。』
同じく筑水が松田琴岳の担担亭（琴岳の亭名）にきて、その席上縁に任せて飲食し、歳華を度すると題して、私に賦して云う。
『巳兒姹娜忽超歳　昨日能行今日言
我豈四方無志者　放歌一曲且開樽』
しかし、この歳、すでに巳太郎（今は彦俊と称す）は二歳であった。
親戚の津島如栢（名は之成といい、小右衛門と称す、後に休作と称す）は、性質が素直で、おもねへつらうこともせず、町役の長老として十数年、役を退いて後、菊を植えて自ら楽しんでいた。子供の陶園（名は之篤といい、清五郎と称し、後に小右衛門と称す）は、特に和歌をよくし、筑水（七字欠）。
嘉永四年の歳、子の酉五が亡くなる。一つ不思議なことがあった。詳しくは山本道斎が詩に序して云ったものを見よ。嘉永四年の秋、友の北溪君が、手ずから菊畑を開き、数十種の菊を植える。まがきを作り、

作蓋、以殘花期至秋杪、黃白齊發、頗為美觀、次子酉郎、年甫三歲、常游蝶花畔、愛翫不已、年冬、蝶偶罹惡疫、落葉不齊、經旬而逝、殯、蓋既終、菊節亦過、人亡花萎、俱成夢境、島君之情、真可悲也、後數日、島君登菊圃、撤籬撤蓋、將為禦冬之計、乍有黃蝶一箇、翩翩來飛、留于殘蕊荒葉上、忽然而死、因謂此是吾兒愛花之魂化為胡蝶而來耶、不然、則此風霜凜寒之節、不宜有此物也、乃取黃蝶遺骸、副以詩一首、且詳記顛末、通告社友、請賦詩、余亦聞、不堪憮然、聊賦一律、以呈島君、併弔胡蝶郎之靈魂云、詩曰、愛菊人亡月末期芳魂化、

高岡詩話卷之五終

「俳諧　画譜百類集」

蓋ヲ作リ、以テ花期ヲ延ツ、秋杪（秋の末）ニ至ッテ、黄白齊発ス（そろってひらく）、頗ル美観トナス、次子ノ酉郎、年甫三歳、常ニ花畔ニ游嬉シ、愛翫シテ已マズ、冬ニ入リ来タッテ、偶、悪疫ニ罹ル、荏苒（日々が過ぎること）ニ旬エズ、旬（十日間）ヲ経テ逝キ、殯葬既ニ終ル、菊ノ節亦タ過ギ、人亡ク花萎レ、俱ニ夢境ト成ル、島君ノ情、真ニ悲シキナリ。数日後、島君菊圃ニ登リ、籬ヲ撤シ蓋ヲ撤シ、将ニ冬ヲ禦グノ計ヲ為サントス、乍チ黄蝶一箇アリ、翩翩ト飛来シ、残蕊荒葉ノ上ニ宿リ、忽然トシテ死ス、因リテ此レ是ノ吾ガ児ノ愛花ノ魂、化シテ胡蝶ト為シテ来ルヤト謂フ、然レド則チ此ノ風霜沍寒（厳しく凍りついて寒いこと）ノ節、此ノ物ノ有ルコト宜ベナラザル也、乃チ黄蝶ノ遺骸ヲ取ッテ、詩一首ヲ以テ副エ、且ツ詳シク其ノ事ヲ記シ、遍ク社友ニ告ゲテ、賦詩ヲ請フ、余亦タ之ヲ聞キ、愴然（悲しみ傷む）ニ堪エラレズ、聊カ一律ヲ賦シテ以テ島君ニ呈ス、併セテ胡蝶郎ノ霊魂ヲ弔イテ云フ。

『詩ニ曰ク、愛菊人亡月末期芳魂化』

高岡詩話巻之五。

覆いを作り、それでもって花の咲き揃う時期を待った。そして秋の末になって黄、白の花が、一斉にそろって開き、頗る美観を呈するものであった。次男の酉郎は年三歳、いつも花のほとりで嬉々として遊び、花を大切にもてあそび続けていた。それが冬になって悪い天然痘に罹り、日増しに癒えず十日を経て亡くなってしまい、葬儀も既に終わってしまった。菊の季節も、また、終わってしまい、菊畑には酉郎の姿もなく、花も萎れて無くなってしまい、共に夢見る境地ともいえるものであった。津島君の情は真実悲しいばかりである。数日後、津島君が菊畑に来て、籬を撤し覆いをはずし、今にも冬を迎える準備をしていると、突然、一匹の黄色い蝶が、軽く翻るように飛んできて、枯れはてた草葉の上に宿ったかとみると、突然死んでしまった。それでこの蝶が、わが子の花を愛でた魂が蝶と化して飛来したのでないかと云う。さりとて既に冬を迎えて厳しく凍りつくようなこの寒い季節に、こんな蝶を見ること自体納得できないことである。それで黄色い蝶の遺骸を手にとって詩の一首を副え、かつ、詳しくその事を記して遍く社友に告げて、詩を賦するよう請うた。

私もまた、これを聞き、悲しみ傷む思いに堪えられず、少しばかりの一律を賦して津島君に呈し、併せて胡蝶郎の霊魂を弔って、次のように云った。

『詩に、愛菊人亡月末期芳魂化という、菊を愛する人が亡くなり、亡くなる臨終に芳しい魂に帰っていった。』

高岡詩話巻之五。

高岡詩話巻之五

【読み下し文中の語句説明】

(1) 蜃吐気　蜃気楼のことで、古代では大蛤が、その吐き出す息で楼台、城郭などの情景を空中に描き出すと考えたので、このようにいわれた。
(2) 飛衞　飛んでくる矢、流れ矢のこと。
(3) 縱逸　足あと、ゆくえのこと。
(4) 美髯　美しい髯のこと。
(5) 後昆　昆も後ということで、のちの子孫。
(6) 不佞　自分を謙遜していう語で、不才、口べたということ。
(7) 沈痼　長患いのこと。
(8) 駟車　四頭立ての車。
(9) 華髮　白髮頭のこと。
(10) 慷慨　いきどうり嘆くこと。
(11) 六出　六出花ともいい雪の別称である。六花ともいう。
(12) 曲肱　肱をまげて枕の代わりに休むこと。
(13) 胡天　北のえびすの国の空。
(14) 蕭瑟　秋風が音をたてて厳しく吹くさま。
(15) 回首　振り向くこと。
(16) 鯨音　鐘の音のこと。
(17) 轔轔　車のきしむ音。
(18) 六吹出　東西南北、上下の四方八方から吹く風のこと。
(19) 筇間　竹藪のこと。
(20) 返景　夕日のこと。
(21) 蘊奥　学問・学芸の極意のこと。
(22) 畢究　悉く究めること。
(23) 傷悼　いたみ悲しむこと。
(24) 好侶　親しいともがらのこと。
(25) 臻重　この上もなく尊いこと。
(26) 娟娟　景色が静かで奥深いさま。
(27) 夭殤　夭死と同じで若死にすること。

【現代語訳文中の内容説明】

(一) 景山先生
佐渡元俊のことで、高岡の医者として、初めて法橋に叙せられる。

(二) 松岡玄達
恕庵ともいい、京都生まれの江戸中期の本草学者である。津島家に伝わる炎帝像の賛が松岡玄達の書であるのは、曾祖父の弟の彭水が松岡玄達に学んだことに由来している。

(三) 炎帝像
火をつかさどる神で、火の徳で王になったという神農氏。百草をなめて医薬を作ったといわれる。このことから医薬の神として祀られる。当時、高岡でも医薬の人々の結社を神農講と呼んでいた。

(四) 雪村
津島家に伝わる炎帝像が雪村の画とあるが、雪村とは、南北朝時代の五山の詩僧で、雪舟を慕って元に渡って学び、室町後期の画僧として個性の強い画風をなした。

(五) 建中湯（堅中湯）
漢方実用事典によると、堅中湯とは、薬名で、慢性的な胃潰瘍、胃炎のために腹力がなく、胃部のあたりを指でたたくと、溜まった水の音がし、食後に腹痛や吐き気、嘔吐をするなどの症状に用いる。胃潰瘍、十二指腸潰瘍、慢性胃炎、胃拡張症に有効な薬である。

(六) 津島元桂（北岳）
津島北溪の父の玄逸の兄の元桂が江戸に剣道場を開いて三百余人の門弟をもち、二十六歳の若さで亡くなっている。

(七) 村瀬栲亭
津島北岳が学んだという栲亭は、江戸後期の儒学者で京都の人。博学で知られ、詩をよくした。

(八) 池田錦橋（瑞仙）
江戸後期の医師で、痘瘡の治療で知られ、後に幕府の医学館で講義した。

(28) 一炷　一本の線香のことで、炷とは、線香のことで、禅宗では、座禅の際に一本の線香を炊いて、それが燃え尽きるのを座禅の一区切りとする。時間にして約45分である。

(29) 疫癘　流行り病いのこと。

(30) 開緘　手紙の封を切る。

(31) 泫然　涙をはらはらとこぼすさま。

(32) 鴻臚幽冥　鴻はおおとりともいうべき大いなる鳥、臚は札で、その方の札が幽冥を異にする世界にある。つまり亡くなってしまったということである。

(33) 蕊経　詩経の別名。

(34) 疾苦　悩み苦しむこと、難儀なこと。

(35) 耳順　六十歳のこと。孔子が六十歳になって天地万物の理に通じ、思慮や判断が熟して、他人のことを聞けば聞くにしたがって理解できたことから耳順という。

(36) 嘆烏兎遷　兎走烏飛というように、月日の過ぎ去るのが早いことの形容。兎が月で、烏は日である。従って、月日の早く過ぎるのを嘆くということである。

(37) 手澤書　手垢のついた慣れ親しんだ書ということ。

(38) 雙鯉魚　手紙のこと、客が二匹の鯉を置いていったので、その鯉を煮たところ、中から手紙が出てきたという故事に基づく。雙魚も同じことである。双鯉魚ともいう。

(39) 淋漓　水などのしたたるさま。元気や筆勢などの盛んなさま。

(40) 閭里　村里のこと。

(41) 齠齔　歯の抜けかわる年頃の子供のこと。

(42) 豚子児　謙遜して、未だ愚かな子兒めといったものである。

(43) 磊塊　石のかたまり、険しいさま。

(44) 五更　夜を五更に分けた第五の時刻で、今の午前四時、およびその前後二時間のこと。

(45) 宛轉　変化するさま、ゆるやかに舞うさま。

(46) 禿木　葉をすっかり落とした木。

(47) 縹緲　遥に遠くに見えるさま。

(48) 飄然　ふらふらとして居所の定まらないさま。

(49) 依旧　昔のままのこと。

(50) 六翮　首、胴体、羽、両足の六つの機能のこと。

(51) 紛紜　ごたごたに乱れるさま。

(52) 江雲潤樹　杜甫が春日懐李白の詩に「潤北春蔬江東日暮雲」と詠んだことから「江雲潤樹」でもって、遠方にある友を思う情の切実なことを意味することとなった。

(53) 阿諛　胡麻すり。

(54) 秋杪　秋の末。

(55) 斎発　揃って開くこと。

(56) 往苒　日々が過ぎること。

(57) 沍寒ノ節　厳しく凍りついて寒い季節。

(29) 津島玄俊（号が鷺橋）
修三堂湯話（高岡湯話）に、富田徳風の友として、その人と為りについて、決して他人の悪口をいわない徳について記されている。

(30) 国分痴王
伏木の光西寺の住職である。山本溪山が布施の圓山を訪ねた折に、光西寺で一泊し、痴王の世話になっている。溪山の「入越日記」に記されている。

(31) 津島竹山
津島北溪の父である。この父の兄弟、北溪の叔父に当たるのが、これまで出てきたように、元桂、玄俊（鷺橋）、父の玄蕙（竹山）、玄勇（栗斎）の兄弟である。父以外は、昔、若くして亡くなっている。

(32) 大橋倒斎
寛政・文化時代の学者の倒斎（本町の鷺塚屋）が京都の藪内の家元につき茶道を究め、高岡に帰り門弟に教え、斯道の隆盛をみていた。

(33) 為楽庵
横田町（百姓町）の長楽寺の十三世の住職である。その子、金沢の最勝寺の民部卿とともに藪内の茶道を極めていた。

(34) 五言古詩・七言古詩
通常、漢詩は、五言を一句、七言を一句として四句、八句で構成されている。古詩の場合は、句の数に制限がないのである。こうした五言古詩、七言古詩を略して五古、七古というのである。

前從リ邑中ニ詩人遊偶ス。詩佛先生ヲ最乗ト為シ、之ノ次ハ中島棕軒ト為ス、棕軒高岡ニ留リテ別レノ詩ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

「高岡詩話」補遺　北溪居士津島佶著

従前より高岡へ詩人が、次々に来遊して宿泊する。その中でも詩仏先生が最も回数が多い。その次ぎは中島棕軒である。その棕軒が高岡に留まった時に、その「別れの詩」に云う。

『客冬臨別自思量　縱得再遊經十霜
不商帰程遇大雪　羸馬蹭蹬滯僻郷
人春奮起強辞舎　氷山猶堅進無方
回轡還投前度地　桃花未開奈劉郎
幸是詩酒同盟侶　相逢欲尋旧歓場
各各争問有詩否　為媿奴背荷空囊
爾来埋首雪蛆似　冷盡老残文墨場
而今気蘊雖解凍　重待株兎痴耶狂
痴狂至此眞可笑　敢将通塞托彼蒼
行李又将明日発　面回分携一河梁
去者如風留者雪　眼前景情一水長
請君且罷陽關曲　只須為我唱滄浪』

北溪居士著

従前遊寓邑中詩人、詩佛先生為最尊、次之為中島棕軒、棕軒高岡留別詩云、客冬臨別自思量、縱得再遊經十霜、不商帰程遇大雪、羸馬蹭蹬滯僻郷、人春奮起強辞舎、氷山猶堅進無方、回轡還投前度地、桃花未開奈劉郎、幸是詩酒同盟侶、相逢欲尋舊歓場、各各争問有詩否、為媿奴背荷空囊、爾来埋首雪蛆似、冷盡老残文墨場、而今気蘊雖解凍、重待株兎痴耶狂、痴狂至此眞可笑、敢將通塞托彼蒼、行李又將明日発、面回分携一河梁、去者如風留者雪、眼前景情一水長、請君且罷陽關曲、只須為我唱滄浪。小引云、乙未春初發福光、再游高岡、意有所感賦、之示前日眷顧之諸詞盟、且以留別、

松下碧海（名暢、字仙雀）江戸人、天保庚子歲冬來寓丁梦宅、能詩畫、能画、宿山家云、溪雨蕭條睡未成、孤灯挑盡待天明、山中頼做飛泉響、免聽窓前蕉上聲。

江尻蕭松（名章啓、字左衛門、能州人、數來寓瑞龍寺、秋日過山家云、蹄頭初看老氣横、秋林秋果熟秋晴、山深未會帰牛下、過澗啼禽不識名。

上田龍郊、致仕不遇、屢來游邑中、專意於經濟、詩非其所長、松任駅別逸見方舟云、自解塵縛、老來益漫游、相逢松任下、分手栗津頭、以我西傾月

小引ニ云フ。

〔乙未（天保六年）春初メ福光ヲ発シテ、再ビ高岡ニ游ビ、意感ズル所アリ、之レヲ賦シテ示ス。前日ニ春、之レヲ顧ミ諸詞ヲ盟ス、且ツ留リテ以テ別ル。〕

松下碧海（名ハ暢、字ハ仙雀）江戸ノ人、天保庚子（十一年）ノ冬、丁梦宅ニ来寓ス、詩ヲ能クシ画ヲ能クス、山家ニ宿シテ云フ。〔詩ハ略ス〕

江尻蕭松（名ハ章啓、勇左衛門ト称ス）能州ノ人、數瑞龍寺ニ来寓ス、秋日ニ山家ニ過シテ云フ。〔詩ハ略ス〕

上田龍郊、致仕シテ遇セズ、屢邑中ニ来游ス、専ラ経済ヲ意フ、詩ハ其レ長スル所ニ非ラズ、松任駅ニテ逸見方舟トノ別レニ云フ。〔詩ハ略ス〕

短い「端書き」に云う。

『天保六年の春の初めに福光を発って、再び高岡に遊び、心馳せに感ずるものがあり、その思いを詩に賦して云ったものである。前日に春について思いをめぐらして諸々の詞を結んだ。そして留まった高岡に別れを告げるものである。』

松下碧海（名は暢といい、字は仙雀）は、江戸の人である。天保十一年の冬に松田丁梦宅に来て留まる。詩と画に優れていた。「山家に宿して」に云う。

『溪雨蕭條睡未成　孤灯桃盡待天明
山中頼做飛泉響　免聽窓前蕉上声』

江尻蕭松（名は章啓といい、勇左衛門と称す）能登の人である。度々、瑞龍寺に来て泊まる。「秋日に山家を過ぎて」に云う。

『蹄横初看老気横　秋林秋果熟秋晴
山深未會帰牛下　過澗啼禽不識名』

上田龍郊、官職を辞めたので遇えず。度々、高岡へ来て遊ぶ。専ら経世済民に思いをおき、詩の方は得意ではなかった。松任駅での逸見方舟との別れに云う。

『自解塵縛　老來益漫游　相逢松任下
分手栗津頭　以我西傾月

待他錦繡秋　別離非所惜　為爾片言留

榊原蘭處（名は典といい、字は子常、また、拙處と号し、三郎兵衛と称す）は、上田龍郊の弟で、書画に優れるとともに、詩が最も得意であった。「偶成」に云う。

『偶然問風趣　忽遇無語言　満地梅花影
仰看月一痕　徘徊浅水畔　夜深坐小軒
相対為一醉　壺盡傾乾坤　静黙有真意
此境如何論』

高沢菊澗（名は達といい、字は原夫、仙之助と称す）また、師弟に教え授けるために、度々高岡に来る。「桃源と題する図」に云う。

『借問当時幾葉孫　不知有漢晋無論
長城万里渾閑事　輸却洞前雲一屯
両岸桃花洞裡春　垂髫黄髮去逃秦
無端偶得漁翁口　傳語義呈以上人』

佐田竹水（名は直道といい、修平と称す）は、筑後の人である。天保十三年の冬に、私の家に来て数日泊まる。その人柄は、偉ぶって人に屈せぬ様さながらで、

榊原蘭處〔名ハ典、字ハ子常、又、拙處ト号シ、三郎兵衛ト称ス〕前ノ人ノ弟、書ヲ善クシ、画ヲ善クス、尤モ詩ハ善シ、偶成ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

高沢菊澗〔名ハ達、字ハ原夫、仙之助ト称ス〕又、數ニ邑中ニ至ル、師弟ヲ教授シ、桃源ト題スル図ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

佐田竹水〔名ハ直道、修平ト称ス〕筑後ノ人、天保壬寅（十三年）冬、予ノ家ニ數日來留ス、其ノ人ト為リハ骯髒（偉ぶって屈せぬさま）、

月待他錦繡秋　別離非所惜　為爾片言留

榊原蘭處（名典、字子常、又、拙處、三郎兵衛と称す）前人之弟、書善画、尤善詩、偶成云、偶然問風趣、忽遇無語言、滿地梅花影、仰看月一痕、徘徊淺水畔、夜深坐小軒、相對為一醉、壺盡傾乾坤、靜黙有真意、此境如何論

高澤菊澗（名達、字原夫、仙之助）又數至邑中、教授子弟、題桃源圖云、借問當時幾葉孫、不知有漢晉無論、長城万里渾閑事、輸却洞前雲一屯、兩岸桃花洞裡春、垂髫黃髮去逃秦、無端偶得漁翁口、傳語義呈以上人

佐田竹水（名直道、修平、筑後人）天保壬寅冬來留予家數日、其為人骯髒音吐如雷、題画云、二人同行絶澗底、暮山空濛風雪餘、一人傾笠望碧虛、清溪路轉三百曲、峨峨雪峰壓頭顱、頗有吾行前日致、鳥海山兮天一隅、曾與有孚同登眺、風雲暴起奪道途、雪上顧然四五仆、兩人狼狽生氣無、長杖忽然下大麓、遥望雪峰在天衢、歸來此游不敢語、一念至胸業生膚、世上何人我相識、写出當年行旅図、二客裝色粗相似、青蓑有孚白蓑吾、隱岐雜咏云、自注、大山雪雨、鯨背千山莫大焉、奇雲終日不離巔、忽逢雷雨一聲吼、黑盡朝鮮韓鵲天、又云、自注、火山絶頂、讃岐荒川斎、東讃筑南風馬牛、萍蹤浪迹作同游、豈圖絶島岐山頂、并膝交論五大洲、自隱岐

念至胸業生膚、世上何人我相識、寫出當年行旅図、二客裝色粗相似、青蓑有孚白蓑吾、隱岐雜咏云、自注、大山雪雨、鯨背千山莫大焉、奇雲終日不離巔、忽逢雷雨一聲吼、黑盡朝鮮韓鵲天、又云、自注、火山絶頂、讃岐荒川斎、東讃筑南風馬牛、萍蹤浪迹作同游、豈圖絶島岐山頂、并膝交論五大洲、自隱岐

音吐ハ雷ノ如シ、画ニ題シテ云フ。〔詩ハ略ス〕

隱岐雜詠ニ云フ〔自注ニ大山ニ雷雨〕。〔詩ハ略ス〕

又、云フ〔自注ニ火山絶頂、讃岐ノ荒川斎ト與ニ同ジク賦ス〕。〔詩ハ略ス〕

彼の声は雷のようであった。画に題して云う。

『二人同行絶澗底　暮山空濛風雪餘
一人傾笠望碧虛　一人倒耳聽水声
清溪路轉三百曲　峨峨雪峰壓頭顱
頗有吾行前日致　鳥海山兮天一隅
曾與有孚同登眺　風雲暴起奪道途
雪上顧然四五仆　両人狼狽生気無
長杖忽然下大麓　遥望雪峰在天衢
帰來此游不敢語　一念至胸業生膚
世上何人我相識　写出当年行旅図
二客装色粗相似　青蓑有孚白蓑吾
「隱岐雜咏」に云う〔自ら注して大山雷雨と〕
『鯨背千山莫大焉　奇雲終日不離巔
忽逢雷雨一声吼　黑盡朝鮮韓鵲天』
また、云う。〔自ら注して火山絶頂、讃岐の荒川斎とともに同じく賦すと〕
『東讃筑南風馬牛　萍蹤浪迹作同游
豈図絶島岐山頂　并膝交論五大州』

隠岐自リ還リ作リテ云フ〔自注ニ先ニ是レ会津ノ松本來蔵、八丈島ニテ歿シ、江州ノ岡廉平佐渡ニテ死ス、皆、予ノ友ナリ〕。〔詩ハ略ス〕

某席上ニ云フ。

天保己亥（十年）ノ夏、宮原栗邨〔名ハ龍、健蔵ト称ス〕來ル、梅花ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

栗村之レ來タリ、佐伯桜谷〔健蔵ト称ス〕ト共ニ至ル、桜谷今ハ既ニ異物（死者）ト為ル、栗邨ハ猶存否ヲ知ラズ、桜谷、乙卯（安政二年）ノ元旦ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

嘉永紀元、仙台ノ中田嘉平〔名ハ綱弘、瀬水ト号ス〕

「隠岐より還り作って」云う。〔自ら注して、以前に会津の松本來蔵が八丈島にて歿し、江州の岡廉平が佐渡にて死ぬ。皆、私の友である。〕

『某沈北海某東海　同是浸遊探島時
喜吾才拙遊多幸　安穏先帰自隠岐』

某席上にて云う。

『家在天涯久別離　稍逢北地冱寒時
傍人為説前途事　贈落越中親不知』

天保十年の夏、宮原栗邨〔名は龍といい、健蔵と称す〕が来る。「落梅」に云う。

『香気全残粉已軋　此花謝盡懶凭欄
従今夜夜窓前月　只作尋常一様看』

この時、栗邨が佐伯桜谷〔健蔵と称す〕とともに来る。桜谷は、今は既に死者となっている。栗邨のその後の存否は分からない。桜谷が、「安政二年の元旦」に云う。

『地爐猶温去年灰　貪睡若忘傳舜杯
稗子迎春初六歳　晩窓先起誦書来』

嘉永元年に仙台の中田嘉平〔名は綱弘といい、瀬水と号す〕が

聖安寺ニ來寓シ、鑑湖ニ贈リテ云フ。〔詩ハ略ス〕

嘉永壬子（五年）、森華陽〔名ハ恕、字ハ仲仁〕來タリ、頼山陽ノ墓ニ謁シ、賦シテ其ノ子ノ子春ニ贈リテ云フ。〔詩ハ略ス〕

是ノ歳、羽州ノ金子得所〔名ハ謙、與三郎ト称ス〕來タリ、夜帰過舟橋ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

詠史ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

詠史ノ作、尤ニ俊秀ヲ覚ユ。

聖安寺に来て泊まり、「鑑湖に贈りて」に云う。

『陽岸青山新雨過　臨湖白屋夕陽多
風光在眼同舟興　共奈曾遊屬逝波』

嘉永五年に、森華陽〔名は恕といい、字は仲仁〕が来る。頼山陽の墓にまみえ、賦して山陽の子の子春に贈りて云う。

『史学文章人已逝　柳梅如故二條橋
唯留一片苔碑在　長楽春鐘撞寂寥』

この歳に出羽の国の金子得所〔名は謙といい、與三郎と称す〕が来る。夜帰りに「舟橋を過ぎて」に云う。

『鉄鎖號風□急流　橋身月黒樹崖幽
連環穏渡神通水　不是老瞞横槊舟
河是神通城一方　銕條鎖斷水波狂
好随漲勢浮沈去　六十四舟橋影長』

詠史に云う。

『済世有人吾別蔵　犯他帝坐是清狂
漢家廿八雲臺傑　不及客星一点光』

この詠史の作は最も才知に優れているものを感ずる。

一日過松葉堂、鍋屋六右衛門、雲華院大含書画、往年富堂上所作云、題富士云、曾経東海道、便上玉芙蓉、披図雲起坐、更欲駕金龍、
今春蝦夷教諭大熊時雨太郎、来過仙臺途中云、野日将沈塊樹陰、断雲流水送帰禽、秋風一路行人絶、唯有馬頭観世音、
八月四日、會于坦坦亭、亭在通石堤長光寺公溪至、余賦云、飄然時至山中客、偏喜吟哦三世交、蓋公溪之父為南塘、南塘之父為東林、共為舊相識、東林贈余以詩、載清淨閣集、東林既為異物、南塘歿政乙卯在京師、奉
皇上遷幸之儀衛云、嗚哉視聊賦

一日、松葉堂〔鍋屋六右衛門ト称ス〕雲華院大含ノ書画ヲ観テ過ス、往年ニ堂上ニ寓シテ作ル所ニ云フ、題富士ニ云フ。〔詩ハ略ス〕
今春、蝦夷ノ教諭ノ大熊時雨太郎〔名ハ道勝、有泉ト号ス〕来タル、途中仙台ヲ過ギテ云フ。〔詩ハ略ス〕
八月四日、坦坦亭ニ會ス、通ニ石堤ノ長光寺ノ公溪至ル、余、賦シテ云フ。〔詩ハ略ス〕
蓋シ公溪ノ父ハ南塘ト為シ、南塘ノ父ハ東林ト為ス。共ニ舊ヨリ相識ルト為ス。東林ガ余ニ詩ヲ贈ル、清浄閣集ニ載ス。東林既ニ異物ト為ル。南塘、安政乙卯（二年）京師ニ在ッテ、奉観シ、皇上遷幸ノ儀衛ニ云フ。〔詩ハ略ス〕

ある一日、松葉堂〔鍋屋六右衛門と称す〕が、雲華院大含の書画を観て過ごす。先年に堂に宿って作ったと云う。題して「富士」という。

『曾経東海道　便上玉芙蓉
披図雲起坐　更欲駕金龍』

今年の春に蝦夷の教諭の大熊時雨太郎〔名は道勝といい、有泉と号す〕が来る。途中の「仙台を過ぎて」に云う。

『野日将沈塊樹陰　断雲流水送帰禽
秋風一路行人絶　唯有馬頭観世音』

八月四日に、坦坦亭に集まる。たまたま石堤の長光寺の公溪も来る。私が賦して云う。

『飄然時至山中客　偏喜吟哦三世交』

ところで、公溪の父は南塘で、南塘の父が東林である。共に旧からの相識る仲である。東林が私に詩を贈る。それを「清浄閣集」に載せる。東林も既に亡くなってしまっている。南塘が安政二年に京都にあって、奉観し、「皇上遷幸の儀衛」に云う。

摩、狂風助虐上一承明、乾坤豈欠回旋氣、却向燒痕青草生、災後踰年一新殿、就子來民庶力經營、自從倉皇移繡扆、寧土人心慘不寧、恒歳乙卯律黄鐘、昨日雪兮今日晴、乃知天意同人意、須臾光景冬春更、家家禁火如寒食、滿城度肅寂無聲、通衢洒掃官令遍、杖矛排列護門間、誰歟啓行大相國、牛車衛夜　行宮迎、儀仗整齊明万燎、清道幻成不夜城、頃之鳳輦御初陽、五雲搖曳向天庭、隊合千官列萬馬、護衛三公與九卿、噫嘻聖恩如海大、縱觀夾道蚩蚩氓、北陸貧道何僥倖、雲游偶爾客天京、敝裘委地經夕坐、滿袖恩霑沐餘清、其前夕欲拜儀衛、貴名菘翁、

貴名菘翁ニ與フ

『咄哉祝融威談獰　狂風助虐上承明
乾坤豈欠回旋気　却向焼痕青草生
災後踰年新殿就　子来民庶力経営
自従倉皇移繡扆　卒土人心惨不寧
惟歳乙卯律黄鐘　昨日雪兮今日晴
乃知天意同人意　須臾光景冬春更
家家禁火如寒食　満城度肅寂無声
通衢洒掃官令遍　杖矛排列護門間
誰歟啓行大相国　牛車衛夜行宮迎
儀仗整斎明万燎　清道幻成不夜城
頃之鳳輦御初陽　五雲搖曳向天庭
隊合千官列萬馬　護衛三公與九卿
噫嘻聖恩如海大　縦観夾道蚩蚩氓
北陸貧道何僥倖　雲游偶爾客天京
敝裘委地経夕坐　満袖恩霑沐餘清
其前夕欲拜儀衛』

貴名菘翁に与う

池内陶所、鬼島廣陰、荻原廣道、及ビ三井敏鈴江曼ガ、畑柳平ノ醫学院ニ集マル。時ニ官ガ禁酒セシム、衆ノ顔蒼然タリ、南塘竊カニ一瓢ヲ携エル、衆慨然トシ、因リテ一絶ヲ賦シテ云フ。

〔詩ハ略ス〕

服部芙蓉〔名ハ友憙、秀太郎ト称ス〕作州ノ人、嘉永壬子（五年）ノ秋、津田半村ノ清足軒ニ來寓ス。土佐ノ野根山産ノ杉ヲ引クアリ、篇長ク録セズ。

木下君均〔仁平ト称ス〕ノ祧ニ奠シテ云フ。

〔詩ハ略ス〕

自注ニ云フ。

『君均今春ヲ以テ世ヲ下ル、曩ノ祖ノ錦里先生ヨリ七世儒ヲ襲ウ、此レニ至ッテ、殆ド絶ス、只一男児アリ、年六才カ、未ダ善ク箕裘ヲ継グヲ知ラズ、家声否隔セズ、予、故ニ此レヲ賦シ、聊ニ幽魂ヲ慰ム。』

高岡詩話補遺　終

池内陶所、鬼島広陰、荻原広道及び三井敏鈴江曼らが、畑柳平の医学院に集まる。その時、官が禁酒を命じた。集まった皆の顔が青く曇ってしまった。そこへ南塘が、密かに瓢箪を携えてやってきた。皆が喜び、それで一絶を賦して云う。

『大酔菩提狂遠公　憐佗陶陸一鞏長
縱令官令禁杯酒　携得自家般若湯
南塘名蔵海』

服部芙蓉〔名は友憙といい、秀太郎と称す〕美作の人である。嘉永五年の秋に津田半村の清足軒に来て泊まる。土佐の野根山産の杉を引く、篇が長いので記さなかった。

木下君均〔仁平と称す〕の祧に供えて云う。

『詞園爰啓碎蘭悲　七世栽培忽絶萎
遺恨猶應九京暎　一根芳孽有清姿』

自ら注して云う。

『君均が、今年の春に泉下にゆく。昔の祖の錦里先生より七代にわたって儒学の家として伝えてきたが、ここに至って全く絶えようとしている。ただ、残された六歳の遺児がいるが、未だこの家の遺業を継ぐかどうかは分からない。この家の名声を、いや、失ってはいけない。私は、故にこれを賦して、願いをこめて、死者のたましいを慰める。』

高岡詩話補遺終わる。

大村直子　画

讀北溪先生高岡詩話謹題卷尾

道德文章海内名。高風誰不慕
先生。有時琴酒歌招隱。餘澤芝蘭見育英。著述等身閑富貴。箕裘傳世久安榮。遺編歷歷音容在。惹起卅年無限情。

明治癸卯九月十四日
舊辱交晚生　阿波加穎再拜敬書

北溪先生ノ高岡詩話ヲ読ミ謹ンデ巻尾ニ題ス

『道徳文章ガ海内ニ名ス、高風ニシテ誰モガ先生ニ慕ワザラン、有時ニ琴酒歌スルニ招隱タリ、餘澤ノ芝蘭ニ育英ヲ見ル。著述ハ等身ニシテ閑ニ富貴アリ、箕裘ノ伝世久シク安榮シ、遺編ノ歴歴ニ音容アリ、惹起卅年無限ノ情。』

明治癸卯年九月十四日　旧辱交晩生　阿波加穎再拜　敬書

北溪先生の高岡詩話を読み謹んで巻の終わりに題す。

『道徳、文章が天下に名が轟き、その気高い人柄が誰からも慕われる先生、ある時には琴を奏でて詩を作り酒を飲んでも穏やかさを招く。また、残された香り高い貴方から英才の教育を見ることができる。著述されたものは身のたけと等しく蘭の花のように富んだ貴さが漂っている。家業は代々久しく安らかに栄え、書き残された書物にはありありと面影が見える。亡くなられて四十年、果てし無い情を引き起こす。』

明治三十六年九月十四日　旧くから交わりをかたじけなくした拙生阿波加穎再拜敬書

登場する人物資料と評伝並びに余話の要約

【巻の一】

・服部南郭について、京都大学元教授の日野達夫氏がそのライフワークの研究成果を「服部南郭伝攷」の一冊にまとめている。南郭とは、荻生徂来の高弟で蘐園塾の筆頭門人として活躍し、一代の山斗と仰がれた人物である。日野氏によれば、南郭は江戸後期の文芸界を主導し、江戸時代最高の詩人であり、実に調べ甲斐のある人物であると評している。この南郭が、高岡の服部家を出自としている。

服部家といえば、家祖の連久以来、高岡の町年寄を勤める家柄である。連久は、もと美濃の郷上から出て天正年間に前田利家に仕えて合戦に従軍し、慶長年間に利長に従って高岡に移り住んで町人となり、天野屋三郎左衛門を名乗った。慶長十五年には、横町屋・越前屋とともに町宿老に任ぜられ、高岡の由緒町人のご三家として、その後も代々町年寄を勤める家柄である。

二代目正知には、十人の子があり、次男の正則が家督を継ぎ、四男の方盛と八男の元矩が京都に移住して越中屋、天野屋の店をそれぞれに構えるのである。その元矩が水戸家の御用歌学者である山本春正の娘の吟子と結ばれ、生まれたのが南郭〔元喬と称す。幼名は勘助、通称は幸八、小右衛門と改む、字は子遷、南郭と号す〕である。十三歳の時に父の元矩を亡くした南郭は、その翌年に歌と絵で身を立てるべく江戸にでる。その後、十七・八歳で柳沢吉保に見出され、学芸の学輩として召し抱えられ歌会に名を連ねるのである。その時に荻生徂来と学輩として知り合い、吉保が亡くなった後、柳沢家を辞し、荻生徂来の門で漢詩人として一門を代表する人物として数々の著述に塾を代表して名を連ねて活躍するのである。

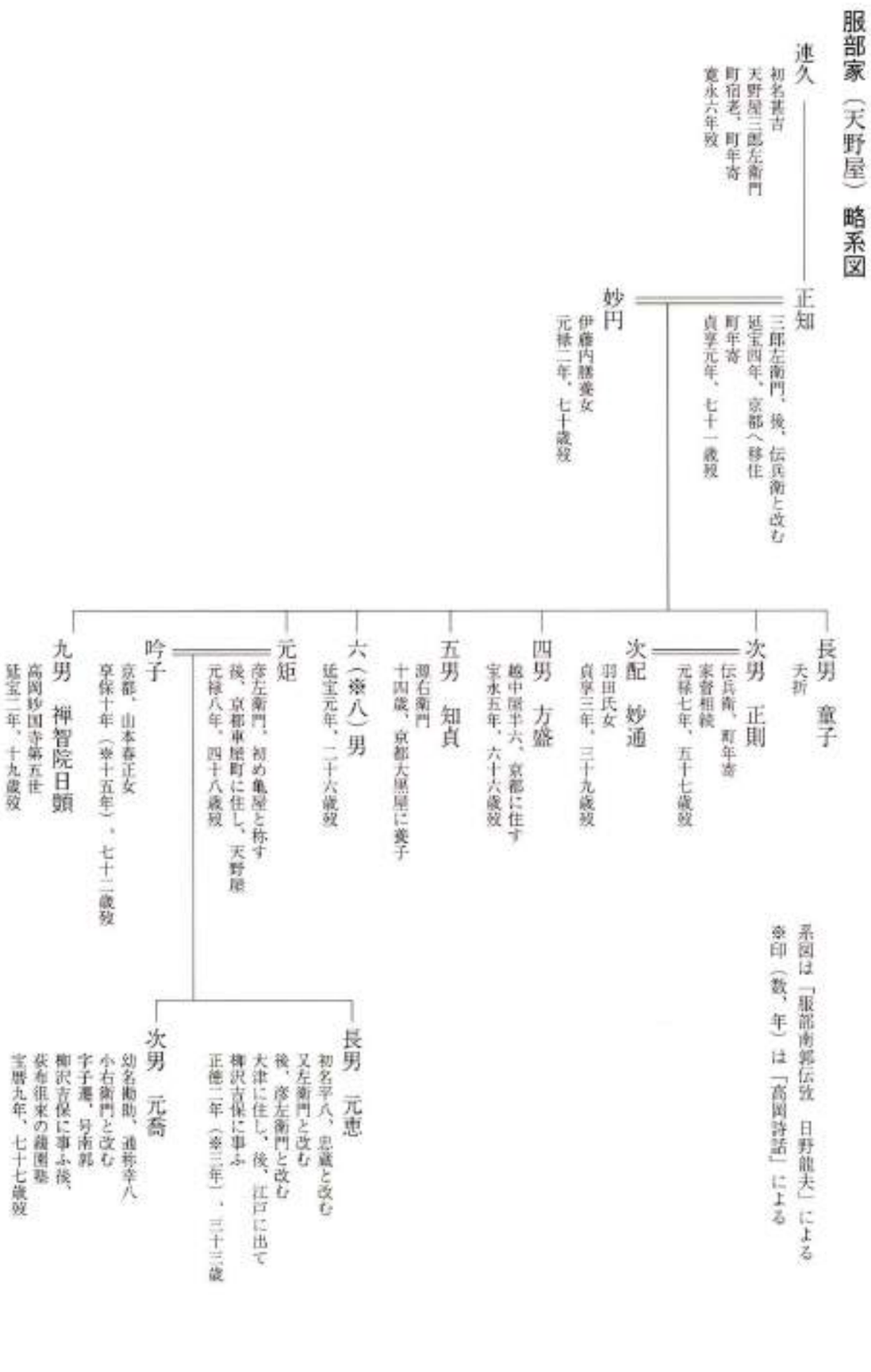
高岡詩話では、南郭の出生について、「一代之山斗ト為リ、而シテ実ニ我ガ邑ニ出ズ、世人ハ罕ニ知ル、今、特ニ表ニ之レヲ出ス。」とあり、また、「南郭ノ襁褓ノ時ニ在ル也、父母ニ挈シテ京師ニ至リ、遂ニ焉ニ住ス。」とある。つまり、南郭の幼少の時に父母に連れ立って京都に行ったというのである。しかし、日野氏によれば、南郭は天和三年（一六七三）に京都の車屋町の天野屋で元矩と吟子の二男として出生したとある。出自とては確かに天野屋の一族ではあるが、出生は京都であることは間違いないようである。

元矩と南郭について、天保三年、文政三年の「天野屋傳兵衛、御尋書上申由緒帳」にも「正知八男元矩義京都江別宅仕、元矩二男元喬俗名少右衛門号南郭義初、松平美濃守殿江知行弐百有余石被抱居候得共、請暇江戸表へ罷出芝赤羽住居仕于今五代云々」とある。

なお、服部家は、御旅屋が取り壊された後、正徳年間に第四代目正武の時に藩主のお泊まりになる本陣を命ぜられ、以後、幕末にまで及んだ。現在のNTT西日本高岡市外ビルのところである。「高岡湯話」に服部正躬が登場する。大変に穏やかな人物で四十余歳になっても遊廓街をも知らなかったという堅物でもあった。その正躬の養父が、お殿様のお泊まりになる二三十日前から家の煤を払い、臭いにまで気を配り、毎晩、帯も解かずに家中を回り、お泊まりになる三、五日も前になると、手燭をもって障子の桟を照らし、埃が無いか確かめていた云々とある。また、古城公園の存続に貢献した服部嘉十郎も、その末裔である。

・高岡の町で出版された詩書に「高陵風雅」「高陵風雅後集」「春潮錦機」がある。「高陵風雅」は釈自然が撰録し、字は子牽と号し、開正寺の宜明講師の義父である。「五言律」が凡そ二十首が収録されている。これに収録された人々は、釈自然、清水少連〔字は子城、荊山と号す、清水家の六世で槇本屋藤右衛門と称す。〕、寺嗜撃〔字は敬業、大樸と号す。荘河、ま

服部家（天野屋）略系図



系図は「服部南郭伝攷　日野龍夫」による
幸印（数、年）は「高岡詩話」による

た、菊主とも号す。沢田屋、今は高原屋と称し、六右衛門の第三子で三木屋半左衛門の義子である。よって半左衛門は蝸州翁の父である〕、内藤順〔字は子卿、海橋と号す。彼丘、又、緑竹堂と号し、内藤彦輔とも称す〕、日下鶴〔字は万年といい、雄上と号す。茶木屋と称す〕、日下昭〔字は成軫といい、才城と号す。茶木屋庄兵衛と称す〕などである。この他に姓氏が不詳であるが、臭良臣〔字は子相、月軒と号す〕、岡直温〔字は君玉、昆山と号す〕、島済〔字は公美、丹岳と号す〕、木雲〔字は子龍、藍淵と号す〕宇祐章〔字は子光、北郭と号す〕、釈義静〔字は大安、善護と号す〕、福安道〔字は士琴、神和と号す〕などである。なお、姓氏の記載が荻生徂来の蘐園塾の習わしに従って、例えば、清水少連であれば、清水を省略して清少連というように記載されてきたので姓氏に不詳が生ずるようになってしまった。

・服部淳卿〔名は輗、字は叔信、楓舗と号し、天野屋三郎左衛門と称す〕は清水少連〔楓木屋藤右衛門と称す〕の第六子で服部氏を継ぐ。詩と画が得意で篆刻も巧みであった。布施の円山の碑は、この人が建てたものである。役人としての才能があった。

「能登の酒井の永光寺の辺」「佳句惜花」にいう。

・「高陵風雅後集」は日下青河〔名は明、字は子明雄上、茶木屋智平と称す〕が、集めて版木に刻んで印刷する。詩十七首が載っている。高資訓、原之驥、山清致、岡維謙、松村庸などである。

さらに清水少連、服部淳卿、日下昭、内藤履吉〔号は王福、また、青梧と号す、宋禹とも称す〕などである。

・内藤彦輔の遺稿一巻がある。言葉の彩が美しいばかりでなく筆勢に力がある。

「午睡」「井圭齊恵韵」「梅雨」にいう。

・内藤履吉は、彦輔の子で内藤貞孺と称し、後に所謂、狂詩に流れていった。寺崎蝸洲の子、蝸洲は内藤彦輔の女を娶り、生まれたのが元鑑である。内藤貞孺には子が無く、蝸洲の子の元鑑〔皆吉〕を育てて跡継ぎとした。しかし父子関係が整わず、他に金圃を育てて跡取りとした。ところが金圃に男の子が無く一女がいたので桐城〔貞孺と称し、今は彦輔と称す〕を婿として迎えた。一方、内藤家を出た元鑑〔皆吉〕は片原町に住んでいたが、元鑑の伯母の夫が内藤宋安で、その宋安夫婦の子が宋純であったが、その宋純が夭折したので元鑑を跡継ぎとした。元鑑は愚山と号し、〔字は孟章〕頗る学才があり、書が得意で布施の円山の碑の山本封山の撰文は彼の書したものである。また、「高陵風雅後集」の跋を書いたのも元鑑〔皆吉〕である。

内藤家略系図

・松田慶は、龍門と号す。三知と称し、李安山の長子である。その慶〔三知〕に子がなく、粟田庸斎〔名は秀、字は成實〕の弟の丁梦〔名は以正、三知と称す〕を養い子とした。その丁梦に男の子がなく、山本道斎〔名は奎〕の弟の良順を養って後継ぎとした。その良順も早世する。

・大撲〔寺崎荘河〕の遺草一巻が、寺崎家にある。風調が頗る高い詩である。

「下石城舟中」「納涼」「警句野望」「観猟」にいう。

寺崎一貫は、字は孟恕、あるいは伯道、蝸洲と号し、また紫苑斎とも号した。寺崎大樸〔荘河〕の子で、三木屋半左衛門と称した。蝸洲は富田徳風とともに京都の皆川淇園のもとで詩経を学び、また、村瀬栲亭について詩文を学び、その感化をうけたのであろうか、詩文、野史小説、俳諧にも興味を示した。人柄としては軽快洒脱な方で、人と対談すれば、洒落や冗談が口をついて流れ、腹を抱えさせるという風であった。こうした蝸洲が高岡の詩壇の盟主と仰がれるのである。「初襖題」「養老軒詩」にいう。また、困譚一巻、狐茶袋を残している。

蝸洲の洒脱さ、洒落や冗談が口をついて流れるという人柄は、「戯和某琴湖竹枝詞」の詩からも伺われる。蝸洲の詩について村瀬栲亭、皆川淇園、海保青陵がそれぞれに評しているが、通常、人とは違った趣で言葉を結ぶ才能がみられるというのである。

殊に、蝸洲の戯著の困譚一巻から十分にその人となりが推察されるものである。例えば、困譚は漢文で書かれた異聞奇事の話である。その一例をあげると、次のような話である。

夜に路傍に立って淫らな行為を売る者を総嫁、あるいは夜鷹という。一人の悪賢い奴が、そこに来て曰く、俺は二十銭もっているが、残念ながら四銭不足するのでお願いだが、暫くその不足分を借金したい。総嫁が思うに、彼が若し返済しなくとも僅かにたかが四銭のことと承諾する。奴は、次の夜にやってきて返済し、そのまま身を翻して帰ろうとする。総嫁が袖をつかんで放さず。奴がいうには、実は残念だが、今は財布が空っぽである。総嫁が、これは間違いなく確かなことだと思い、日く、明日の夜にまた来て返済すればよい。奴は、遂に「一箭両鵰を射る」〔一本の矢で二羽の大鷹を射止める〕、つまり、一度の支払いで二度にわたって楽しみを手にして、その後、再びその地に訪れることがなかった。

こんな調子の話が約四十編も記されているのである。蝸洲の人柄が垣間見える一巻ともいえる。

蝸洲の子の女青翁〔名は敬孝、女青の両文字を合わせて婧園ともいった。初めに二一郎と称し、後に清作と称した〕。女青には男の子が無く、山本道斎の弟の寛所〔春窓と号し、半左衛門と称す〕を育てて子とした。この家に上杉景勝の軍扇の檄書が所蔵されていた。これをみて頓鴨涯〔名は惟醇、字は子春、三樹三郎〕が歌にいう。

・富田徳風は、富恆亭ともいい、富田八十右衛門の父である。

「高岡湯話」の徳風の伝によれば、富田助、名は美宏、字は子順、号は徳風、松斎、冬青、晴雪窓、幸適屋、皆、その号なり。富田氏と称す。世に横町屋弥三右衛門と称す。横町屋は、天野屋、越前屋とともに由緒町人のご三家の一つで代々町年寄を務めた家柄である。徳風は、その十代目の弥三右衛門である。横町屋は、もと朝倉家の家臣であったが、浪人して前田利家が越前の府中にいた時に従い、利長とともに守山城の横町に住居を移し、富山に移ったときにも従い、また、高岡入城とともに高岡に移り、守山町に住んだものである。城の横町に住んでいたことから横町屋とも名乗ることになったとある。

徳風は、八歳の初めに四書を習い、二十歳にして京都に遊学する。皆川淇園について儒学を専攻し、また、その傍ら伊勢において国学を学ぶ。修三堂湯話、宜深誌、南瓜集、冬青園常盤帳、四十七字麓之志留邊等の著

がある。二十七歳にして町役人となる。その間、瑞龍寺の山門の再建に向けて藩庁に強く請願し、竣工に漕ぎ着ける。文化十四年（一八一七）に亡くなる。享年五十二歳であった。

徳風は、蝸洲とともに皆川淇園の門で学んだが、二人は互いに全く趣向を異にし、蝸洲は詩歌をつくる方に進んだが、徳風は、専ら四書・五経など儒教の方に進んだ。この為に講堂をつくる企てに及んだ。

富田徳風が文化三年に無影井の東に土地を買い、町で最初の講堂を造る。修三堂という。この時、友人の長崎蓬洲、氏家玄兎〔関屋八右衛門〕、宮崎斗百〔太田屋甚右衛門〕、篠原花渓〔増山屋善兵衛〕、田代呑舟〔棚田屋小兵衛〕、田代朴亭〔棚田屋小右衛門〕、田代菊史〔棚田屋小左衛門〕、市山青羽〔下村屋吉右衛門〕、横山雀梅〔米屋伊右衛門〕などが協力する。

この堂へ海保青陵、脇坂義堂、原松洲が来て講義する。

文政初年に、折橋清狂〔雄川と号し、勘助とも称した〕の弟の桐陰〔名は寛といい、後に喜三右衛門と称す〕を娘婿として堂に住まわせる。徳風に子がいなかったので桐陰を後継者にする。

徳風の遺著に「高岡湯話」〔「修三堂湯話」〕がある。高岡古来の孝子節婦等の善行美談を節婦きみ、動地六兵衛をはじめ百人ばかりの美談を飾り気のない平易な文章で書き残している。

これには、「湯話の序」にいうように、ある夜、何人かの者が集まってお茶を飲みながら話している中で、遠い国や、昔のことや、唐天竺の書に書かれた物にあることよりも、目の前の高岡の中で、その人柄にかかわらず、例え少しの善徳のある者を各自思い出し、尋ね出して文章や筆跡の上手下手をも頓着せずに、時々、この修三堂に集まって書いてみようということで書かれたものである。それを徳風が「高岡湯話」としてまとめたものである。

また、徳風と蝸洲が京都の皆川淇園に学んだことで時報の鐘の銘并びに序を淇園に頼み、今は場所を移して大仏寺に吊るされているが、その撰文が鐘に刻まれている。

この時報の鐘は天明二年（一七八二）に町奉行の寺島五郎兵衛が時報の鐘を町民の手によって造るべく藩庁に願い出て許しを得ていたが、果たせないまま職を退き途絶えていた。その後、孫の荒木蔵人が奉行となり、同役の荒木直哉と相談し、金屋町と木町の人々が旧から宅地を賜るなどの恩恵をうけているので鐘の鋳造のことをもちかけた。二町の町民が賛成してくれ、間もなく鋳造に取りかかったが、出来上がった鐘の音は馬の嘶くようであった。それで坂下町で綿を商いとする鍋屋仁左衛門という者、元は金屋町の一族から出た者が心から憤り、その鐘を壊してしまい奮って鐘造りにあたり、梅山に冶場を設け、また、町民に銭を募り鐘の鋳造を促した。こうして二度目の鐘が完成し、出来上がった鐘の質は純にして音は明るく豊かなものであった。役人たちは小躍りし、町民は手を打ち踊って喜んだ。

また、時報の鐘の銘文について、「高岡市史料集」の第一集に「時鐘銘（判）」が収められている。これは文化元年に鋳造された時鐘銘について批評したもので、批評者は富田徳風かも知れないといっている。というのは、時鐘の銘は、今は皆川淇園の撰文が刻まれているが、最初の鐘の銘文を中島半助につくらせた。ところが文章に締まりがなく、長いことからその体を失うものであったとある。それで蝸洲・徳風の手を煩わせて皆川淇園に銘の撰文をお願いしたというものである。ただし「市史料集」の「時鐘銘」には、「木堆謹撰中島尚書」とある。とすれば撰文は木堆、書の方が中島半助ということになろうか。

・長崎蓬洲は、名は壽といい、字は業福、玄庭と称する。長崎浩斎の父である。浩斎は、名は健といい、字は中正、原禎と称した。浩斎は、蝸洲の亡きあと「松映房」に集まる高岡の詩人たちの結社の「鳳鳴社」を取り仕切る。

長崎家は、宝暦年間の神農講の中に、瘍科、長崎玄貞、また、文化年間の神農講には長崎玄庭とある。阿波加悟造の春塘随筆に、長崎氏はもと萩原氏を称したが、長崎で蘭医を学んだところから「長崎医者」ともて囃されたことから自ら長崎氏を名乗るようになったとあり、長崎家は蘭方外科として鳴らしていたようである。浩斎は、寺崎蝸洲の亡き後、高岡詩壇の中心を担ったが、医学では江戸の大槻盤水の門に入って西洋医学を修め、帰郷すると、越中はもとより飛騨、越後からも患者が集まったといわれている。文学では蝸洲の「困譚」に、鶴郊居士〔浩斎の別号〕の名で序文を書いている。また、五十嵐篤好の「国学無目籠」に健の名で序文を書き、さらに浩斎〔健〕のために篤好が国学を学ぶ指針として「真木柱」を書き贈るのである。

この浩斎の長子が言定で、家業の外科医を継ぐが、経史詩文を好み、五十嵐篤好に国学を、富士谷御杖に和歌を学び、閑雲禅師にも教えをうけ、朝野の名士と交遊するのである。この言定の次男が忠正で富山藩の家老に次ぐ家柄の林太仲の養嗣子となり、貿易業界、なかんずく画商として西洋に日本美術・工芸の素晴らしさを伝え、また、日本美術界の近代化にも尽くすのである。

・「桑亭」について、弘化初年に、上田幻斎〔名は耕といい、作之進と称す〕が、大仏の後ろに講堂を造り、桑畑の中にあったので「桑亭」と名付ける。嘉永年間に廃止される。

当時、文人たちが憩い休む所として博労町に「臨江亭」〔今は青木伯養が住んでいる所〕があり、谷内には「養老軒」〔今は板屋長助の住む所〕が、坂下町には「是性庵」〔今は中邨屋治右衛門が住む所〕があった。ここで北渓は、「是性庵」の詩があれば、他日にその収録に当たりたいといっているが、巻の四に桑山梅浦が「是性庵に游ぶ」の詩に、次のように詠んでいる。

独歩春園柳蔭風　黄鸝日暖囀幽叢
茅堂寂寂松濤起　雲外連山斜照紅

独り春の庭を歩き、柳の陰が風に揺れている。鶯が日が暖かくなって静かに草むらの辺りに囀っている。茅葺きのお堂にひっそりと寂しく松風の音がたっている。雲が連山の表面にかかり夕日が紅く斜めに射している。この詩から坂下町にあったという是性庵の竹まいと坂下町という比較的高い位置から西山に落ちる夕日が望めるという当時としての風景の一端が思い描けるようである。

・「敬業社」について、文政八年に町奉行の大橋作之進が関野神社の前に講堂を建てる。このために白銀町にあった「養老軒」の古材を使って増築する。この責任者に桑山玉川〔梅染屋武兵衛次〕を宛、敬業社と名付けて、その扁額を村井豊州に頼む。富山藩の小塚南郊を講師に招く。竣工に明楽を奏して孔子を祀ってお祝いする。講堂が廃止されて、飯野屋仁右衛門宅が、その跡である。

・「春藻錦機」は、文政四年に半桃亭主〔板屋小右衛門と称す〕が、集めて彫り刻んでいる。これに掲載されている者は、現在残っている者として僧の玄妙〔字は大玄といい、痴主と号した〕、誠處〔名は興といい、字は凡民、高島庄助と称した〕、法隆〔字は周済といい、光楽寺の老僧〕、赤松青〔松井藤馬と称し、高峯鼎亭の義子となり、高峯玄臺と称した〕、及び長崎浩斎老人である。さらに浩斎を通じて次の人達を知り得た。

緑處は小堀八十太夫の弟で、後に西村氏となり、西村與三男と称した。梗園は名は篤といい、山本一覚と称した。浚庵は米屋八十兵衛の弟である。石雲竺道は笹河の廣済寺の先の住職である。北陵雄は鴨島の教恩寺の先の住職である。佐野成章は六度寺村の佐野屋年次郎である。林嶺主人は吉埜屋嘉兵衛である。露園は名は叔斐といい、字は子章で、横屋貞助である。桃里は名は信照といい、大坂屋武左衛門と称する。僧詩天は名は師

子といい、字は王吼で、下牧野の東弘寺の先の住職である。烏郊は名は楨といい、字は某で、百姓町の上野屋嘉右衛門である。法周は開発村の妙専寺の先の住職である。彦玲は名は維といい、初め藤甫と称し、和田彦齢といった。樣堂は妙国寺の先の住職である。木舟は松田丁梦の別号である。容斎は栗田庸斎と称した。如斎は、東林の別号である。

・辻丹楓に今道集一巻がある。安永四、五年の作で、「河東の夜に坐して」の詩がある。山本蘭卿〔名は有香といい、封山と号し、山本中郎と称す〕とも交わっている。丹楓は、砺波屋伊右衛門と称し、明和年代（一七六四～一七七一）に京都から擬堆朱や存星などの技術を伝えるとともに御車山の後屏などに優れた作品を伝えている。また、北渓が、丹楓に、こんなに沢山の詩があるとは知らなかったといっている。

・聖安寺の寺中の安乗寺での講堂について、文化十年に、長崎蓬洲が栗田佐久間〔良継と号し、庸斎の父〕と相談して富山の島林文吾〔名は文といい、字は季華、雄上、または自省と号し、林文と称す〕を招いて孟子や唐詩選を講義させる。これに内藤王服に世話をさせる。また、詩づくりを学ばせた。

これに就学した者に、浩斎、庸斎、津田半村、称念寺の懶外〔名は海導、字は済生〕、津島栗斎〔玄勇と称す〕、渡辺玄碩〔後に津島姓を名乗る〕、松井藤馬〔高峰梧門の旧称〕、内藤家の義子の伊織、佐渡龍斎〔養順と称し、葵斎の父〕などで、これら町中の老詩人は、皆、烏林文吾の指導をうけ、そのふいごから育った面々である。

【巻の二】

・「松映房」について、澤田等岳が高の宮の前に庵を造り、「松映房」と呼び、寺崎蝲洲を中心とする長崎浩斎、清水露園、桑山石蘭、妙国寺の樣堂、澤田等岳〔澤田屋と称し、後に扇子屋を名乗る〕、石川雪峰〔名は憲といい、新保屋周平と称した〕、上原龍圃〔名は師古といい、初めに貞順と称し、後に迂斎と称した〕及び桃里、烏郊などの社中の面々が吟詠に集まる。これが「鳳鳴社」の出発点となる。

・長崎浩斎が文政元年に、二十首を作って印刷する。栗田容斎、清水露園、桑山石蘭、妙国寺の樣堂、上原龍圃、樓斎など、「松映房」に集まった「鳳鳴社」の面々の詩。

浩斎「春寒」、栗田容斎「春月」「早春」、桑山石蘭「春江泛舟」「水樓避暑」、桜廊先生〔蝲洲の別号〕に次いで、清水露園、樣堂、上原龍圃、樓斎などが、それぞれ詩・賦にいう。

・文政五年に、詩仏先生が来遊して「陸舟樓」に泊まる。これが機縁となって来遊する文人墨客が、ここに泊まり、文政・天保の頃に隆盛を極める。

文政八年には「松映房」での社中が、ここ「陸舟樓」に移されることになる。当時、長崎浩斎を中心に栗田容斎、釈懶外、津田半村、富田桐陰、松田木舟、澤田恭堂〔周謙と称す〕、金子観水、江尻譲斎〔宗叔と称す、富山の人、時に高峰家に泊まる〕、釈台巌〔名は信成といい、字は義倩、超願寺の左衛門と称す〕、釈恵蔵〔蓮光寺の弟〕、津島帆斎〔先兄の橋東君の別号〕、及び烏郊の面々が、毎月集まって会をもった。

さらに翌年には、高峰犀江、逸見雪窩、川上軌斎〔名は秀実といい、字は士毅、菱屋二郎四郎〕、石川九斎、釈教界などの面々が入社し、天保の頃まで続いた。

・閑雲禅師が、文政五年に瑞龍寺の住職となる。近江の中山に登った時の「琵琶湖一望」の詩を誦詠する。

・大音二岳〔二上屋吉助〕が、某太夫の一篇を上表する。『高岡詩話』には、この某太夫が記述したという一篇を挙げている。「高岡市史」に二上

屋の由緒を記している。二上屋の遠祖は大和国より出で、元正天皇の養老年中（七一七～）、同国の二上山権現が越中国二上山に勧請された際、供奉して二上山山麓に居住したもので、前田利長が守山入城の時には、既に六十代目であったという。この家譜の記す通りであるならば、越中の一宮射水神社と歴史を共にする類い稀なる旧家ということになる。また、市史には、二上屋は、利長の守山在城時代から知遇をうけた旧家であって、慶長十八年（一六一三）には豊臣秀頼の密使として前田利長の許に遣わされた織田左門が、二上屋吉助の宅に草鞋を脱いだといっている。この二上屋吉助が、元和六年（一六二〇）に前田利常から由緒町人の横町屋、天野屋、越前屋らとともに町年寄に任ぜられている。それほどに由緒ある家柄であったということである。

・八橋通仙〔名は方岳といい、茶顛と号す〕が、文政九年に広乾寺に来て泊まる。煎茶の高遊外〔売茶翁〕の流れを組む者という。また、中国から伝えられたという明楽を得意としていた。これに学ぶもの十数人、新田節斎〔米屋亮蔵と称す〕、高足を弟子としていた。

高遊外とは煎茶翁のこと、遊外は煎茶の祖とされ、当時、抹茶の世界が堕落し、殊に禅僧社会の欺瞞に対して禅が真の姿に立ち返る方便として煎茶の手前を案出し、自ら茶道具を籠に背負い気ままに庶民とともに歓談しながら茶を楽しんだ。このため遊外は、本来、黄檗宗の禅僧であったが、市井の隠者として籠を担いで京都の郊外に茶店を開き、往来の客に茶を売っていた。それは金儲けのための売茶ではなく、「茶銭は、半銭まではくれ次第、自由勝手にただ飲みも結構、ただし、ただよりまけはいたしません」と、彼がいうように、気ままに庶民の中に入って主もなく賓もなく、誰彼の区別もなく気楽に茶を楽しんだのである。このように煎茶を自由に振る舞うことで禅が真の姿に還えるための方便としたのである。これが当時、上田秋成、頼山陽などの文人社会からも受け入れられ、秋成は、「点するは賢しらたり、煎するは聖たり」と称賛している。こうした気風が、その流れを組む八橋通仙によって高岡にも伝えられていたということである。

・貫名海屋が、文政十二年に来て津島東亭の生春堂に泊まる。

・長崎浩斎の書樓を「清風名月樓」と名付けていた。詩仏先生が自らの詩と浩斎、桧村空翠〔名は円平といい、八田屋円平と称す〕の詩を『北游詩草』に掲載する。これに小塚南郊が寄題する。この樓が嘉永六年の火災で無くなる。京都から来た詩仏先生と日原松洲との清風名月樓でのやり取りが記されている。

・山本梗園「納涼」、称念寺の懶外の遺稿一巻に「秋夜」「舟行」にいう。

・津田半村の詩、北游詩草にあるのを再度掲載する。この詩話に資するところが多い。

・上子心竹が、「林谷梅花」の巻図を所蔵している。その中に斉藤拙堂の月瀬紀行がある。それによると、明和八年に頼山陽に連れ立って、山本梗園らとともに月瀬に探梅に出掛けて詩を詠んだという。元は十、あるいは十三首があったというが、今回は七首を記録する。この時、山陽が詩の第一句を唱え、その句に続けて数絶句をつくったが、たまたま句が湧いてきたというだけのことであるといっている。

・高峰犀江が嘉永七年に「歳旦」の詩を詠んでいる。

・土肥知言〔名は伯敬といい、恭蔵と称す〕は、眼光が鋭く高い鼻梁で骨格が大きい。医者として家を起こし、五言絶句をつくり、戯れて「五言体」と称していた。「雪後尋梅」土肥松軒〔名は敏といい、字は遜志で、俊造と称す〕は知言の息子で、かつて京都で劉石秋について学ぶ。松軒の弟の秋香〔名は倹といい、倹次と称す〕は書画にすぐれ、吟詠もよくした。「梅花」、松軒の弟の秋香〔名は倹といい、倹次と称す〕は、書画が上手であった。これは天性のもので特に師から習ったものではない。「元旦」に

いう。

・富田南山〔名は恩孝といい、字は維則、また、奈園と号し、平田屋五左衛門と称す〕は画を得意とし、吟詠も好む。その息子の秋芳〔五左衛門と称す〕のところで遺稿を手にする。その中から二、三を記す。「秋夕閑居」「緑陰垂釣」「雨後坐月」にいう。

・富田氏のところで富田懋風の遺稿をみる。「修三堂湯話」三巻と同付録一巻がある。町中の善行のある者を数十人を記したものである。末永く伝えるべき書物である。また、「南瓜集」数巻があり、詩や和歌が雑然と収められている。皆川淇園によって文字が改められているが、二首を採り上げる。「登楼」「春宵坊に集まって即時」にいう。

雪窓〔桐陰の別号がある、幸舎と称す〕は、ひたすら四書・五経について究める。詩の方は得意ではなかったが、一、二を摘んでみる。「冬晴」はかにいう。

・江尻宗叔〔名は温といい、讓斎と号す〕が、三井文卿〔玄孫〕君の六十歳を賀してという。

・閑雲禅師の師は活淇禅師である。閑雲禅師は老後に川口の谷昌寺に住む。頗る吟詠に優れていた。「題萱草」「自題肖像」にいう。

【巻の三】

・服部菊玄伯が、高岡の春について八首を詠んでいる。「分霞橋」「無影井」「青雲館」「桜馬埒」「臥鱗墓」「瑞龍寺」「古城蹟」「新渡」である。享保十二年（一七二七）、今から百三十四年前につくったものである。

・「分霞橋」、中島橋と称するところで、旅をする人を送り、別れをするところであった。

・「無影井」、井戸のところに孝行者の動地六兵衛の碑がある。修三堂がある。それが造られた時の協力者、海保青陵、脇坂義堂などが講師として来たことを記している。

・山本渓山〔名は章夫といい、藤十郎と称す〕が、能登を遊び、その時に北渓から能州名跡志を借りたお礼に感謝をこめて福浦・鳳来山をめぐる詩を贈っている。

この時、山本中郎の孫の渓山が、祖父の中郎が布施の円山の万葉の碑文に刻んだという撰文を見るために祖父の故郷である高岡を訪ねるべく嘉永四年（一八五一）四月一日に京都を発って同年九月十七日に帰宅するまでの一六四日の行動と見聞を「入越日記」に書き残している。その間、影無坂の超願寺裏の祖父の実家である日下家に逗留し、高岡の文人たちと交流し、数多くの詩文を残している。また、日記には、高岡で目にした習俗を事細かに書き記している。それらの習俗は、今は誰も知ることのない当時の高岡の習俗として貴重な記録である。それには五月の節日に次のように記している。

五月四日

家々の簷端に蒲と艾を挿し、菖蒲湯を設けて浴する。

「枕草子」の二十九段に、五月の節供に宮中の御殿をはじめ庶民の住家まで菖蒲や蓬を屋根一面に葺き並べ、また、家の軒にも挿して邪気を払うと記している。高岡の家々の軒端にも蒲や蓬を挿したのも邪気を払うという習俗によるものである。

五月五日

朝食に粽粥を供し、もって節物となす。人家の三五歳児は、皆、五つの彩りの縮緬を用いて裁ち、胡蝶をつくり、それに金銀、ガラス類を用いて飾り、その大きさ一尺ばかりの鳳子状〔大鳥の雛の形、あるいは、アゲハか〕にして、これを子供の背に負わせるのである。貧家の女は、やや長ずる者は、ただ、寸ばかりのものをつくり髷上に挿す。男の童は、蒲を正に

結んで頭につけそれに蓬の葉を頭の後ろに垂らす。さらに蒲束の四五寸に切りたるを長縄をもって繋ぎ、町の通りにでて争いて、端女をして戯れ笑いて道ゆく人の尻を打たせて騒ぐのである。これを蒲浦倍という。

こうした尻叩きの習俗についても「枕草子」の三段に、一月十五日の望粥の節日に、宮中でも「腰叩き」が女房たちの無礼講の習俗として記されている。それには叩かれた女性に元気な男子が誕生するという意味があってのことであった。

今では、こうした習俗のあったことすら伝えられていない。

・超願寺の正面の広乾寺に、天保二年に浦上春琴が来て泊まっている。この時に津田半村と津島東亭が氷見まで送っている。また、天保十年に諫山夕翠〔名は哲といい、鐵蔵と称す〕が来て泊まっている。これには逸見之方〔名は一実といい、可都美と号し、蕉窓とも号す、高原屋久左衛門と称す〕が取り持つ。夕翠が遊女の緑李を伴って帰ってゆくが、帰国後亡くなる。

・岩原逸菴〔名は任といい、二作と称す、大聖寺の人〕が来て泊まる。「桃樹村途中」「高岡留別」「見梅」にいう。

・安政五年に劉冷窓〔名は昇といい、字は君平、三郎と称す〕が来て泊まる。

・広瀬旭荘が来て泊まる。「白山に属目」して詩を詠む。この詩に長光寺の南塘が詰っていう。

・「青雲館」にいう。享保十年に御旅屋の亭館が老朽化して取り壊す。その遺材で夏月曝書亭を造る。それも寛延元年に取り壊す。菊渓服部玄伯による「青雲館」の詩は、夏月曝書亭が取り壊される以前の作である。今は武器倉となっている。樹木が繁茂し、その古木に藤が絡み、晩春・初夏に紫の花で覆われ、文人墨客が遊び楽しむところとなっている。

・「桜馬埒」、当時、馬場の中間に小さな亭があり、その礎石の跡が、今も残っている。それを圓山という。

・児玉旗山が高岡に留まって、笠原北湖〔名は辰省といい、字は不浄、また雀斎と号す、絹屋権九郎と称す〕と一緒に花を愛でる。それに南風多蝮子が、折よく帰ってきて、上子心竹に出会って広瀬旭荘を伴って来る。そこへ高田惠圃〔欣右衛門と称す〕も一緒に加わって馬場の西の桜花村の舎に登って遊飲する。また、有馬羽瑟泉〔羽広屋宗左衛門と称す〕が酒肴を携えて来て加わる。

なお、長崎浩斎が巻二に「春寒」の詩を詠んでいるが、それには、「寒風が吹き雨が茅葺きの屋根を叩いている。春分のあと十五日も過ぎて二十四節気の清明の日の前後の頃だというのに、未だ蒲団と火のあるねやが恋い慕われる。こんなことでは、ただ、桜の開花の折の点灯の遅れが心配である。」と詠み、自ら注釈を入れて、桜が将に開花すると邑の習いとして点灯することになっている。このことから桜の開花の時には、馬場に点灯が施され壮観な花見を楽しんだ様子が想像される。

・「臥鱗墓」この詩で、高岡を築いた鯉鱗ともいうべき才知に優れたお方のお墓が石の上に建っていると利長公の功績を顕彰し、その御霊を静かに拝み、碑文が、日々新たな町となることを見守っていると詠んでいる。

・「瑞龍寺」歴代の住持として広山〔恕陽〕和尚を開山に、第廿三世に至る住持を記している。天保二年に浦上春琴が閑雲禅師を訪ねてやってきて、「登瑞龍寺仏閣即時云」とあり、この詩では夜に訪ねた禅寺、一輪の月が松頭を照らし、僧堂をはじめ連なる堂舎が静まりかえり、ただ虫の声が辺り一面から秋を告げていると詠んでいる。

また、愚伯禅師が「歳旦」の詩を詠み、貞享二年に住持を退いて泉州に隠居する折に「住持印」を残している。

・「古城蹟」、野村空翠が自ら嘆じて古城を詠み、また、児玉旗山が古城を即目して詠んでいる。さらに劉冷窓が杉谷清淵とともに古城に遊び「有

感」の詩を、津田半村が「九月十三夜の古城の賞月」を詠んでいる。

・林蓀坡〔名は瑜といい、字は孚伊、清痴と号す〕が、中河村の南家と題して詠んでいる。南家は、氷見の十村役を務める南家の一族で津田半村の生まれた家である。現在の裁判所の辺りにあったという。蓀坡が詠んだように、屋根の庇が古びた景色を鮮やかにたたえ真の趣が豊かである。そこに吹いてきた穏やかな風が、恰もこの代を重ねた家を覚え知ったかのように吹いている。この家は、高岡市長を務めた南懐一郎氏の家でもある。

・「新渡」、横田小橋という。中島橋を大橋という。

三州志を引いて上戸出に築堤を命じて千保川の水勢を半分に減じさせたという。これは松川除をいうもので、当時は、庄川の本流が、現在の河道筋に固定されるまでは扇状地上に幾重もの河道をつくり乱流して小矢部川に流れこんでいた。なかでも千保川筋が本流となっていた。このため千保川筋の洪水が問題であり、創建された瑞龍寺の後ろに深い淵が数カ所もあり、洪水の危機に迫られていた。それで利常公は、庄川の本流を中田・大門筋に固定し、かつての千保川筋を本流・分流とする筋を上流で締切り、用水化することで砺波平野全域を洪水から護るための抜本策をたて、かつ、河道筋であった廃川地の新田開発を目指した。このため庄川扇状地の扇頂部である砺波市庄川町の青島の弁財天付近で千保川その他の旧河道を締切り、全水勢を中田・大門の河筋へ移すという松川除普請が、寛文十年（一六七〇）から四十四年間にわたって行われた。その結果、詩話にもいうとおり、千保川の水勢が半減し、水が減ったことで、橋も架けられ、横田小橋と呼ばれ、「新渡」となったのである。

千保川は町に沿って流れ、流れに従って下ると景色がみめ麗しいうちに木町に至り、小矢部川に合流する。一里ばかりにして米島の津に至る。切り立った崖が左に聳え数千刃、これを赤壁という。その先で庄川に合流する。雅客たちは三叉江と呼んでいる。ここからは直ちに海に至る。こうして文人、詩づくりの人の賞詠の地となっている。

・天保六年に、林蓀坡が町中の皆とともに赤壁下に遊んだ時の詩を二首を記している。また、大聖寺の阪井梅屋が来遊し、「伏木舟行」「舟中帰路」を詠んでいる。

・また、この「高岡詩話」とは別に、津島北渓が「英遠紀行」を残している。それには木町から舟で伏木に向かう件で、吉久の桃林について、次のように記している。

「先ず、吉久の桃林を訪ねたいと思い、船頭に問う。船頭が答えるには「桃林は、これまで数百株もあったが、近年、河の洪水で損なわれ、今は残っているものは数株に過ぎない。」既にして遙かにこれを望むに花がまさに盛んに開いている。しかしながら僅かに七、八株、行きて観るに足るものではない、と記している。この記述から、かつて吉久には桃林があったことが伺われる。その桃林も庄川の洪水で流されたというのである。

・町中の芸者のいるところを瞽女街という。雅客は絃楼と称していた。開正寺の門の正面の蒲倉の後ろに二楼があり、仙姑と藏佳である。寺の横の一楼が石垣であるというように地図に落としたように楼の所在を挙げている。その瞽女街のことを丁字街、あるいは撞木街ともいい、街の形状が鐘をつく撞木に似ているからである。また、千木屋街の橋を左折すると、阿閦、新川端、川端と並ぶ。そこから折れて西に角院、その次に凹んであるのが松古、その正面にあるのが清香楼、その東の凹みにあるのが茶釜である。これらは上衢のこしらえという。下川原の丁字街を下衢のこしらえといい、一本杉、二本杉、石垣、延対寺、芭蕉楼などと続く。不破氏が、この町の奉行となってから贅沢な暮らしぶりを厳禁し、それが花街のことに及び、奉行がいうには瞽女がいるから瞽女街で、それは瞽女が三味線なりをよく弾くからである。ところが、今は瞽女というものではなく、三味線の弾ける者とていない状況である。このために芸者を追い払い尽くして里

に返し、それぞれ生産につくよう治めた。ただし、西院一楼だけに例外に瞽女をおいた。ところが奉行の不破氏が高岡を去ると、再び楼毎に瞽女を置くように戻ってしまった。それには芸者が、また、元のように徐々に増えたからである。

また、これらの瞽女街の絃楼の扁額を当時の文化人の頼山陽、菅川淇園、中島宗軒、原松州などが書したものであることが分かる。

服部淳卿、山本道斎が、それぞれ「竹枝」にいう。

・万延元年に広瀬旭荘が、田代琴岳〔名は孝といい、字は子徳、棚田屋甚右衛門と称す〕とともに芭蕉楼に登り、一絶を賦していう。

・服部家の向かいに上子心竹の丈池楼に文政九年に高島雲溟〔名は時升といい、庄兵衛と称す〕が来て泊まり、咏雨にいう。児玉旗山〔名は慎といい、字は士敬、三郎と称す〕が来遊し、天保五年にこの楼で「重三有感」にいう。高島誠處〔名は興といい、字は凡民、庄兵衛と称す〕が途中にいう。後に心竹が、住まいを谷内に移し、丈池楼を取り壊す。心竹の天尺楼は高の宮の西にあり、天保五年の夏に林谷〔名は君澤といい、字は氷壺〕が「画蘭」にいう。その後、来遊して来た者に、羽倉可亭〔初め駿河守と称し、後に伊予守と称す〕が篆刻をもって来る。

□□松陵、青山六雄〔名は瑋、霞舟と号す〕、轟松居、皆、篆刻をもって来遊する。

・町中の医者が集まって神農講をつくる。正徳年間から始まる。宝暦年間に記されたものによると、

大方脉（だいほうみゃく）は、〔わが国では本道と称し、漢方医の用語では内科のこと〕津島元俊、内藤元鑑、瀧元綱、金子元仙、上田玄隣である。兼ねて瘍科（ようか）〔できもの、わが国では外科のこと〕は、上田玄隣の子の玄政、関玄的、大島玄騰、藤岡玄釣、生島玄畢、伊藤周哲、杉山休菴、その息子の全慶、大久保壽澤、小竹元嗣、小芝正仙、桜井元安である。婦人科は、佐渡養順である。眼科は松田三知、その息子の鎌隆である。鍼科は岡田玄達、関全順、岡島玄隆、その息子の順隆である。瘍科は、長崎玄貞、その息子の玄周、津島右膳、大島玄叔、藤岡玄正である。按摩は嶋長育、中條三達である。口歯科は大門屋次兵衛、八十島屋安右衛門、岩見屋四郎右衛門である。

この会が廃絶されて三十年の空白があったが、文化十二年に亡き父の玄逸が再興した。その時に集まった者が長崎玄庭、松田三知、金子玄僊、澤田早雲、粟田柔斎、上原貞純、内藤貞孺、小竹玄透、岡田元達、佐渡養順、及び私の父玄逸である。

文政四年の火災後に、この会が、また絶えることになる。天保十一年に、私が長崎浩斎と共に松田丁梦と互いに謀り、この会を興す。上原汪斎、高峯玄臺、土肥恭倉、津島玄碩、松田三知、内藤貞孺、上子元城、粟田太逸、粟田作磨、小竹修三、澤田龍岱、佐渡養順などである。

【巻の四】

・私の幼い竹馬の友に寺崎山窩〔名は文敬といい、字は元吉、若園と号し、三木屋源右衛門と称す〕、いま一人は山本翠渓〔名は奎といい、字は仲章、道斎と号す〕である。

山窩の本姓は川上で、川上鶯宿〔中条屋作郎右衛門と称す〕の弟である。寺崎女青の娘の婿である。「春周」「初夏」「出遊」「山行遇雨」にいう。

山本道斎は、知識の袋とまでいわれ、歴史学を好みとしていた。「栗殻嶺を過ぎて」にいう。道斎は、山本彦助のやしゃ孫で、その血脈を伝えている。逸見方舟が撰録した遺稿一巻に、「案山子の歌」にいう。「紙鳶」にいう。

山高は、私より一歳上で道斎は一歳下である。二人の趣味や趣向は同じでないが、よしみは全く兄弟のようである。道斎が亡くなり、元吉〔山高〕も亡くなり、私の両手を失ったようなものである。

北渓にとって竹馬の友が、寺崎山窩と山本道斎であったというのは、当時は坂下町の現在の金子医院のところが北渓の家で、山窩の家は源平町、道斎の家は片原町と互いに家が近かったことに由来する。

山本道斎は、幼い時から才能に優れて賢く人々から知識の袋とまでいわれていた。加賀藩の明倫堂で学び、十三歳で藩主の前で詩経を講読するほどの秀才であった。後に江戸に出て昌平黌で学び、京都に移って頼山陽の塾で学んだ。その折に山陽の子の頼三樹三郎と知り合い、その三樹三郎が蝦夷地を訪れた帰りに高岡に立ち寄り、山本道斎の家に七ヵ月逗留する。この時、三樹三郎は高岡の文人たちと交流する。その中に勤皇家でもある道斎の妹婿の逸見文九郎もいた。三樹三郎が高岡を発つ時に文人たちが和田の町はずれ辺りまで見送り別れている。今は上北島の公民館の近くに三樹三郎との別れの碑が建っている。

・堀田松籟〔太順と称す〕、初め小竹玄透の養子となる。その後、玄透に二人の子ができ、松籟を嫌い遠ざけたので松籟が、この家を去り、伏木で医者を業として身を立てた。私の「舟中の虫を聴く」に和していう。北湖の作に和していう。

津島北渓が安政四年に笹原北湖と田代琴岳を伴って氷見の阿尾の城址を訪ねた折に伏木で堀田松籟の家に立ち寄っている。二十余年前に納涼の一重までつくり、川遊びに興じたなかまである。

・服部有年〔天野屋外與次と称す〕、有年の弟の清水梅巌〔名は冕といい、字は天民、槇屋藤右衛門と称す〕は亡くなってしまったが、「秋江の晩泊」にいう。「江軒」にいう。「晩歩」にいう。「海楼望月」にいう。

・かつて、親しい友の印影を集めた賦をもって着物に彩り、納涼の一重をつくり、舟を浮かべて杯をあげ、詩を賦し、魚の網を打って盛り上がる。二十余年前のことである。一緒に遊ぶ者十三人、河原柳香、山本道斎、寺崎山窩、服部有年、小竹松籟、川上菅根〔舞風と号す、軌斎の父〕、笹原北湖、氏家愼斎〔名は之弘といい、字は士毅、関屋八左衛門と称す〕、田代琴岳、小川北峯及び私である。そのうち二人は忘れる。今も達者にいるものは北湖と愼斎、琴岳と私の四人である。

・河原柳亭が「喜晴」にいう。「鳥影度寒塘」にいう。「早春喜晴」にいう。

・笹原北湖が「樹間石」にいう。「秋日」に即事にいう。

津島北渓は、笹原北湖とは殊に親しかったということか、田代琴岳を加えた三人で安政四年に氷見の阿尾城址や布施の円山を訪ね「英遠紀行」として残している。また、同じくこの三人で安政二年に五箇山松尾村へ「天柱石」を訪ねている。「天柱石」とは、土地の人々が松尾の立石と呼び、その高さ数十mにも及ぶ巨岩で神聖視され、触れたり登ったりすると竜神の怒りをかって暴風雨に襲われると信じられていた。況して米の収穫時には誰もが近づいてはならぬとされていた。この時も八月の下旬の季節で土地の人の制止もあって三人は天柱石の見物を諦めて帰っている。その時のことを「天柱詩草」として残している。さらに万延元年頃かと思うが、同じくこの三人で福岡の西明寺の湯を訪ね「河西遊記」として残している。北渓、北湖、琴岳のこの三人、余程気心の通じ合うよき友ということであったのであろう。

・笹原翠處〔名は孟霊といい、字は子行、権之助と称す〕は北湖の子である。「片原橋上」にいう。「秋夜」にいう。

・氏家愼斎が「春暁に聞く鶯」にいう。「密雪望行人」にいう。

・田代琴岳〔名は孝といい、字は子徳、棚田屋甚右衛門と称す〕に売茶庵の詩稿が数巻あり、「十六夜無月」にいう。「風竹水声の如し」にいう。「山

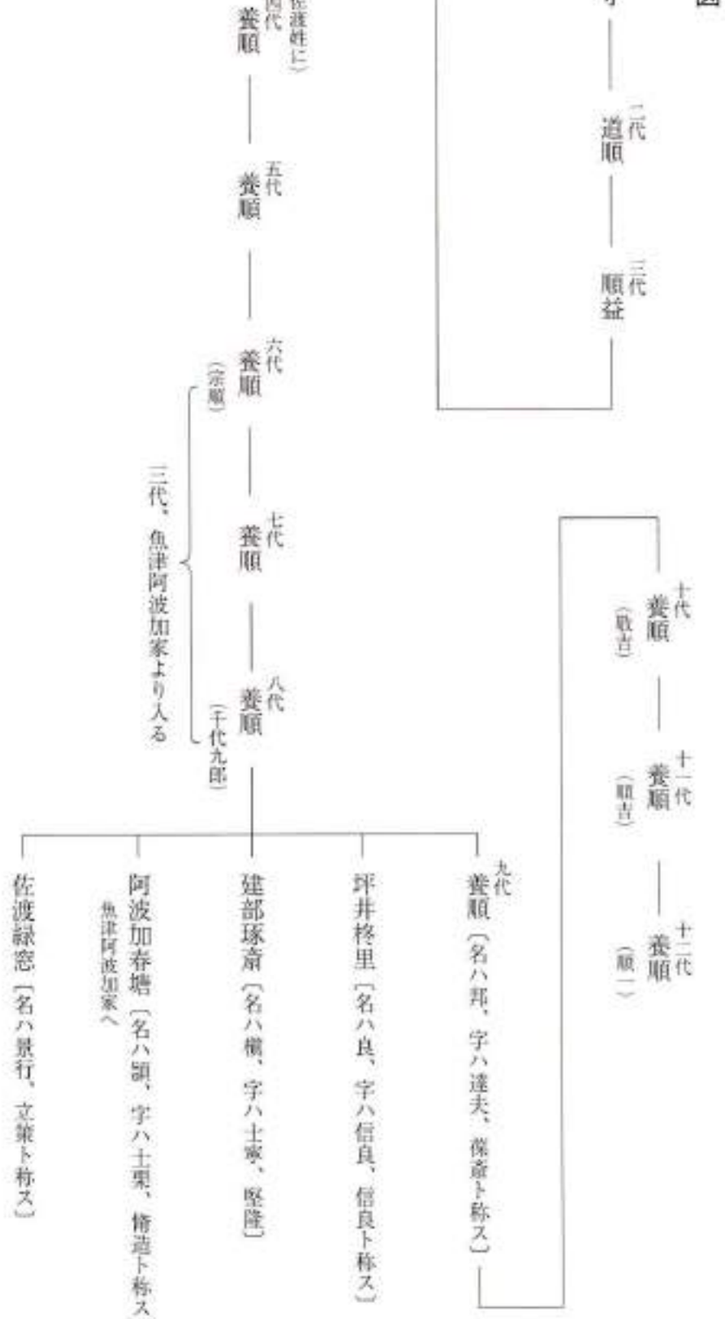
夜聞鐘」にいう。「咏老妓」にいう。

・佐渡葆斎〔名は邦といい、字は達夫、山梁詩痴と号す、養順と称す〕が「信玄公の分字得陀」にいう。

佐渡家は、高岡の町医者の中でも最も由緒の古い家柄である。利長公が高岡城に入られた時に召されて下川原町に移住し、後利屋町に移り今日に及んでいる。佐渡家の三世が養順で、この名をもって代々養順を襲名し、養順堂の名をもって親しまれてきた。

・坪井柊里〔名は良といい、字は信良と号し、信良と称す〕は佐渡葆斎の弟である。江戸に出て坪井信道の門に入り蘭学を学ぶ。この門には緒方洪庵らもいた。坪井家の婿となり、坪井信良と名乗り、将軍家の侍医となり

佐渡家略系図



り、医師としての最高位である方眼に叙せられる。かつて、福井の松平侯にも仕えていた。柊里が、「臘月無雪」「記梦」の詩を詠んでいる。殊に「記梦」の詩には、当時の黒船来航による世相が伝えられている。

・建部琢斎〔名は槙といい、字は士寧、堅隆と称す〕は坪井柊里の弟である。宇津木太一郎が家に迎えて娘の婿とした。「竹窓聴雨」にいう。「冬晩」にいう。「点燈会友」にいう。「初夏晩晴」にいう。

・阿波加春塘〔名は顯といい、字は士栗、箒造と称す〕は建部琢斎の弟である。「偶成」にいう。春塘は魚津の町医者の阿波加家、この家から六、七、八世の養順を佐渡家に養子として迎えていた。その阿波加家の養子となる。津島北渓の薫陶をうけていたこともあり、この高岡詩話の巻尾に「旧琴交晩生」として題詞を添えている。

なお、春塘〔箒造〕の子の敬吉が十世の佐渡家を継いでいる。

・佐渡緑窓〔名は景行といい、立策と称す〕は、阿波加春塘の弟で詩づくりの才能があったが十七歳で亡くなっている。以上、柊里、琢斎、春塘、緑斎は、すべて佐渡葆斎を兄とする兄弟である。

・逸見方舟は書に優れ、吟詠を嗜む、山本道斎がいうように、私は酒の助けを借りて詩づくりするが、方舟は酒の代わりに詩を嗜む方である。それほどに詩づくりが大好きであった。『柳瀑帰舟図』にいう。「秋館雨夜」にいう。「冬夜」にいう。

方舟は、通称を高原屋文九郎ともいい、山本道斎の妹を娶り、道斎を義兄にもつこととなった。頼三樹三郎が道斎の家に七ヵ月も逗留したことで三樹三郎と国事を論じ意気投合し、三樹三郎に傾倒していった。このため三樹三郎が安政の大獄で処刑されると、文九郎も捕縛され、七十日余の糾問をうけるのであるが、疑い晴れて釈放されるのである。

また、文九郎は瑞龍寺の閑雲に帰依し、書にも感化をうけた。それが縁で文九郎の墓は今も瑞龍寺にあり、勤皇の志を讃える顕彰碑が古城公園にある。

・宮島如雲〔室屋次左衛門と称す〕は性格が温厚で詩を好み、書・篆刻に妙技をもっていた。「晩行江上」にいう。「客去」にいう。

・高峰槐窓〔名は紳といい、字は張書、元稑と称す〕は、高峰犀江の息子で朗るる才気があり、究理学、つまり自然を対象に究める学問である自然科学に通じていた。弘化年間の頃、津島北渓、逸見方舟らと娯分吟社の一員として詩づくりに励んでいた。今は加賀藩に仕えているとある。「春江晩景」にいう。

高峰譲吉の父が槐窓〔元稑〕である。高峰家は、文化年間に譲吉の曾祖父の幸庵が越後から高岡に移り、御馬出町の現在の高峰公園の一画に移り住み、以来、代々医者であった。元稑のところへ横田町の酒造業「つるぎ家」の津田半村の娘、幸子が嫁ぎ、生まれたのが譲吉である。半村といえば、中川村の南家の生まれであるが、津田家を継ぐこととなったものである。元稑は、医学とともに蘭学、化学をも修めた篤学家で、譲吉が生まれた嘉永七年（一八五四）の翌年に加賀藩から壮猶館の創立のために迎えられ、藩の典医を務めることとなる。なお、譲吉の妹の節子が祖父津田半村の実家の南家に嫁ぎ、その二男として生まれたのが高岡市長を務めた南慎一郎である。また、母の妹、譲吉の叔母のいつが津田家から木津家に嫁ぎ、その孫が市長を務めた木津太郎平である。

・弘化年間に、娯分吟社に集まった者は、雀斎、盧山、葆斎、方舟、槐窓、逸斎、李斎、分斎、莎洲及び私である。今は逸斎、莎洲が亡くなり、槐窓、盧山は金沢に移っている。

・釈盧山〔名は周玄といい、字は周民、慶聞寺と称し、今は常敬寺と称す〕は優れた才知のある人である。「倶利迦羅途中」にいう。

・松田逸斎〔名は晉といい、字は良順と称す〕は山本道斎の弟で、松田丁梦の養子となり、松田姓を名乗る。若死にする。「諫山を送り夕翠」

にいう。

・福尾莎洲〔井波屋太助と称す〕が、「游能州」にいう。「雨後訪清足軒」にいう。「初夏」に即事にいう。

・嘉永三年半に、健〔長崎浩斎老人の別号〕、松軒、梅顔、東竹の面々が娯分吟社に入ってくる。

・松軒が□□にいう。

・梅顔の詩を既に数首を記すが、その息子の遺稿を入手する。「赤壁の図」に題していう。

・天保十二年七草粥の日に、売茶庵にて連句の者が集まった。琴岳、柳亭、知言が、次いで北渓、雀斎、最後に起雲が結んで詠む。

・栗田起雲〔名は文といい、太逸と称し、後に文機と称した〕は、高く優れたものをもち意思が強い。医者で身を立てた。

・西方寺の速満が「嵐山花」にいう。

・天保五、六年の「履鳴社」の吟稿を氏家慎斎が入手する。その中に松籟、雀斎、三龍〔葆斎と号す〕、慎斎、山窩、有年、敬介、宗明、謙斎、南山、有峰、蘭窩、梅画、由斎、の面々の詩が載っている。今回は未だ挙げていないものを収める。

・服部冠斎〔名は信といい、字は履吉、修道と称す〕が、「終日登古城」にいう。「秋夜不寐」にいう。「雪後出遊」にいう。

・服部有年が「晩景」を即事にいう。「秋夜枕上」にいう。「秋晩閑居」にいう。「秋夜不寐」にいう。「雪晴晩望」にいう。

・沢田君亭〔敬輔と称し、早雲の義子である〕が、「紅葉」にいう。「閑落葉」にいう。「牧童」にいう。

・富隆介〔名は元隆といい、字は謀人〕が「晩景」にいう。

・南謙斎〔旦里と号し、建斎と称す、氷見に住む〕が、「紅葉」にいう。「秋夜閑落葉」にいう。「江村雑興」にいう。南謙斎〔旦里〕は氷見の十村をつとめた家柄で、津田半村の実家である高岡の中川の南家は、その一族である。安政四年に津島北渓が、笹原北湖、田代琴岳と氷見の英遠を訪ね、「英遠紀行」を残している。この時、南旦里を訪ね道案内を乞い、懇ろな接待をうけている。

・川上有峰〔名は秀実といい、字は士毅、また軌斎と号す、菱屋二郎四郎と称す〕が、「冬日遊山寺」にいう。「春晴登楼」にいう。「早起渉園」にいう。「雪中閑鶯」にいう。

・山本蘭窩〔詩に禮造と称す、今は加賀藩に仕え、内藤宗安と称す〕が、「竹笛」にいう。「夏日宴池亭」にいう。

・桑山梅浦〔名は仁山といい、字は粥糟、梅染屋浦之丞と称す、今は吟左衛門と称す〕が、「冬日遊山寺」にいう。「遊是性庵」にいう。

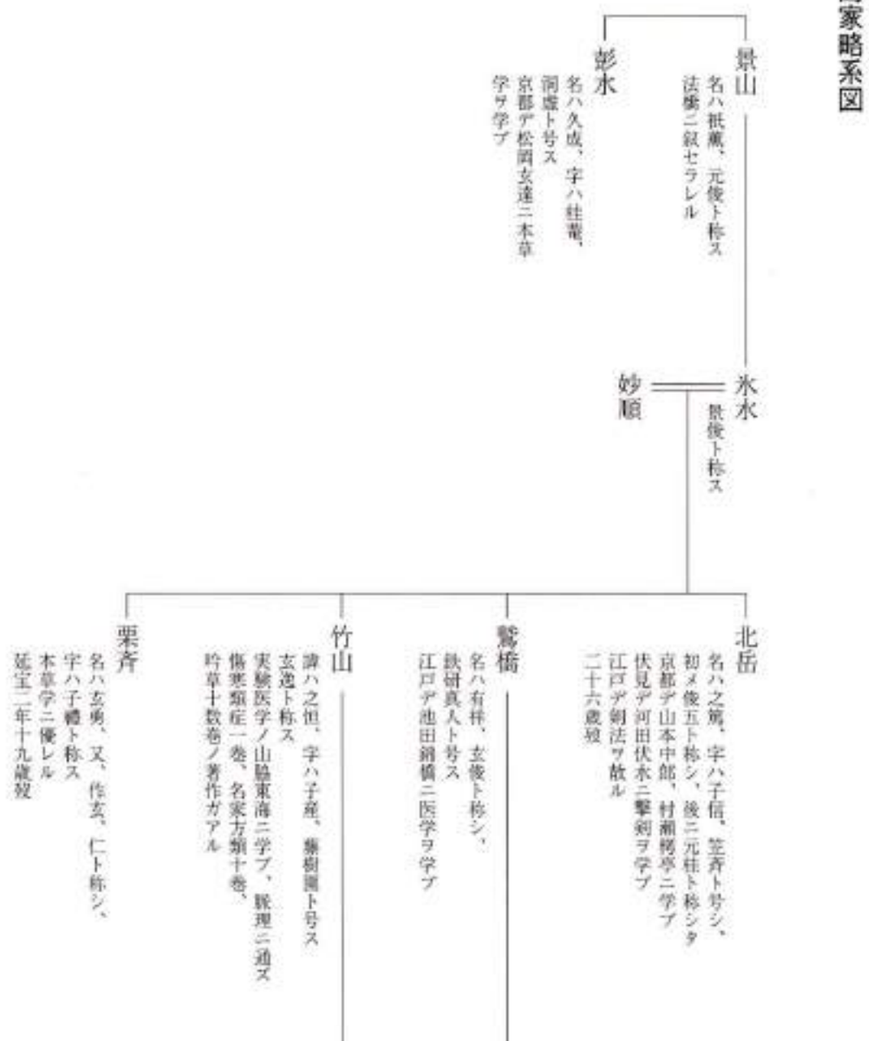
・津田由斎〔名は景完といい、字は苟好、鶴来屋喜三次と称す〕が、「山村書所見」にいう。「春雨」にいう。「咏柳」にいう。

・橋仙禅師を訪ねる。その時に閑雲禅師のつくった偈を見せていう。

【巻の五】

・私の曾祖父の景山〔名は祇董といい、元俊と称し、医者として法橋に叙せられた〕の弟の彭水〔名は久成といい、字は桂菴、また、洞虚と号し、また、如蘭軒と号し、恒之進と称す〕、石崎小洲が云うには、兼葭堂雑録で調べると、彭水は物産学を松岡玄達にうける。物産学では京都や大阪で名が知られ、新井白蛾、中井竹山、兼葭堂〔木村孔恭のことで、字は世粛、巽斎と号し、また、兼葭堂と号す、小字は太吉郎、家は坪井屋と号す、元文二年に浪華に生まれる〕、山脇東門、藤林玄覚、福井立啓などが、昔、彭水の門からでる。宝暦四年に亡くなる。「攻玉本草」十巻、「異魚録」三巻が、家に伝えられている。彭水が「岩子島夕照」にいう。「鯨島

津島家略系図



飯軌」にいう。

・曾祖父の景山先生が炎帝像を所蔵していた。これは雪村が描いたもので法印玉翁の賛がある。その賛は松岡恕庵〔字は成章、恕庵と号し、京都の人、物産学を加賀藩の侍医の稲生若水から継ぎ、これを興す〕先生が書したものである。その賛にいう。

嘉永六年に、彭水の百回忌にあたり、上子東竹〔名は格といい、字は物卿、坦庵と称す〕が、一絶を賦していう。私、北渓も一絶を賦していう。先生には美しい髭があった。詳しくは私の著述した「高岡佳話」を見たらよい。

・私の祖父の氷水〔景俊と称す〕の詩を探しているが、まだ入手できない。取り敢えず佐渡養順に書き与えたものから採って記す。「建中湯」のことを質問した手紙である。

・叔父の北岳〔名は之篤といい、字は子信、また、笠斎と号す、初めに俊五と称し、後に元柱と称した〕は、京都に山本中郎に学び、また、儒学者の村瀬栲亭に学ぶ。

上洛して家族にいう。「歳晩」にいう。「山家看雲」にいう。「賞雪」にいう。「午睡梦友人」にいう。「広沢池に遊び」にいう。「塞下曲」にいう。「花月を吟じて帰郷」にいう。「伏見途中」にいう。「有感」にいう。

叔父は伏見の河田伏水〔佐助と称す〕のところで撃剣を学び、技芸の奥義を究める。その同門に孫福斎宮という者がいて、叔父を訪ねてやって来る。その時に新雪が数尺積もり、その雪の上で二人が走り回って剣を揮っていた。それは恰も平地を走るようであった。二人は家の空き地の二尺余の雪の中で、宙を舞いながら打ち合っていたが、少しも乱れることがなかった。

祖母の妙順が、ある時、叔父の話に、叔父が武事に優れていたからだといい、江戸から薦める者があり、江戸へでて演武場を開き、剣法を教え、その門生が三百余人に及んだという。病のために国へ帰る途中、越後の柾屋敷で亡くなる。時に二十六歳であった。

・叔父の鷺橋〔名は有祥といい、玄俊と称し、鉄研真人と号す〕は、医者の池田錦橋〔瑞仙と称す〕に学ぶ。その善行は修三堂湯話にも載る。鷺橋〔玄俊〕の息子の帆斎〔名は敬之といい、字は吉幼、猪吉と称し、後に玄俊と称す〕は、浪華の三井棗洲〔名は善之といい、字は文卿、玄儒と称す〕に学ぶ。

・渡辺知足〔字は叔富〕が、帆斎の送別にいう。帆斎が文政七年に亡くなる。二十二歳。遺稿一巻がある。明年の中秋に、社の仲間が陸舟楼に集まって、彼を祀り、それぞれに詩を賦す。沢田周謙〔早雲の息子、龍岱の兄〕、津田半村、金子観水〔名は進といい、字は盈科、原泉と称し、後に恕謙と称す〕、超願寺の孤松〔名は信成といい、字は義倩、後に台巌と称し、今は隣泉と号す〕、称念寺の懶外、松田丁梦、浩斎老人などである。

また、三井棗洲、三井檀橋〔名は正之といい、字は伯亀、孝孺と称す〕が、その計報を聞いて、泣いて詩にいう。

・叔父の栗斎〔名は玄勇といい、作玄、また、子仁といい、字は子禮、玄勇と称す〕が、文政元年に「歳晩」にいう。栗斎は、父の弟で本草学に優れ、詩は好む方ではなかった。文政四年に悪性の流行病で亡くなる。二十九歳。友人が挽歌集一巻をつくる。これに長崎浩斎が序に、次のように書く。蝸洲翁と東林、玄妙、宝橫、懶外の四師、それに誠所、容斎、龍斎、元良、敬周の皆さんと交わり、優遊唱和して云々と。

蝸洲が泣いていう。長光寺の東林〔名は雪象といい、字は公鮮〕が泣いていう。国分痴王〔名は玄妙といい、字は太玄〕が泣いていう。称念寺の懶外が泣いていう。南半村が泣いていう。長崎浩斎が泣いていう。東林が花を看て亡き友の津島子仁を憶っていう。

・今は亡き私の父の津島竹山〔諱は之恒といい、字は子産、一に藤樹園と

号し、玄逸と称す〕は、鶯橋の弟であり、また、栗斎の兄である。実験医学の先駆者の山脇東海〔名は約といい、字は子斑、道作と称す〕の許で学び、殊に脈理に通じていた。傷寒類症一巻、名家方類十巻、目録一巻、咏草十数巻を著作する。文政十年に亡くなる。五十歳。

「江風名月吟」にいう。「春日山に居て」いう。

父は、曽我暉一〔真田平之進と称す〕の模写した炎帝像を所蔵していた。その像図に山脇東海が賛にいう。

津島東亭が父の門人で、本姓は佐渡養順の子で渡辺姓である。富山藩の侍医の木村東詮の娘婿になるのに家柄が釣り合わないので、父の義弟とすることで津島姓を名乗り、願が叶う。その後、義父との折り合いが整わず不縁となり、木村家を出て七尾、氷見、金沢、高岡と移り住んだが、元の渡辺姓に戻らず津島姓を名乗ったままである。

浩斎老人が、東亭の六十歳を賀していう。

・亡き父、竹山の交友の中で最も親しき人々は、超願寺の其蘂、長崎蓬洲、藤島鳥翁、栗田花岳、大橋侗斎、長楽寺の為楽庵たちであった。蓬斎と侗斎は詩を好み、鳥翁と花岳は俳句をよくし、其蘂と為楽庵は和歌を好んだ。前年の為楽庵の忌日にあたり、その子の民部卿〔西勝寺と称し、金沢に住む〕が、広く詩歌を募った。それに私は次の詩にいった。

父の慣れ親しんだ手垢のついた書を開いてみると、その中に上人からの手紙が挟み込まれていた。墨痕が水の滴るようでその筆勢も穏やかである。数行の文字を目にしただけで、その文意にあり余るものがある。・・・・・云々。

今は、為楽庵のように茶を愛し、和歌を詠む者、無きに有らざるが如し、風趣絶えて、この節では雅びの情が無くなっている。月日がゆき過ぎていって、今更に追いかける術もないことである。密かに父の書に収めて、涙が注ぐようにこぼれる。

・大橋侗斎、大橋家は木町の名門で、侗斎は、名は喬樹、通称は鶯塚屋八左衛門で、後に八三郎と改めた。若くして京都に遊学し、漢学を村瀬栲亭に学び、鰐洲とは同門の後輩である。風流人で藪内の竹翁に師事して茶道の奥義を究め、高岡に藪内流を広めたのはこの人である。藪内流は古くから西本願寺と密接な関係を結んでいたので侗斎も茶の湯を通じて勝興寺の住職と親交があった。長楽寺の為楽庵とも、その関係で津島竹山を含めて親しい茶の仲間であったということであろう。

・亡くなった兄の橋東〔諱は俊といい、字は潤夫、嚴俊と称す〕は、資性において才能、知識の優れた人で、書は美しいものであった。酒が大好きであった。惜しいかな三十歳を前にして亡くなってしまった。浩斎老人が泣いていう。琴岳が泣いていう。

兄には「古方薬註」という意に適った抄録の著がある。「橋東居集」一巻、これは私が集め、録して文にしたものである。

・橋東居集は、美を整える点では優れたものとはいい難い。そのうちにも、よいものを摘んでみると、「五言古詩」の水亭観蛍の如しにいう。「七言古詩」の題画の如しにいう。「七言律」の明雁の如しにいう。「北湖を訪ねて」にいう。「七言絶句」の春暁の如しにいう。「秋日閒に居て」にいう。「秋日偶成の如し」にいう。「古城に遊ぶ」にいう。

橋東が道斎の偶成に次いでいう。私が、天保七年に、兄に寄せていう。

・私、北渓は、天保二年に江戸へ遊学にでて増島蘭園〔金之丞と称す〕の門に入る。留まること三年、毎月、皆と一緒に詩づくりのために亀井戸の大□庵に集まる。

ある時に、奈須柳邨先生が、武田道安君と出会ってお出でになる。その帰り道に亀井戸を過ぎた辺りで詩作を共にする。

天保三年春に、服部敬作〔今は、三郎左衛門と称す〕が、本間才輔〔今は、山本元春と称し、今石動に住す〕を送って共に鎌倉に遊び、湘中記一

巻がある。

この歳の秋に、奈須玄竹、山本宗洪、鹿埜得三と一緒に小島葆素先生〔時に喜菴と称し、後に春菴と称す〕に従い、日光に遊び、「日光紀行」一巻がある。ともに作った詩数十首を載せる。

天保四年に、江戸より東海道を経て京都に遊ぶ。四月に京都に入り、上子心竹、本間才輔が京都にいる。才輔が詩にいう。才輔が帰る時に、私が古調の一篇を贈り、篇末にいう。この歳、九月に祖母の病が重く、帰省する。

天保五年に、また、江戸へ遊学する。小島葆素先生の門に入る。先生と松崎慊堂先生が親しかったので度々お逢いする。「籠雖」の詩を正して頂く。

天保九年の春、北小輔〔名は由之という〕とともに葆素先生に従い、隅田川に遊び、聯句をつくる。途中に宮戸得所〔寛司と称す〕に遇う。得所が、聯句づくりの句を求められて、暫し驚き一句も得られずに立ち去る。

この夏に流行病を患い、死に瀕する。病床に三宅昌享〔小太郎と称す〕が見舞いに訪れて、座敷に賦していう。彼は増島先生の奥様の弟である。

病後は、つれづれに退屈に堪えず。山本学半〔彦十郎と称す、北山の孫〕が、皆と計り、房総に遊ぶ段取りをする。それで上総に行って海に舟を浮かべて房州にて遊ぶ。この遊びによって「蓑笠餘滴」一巻がある。この行で知り合った新井子恕〔名は忠といい、三太夫と称し、仙台の人〕、柳下子柔〔名は温といい、宗寛と称す、相模に人〕、子恕は蘭園先生の門人、子柔は葆素先生の門人で、このため皆、旧門人ということで知り合う。

・天保十年の春に江戸に戻り、賦を先生に呈し、先生が、それに和して韵に次のようにいう。この歳の冬に、兄の橋東が病が重く、このため高岡に帰る。

・天保十一年の歳、家にあって子準〔名は貞縄といい、倉平と称す、豊前の中津の人〕の寄せ書きにいう。新井子恕が、また、その兄の白石を誓とする。私は、去年、子恕とともに飲み、不忍の池で別れ、よりて詩に寄せていう。

・天保十三年の冬、佐田筑水〔修平と称す、筑後の久留米の人〕が、私の家に数日来泊する。話が進み奥州の浮島に及び、私に贈りていう。同じく筑水が、松田琴岳の坦坦亭に来て、飲み、「歳華を度する」と題して、私に賦していう。

・親戚の津島如栢〔名は之成といい、小右衛門と称す、後に休作と称す〕は、性質が素直で、へつらうこともなく町役の長老として十数年、役を退いて後、菊を植えて自ら楽しんでいた。嘉永四年の歳に子の酉五が亡くなり、一つの不思議なことがあった。詳しくは山本道斎が、詩に序したものを見よ。

嘉永四年の秋、友の北渓君が、手ずから菊畑を開き、数十種の菊を植える。籬をつくり、覆いをつくり、それでもって花の咲きそろう時期を待った。秋の末になった頃、黄色や白色の花が一斉に咲きそろい頗る美観を呈するものであった。次男の酉郎は、年三歳、いつも花の辺で嬉々として遊び、花を大切にもてあそび続けていた。ところがその年の冬になって、悪い天然痘にかかり、日増しに癒えず十日を経て亡くなってしまった。葬儀も既に終わり、菊の季節も終わってしまい。菊畑に酉郎の姿もなく、花も萎れてしまい共に夢見る境地ともいえるものであった。それこそ津島君の情は、真実悲しいかぎりであった。数日後、津島君が菊畑に来て、籬を徹し、覆いをはずし、今にも冬を迎える準備をしていると、突然、一匹の黄色い蝶が、軽く翻るように飛んできて枯れ果てた草葉の上に宿ったかとみると、それが突然に死んでしまった。それでこの蝶が、わが子の花を愛でた魂が蝶と化して飛来したのでないかという。さりとて既に冬を迎えて厳

しく凍りつくような、この寒い季節に、こんな蝶を見ること自体が納得できないことである。それで黄色い蝶の遺骸を手にとって、詩の一首を副えて、かつ、詳しくそのことを記して遍く社友に告げて、詩を賦するよう請うた。

私も、これを聞いて、悲しみ傷む思いに堪えられず、少しばかりの一律を賦して津島君に呈し、併せて胡蝶郎の霊魂を弔って、次のようにいった。菊を愛する人が亡くなり、その間際に芳しい魂に帰っていった、と。

【補遺の巻】

・従前より高岡へ詩人が、次々に来遊して宿泊するが、その中で最も回数が多いのが、詩仏先生である。次いで中島棕軒である。棕軒が高岡に留まって別れの詩にいう。

・松下碧海〔名は鶴といい、字は仙雀〕は、江戸の人で、天保十一年に松田丁梦宅に来て留まる。

・江尻蓉松〔名は章啓といい、勇左衛門と称す〕は、能登の人である。度々、瑞龍寺に来て泊まる。

・上田龍郊が、度々高岡に来て遊ぶ。専ら経世済民に思いをおいていた。松任駅での逸見方舟との別れにいう。

・榊原巢處〔名は典といい、字は子常、また、拙處と号し、三郎左衛門と称す〕は、上田龍郊の弟で、書画に優れ、詩が最も得意であった。

・高沢菊澗〔名は達といい、字は原夫、仙之助と称す〕が、師弟に教えるために度々来る。

・佐田竹水〔名は直道といい、修平と称す〕は、筑後の人で天保十三年の冬に、私〔北渓〕の家に数日泊まる。

・嘉永元年に仙台の中田嘉平〔名は綱弘といい、瀬水と号す〕が聖安寺に来て泊まる。

・嘉永五年に、森華陽〔名は恕といい、字は仲仁〕が来る。頼山陽の墓にまみえて、賦して山陽の子の子春に贈りていう。

・この歳に、出羽国の金子得所〔名は謙といい、與三郎と称す〕が来る。松葉堂〔鍋屋六右衛門と称す〕が、雲華院大合の書画を観て過ごす。

・今年の春に蝦夷教諭の大熊時雨太郎〔名は道勝といい、有泉と号す〕が来る。

・公渓の父が南塘で、南塘の父が東林である。共に旧からの相識る仲である。東林が、私に詩を贈る。それを清浄閣集に載せる。その東林も亡くなってしまっている。

南塘が、安政二年に京都にいて観奉って、皇上遷幸の儀衛にいう。

・貫名菘翁、池内陶所、鬼島広陰、荻原広道及び三井敏鈴江曼らが、畑柳平の医学院に集まる。その時に、官が禁酒を命じていた。そこへ南塘が密かに瓢箪を携えてやってくる。皆が喜び、それに一絶していう。

・服部芙蓉〔名は友憲といい、秀太郎と称す〕は美作の人である。嘉永六年に津田半村の清足軒に来て泊まる。

・木下君均〔仁平と称す〕の僕に供えていう。君均が、春に泉下に逝く。昔の祖、錦里先生より七代にわたって儒学の家として伝えてきたが、ここに至って全く絶えようとしている。ただ、残された六歳の遺児がいるが、家の遺業を継ぐかどうかは分からない。この家の名声を、いや、失ってはいけない。故に、私は、これを賦し、願いを込めて死者の魂を慰める。

挿絵・写真一覧

「俳諧画讃百類集」
鷹真斎守美筆
安政四年（一八五七）発刊

蛙……42
鶴……46
燕……48
鶯……84
鴛鴦……86
鷲……90
せみ……99
雀……105
蛍……124
椿……126
鷹……128
蝶……134

「春藻錦機」
高岡半樵亭
文政四年（一八二一）発刊

表紙……3
楽堂画　竹……32
梅……45
松田三知　画　海老に松……76

「玉飛路ひ」（越の部　乾）
雪月堂楽只
安政三年（一八五六）発刊

桜馬場……7
関野の社……27

布施湖……51
二上山……80
椿の古城……107

「多ま比ろい」
麦仙城烏岬編
嘉永七年（一八五八）

くりから……82

「挿絵」
大村　直子

薄に半月……56
梅に鶯……58
川べりの家……71
晩秋……93
柳……95
茅……102
紅葉……104
蓮の花……117
松……125
農村遠景……132
二上山……147

※本文中、掲載図書はすべて高岡市立中央図書館の所蔵である。

高岡市古書古文献シリーズ　第九集
「高岡詩話」（現代語訳）
平成十七年三月三十一日　印刷
平成十七年三月三十一日　発行
発行　高岡市立中央図書館
〒九三三―〇〇二三
富山県高岡市末広町一―七
電話（〇七六六）二〇―一八一八
FAX（〇七六六）二〇―一八一九
印刷　小間印刷株式会社
〒九三三―〇九二七
富山県高岡市利屋町三

「高岡詩話」の正誤表

誤	正
魚津城ガ廃レ海ニハ暗黒シ	魚津城ガ廃レ海ニハ雲ハ黒ク
１０頁	
折橋清狂〔又。雄川ト号シ、甚助ト称ス〕ノ弟ノ〔名ハ寛、三郎ト称ス	折橋清狂〔又、雄川ト号シ、甚助ト称ス〕ノ弟ノ桐陰〔名ハ寛、三郎ト称ス・・・
１４頁	
煙楊柳ニ籠リ詩腸ニ籠ル	煙楊柳ニ籠リ詩腸ニ[illegible]ス
３３頁	
九十春光ニ僅カニ此ノ句 春の三ヵ月間ののどかな景色に 僅かにこの句だけしか作れない	九十春光ニ僅カニ是レ句 春の三ヵ月〔九十日〕も僅かに十日を 過ぎたばかり。 〔つまり、春九十日は、立春から立夏までの九十日が春である。〕
４１頁	
永珠千点ガ印籠ニ炎ス 永久の珠が千点の炎を印籠に 輝かせるように花を咲かせている	氷珠千点淡ク烟ニ籠リ 千点の氷の珠が淡く煙るように籠もり、
４６頁	
豊止ノ人ニ間ニ残ヲ祭拝ス 豊かな足跡を残された方の 御霊を静かに祭り拝む	豈止ニ人、間ニ残ヲ祭拝ス いやそればかりでなく、人々が静かに 足跡を残された御霊を祀り拝んでいる
６１頁	
春の九十日間酒を 十分に飲んで楽しむ。	春の九十日の光がたけなわである。 〔つまり、九春酣とは春九十日、真っ盛り、〕
７３頁	
― 五男　知貞 源右衛門、十四歳、京都大黒屋に養子、 ― 六（※八）男 延宝元年、二十六歳没 ― 元矩	― 五男　知貞 源右衛門、十四歳に京都大黒屋に養子、 延宝元年、二十六歳没、 ― 六（※八）男 元矩
１４９頁	
荻生徂来の[illegible]園塾	荻生徂来の[illegible]園塾
１４９頁	
立山連邦 60頁下段13行	立山連峰 60頁下段13行

高岡市立図書館
005392451